

錫婚旅行は雲に乗って(二)

佐々木 一郎

機は、ズシッと重い音を立ててホノルル空港に着地すると、そのまま五分程軽い滑走を続けて、ようやく停止した。

搭乗客たちは、無事にハワイに着いた解放感に思わず歓声を挙げ、言い合わせたようにシート・ベルトを外して背伸びをし、ゆっくりと頭上のハットラックから荷物を下ろし出した。

そのうちに誰ともなく、手荷物を片手に子供の手を引 きながら逃げるように機内から消えて行く搭乗客たちの姿に気付く、それが空港待合室の入国検査の早い順番を取るためだと悟った途端、機内は一遍に騒然となった。そして今度は取り残された者たちがまるで何かに憑かれたように先を争って出口に舞き、接続通路の中は靴音の反響で一杯になった。

二階堂夫婦も、次から次へと押されたり擦り抜けられたりしているうちに、何時の間にか小走りになっていた

が、ふと気が付くと、急いでいるのは日本人観光客ばかりで、背広をきちんと着こなしたイギリス人やフランス人らしい搭乗客たちは、歩幅が広いためか、それとも入国受付の順番が確保されているからか、特に急いだ風もなく談笑をしながらゆったりと歩いていることに気が付いた。二階堂は、国外旅行に出る度に、日本人のせせこましさに眉を顰める光景に度々出会うのだが、少なくとも、経済大国日本の矜持は国外に出た途端消滅してしま うように思えてならない。

待合室からはエスカレーターで三階の入国手続き室に向かうのだが、ふと前方を見ると、先頭のグループの中に何時の間に入り込んだのか浅利啓子と木下良江の二つのショート・ヘアの後ろ姿が見えた。二階堂は反射的に後ろを振り返って見ると、案の定、大木秀彦と山口亜希のご両人は二階堂夫婦よりずっと後ろの列にのんびりと並んでいる。視線が会うと大木は笑って会釈をしたが、

その口の端から白い歯が零れて、機内ではあまり気が付かなかったが、いかにも清潔そうな好青年である。

入国の手続きが始まると、二階堂はまた気持ちを重くする光景を目撃しなければならなかった。

日本人や白人たちが簡単に手続きを終えて続々と入国しているというのに、後回しにされて事務所の隅の方に踞^{くも}って指示を待っている数人の黒人の姿だった。真つ黒なのはアフリカ系、それよりも少し浅黒いのはアラブ、パキスタン、アフガニスタン、それともインドなどの東南アジア系の人たちなのであろうか。

「また、厭なものを見ちゃったよ!」

「あの黒ん坊のこと?」

「しっ、『黒ん坊』は差別用語だ。誰が聞いているか分からない」

「でも、日本語じゃあ分からないでしょう?」

「分かる、分からないの問題じゃなくて、使っちゃいけない言葉なんだよ……」

「はい、旦那様……。それにしても、あの人たちは何なのでしょうね」

「うん。パリのドゴール空港で見た時はハイジャックの容疑らしかったけど……」

「あの頃は、あっちこっちにハイジャックがあったから……。じゃあ、これ、麻薬の密輸容疑かしら?」

「うーん。そんなところかなあ……。いや、待てよ

書類の不備ってこともある」

「書類の不備って何ですの?」

堯江は、ハンド・バックからチューインガムを取り出して一枚を夫に勧めた。

「まあ、何と言ってもパスポートの不備だろうね。記入していない箇所があるとか、証明が不十分だとか、写真と本人の顔が極端に似てないとか、ひどいになると偽造のパスポートだったり……」

「そんな……」

「いや、本当の世界を知らない僕たちには、想像も付かないような事が色々あるらしいんだよ。第三世界と呼ばれている国々の中でも、やっと独立に成功して自由を獲得したものの、領土は狭いし、ろくな産業が無くて、国民は飢餓やインフレに苦しんで、万止むを得ず国際法を犯して麻薬を栽培したり、パスポートの偽造をしたり、密輸を企てたりする国もあるんだということを何かで読んだ覚えがある」

「あ、そう言えば、日本だって武器輸出をしているってこの間の週刊紙に出ていましたわ。折角の平和憲法が泣くって……」

「うーん。これも週刊紙情報だけど、日本の死の商人たちにはそれぞれ大企業がバックに付いていて、いざという時には安全な場所に逃げ込めることが出来るけど、この小さな国の人々は、駄目ならまた元の領土に詫び

を入れて、自由を断念しなければならないという絶対絶命の土壇場にまで追い詰められているんだという」

「……でも、世界中からそういう国には援助の手が差し延べられているんじゃないやしません?」

「それはその通りなんだけど、問題はその国に救済物資が届いた後の、国内の配分方法なんだよ。平等に難民たちに配られるのなら問題ないんだけど、これらの国の中には、国王が独り占めしてしまったり、政府の高官たちが山分けにしてしまった例が少なくないって話だよ。

国内の配分はその国に任せられるからね」

「そんな、好い加減な……」

堯江が思わず大きな声を出したので、前に並んでいた人々が驚いて振り返った。どの顔にも余り長い間待たされている苛立ちが見える。ふと見ると、外の五つの窓口では係官がバスポートにボンボンとスタンプを押しては次々と入国させているのに、この側だけは一人のアラブ人らしい男のところで支えている。何か係官と盛んに押し問答を繰り返しているのだが、互いに譲らないので列が全然動かないのである。そのうち係官は行列の人々の罵声を尻目に、奥から分厚い書類綴りを持ち出してきた。

「これは赤十字で聞いた話なんだけど、ある貧しい遊牧民の種族の国へ食糧を運んで行ったところ、いきなり一番元気の良い若者たちがムシヤムシヤ食べ出した。驚いて、『一番衰弱している幼児や老人たちに先に遣って

くれ』って頼んだら、皆吃驚した顔をしている。よく聞いてみたら、この種族では、動物でも鳥でも魚でも捕まえて来た者がまず最初に腹一杯食べる、そして最後にこの狩猟や釣りに最も役に立たなかった者たち、つまり老人や幼児が食べる。これがこの苛酷な環境下で種族が生き残れる唯一の手段なのだと言うんだね」

「それ、どういう意味?」

「つまり、食べ物を取って来ることが出来る一番強い者を大事にして置かないと、結局は全家族が飢えてしまうということらしいよ」

「まあ、あたしには到底考えられない論理ね」

「しかし、領ける点がないでもない。つまり、彼等は、僕たちが想像する以上に厳しい生存努力をしているんだということだね。どうもそうなると、『老人福祉』や『児童福祉』の推進を叫べるのは、先進諸国が、それに続く発展途上国まできりかもしれないなあ……」

「随分悲しい話ね。同じ人間だっていうのに……」

「あの黒人たちの母国も、政情が不安定なのかも知れないね。同じようにバスポートを示しても、日本人やアメリカ人やイギリス人なら『観光に来ました』って言えば『良くいらっしやいました』で済むのが、ああやって後回しにされて厳重な検査を受けなければならないんだから、何か理由があるのだろう」

やっと二階堂たちの順番がきて、手続きを済ませ手荷

物を受け取り、出迎えのA旅行社に先導されながら外に出た途端、ムツとするような熱気が襲い掛かって来て二階堂は思わず立ち竦んだ。無理もない。とにかく日本の冬のさ中に立し、機上では約七時間適温で過ごした直後に真夏の太陽の直射に遭遇したのだから……。

ハワイは「常夏の島」と言われるだけあって一年中温暖な日が続く。熱帯と言ってもペーリング海の影響と常に北東から涼しい貿易風が吹いて来るため、夏でも摂氏三十度を越えることは少なく冬でも二十度から二十五度程度で、その上に湿度が低くてカラッとしているので、年平均約二十四度の島の生活はなかなか快適だと言われている。しかし、直射日光は強烈である。そう言えば、A旅行社の「旅行マニュアル」にも、ホノルル出身の帰休兵がつい気を許して炎天下で昼寝をしてしまい、全身に大火傷を負って入院した実話が載せてあった。

ハワイ美人にレイを懸けて貰い、頬にキスをされるとあとはA旅行社の指示で観光バスに一目散に走り込む。社内の冷房でほっと一息ついて何気なく運転席の方を見ると、吃驚するような大柄なガイド嬢が入って来た。ピンク地に縦の水玉模様をあしらったムームー風なワンピースを着た堂々とした体軀の女性で、身長は百八センチメートル位、体重は少なく見積もっても八十キロはあ

ナオーケットと申しまして、匂いはございませんが非常に良いお花でございます。

これから市内観光をお楽しみ頂きましたあと、「クイン・カピュラニ」というホテルで昼食を取って頂きまして、その後簡単にご滞在中の日程をお話しします。ハワイのホテルのチェック・イン・タイムは三時の予定でございます。

ハワイでは観光バス、乗合バスの中は一切ノースモーク、ノードリソキングになっておりますので、バスの中でのお煙草、お飲物はご遠慮下さいませ。前方にはパッセンジャー・セフティのことが書いてございまして、進行中のバスの中はどなたもお立ちになつてはいけないことになっております。また、観光地とか公園、ビーチでは物を絶対に売ってはいけないことが法律で決まっておりますので、店は何もございません。そういう所に綺麗な花が咲いているからといって取ったら罰金でございます。紙屑を散らかしても罰金でございます。ただ今ホノルル警察で厳重に取り締まっておりますことは、ビーチでお酒を飲んでいる人です。見つかりますと、その場で手錠を掛けられて警察連行でございます。

「どうも、このガイド、大分脅かすなあ」

「あら、脅かしじゃないかも知れませんが。所変われば品変わるって言いますからね」

「ところで、飛行機の中じゃ幾らか寝られたい？」

りそんな混血女性である。顔の浅黒さから見ると、ポリネシアの血がかなり入っているようだ。とにかく日本ではあまり見かけない容姿に圧倒されて、観光客たちは啞然として眺めていたが、ガイドが始まると、今度はその歯切れの良い日本語にまた吃驚した。聞けば、日本人三世で勤続十年のヴェテランらしい。チョイス夫人という。

「アローハ」

「アローハ」

観光客の中にはなかなか旅慣れた人がいて、すかさず彼女の問いかけに答える。それに付られて全員が唱和すると妙にハワイへ来ている雰囲気が出て来る。こういうことが大の苦手を二階堂も、掠れた声で「アローハ」と呟いた。ハワイの旅はいよいよ始まった。

「アローハ。ハワイでは、よくいらっしやいました、お早うございます。今日は、今晩は、ご気嫌いかがですか、そういうご挨拶の言葉は全部アローハ、という言葉によって代表されます。

外国からいらっしやったお客様にアローハと言って、生の素敵な花を首から掛けて頂く習慣になっているのですが、今皆様に貰って頂いた花は随分豪華な花で、カーネーションの間に白いチューブのような花が入っています。チュガロスって申しまして匂いが良いですからレイの花に使用されています。

もう一つの違った花は紫の花、これは蘭の花で、ベン

「全然。ちょっと、ウトウトとしたかと思うと、すぐ目が覚めちゃうんですもの。とにかくあの飛行機の音はちやうど電車がトンネルの中を通る時のような煩さね」

「僕なんか、自慢じゃないが殆ど睡れなかった。一晩中読書灯を点けっ放しさ。お陰で持ってきたクリスティーの『ナイルに死す』を半分以上読んじゃった。

しかし驚いたねえ。夜中の二時十分頃になったら突然アナウンスが入って『ただ今のハワイ時間は、日付変更線を越えましたので、十二月二十六日月曜日午前七時十分でございます』とくるんだからねえ。慌てて時計の針を戻したけれど、実際に、それから三十分も経たないでハワイに着いたら、もうちゃんと朝の七時四十分の景色になっているんだもの……」

「それも、前の日のね。この日付変更線とか時差は、実際に経験した人じゃなければ分からないわね」

「うん……」

そっとバスの中を見回すと、約四十人いる乗客の半数は居眠りをしている。一番前の席にちゃっかりと座り込んでいる浅利と木下も、二階堂夫婦の後部座席の大木たちも眠り込んでいる。

しかし、ガイド嬢は慣れたもので、起きて聴き入っている残りの半数の乗客に向かって、益々熱心に説明を続ける。体格も良いが、声も良い。

「右側の白い花、ブルメリアと申します。匂いが大変

よろしうございます。日本の皆様。あたしたちは、日本旅行を致しまして、東京駅で人を見ただけで腰を抜かして帰って来ております。いかがでございます。この人口の少ないこと……。ホノルル市内、現在住んでいる人が六十万人ぐらいです。

左側の赤いお花、これポインセチアで、クリスマスフラワーとも呼んでおりますが、今年はちょっと色が悪いようでございます。

右側に黄色いお花が咲いております。アラマンダーと言います。

あ、お小さい方がいらっしやいますから、ご説明します。右手をご覧になって下さいませ。青い実がなっていますね。木に……。これが椰子の実です。よく日本の皆様、ハワイへ行って椰子は見たがココナッツは見なかったわ、なんて嘘ばかりおっしゃる。

椰子とココナッツは同じものでございます。(爆笑)

ホテル内にはいろいろとレストランがございますが、今日は女性の方が多くございますので、ぜひハワイでしか飲めないトロピカルドリンク、と言われます南国のお酒、殆どがジュースでございますが、まず、ブルーハワイ、チチ、マオタイを飲んでお帰り頂きたいと存じます。

左側に白い建物が見えて参りました。こちら、救世教のハワイ支部でございます。それからタンボポのようなあざみのような真っ赤な花が咲いております。これ、レ

ファの花と言います。

日本の皆様。これ、珍しいんです。木はオフィア、花はレファ、木と花の名が違います。この花を採ると雨が降るといふ伝説があるんですね。

左側の木に青い実がなっていますが、あれ、ババイヤでございます。便秘の特効薬です。ハワイでは女性、子供には欠かせません。

そして、左側のオレンジ色の花、ベード・オブ・パラダイス、極楽鳥でございます。

「うーん、確かに話しは巧いけれども、花の説明ばかりじゃ退屈だなあ。どうも僕は花は苦手だ……」

「あら、そんなこと無いわ。あたしには、とっても興味がある説明だと思っけ……。第一、市街地観光を後回しにしてダウン・タウンから直接ヌアヌ・バリ峠に登っているわけでしょう？　ここは道は良くても山ばかりだから、木や花の説明をするより説明をするものが無いのよ」

「ま、そう言えばそうだけど……」

オアフ島は南側のホノルル地区が観光の中心になっている。ワイキキ海岸、高層ホテル群と繁華街カラカワ大通り、ダウンタウン地区のイオラニ宮殿、カメハメハ大王像、諸官庁、さらにはパール・ハーバー、ダイヤモンド・ヘッド、大きな植物園、動物園が、一年に何百万人もの観光客を集めている。

このバスは、ホノルル空港からヌアヌ・バリ展望台に向かい、取って返してダイヤモンド・ヘッドやパンチ・ボール、そしてホノルル市街地見学の手配となっている。気が付くと、車内の乗客はいつの間にか目を覚まして、説明に聴き入っている。

「右側の方に薄いピンクの花が咲いています。これをベクアの花と申しまして、日本桜と呼んでおります。ただ今ジャングルみたいな所に入参りましたが、ハワイには蛇は一匹もいません。(嘆声)ただ朝が早いので、時々モングースといって、いたちが飛び出して来るがございます。ハワイは昔から砂糖きびの畑が多くて、鼠が随分住んでいます。鼠を捕ってくれるんじゃないか、といって、昔、東南アジアの方からモングースを連れて来たわけなんです。ところが、鼠は昼間寝て夜活躍します。モングースは夜寝て昼間活躍しますから一度も出会ったことがないようで、(笑い)何でもやってみてから気が付くというのがハワイ人で、『いけんことした』言ってますが、(笑い)あとの祭りです、今では、鼠もモングースも増える一方でございます。(爆笑)」

アメリカ合衆国でハワイ程お米がよく売れる州はございません。あたくしたちこちらの日本人は、朝は必ずご飯にみそ汁、それもインスタントなど頂きます。みそも全部ハワイで作っております。ケミカルが入っており

ません。だからみんな、朝炊いたご飯をお弁当箱にしっかりと詰めて、弁当箱もスーパーマーケット・ダイエーで売っておりますので、(爆笑)プラスチックの良いのを買って、サラリーマンは全部家からお弁当持ちでございます」

「おい、堯江。耳が痛いだろう」

「あら、朝ご飯はパンの方が良いっておっしゃったのはあなたじゃない！」

「どんな白人の家でも夜は必ずご飯でございます。だから、アメリカ人のことを米国人と申します。(爆笑)」

「なんだ。落し話か。ハハハハ」

「ホホホホ……」

「ちょうど右下がホノルル市の水道局の水源地でございます。今日から皆様に飲んで頂く水道の水の中には一滴の消毒薬も入っておりません。非常にハワイの水道の水はよろしいのです。お年寄りが長生きをしたり、病気が治らない方がハワイに療養にいらっしやると、もう、不思議なくらい早く治ったとおっしゃるのは水のせいだと思えます。」

正面の山の向こうが海でございます。九州の桜島の錦江湾の景色によく似ていると言われるのですが、昭和十六年十二月七日、日本海軍航空隊の真珠湾攻撃というのがございました際に、日本の飛行機が攻めて来たのも実はこの山の向こうです」

車内がちょっとざわめいた。

二階堂は、写珠湾攻撃と聞いて、それまで三十数年間忘れていた悪夢が蘇った思いがした。そうだ、ここはあの真珠湾のある国だった。

二階堂がこの真珠湾攻撃のニュースを聞いたのは、旧制中学四年生の学期末試験が終わって、校庭で体力章検定の投擲練習をしていた時だった。その後、特殊潜水艇の隊長の岩佐中佐には軍神の名が冠せられて報道され、二階堂も他の若人と同様、長い間尊敬と憧れの気持ちを抱いていたことを覚えていた。

その数年後、昭和二十年五月には二階堂自身も殉教精神にも似た心地で、最後の学徒出陣に加わった。

しかし、戦後発表された真相の報道で、この一身を投げ出した純粋な愛国的行動が、実は一部の軍部及び軍国主義者たちの野望に操られた結果に過ぎなかったのだという事実を知らされた時、二階堂は何とも言いようの無い空虚な思いに長い間悩まされた。と、同時に、真珠湾攻撃も「宣戦布告前の奇襲」という武士にあるまじき行為だったのだと聞いて、それこそ、何処にも持って行き場のない程の憤りに燃えた。これでは、自分の命を懸けた大切な青春は何処に消えて行ってしまったのだらうと彼は泣きたい思いだった。

これが、二階堂の二十の青春だった。

その真珠湾奇襲の紹介を、それも現地で、突然ガイド

でも、昭和十六年と言えば小学校へ上がったかどうかという頃だから、多分何も覚えていないであろう。

と、言うことは、この観光バスの中の観光客、ガイド、運転手を通じて、真珠湾攻撃の当身を体験しているのは最年長の二階堂一人ということになる。

彼は、また別の意味の、何ともやり切れない思いが込み上げてきて、惘然たる面持ちになった。

二十分程の休憩でバスはスタートしたが、登って来たバリ・ハイウェイを下るコースなので、今度もまた山また山、緑また緑の連続だった。

「この左右に大きな木が生えておりますが、ユーカリの木でございます。このユーカリの木を好んで葉の大きい蕨のようなものが巻き付いているんですが、『象の耳』と申しましてハワイ独特の蕨でございます。」

今でこそ、こういった旧道は観光バスしか通りませんが、この道は昔からあるハワイの本通りでございます。昔は馬に乗ったハワイの王族たちがこの坂道を越えカイルワという所に避暑に行かれたのですが、帰りにもこの山道を通りましたときに歌いましたのが、『雨雲が低く垂れ、木々は憂いに満ちて……』という『アロハオエ』の歌だと言われております。一説には、滅び行くハワイ王朝を嘆き悲しんでリリウオカラニという女王様が作った歌とも言われております」

されたのだ。二階堂はハッとして、思わず俯いた。

しかし、車内のざわつきの原因は別のところにあった。風光絶佳と言われるヌアヌ・バリが見えて来たための歓声だった。この時は、表オアフと裏オアフを結ぶメイン・ハイウェイの途中にある峠で、ハワイ原語の「深しい峠」という意味らしい。また、ハワイ王朝を築いたカメハメハ大王が、最後の統一戦争に勝利した古戦場としても名高い。

下車して笑いさざめきながら展望台に駆け登って行く若者たちの中には大木秀彦の姿も山口亜希の姿もあった。少し遅れて浅利啓子も楽しそうな顔付きで登って行く。

考えてみれば、彼ら、彼女らには、「真珠湾」という言葉は何の反応も起こさない言葉だったのに違いない。いや、仮に単なる知識概念として理解していたとしても、二階堂のように青春を回顧する感慨は伴わなかった筈である。なぜならば、彼ら、彼女らは戦争が終わってから三十年も経ってから生まれ、戦時中はおろか戦後数年にわたって続いた日本国民の極端な窮乏生活苦さえ知らずに育って来ている人たちだからだ。

ガイド嬢にしても、「日本海軍航空隊の真珠湾攻撃というのがございまして……」と淡々としゃべっていたが、この人も恐らく会社のガイドブックの受け売り程度なのであろう。当然、二階堂より十歳年下の妻堯江にし

ここでガイド嬢は、ゆったりとしたテンポで「アロハオエ」を原語で歌う。

成程、そういう説明を聞いてから耳を傾けると、いつも単なるムード音楽として聞いていたハワイアンが、莊重でかつ哀調を帯びて聞こえるから不思議である。

Ha aheo e Ka ua i na pali

Ke nihi a elai Ka nabele

E uhai ana paha i Ka lipo

Pua ahini lehua o uka

Aloha oe, aloha oe

E Ke ona ona no ho i Ka lipo

Ono fond embrace

E hoi ae au

Until we meet again

車中、寂として声なし。

「莊重なものだねえ……」

「ハワイのフラダンスだって、伝統的な民族舞踊だって説明書に書いてありましたよ。あなたのように、脚だの腰ばかり見てちゃいけないんですって……」

「……………」

「では皆様、今度は右下をご覧くださいませ。日本人墓

地が見えて参りました。ただ今の経済大国の日本ではございせん。明治元年頃、広島県、山口県、福岡県の方から移民で渡っていらっしゃった方たちで、残念ながらだれ一人として生まれ故郷日本の土を踏んで死んだ人っておりません。また、言葉が出来ませんでしたから、白人社会から馬鹿にされました。しかし生まれて来る子供達だけはこんな惨めな思いをさせたくない、せめて教育だけは付けてやるうと言って、親が一生懸命教育の方にお金を使ってくれましたお陰で、今のハワイは日系全盛時代だと言っても良い位、日系人が政界、財界で活躍しております。今のハワイの州知事はジョージ・アリヨシといって日系二世でございますし、ハワイ大学の総長もマツダ・フジオといって日系二世でございます。

また、教育界で活躍している方が多くて、公立の中学校・高等学校の校長先生の八十五パーセントまで日系が占めております。医者、弁護士なども日系が多うございます。

この時、後ろから肩を叩く者がいるので振り返ると、大木が手に小冊子を翳して

「これに、ジョージ・アリヨシの小論文が載っているんですけど、ご覧になりましたか？」

「えっ、アリヨシ知事のですか？」

「ええ、もし良かったらお使いください」

礼を言ってお受け取ると、それは、「パンナム・グリス

このことは、実に重視すべきことだと思います。

日系の人々と話をするとき、私はいつも『祖国の文化を恥じないで、その文化を持ち続けて下さい』と申し上げています。自分のアイデンティティを無くさないことは実に大切なことだと思います。

私自身、父は福岡、母は熊本の出身です。そして父母の国『日本』を誇りに思っています。プライドというのは大切に、特に物事に成功するには、このプライドと自信を持つことが必要なことだと思います」

「うーん、堯江、僕はアロハ・スピリットという言葉は今まで知らなかった」

「あたしも初めて……」

「……ハワイには、実に素晴らしい思想があったんだねえ。こんな素晴らしい言葉を今まで知らなかったなんて、僕は教師としてつくづく恥ずかしい」

「本当に……。あたしたち日本人の島国根性を反省させられる言葉ですわ」

「うん。僕は、ハワイを『太平洋の楽園』と呼ぶ意味がやっと分かったよ。気候が温暖で、レジャー施設に恵まれているということだけじゃなくて、人種差別が無いということだったんだ」

「ええ、アバルトヘイトの国の大統領にこの州知事の爪の垢でも飲ませてやりたいくらい……」

「紙」に載ったハワイ州知事ジョージ・R・アリヨシの「アロハ・スピリット」と題する小論文だった。二階堂はじっくりと読み、堯江に回した。さいわい、行きと同じ道を戻っているせいかガイドは小休止している。

論文の要旨は次のようなものであった。

「ハワイ程色々な国の人々が仲良く共存している所はありません。ハワイ以外の国では、国籍の違った人々がお互いに信用し合ったり、和氣藹々とは暮らせないのが現実です。しかしハワイでは、みんなががっちり一体となって住んでいるのです。

色々の文化で育てられた人々が、お互いに違う習慣とか考え方を見ながら生活して行くので、様々な生き方を理解出来るようになるのです。

とにかくそういう点でハワイは特別で、あらゆる種類の人々とうまくやっていると人達が育っていく土地柄なんです。これは世界中でわがハワイだけではないかと自負しています。

これを私共は『アロハ・スピリット』と呼んでいます。ハワイを訪れた人々で、この『アロハ・スピリット』を経験し、それを外の人にも伝えたくて、私に手紙を寄せた人が何人もあります。

恵まれた自然と『アロハ・スピリット』は、わがハワイの誇りです。殊にハワイに於いては、色々な人種の人々がそれぞれの国の文化を失うことなく共存していて、

「まったく。今の世界はあまりにも幸せの人間と不幸せの人間の差があり過ぎる」

二人で大いに慨嘆していると、またガイドが始まった。「入って参りました所、ゴルフ場なんて事おっしゃらないで下さい。国立墓地、パンチ・ボールの丘でございます。太平洋国立記念墓地。みんなお墓で、しかも土葬でございます。ハワイじゃ、クリスマスの日、お正月前にはみんな息子や孫の墓にお参りします。ただ今通過しますこの左右の墓地は、ベトナム戦線で亡くなりましたハワイ出身の十八才前後の青年達の墓です。

暗い感じがしませんでしょう。全部これ生の花でございますが、昨日はクリスマスでしたから皆来んでいます。この左側の大きな木、これ菩提樹でございます。亡くなった方の中には仏教徒がたくさんおられます。日系人と言えば殆どが仏教徒でございますから、わざわざアメリカ連邦政府がインドから船で運んでくれた木でございます」

下車してから改めて眺めると確かに広い。ゴルフ場と間違えるな、とは言いで妙である。日本でこれだけ広い緑の地帯と言えはゴルフ場位であろう。旧火口丘一杯に連なる芝生には、松に似た大きく枝を広げた常緑樹が点々と植えられ、その間を舗装された道路がうねりながら、或は幾重にも別れながら走っていて、その傍らには

整然と並べられた墓地が幾つもの区画に分けられて設けられている。どれも、第二次世界大戦、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争のハワイ出身の戦死者を葬ったもので、総計二万一千体を越えるという。石碑は、コンクリート製の上げ蓋の上に墓碑銘が置かれ、アンセリウム、オーキッドなどのハワイの美しい花が飾られている。

墓地の中央には、イタリア産の大理石で作られた巨大な慰霊塔が建てられ、「平和の女神・コロンビア像」が大きく長く続く石段の上から暖かくこの戦争の犠牲者たちを見守っている。

ガイド嬢が速くに見える一角を指さして、

「あの墓地は日本とアメリカの戦争中に二世部隊が召集されました、イタリア戦線で壮烈な最後を遂げました日系の二世、四四二連隊百大隊の方が眠っています。ほとんどが十六才前後の青年たちでございます。そりゃあもう皆様。戦争当時は、ハワイに住んでいた日本人は、惨めなものでございまして、家屋没収土地没収、財産没収でございます。当時十六才前後の青年たちが、『一つ、我々の血を以てアメリカに対する忠誠を誓おうじゃないか』と、ここに結成されましたのが二世部隊でございますが、当時の大統領ローズ・ベルトは、対日本戦線には使わないで、一番戦争のひどかったイタリア戦線の方へ連れてまいりまして、そこで壮烈な戦死を遂げております」と説明をした時には、一瞬シーンと静まり返ったが、

それから約三十分間の自由解散が告げられると、忽ち先を争って「コロンビア女神像」の方に殺倒し、まるでピクニックにでも来たような笑い声を上げながら互いに記念写真を撮り合ったり、中にはガイド嬢に頼んで撮って貰ったりしている。ここでも二階堂は一人ぼっちだった。彼は、一行に背を向けて、広いアスファルトの道路を突っ切り、緑の芝生の中にメートル置きぐらいに点在する小さな墓地に黙禱を捧げながら歩み続けた。

「どうなさったの？」

後から追いかけて来たらしい堯江の声がした。

「うん、ここはハワイ旅行の目的地の一つだからね。

ちよっとお参りがしたかったんだよ」

「そう……」

堯江は、さざめきの聞こえる丘の上をちらっと振り向きながら頷いた。

このハワイへ日本人が「出稼ぎ人」としてやって来たのは明治元年五月のことで、「元年者」と言われた。

この人々は、正式な政府同士の取り決めによる移民ではなかったので、農業専門業者が少なく、環境にもなかなか馴染めず、加えて苛酷な労働条件を課せられて苦労したが、それでも、「頑固者」の代名詞のように使われる「元年者」たちだったから、結構、最後まで頑張り抜いて成功した人も少なくなかったらしい。

千八百八十五年（明治十八年）政府間契約の「官約移民」が東京を出港した。内訳は山口四二〇、広島二二二、

神奈川二一四、岡山三七、和歌山二二、三重一三、静岡一一、滋賀五、宮城一人。当時日本は全国的な大凶作で、その被害の大きい県ほど、離農して新天地に一攫千金の夢を託したのだった。

その後、この「官約移民」は二十六回実施され、三万人をハワイに送り込んだが、県別では広島、山口が圧倒的に多い。

しかし、彼等を待っていたのは、元年者の時とあまり変わらない慣れない気候、風土と生活習慣、そして苛酷な労働条件だった。これらは、契約違反として、正式機関を通じて次第に改善されていったが、初期の移民たちの苦労は今なお二世、三世を通じて語り伝えられている程酷いものだった。

「官約移民」の時代が終わると、私約移民（呼び寄せ移民）の時代となった。

成功者の一人、沖縄出身の中本辰吉の回顧談。

「父がハワイへ行ったのは私が九才の時でしたよ。十八才まで待って、父の『呼び寄せ』でハワイへやって来たんです。父はワイパフ（オアフ島）にいました。そこには、フィリッピン人が多かったことを覚えています。ワイパフのプランテーションには居留地（キャンプ）が二つあって、下の方は内地（沖縄以外の日本人）の者が

占めていました。これは、内地の方が、先にハワイに来ておったからでした。

プランテーション（耕地）の仕事は、男はハッピーコウ（砂糖きび運び、元来は牛がする重労働）、女はバイラ（炊事）。一日働いても幾らにもならなかったねえ。わしらは、一つの家を何人かで借りて住んでいました。

三食は大コックに頼みました。大コックというのはミセスの婦人のことです。肉片などはツীবアウンドを七、八人で共同で買って、それを分けて食べておった。私は、ワイパフのプランテーションには一年もおらんかったんで、ハッピーコウの苦労もありしないで済みました。

ワイパフを出て、島の裏側にあるカハルという所で五、六年暮らしたけど、その仕事は荒地を、バイナツブル畑にする仕事で、楽だったね。ただ、一日三十五セントにきりならなかった……。

それからホノルルへ出たのよ。そこで人に使われて、白人の車のドライバーになった。自分でトラックを持つとうとしたんです。ハオリ（白人）がヤード（庭）に車を放り出してあったので、二百円（ドル）位出して買ったのよ。この車を使ってレストランから出る豚の餌を運んだり、道を作るときに手伝ったりしたので、自然と家を作る、ガレージを作る、トラックも持つようになった。どんな家かって？ 公園に置いてあった古い板を買って来て、自分で作ったハウスよ。このハウスに二年位いた。

それからモロカイ島に移ったけど、移る時に結婚した。オアフ島では車は高いから、モロカイへ行って二トンハーフの車、五、六トンは積める車を買った。そして、プランテーションのバイナップルを積んで棧橋まで運ぶ仕事をした。それはプランテーションとのコントライキ（契約）よ」

日本人移民が「出稼ぎ移民」から「定住時代」に入る頃は、生活が落ち着き経済的な余裕が出てきたので、一様に家庭を持つようになった。日本で結婚していた人々は早速妻子を呼び寄せ、独身者は、事業や旅費の都合で写真を交換して結婚した。そのため写真が若い時のものであったり、財産が誇張して書いてあったり、本人が写真とは別人であったというような悲劇もあったが、この「写真花嫁」たちが、明治末から大正年間一杯、続々と大量に海を渡ってハワイに移住してきた。

平良ウシは「写真花嫁」の一人。

「私がハワイに来たのは二十七才。結婚してから七年間、沖繩の親の元で『呼び寄せ』を待ったの。

ホノルルに着くと、ハズバンが迎えに来た。ハズバンはマウイ島のバイヤ耕地で働いていました。

耕地では私は何でもやりました。始めはハッピーコウ（砂糖きび運び）のクック（炊事がかり）。そのあとカチケン（砂糖きび刈り）。今でも『馬鹿らしい仕事だっ

たのう』言うて。今、ワン・デー、三千円やけえ。

ルナ（監督）はボネギー（ポルトガル）が多かった。女は子供が出来る、耕地現場で働くことは出来ないけえ、キャンプで独身者のために食事を作ったり、洗濯をしたんや。

わしらは二年間バイヤ耕地で働いて、オアフ島のエヴァ耕地に移った。ここに六か月いてまたマウイ島に戻った時、第二次大戦となった。しかし、もうこの頃は、オアフ島のワイホレで農民（ファーマー）になっていたのや。

プランテーションで奴隷のように使われていたわした夫婦は、自分のプランテーション（耕地）を持つファーマーに出世したんや。

ファーマーの仕事は死ぬまでやりまますよ。なにしろ、自分の仕事やけえ。朝もハナハナ（労働のこと）、夜もハナハナや」

「本当に、元年者や官約初期の移民は、考えただけでも恐ろしいような重労働に携わっていたんだなあ！」

「名前は官約移民でも、実際は奴隷だった、って書いている人もいるわ」

「そうそう、僕もハワイ旅行に備えて大分図書館通いをしたけれど、資料を読めば読むほど、よくここまで耐えて来たものだと思えたら、思わずゾッとしたね。こ

のハッピーコウなんて、牛や馬がやってた仕事じゃないか。それを人間にやらせるなんて……」

「何の技術も持っていない人たちがだったから、どんな仕事でも良いから、まずそれにしがみつくより仕方がなかったのよ。それこそ死物狂いで……。それから段々と収入の多い仕事に這い上って行っただわ、きつと……。少しでも条件の良いプランテーションを持っている島を転々と巡り歩いたのも同じ蠢きね。

そして着々とお金を溜めて行っただのよ」

「こうなると、まるで執念の固まりだね」

「そうよ。命懸けの執念よ。もうこうなると執念と頑健な体力しか頼みになるものは無いからですよ」

「うーむ。どうも君の説明を聞いていると、何となく元年者たちの気概が分かってくるような気がしないでもないけど、どういうものか、僕には君のような感覚がなかなか湧いてこないんだなあ」

「それは、あたしが女だからですわ」

「えっ……」

「働いて所帯を持ち、子供たちには大学教育を受けさせてやりたい、その為には石に噛み付いても金を溜まなければならぬ。だからどんな苦しい仕事にでもしがみ付いて離れない。こういう発想は、元来母親の発想ですわ。勿論、父親の理解が無ければ実現しないことですけれども……」

「そうすると、父親と母親の子育ての心構えは違うということなのだろうか？」

「ハッキリ申し上げて違うと思いますわ。女親の子育ては、ある意味で、命懸けなのですわ……」

「成程ねえ。実を言うと、僕はね。このくだりは、著者が、後の第四四二連隊百大隊の赫赫たる武勲を描く為の、伏線として強調して書いているような気がしてならないんだね……」

「いいえ、それは思い過ごしですわ。この移民の親心は本物です。あたしは、これと第百大隊の活躍とは全く別個の問題だと思いますわ！ たまたま、親は子を思ひ子は親を思う美談になったとしても……」

「ふーん。そうかなあ……」

「第一、今の日本だって同じじゃありませんの。良い学校を出さえすれば、高級公務員にだって、大会社の重役にだって、医者になって弁護士にだってなることが出来るんですからね。家計を切り詰めたって進学させますわ……」

ただ、極貧の生活をしながら、ビジョン・イングリッシュを語り話せず、アメリカ人やポルトガル人、中国人たちにまで軽蔑されながらも頑張り抜いた移民一世の方々の執念にはかないませんけどね」

「その子育てに熱中している最中に、あの忌まわしい真珠湾攻撃が起きてしまったんだ！」

「そうなのよ……」

日本軍による真珠湾攻撃の直後、ハワイ全島には戒厳令が敷かれた。それと同時に、FBIや警察、憲兵隊等が活動を開始し、ハワイの日本人社会の指導的立場にある人々を次々に逮捕し抑留した。翌年の二月までの逮捕者数は二百名に達したという。

こうして、ハワイ住民の間に排日機運が高まりつつある中で、ハワイの軍司令官デロス・エモンズ陸軍中將は、「日本人住民が、法律に従う限り、出来るだけ保護をする」と、断固とした日系人保護政策を打ち出した。

この英断が、アメリカ本土の日系人二世と全く異なっていた行動をハワイ二世にとらせた、と言われている。

このエモンズの努力の結果、僅か千四百四十四名の日系人が戦争中抑留されただけで済んだ。そればかりか、ハワイ在住の日系人は強制収容所に送られることもなく、財産を没収されることも無かった。また、貴重品のガスマスクの配給も、敵性外国人である筈の一世に対してまで全く平等に配給されたのである。

これに反して、アメリカ本土の日系人に対しての弾圧は酷いものだった。山崎豊子の「二つの祖国」はNHKの大河ドラマにもなったが、ロスアンゼルス市の「リトル・トーキョー」を舞台にし、一世の天羽乙七とその長男でアメリカ国籍を持つ二世の賢治たちが、真珠湾攻撃

以来どのような迫害を受けたかを克明に描いている。

アメリカ本土の日系人は、アメリカ生まれのれっきとしたアメリカ市民である二世たちまで敵性外国人と見なされ、財産は奪われ、強制収容所へ隔離された。

それはどれも、鉄条網が張られた家畜小屋であった。このため、日系人たちの憤慨、恐怖は、アメリカ民主主義に対する疑惑にまで変わっていった。

それがまた、アメリカ人の対日感情を益々悪化させ、到頭全キャンプの日系人に対して、「アメリカに対する忠誠度テスト」を実施するまでにエスカレートしてきた。それに加えて、この反応が予想外に悪く出たため、弾圧は一層強化され、両者の感情的対立は最早抜き差しならぬ泥沼に嵌まり込んでしまった観があった。

ハワイの日系二世たちは、「本当のアメリカ人であることを今こそ示してやる」という気持ちと、「どうしてもアメリカ人になり切れない一世を排日運動から救い出そう」という気持ちから軍隊を志願する若者が続出した。

「それが第百大隊ね」

「それまでは裏切られることを恐れてなかなか許可しなかったアメリカが、急転直下、ハワイ二世部隊の結成を認めたのは、その熱意に打たれたのだという説と、予想以上に早かったマニラ陥落に驚いた軍当局が『手軽な先頭部隊』を作ろうとしたのだという説と、二つの見方

があるんだよ。ま、学者によって見解が違うからね」

「手軽な先頭部隊って、早く言えば『弾避け』のことでしょう？」

「うーん。そう簡単には言い切れないけれど、命を大事にされている部隊では無かったことは確かだろうね」

「そして、アメリカ軍当局が驚く程勇敢なハワイ日系二世部隊の活躍が始まったわけ……」

第四四二連隊はイタリア戦線に投入され各地で赫々たる武功を立てたが、特にアメリカ国民に絶対の信頼を得たのは、当時「失われた部隊」と異名を付けられていたアメリカ陸軍テキサス第三十六師団救出作戦に成功したことだった。

連合軍の一翼としてフランスに侵入したテキサス第三十六師団はドイツの大軍に包囲され、全滅の寸前にあった。救出の努力は繰り返されたがその度に失敗し、テキサス州の世論は直接ローズベルト大統領攻撃にまで向けられるようになった。

思い余ったローズベルトは、ハワイ日系二世部隊の第四四二連隊第百大隊に三六師団救出の「大統領命令」を発した。

命を受けた二世部隊は、六週間にわたる死闘の末、見事に「失われた部隊」を救出した。しかし、三四一人のテキサス部隊を救出するために、八百人の二世が戦死したり重傷を負った。

千九百四十六年六月、第四四二部隊はアメリカ合衆国へ凱旋した。その翌日兵士たちはアメリカ大統領ハリー・S・トルーマンによって勲章が授与された。この日のパレードの後、雨の降りしきるホワイト・ハウスの庭で行われた表彰式で、トルーマン大統領は、

「君達は、敵ばかりでなく、偏見とも戦い勝利を得たのだ」と述べた。

この二世将兵たちの働きで、アメリカはハワイ日系人を心から信頼し、日系二世ばかりか一世まで自由な生活を送ることが出来るようになった。現在、大学教育を受けた二世たちはハワイの各界で活躍しており、一世の人々も幸せな老後を送っている。

「あの辺りかな。四四二部隊の墓地は？」

「そうね。さっきのガイドさんの説明だと、あの辺ね」

「僕はね。県立図書館でハワイの資料を探していた時、思いがけない本にぶつかった。『全国陸軍予備士官学校史』という本だね。僕が在学していた予備士官学校のページを見ているうちに、初めてあの当時の本当の軍の動きを知って愕然としたんだ。とにかく、何一つ真実を知らされずに、教官の言う言葉だけを信じて、国の為、親きょうだいの為に命を捨てる覚悟でいたんだからね」

「……」

「まあ、花なら蕾の紅顔可憐な美少年、いや、美少年

と迄は行かないとしても、まだ二十才の、前途洋々たる青年だったんだよ……」

「……」

「教官の区隊長の執筆した『思い出』という投稿文を読むと、どうも僕たちは特別甲種幹部候補生の身分のまま内地決戦の予備軍に編入されていたらしいんだ。これは、『どうせ八か月の教育後將校に任官して、沖縄の第一線の小隊長として散ることになるらしい』という噂は薄々聞いていたから別に驚かなかったけれども、敗戦を知って、候補生たちが自決を覚悟して集会所に籠城したことまでが、どうも一部の過激派の中堅將校たちの扇動に乗せられていたらしい気配が感じられて、愕然としたんだ」

「その、自決覚悟で集会所へ籠ったってのは？」

「うん、戦争に負けたのは俺達軍人に責任がある。この上、生き恥を晒しておめおめと故郷に帰えるよりは、いっそ、ここで自刃して果てよう……」

「えっ、死のうとなさったの？」

「おいおい、そんな妙な目付きで見ないでくれよ。これでも二十才の純真な愛国心に燃えていた時だってあったのさ。今でこそ腹が突き出て、複雑な社会をぬらりくりと泳ぎ回るイヤなじいになっちゃったけどね」

「あら、そんな意味で言ったんじゃないですわ」

「それがどうも、僕たちは、過激派の区隊長たちにはう

み、敗戦に追い込んで国民を苦しめたのもこの卒業生たちが中心だった。今のシビリアン・コントロールされている自衛隊とは根本的に違うんだよ。

その中で、予備士官学校の区隊長や生徒まで巻き込んで、アメリカに最後の抵抗を示して、少しでも日本に有利な講和条件を勝ち取ろうとした奴らがいた。『思い出』には、本科士官学校から呼びかけられた、と書いてある。恐らく、敗戦になって処刑されるのが怖くなった卑怯者たちの仕業だろう」

「それで、あなたは時どうなさったの？」

「うん、あっ、一番大切なことを言い忘れちゃった」

「……」

「僕たちは、広い板の間に思い思いの恰好で座っていた。正座している者、頭を抱えている者、じっと瞑想に耽っている者、皆、黙りこくって長い時間、連絡の来るのを待った。連絡が来れば、すぐ自決しなければならぬ。拳銃で頭を撃つ者、日本刀で割腹する者、首筋の頸動脈を切る者、または互いに胸を刺し合って死ぬ者もあるかも知れない。僕は、おやじが『わが子が將校になるなんて、こんなに嬉しいことはない』と、わざわざ長野県の知人から譲り受けたという日本刀で、頸動脈を切って死ぬことに決めていた。

しかし、堯江、人間って不思議なものだね。今にも、『実施命令』を携えた使者の、コツコツという足音が聞

まく躍らされていたのか、と考えたら悔しくなっちゃって……」

「その過激派って何なの？」

「まあ一口に言えば、戦争継続派かな。普段は『天皇陛下のおん為に』なんてうまいことを言いながら、その天皇がポツダム宣言受諾の放送をしようすると、『玉音盤』を奪おうとした、あの連中なんかもそうだね。

士官学校には二種類あるんだよ。本科士官学校と予備士官学校とね。予備の方は、僕もそうだったけど、本来の職業を持っている人が入る学校だから、戦争が終われば元の職業に戻るのさ。けれど、本科の方は、軍人で身を立てる人の為の学校だから、一生軍人で暮らす人ばかりだ。当然、陸海軍の要職は全部、陸軍なら本科士官学校、海軍なら兵学校を卒業した者が占めている」

「じゃ、今の自衛隊のようなものね」

「いや、同じようだけれど、自衛隊は日本が攻撃された時以外は戦争をしないと憲法で定められている。そこへいくと、旧憲法下の軍隊は、第二次大戦の外に日清日露の戦争を始め数多くの侵略戦争をしたんだ。また、本科士官学校や海軍兵学校は戦争を教える学校だから、軍国主義者の養成所でもあった。『皇国史観』に心酔した者も多かったし、二・二六事件や五・一五事件の首謀者たちもこの学校の出身者だった。勿論、真珠湾攻撃を企て実施したのも彼らだったんだよ。日本を戦争に巻き込

こえて来るという恐怖に脅えながら、片一方では全然別な事を考えているんだよね。

僕は無性におふくろに会いたかった。早く戻って、おばあちゃんともう一度裏庭を散歩したかった。そうだ、出征の時作り掛けていた模型飛行機を早く完成しなくちゃあ、なんて、とんでもない現実離れしたことも考えていた。ま、今考えると一種の痴呆状態だったんだな。

しかし、堯江、本当に怖かったんだよ、僕は……。心の底から怖かった。いっそのこと、裏口から便所にも行く振りをして、そっと逃げ出せないだろうか、とさえ思った。

しかし、去年の暮れの事件の記憶があまりにも生々しくて、動けなかった。この学校の苛酷な訓練でノイローゼになってしまった僕より一期上の候補生が、逃亡を企てて射殺されてしまったという事件なんだよ。だから、今、僕が逃げてても間違いなく射殺される。そうなれば、遺体を下げ渡されたおやじがどんなにか悲しむことだろうな、って考えたら、また体が強張ってしまった。

そっと回りを見渡すと、平然としている奴なんて一人もいないんだ。時間が経つにつれて、段々と恐怖心が高まってきて、誰の顔にも、必死になって生と死と闘っている様子がありありと見えるんだ。

無理も無い。俺も貴様たちも、国の大事に命を捧げようと大学高専のキャンパスを飛び出してから、まだ三か

月きり経っていないホヤホヤの幹部候補生だ。職業軍人と違って、「同期の桜」になりきるのには、あまりにも人間としての血が多すぎる。平和を愛する気持ちが多すぎる」

「それで、最後はどうなったの？」

「靴音がしたと思うと、校長閣下以下中隊長、区隊長が大勢飛び込んで来て、僕らから武器を取り上げ、そのまま全員軟禁されてしまった。扇動した区隊長たちも逮捕されたし、東京から操っていた職業軍人たちも一網打尽だったらしい」

「じゃあ、助かったのね」

「当たり前じゃないか。あの時死んでいたら、今こうして君と一緒にいる訳が無いじゃないか」

「そうね。ホホホホ」

「ただね。この若い四四二連隊百大隊の英霊たちは、随分と怖い思いをしたのだろうなあ、と思ってるね。確かにハワイから歓呼の声に送られて出陣した時は元氣一杯だったと思う。しかし、何回も戦闘を続けるうちに、戦死者や戦傷者を目の前に見て、段々戦争の恐ろしさが身に滲みてきたのじゃないかと思う。」

僕はね。「失われた部隊」救出作戦が、この若い人たちの一番恐怖に曝された戦闘だったと思うんだよ。戦力だって、各中隊二百名編成だったのが、この時は三十名程度に激減しているし、ひどい部隊になると殆ど戦死し

てしまっていたり、指揮官がいらない中隊などもあったというから、ドイツ軍と戦う前から全員戦死を覚悟していたのじゃないかと思うよ。この引くに引けない立場に立たせられた恐怖感、これを見ると、僕はたまらなくなってしまうんだ。

比較にはならないけれど、僕自身、あの短時間に地獄とこの世を何回も往復して、心の中で『生きたい、生きたい、生きたい』って絶叫した経験があるから、不幸にしてそれが適えられなかったこの若人たちが哀れてねえ……」

堯江は、二階堂の声が掠れてきたような気がして、思わずその顔を見上げると、何と彼の目には大粒の涙が湛えられているではないか。

死に直面した経験のない堯江は、はいり込むことのない男の感覚の世界で、二階堂が心から悲しみ、哀れだと嘆いている姿を呆然と眺めていた。

堯江は、意味が分からないままに貰い泣きをしていたが、突然、矢も盾もたまらず二階堂の胸に取り纏った。

「あなたっ……」

二階堂は、二、三步よろめいたが、すぐ立ち直ると優しく堯江の肩を抱き締めた。

「あなた。あたしは、あなたが大好き……」

「……………」

「あなたはいくつになっても純粋だわ。あなたは、時

々上司に直言をするので教育長にも部長にもなれなかった、なんておっしゃるけれど、あたしは、その反骨精神が大好きなのよ」

夢中で取り纏りながら、つと、向かい合った二階堂の顔を見上げると、彼は、頬から耳朶の辺りをうすうすと赤らめて、慌てて視線を彼女から逸らした。堯江は泣き笑いになりそうな感情を無理に堪えて、さり気なく離れようとすると、今度は二階堂が堯江の肩に掛けていた力を強めてきた。

「堯江、僕が好きだ」

「えっ」

「僕は、好きで好きで堪らない程君が好きだ。

僕のように、大正生まれの戦中派は、小さい頃から男が女に愛情の告白をするなんて軽薄な極みだと教えられてきた。だから、例え心の中で思っている、なかなか口には出さず言えなかったし、また、上手な言葉も持っていない。しかし、此処は外国だ。思い切って言わせて貰った」

「……………」

「……………」

「あなた。ねえ、もう一度言って……………」

「……………」

「ねえ、もう一度言って下らない？」

「……………」

「駄目？」
「だからさ。僕は、君が世界一大好きなのさ。今この四四二部隊の墓の前に立って、四十年前あの集会所で自決しなくて良かったと、つくづく思っている……………」
黙って聞いていた堯江の頬に涙が一筋つーと流れた。

「ありがとう、あなた」

この時、招集の笛がピーツとなった。何人かがこちらを向いて何か大声で叫んでいる。

「さ、戻ろうか？」

「ええ」

歩き出すと、堯江は素早く二階堂と腕を組んだ。しかし二人の背はかなり違うから、取り纏った形となった。

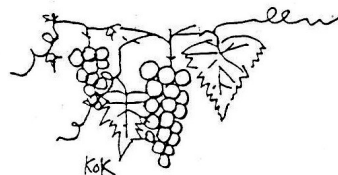
「こ、これは……………」

「いいじゃないの。此処は外国でしょ」

「う、うん」

「女神・コロンビア」の下に集まっている一行は、二階堂と堯江が照れ臭そうに腕を組んで歩いて来るのを見ると、しばらくじっと眺めていたが、やがて誰からともなく拍手が起こり、それらが忽ち盛大な拍手に変わった。

やはりここは、「アロハ・スピリット」の国であった。



輝やかしい夏の日々 (2)

恋人たちの小径

Lovers' Lane

アリカ ジューン
有 香 六 月
(青瑠薔薇)

むさし野の雑木林、樺や櫟、榎の木、栗の木その他が柔らかな緑に茂り、そして下草もたつぷり根元を被っているその間に一筋走ってゆく五百米以上はある道、それが「緑の修道院」の中の径だけに、独自の性格を持っていた。しかし、恋人たち、ほんものの恋人たちも何組も何組もここを通過して結ばれたに違いない、夢のままに終わったかもしれない。

あの頃、必ず日曜には、羽織袴に身を正した、端正な顔立ちの青年が、西寮の応接間に姿を現わした。私たちの先輩を訪ねてくるのであった。午後から数時間、二人はそこにこもっていた。百合子はそれを羨やましいなど思う余裕はなかった。語学とヴァイオリンと——日曜ごとに彼女は、独りか、先輩の三木五月と荻窪の峰谷龍先生の所にヴァイオリンの稽古に出かけていた。

Lovers' Lane

そのひびきのよい名称を持つ林の小径を、百合子はよ

された、おちついた物腰の人で、どこからみても百五十名の選抜された学生たちの団長にふさわしい人物であった。その彫りの深い端正な顔立ちは近づく人を惹きつけずにはおかなかった。

刈田兄弟の弟は、百合子がアドニスと名づけたほど甘美なマスクの美青年で、生真面目な人物であった。桂子とこの刈田春樹との仲の良さは有名となり、二人はどこにゆくにも一緒に行動をしていた。

この二人は素適なカップルとして必ず結ばれるとみんなに祝福されていたのに、それを妨げたのは、辰見家の当主、桂子の父親であった。その父親の反対を押しきって、宝塚の旧家を飛びだすほど桂子は強くなかったし、それを敢えてさせるほど本人の春樹も、弟を応援する夏樹も強くはなかった……良家の子女の甘美なロマンスにそれは終った。しかしそれがいかにも好感のもてる二人の生涯に影を残さなかったとは言えないようである。

百合子は桂子と親しかったので、しばしば、この仲の良いカップルと同居することは多かった。しかし百合子はそれを好ましいと眺めても、羨やましいと感じたことはなかったし、又榎夫と自分の間がおそろしいことと縁の無いことに別にこれという感情も持っていないかった、何となく、この幸福な御令息御令嬢の世界と自分たちは異なる世界のような気がしていた。榎夫が会話学校に通っていた時、百合子の予科に入った時の同級生、長

く散歩した。独りか、女友達と。

一九四〇年七月の日米学生会議の物語に戻ると、男女の学生百五十名が同じキャンパスで生活を共にしたのである。当然いくつものロマンスをも産み出したのである。小柄で敏捷で、恐ろしく頭の良い花澤啓氏がその生涯の伴侶を見出したのもここである。その一年前に二人はすでにアメリカに渡航した組に入っていたが。その相手の女性は、百合子たちの二年先輩の大へん文才豊かな、一寸皮肉っぽい鋭利な知性の持主の妹で東京女子大の学生であった。さきの京都の名家の令嬢辰見桂子も、いかにもふさわしいパートナーを見つけていた。兄弟で参加していた刈田兄弟だった、たしか銀行に勤務している人の息子たちで、いかにも慶応ボーイらしく、スマートで洗煉された物腰の、好感の持てる青年たちであった。この会議では慶応の人たちの活躍が目についた。第一、団長の山際氏も慶応の経済学部の人であった。それは洗煉

谷川禎子という人も一緒にクラスで、榎夫がこの秀れた女性に心秘かに憧れていたこともあとから知った。この女性は十八才で地上から姿を消していた。名の知られた画家の二番目の娘として、眉目形の見事に整った、ふしぎな静かな魅力を湛えた女性だった。彼女も若いのにもう成熟しきっているような感じの人物で、そういえば彼女は、あの中宮寺の黒衣の観音にそっくりな面差を持っていた、といえる。あの完全な田満の美の象徴。あのふしぎな深秘を湛へた謎めいた微笑！ 榎夫がこの女性に惹かれていたと知って、いかにも榎夫らしいと思われた。折柄、愛するシンプソン夫人のために王位を捨てたエドワード八世の話がその会話クラスに出て、クラスの人は一一人、英語で意見を求められ、その際、長谷川禎子は、「私がシンプソン夫人なら死んでしまふ」と答えたと伝えられた。

百合子は後になって、榎夫の傑作と言われる劇、「なよ竹」の女主人公の竹から生まれたという姫のモデルはこの長谷川禎子という確信に近いものを抱いたものである。竹から生まれた姫が、この世の求婚者のすべてを退けて——その中には帝も含まれていた——そして、故郷の月の世界から迎えにきた人たちに守られて、車に乗って、月の世界に帰ってゆくというあの物語も、それは早世する姫君のその運命を象徴したものと信じられた。

榎夫が憧れていたすばらしい女性は、この世に長く留

めておかれない存在であった。そうして榎夫も……

百合子たちは津田の二階にいた、丁度、榎夫はその場に居なかった。百合子はさっき、通りがかりに目にしたキャンパスの隅に咲いていた淡いピンク紫のホタルブクロの花々をふと思浮べていた、そのむさし野の草々に混って咲いているホタルブクロの花々はふしぎに心を和める可憐な存在であった。そこにふと榎夫が突然姿を現わした、その優しい野の花々は妙に榎夫のイメージと重なった。

前夜、日本の学生たちで、関西のグループと関東のグループの始めての顔合せが、津田カレッジ本舎三階の立派な講堂で行われていた。神戸に生れているが、もともと横浜育ちの百合子たち、関東のグループにとって、関西の人たちとの顔合せはもの珍しかった。その中に当時十九才で、白いカスリの和服をつけ、袴を穿いたイガグリ頭の学生、柳生直行も混っていた。後に人生の様々の途上で交流があった。戦後すぐ務めたマッカサー司令部直轄の新聞検閲部の翻訳部で共に仕事する仲間だったし、又後に勤務した関東学院大学でも、柳生直行はその院長となつて、三年前に世を去つた。

その翌日の午後遅くなって、アメリカの学生たちが、学園に姿を現わした。かなり早く入港していたが税関の

折角、立派な男の人たちを迎えても、その夏、この女人の殿堂ではダンス・パーティーは行われなかった。当局の御達しで自粛ということだった。しかし野外でフォークス・ダンスは男女日米学生の間で行われた。十メートルほど離れて並び、双方、中央をめがけてスキップしてきて手を取り交わし、又離れてスキップしてゆく、それさえ、男慣れない百合子は苦手で眺めていただけなのに、一年上の親しい杉原寛子、日頃地味で何かと人々の力になつてくれるこの人が、平然として、楽しそうに日米の男性たちと手を組み合せてスキップしてゆくの、百合子はすっかり驚いて見ていた。

百合子は次第に、チェアマンとして自分たちを指導してくれている木曾榎夫に心が傾むいてゆくを感じていたが、彼の手を取るなど考えもしなかった。それは、少女のひたむきな憧れであり、百合子は対象の榎夫を通して、一つの理想に恋していたのだ……

コンサートが行われ、百合子もヴァイオリンを弾いた、ピアノは、大槻藤子が見事な腕前で伴奏してくれた。藤子は東寮の住人、山口市からきていたこのすばらしい女性と百合子は親しくしていた。極めて高い知性と、そしてピアノにも天才的な腕前を持っていた、もし彼女があのまま、ピアノの才分を思う存分伸ばし得る環境にあつたなら……彼女が百合子より一年早く卒業して、しか

手続きなど折柄の国際状況のため、ずい分手間どり、横浜から、都心をはるか離れた小平の野に到達したのはもう夕方にも近かった。何人も混る大男たちに百合子はすっかり圧倒された。それ迄、先生方や宣教師関係以外に外人と付き合つたことがなかったので、よけい圧倒されたなるべくアメリカ人と交流するため、つとめて食事の間、そばに坐るようになっていたし、又、討論のグループではいつも一緒にになるので、慣れない百合子たちには大へんな緊張であった。

しかし若者たちは他方で大いに交歓し、楽しんだ。遊びという生活からおよそ遠い生活の日々を送ってきた百合子にとっては戸まどいすることも多かった。彼女にとって、ことに両親が外地に赴任して、横浜で、もと学校の教員をしていた母方の祖母と弟との三人の生活は頗る健全で、遊びが入る余地のない生活であった。ただ学校以外に、ヴァオリンの先生に師事していたので、毎日練習に励むそれも修行の日々だった。およそ遊びとは縁がなかった。寮の日々、他の寮生たちは、夕方七時からの自習時間の前までは、パーラーでダンス曲をかけては、女同志ダンスを楽しんでいた。「奥様御手を何卒」「青空」「南国のバラ」主としてタンゴであり、ワルツも混り、フォックス・トロットの軽快なリズムもあり、その流れてくる曲に百合子は親しんだが、自分でその踊りの中に入ることはなかった。

も本科に直接入っていたので、三年間で学校を終え、そのまま東京に残り、荻窪に下宿して会社就職していた。さぞその生活は彼女の意に添わなかったろうに、一言もこぼしたりはしなかった。

あの夏の日々、百合子と藤子は西寮の彼女の部屋で同居して暮した。もっとも二人ともそれぞれの活動に追われて、寮の部屋は寝るだけ、それもしばしば夜半すぎだったので、部屋でゆっくり話す暇もなかった。朝は、慌てて起きて食堂に降りてゆかなくてはならなかったし……

夏至の夜 聖ヨハネス祭りの夜、梔子の花の香りが夜の空気の中に流れている

芸術家として卓抜していた灰白い面差の大槻藤子！

しんから心の温い、思いやりに充ちた思慮深い杉原寛子！

この二人を親友として、この中で一番未熟な、ただ憧れのみに逸る百合子、彼女の奏でるヴァイオリンのようにデリケートな心情の 百合子！

百合子の時に繊細すぎる心の動きは、榎夫を時にはらはらさせた。榎夫にふさわしいのは、本当は杉原寛子の

ような女性に違いない。決して人目に立とうとせず、静かな愛情で相手を包みこもうとする慈母型の女性。

大槻藤子も百合子のな所があり、あく迄自己の理想、夢に忠実に生き抜こうとするタイプであった。いささかもそのために妥協をしようなど考えないのだった。

槇夫に必要なのは、知性をもって彼を支え、やさしい愛情で包みこむ女性なのであった。

あの夏の夕べのコンサートで——それは雨天体操場で行われた——槇夫も出演した。彼は唄ったのである、ソロで。その深い深味のある咽喉を聞かせてくれた。槇夫はヨードルを唄ったのである、裏声で……あの多忙で、勤勉な槇夫がいつこんな器用な芸まで覚えこんだのだろうか？ 百合子は、すっかり驚いて槇夫の、その一心に唄う顔を見守るのであった。

東寮には日米の男子学生が宿泊し、西寮には日米の女子学生が宿泊していた。そして槇夫の住んだ部屋は、東寮の二階一番、向うの庭園に面していた部屋であり、そこは大槻藤子、百合子の親友の部屋であった、従って平生、百合子はよくそこを訪ね慣れていた。

百合子の中で、ただ百合子の心の中で、槇夫を敬愛する気持が募り、そして、もっと深い感情に変じていった。時間の経過するにつれて……折柄、月が次第に丸みを増して、その光り、いよいよ青白い光りがクレセンドし

の芝生の所に出た。あちこちに、グループだの、カップルなど散らばって坐っていた、といって誰も他のグループなど気にしていない。その前は、昔のままのむさし野の雑木林が温存されていた。樺（ブナ）、小檜（コナラ）、栗の木々、そしてその林の中に北から南にと五百メートル以上の自然の径が走り、それは、このカレッジでは

Lovers' Lane 「恋人たちの小径」と呼ばれていた。

女性だけの学校であるだけに、この言葉は意味深かった。青白い月光の燦めく芝生の上になった独り坐った百合子はいつのまにそこに仰向けになっていた。そのまま時間がたち、いつか真夜中近く、少し冷えて百合子は立ち上った。それは独特の感情だった。相手がいたら、好ましい話相手とそこですごしていたら……しかし月光の中に一人いる気持には、独特の魅力もあった。それは愛器を抱えてソロを奏でているのと同じであった。

外で、都心の要所で、時折パーティが催おされた、昼食会や、正式の夜食会、下級生の百合子は三信ビルで行われた昼食会に一度招かれただけであったが。槇夫のような立場の人は度々、もっと華やかな会に招かれているようであった。黒い服に身を包み、白い絹や淡いヒヤシンス絹のワイシャツにネクタイをつけて出かけてゆく槇夫の姿は大へんエレガントであった。槇夫は決して美青年というタイプではない。しかし彼らしいいかにも思索に耽ける芸術家らしい風貌であった。

ていったように。

ある夕方、百合子は用事で槇夫の部屋にゆくことがあった。用事はすんで、槇夫は机の上にあったハーシーの「キス・ミー」のチョコレートをいくつも百合子の掌にのせてくれた。

その場所はどこであったろうか、もう夜に入っていた、食堂は西寮だけが男女の学生に解放されていた、従って夜そこでもみんなが集って喋っていた。

ある夜、誰かがそこにレコード・プレーヤーを持ちこんでいた。そしてショパンのノクターンのレコードが何枚かあって、それがかけられた。百合子が自分でそれのかけたのかもしれない、はっきりしていることは、そこにはただ一人日系二世のケイがいて、百合子が夢中でレコードに聞入っているのを感じたように見ていたことをおぼえている。あの夜のノクターンは百合子の心をふしぎな境地に導いていた。それは百合子を、憧れと現実との葛藤から、より高次の世界に連れ去るのだった。その世界の美しさに息をのむ思だった。いつか食堂の上に額を押しつけてしまっていた。それはノクターン「15番の1、へ長調」「15番の2、嬰へ長調」「15の3、ト短調」であった……

折柄、月の光はキャンパスに益々冴えていた。百合子は寮を出て、本校舎の背後、コの字型に配置された中庭

槇夫は後に、出身の慶応大学の予科（当時）の英語の先生を務めた。しかし、それよりも、新進の劇作家として劇壇に華々しく活躍していた。少くとも百合子のように、戦後、苦しい思で暮していた無名の者にとってはそう見えた。苦しいといっても、それは戦前の生活を思うからで、もっともっと辛い目に会っていた人々の目からは、甘く見えたかもしれない。しかし頼りにする父が開戦後一年もたらず、四十八才で世を去り、後、住居をも失い、いかに婚家とは言え、結局、他人の家の飯を食する身にはこたえた体験であった……

しかし槇夫とて楽な身ではなかった筈である。彼の父上は北海道大学の植物の教授であった。彼の兄の令嬢、つまり槇夫の姪に当る女性が、ずっと後に、北京生活を綴り、その特殊な才能で芥川賞を得られたが、叔父槇夫と戦後、世田ヶ谷、若林の家で同居されていたのを記されている。槇夫が自らの意思で世を去ったのは、その家ではなかったらうか。

百合子は、槇夫をよく知っていたという名門慶応高校前教頭で英語の村野先生と親しく話を交わすようになった。同僚として埼玉県のある学校で。このいかにも穏やかな、円満な御人格の中に、様々の豊かな人生体験を蔵されている村野氏は、木曾槇夫の戦後の華々しい活動をよく記憶しておられて、その折の上演の貴重なプログラムを下さったりした。御自分の御意志で御子様を持たれ

ない氏は、数多くの良き教え児たちをこよなく愛され、交流を続けていられる。

戦後、百合子は榎夫に会うことはなかった。ただサルトルの劇、「出口なき部屋」とアヌイの「アンチゴーン」の上演で、都心の講堂に、母と出かけたことがある。百合子はあまり劇を好かなかった。しかし母が大好きで、お伴をしたのである。その帰り、上の階にある会場から、細い階段依いに何階も降りていった。エレベーターは当然満員なので。その時ふっと、階段の自分のすぐ上の所に、木曾榎夫の姿を見かけた、たしかに彼——ずい分昔と変っていた、といっても、わづか六、七年前の姿と。

それは、全くといってよい蒼白な顔をした痩せた姿であった。百合子ははっと息をのみ、一寸二、三步すれば近寄れるのに、そのまま挨拶せずに下に降りてしまった。何かお久しぶりで、と気軽に声をかけたい気持をなくさせるものを、その蒼白な表情が示していた……

それから間もなくであった。彼の突然のこの世からの消失を知ったのは……

榎夫は戦時中、海軍予備学生として召集され、船に乗ってフィリピン方面に向う途中、その船が撃沈され、フィリピン沖で長い間、海に浸り、それから救出されたと聞いたことがある。彼は体もよくなかったのでなからうか。そのことが原因で、おそらく胸も患らっていたかも知れない。

武士の一人一人まで、和歌という教養を身につけていた日本の伝統ある市民にとっては。たえず、死と生に曝^{さら}されている市民たちも、その本質には一人一人詩人の傾向を持っていると言えるかもしれない。トーマス・マンの主張していることのほうが、むしろ奇異なのかもしれない。

輝やかしい夏のキャンパスの日々！

夜。創立者、津田梅子の立派な墓が、東北の一隅に静かに収まっている、そこに両側に桜並木があり、その此方側に広大な芝生が広がって、その西の先きに東寮と西寮があるが、墓地に近いほうの芝生に、ある夜、いく人もの人たちがかたまつて、じかに芝生に腰を下していた。冷房もなかったあの日々、ふしぎに暑いと思つたことはなかった。むしろ、芝生の夜気はひんやりしていた。大槻藤子がそばにいた、そして、よく藤子のそばにきて話しかけるようになっていた小柄な凛とした好青年もそこにいた、たしか、彼は外交官になったと思う。梅村とあったろうか、梅影、それとも影村梅夫とあったろうか。お互いに将来のことを話していたように思う、半ば夢のように。さきに述べたように、学生たちには、実際には戦争の黒い影はまだ迫っていなかった。藤子はしきりに口にしていた、あの時の口調、あの時の彼女の目の輝きをまだはっきり覚えていて、

「私は何か一つの理想のために身を献げたいの、一

しれない。栄養も行きとどかず、しかも戦時中、戦後の物資欠乏の時代を、劇作のために、懸命の奮闘をしてきた。榎夫は戦時中、小劇団で活動していた間に——神田錦町にその本部があった——後に、有名になった、地味な女優と結婚していた……

しかしそういう、いわゆる「幸せな生活」、洋々たる未来も、彼をこの世に引き留めておかなかったのだろうか？ 何故？ と百合子はつくづく考えざるを得なかった。

毎日大へんな生活の中で度々、かつての「輝やかしい夏の日々」が蘇るのであった。

榎夫は「劇」の人であった。百合子は「ヴァイオリン」の人である。音楽を呼吸せずには、本質的に生きてゆかれなかった。音楽は彼女に与えもし、又何かを失わせるかもしれない。世の常の幸福とは何であろうか？ 普通の市民と芸術家の生活のギャップに悩んだトーマス・マンが、それを見事に結晶させた「トニオ・クレイゲル」、あの作品の主人公の悩みはそのまま、自分のもののような気がしていた。

普通の健全な市民としての生活を享受しながら、なおかつ、詩という月桂樹の葉をむしりとりとうとした人がやはり、トーマス・マンの作品の中に出てくる。その人は、彼が自作を朗読したその宴会の席を白けさせたのである。しかし、それは日本では、別に奇異なことでないだろう。

つゝの真理のために！

ピアニストでもあり、百合子のヴァイオリンなどよりはるかに秀れた腕前を持っていた藤子は、何故か、その時、「音楽のために身を献げたいの」と口にしなかった。何故だろうと百合子は一寸ふしぎに思った。彼女ときたら、毎朝毎朝七時頃から八時頃まで、すぐ寮のとなりの本校舎の三階の講堂にあるピアノで練習していた。それはベートーヴェンの「ワルドシュタイン」であった。おかげで、百合子はすっかりその曲を覚えてしまった、あの出だしの激しいパッセージは、そのまた一見、温和そうに見えた灰白い面輪の藤子の内に秘めた炎であった。藤子！ 思えばその炎はあく迄神聖なものであった。ヴェスタに献げられた神火を守る巫女のものであった。彼女なら、若い侍女が、男と恋愛しても嫉妬に狂ったりしなかったろう。伝説のサフォンのように、若い恋人を若い女性に奪われたからといって、崖から海に投じて果てたりしないだろう。彼女こそヴィンセンツォ・ペルリーニの描いた「カスタ・ディーヴァ 淨らかな女神」であった。

戦時中、東京に務めていた藤子は故郷の山口市に帰り、その専門学校の英語の教師となっていた。その学校は後に大学に昇格した。しかし、二、三年で彼女はやめ、西寮の百合子の後輩、やはり山口市の井村美加にそれを譲り、自分は諏訪市の修道院に入り、やがてその修道

女院長となり、アルフォンスという名のマザーになった。彼女は音楽としては、アイリッシュ・ハープで聖歌に伴奏する。それまでクリスチャンではなかった彼女が、俄に修道院入りを決意したのは、近くの広島市の原子爆弾投下のあと、悲惨な被害者救済のため、決死の献身的運動をされたという異国の青年司教の感化であることを、後から聞いた……彼女の兄の青年医師は従軍し、南の太平洋の島で戦死していた。母が残されたが、彼女の姉が面倒を見たということである。

藤子、アルフォンス修道女院長は今も健全で、自らの手で、諏訪の修道院を、南国、宮崎の丘、シオンの丘に移し、そこで朝夕、瞑想と祈禱に耽けつてゐる。世の人々の救済のため、神の御加護を求めつづけている。宮崎市長は、一千坪の丘の土地を寄進し、諏訪の地を売却した金子、その他の寄附で、ともかく修道院本部の建物は作られたのである。ミカンの木が一千本も生い茂っている丘の上である。

百合子にとって、二人の一番身近な友人のうちの一人、杉原寛子は二児の優れた母として、大蔵省のお役人の伴侶としてすごした。長女は嫁し、孫も得、次女が東大を出て東京都庁勤務を経て、通産省の役人として積極的に公園課の部門で広く活動している。しかし寛子自身は十年も前、十一月七日、山茶花の匂う日に世を去った。実父、医学書院社長は当時まだ健康で、時至らずして世を

あの文字通りハングリーの時期、しかし研究室の図書は自由に読めた。それに本屋に原書が売られていたとしてもそれを買うお金は、百合子たち普通の市民の学生にはなかった。だからかえって勉強する意欲が湧いたのかもしれない。

当時百合子は幼い娘を持っていた。しかし、理解のある物理化学者の良人は悦んで百合子の勉強を励ましてくれた。

月日はたつて、寛子と反対に、百合子はその一人娘アリサを二十才で失った。娘はどこか、かつて横夫の憧れた、百合子の津田の時のクラス・メイト、長谷川楨子の面影があった。しかし彼女は予科時代、十八才で世を去った。本郷在住の有名な画伯の次女であった。

寛子の娘たちが、母親の遺志を継いで暮しているように、百合子は反対に娘の遺志を継いで何とか生きてゆかなくてはならなかった。その百合子を支えているのはヴァイオリンであり、音楽であった。アリサが真剣な顔をしてシューベルトの即興曲に、夜、よく耳を傾けていたのを思い出す。アリサはピアノを弾いたし、もう一つの名はカロリーヌであり、カロ（愛する）であった。それはシューベルトの若き日の面影を伝えている映画、「未完成交響曲」に登場する、どこかヤンチャな、しかし魅力溢れたハンガリーの大貴族エステルハージー侯爵の姫君カロリーヌにあやかっただけだった。どちらを取って

去る娘を毎日病床に見舞っていた。そして、娘の世を去った後、キャビネにのぼした寛子の写真を親しかった友人の一人一人に贈って下さった。寛子はその長女に百合子の名を付けてくれた。その他、百合子はどうにも寛子の導きを受けたり。出征していた夫君の帰国を待つ間、寛子はT大学の法科に入った、そしてそれが百合子の励ましになって、その翌年、百合子も同じ大学の文学部に入った、それは横夫の刺激でフランス文学科であった。本来なら百合子はドイツ文学科に先きに入ってもよかったのであるが、戦後三年目であった、新聞の翻訳の仕事

を止めて、思い切って百合子は新しい道を志した。戦後、フランス文学科は俄に人気を増し、それ迄、年に五人位しか志望者がなかったのに一挙に五十人となり、有名な辰野隆先生、鈴木信太郎先生を大へんまごつかせていた。横夫の手引きがなければ、百合子が、このような御立派な恩師たちに廻り合えたかどうか分らない。そこには、十六世紀ユマニストの御研究で、新旧両派に分れて同じ神の御名の下で血と血で争ったキリスト教の世界を詳述されていた渡辺一夫先生がいられしたし、一番若いデカルト、パスカルの深い研究、それから飽くことのない、激しい知的探究心に燃えて私たちに講義された森有正先生がいられした。どんなにそれぞれ御性格、御研究対象の異なるこの大先生たちから百合子たちは感化を受けただろう。食物も充分でなく、まだ配給で、原書も本屋になかった

も、どこか愁いの漂う名前であることにあとから気付いたが。アリサとは、葱科のつましいリラ色の撒形小花を咲かせるアリッサムからきたものであらう。アンドレ・ジッド、植物に強い関心を寄せていたフランスの大作家がつくったきれいな名前である。彼の妻になった二つ年上の従姉マドレーヌの創作上の名前で、「狭き門」の女主人公の名前であった。

今日是一九九〇年九月十三日

午前三時半に、東南の空、向いの建物（十メートルの高さ）の上に、オリオンが、はっきり見える。それから一時間ほどたつて見ると、その建物の横から、シリウスが青白く冴えたあの見事な光りを放って、オリオンを目がけて昇ってくる。

あと十日でお彼岸、死者と生者が交流する日。

一九四〇年七月半ばすぎ

広いキャンパスにさしてくる月の光がだんだん拡がってくる。日米の百五十名の学生たち、十九才からせいぜい二十三才までの若者たちが二週間一堂に会し、寝食を

共にして、デイスカッションを行い、余興に興じた。ダンス・パーティもない、ましてデイスコもロックもない、静かな音楽の雰囲気の中に包まれて打ち過ぎた日々。一九三二年五月十五日犬養木堂（毅）首相が青年将校に、「問答無用」とピストルで暗殺された。一九三六年二月二十六日の暁方を血で染めた重臣逆殺事件、一部の軍の反乱事件……満州事件……

しかし日米の若者たちを包みこんでいたあの空気はふしぎな位、晴朗で、温かく、相互理解の精神に充ちていた。その中に未来の大蔵大臣花沢夫妻が混っていられた。月の光は夜毎に光を増して、むさし野の雑木林を縫い、小川に燦めいた。校門の外に、それは今でも幸い切り倒されていない小川―玉川上水―沿いに茂っているが。半世紀の以前には、至る所、果しもなく広がるむさし野の原林と原野であった。春には、金蘭、銀蘭の鈴蘭形の花々が咲き乱れ、秋には萩が一面に細かい花びらをこぼした。野菊が紫染し、われも紅が顔を見せた。早春の小川の堤には、一面にぼけが朱紅の花々を見せた。五月緑のさなかに、かなり背の高い木になるエゴの木が純白な、仄かな香りのする白い花々を一面につけるのだった。それは西寮の向って右手、二階の洗面所の窓まで届いて一本茂っていた。

七月のある夕べというより、夜も午後九時すぎて、百合子は構内の外に出て月光に青白く燦めく雑木林の中を

当時、そう判然と自覚できたわけではないが、このことを榎夫から教わった。

やはり夜、西寮の食堂に大勢集まっていた、御飯の残りが、すぐ続く大きな台所に、お櫃に沢山入っていたので―女中さんたちが、わざわざお夜食にと残しておいてくれたと思う―あと一年位で食糧統整の実行される以前、何と寛大であったことか。百合子たち数人の女子学生はそれで一生懸命お握りをつくり、お皿に山盛りにして広い食卓のあちこちにおいた。榎夫もあとから入ってきて、それを口にくれた。

あの頃、何と夜少ししか眠らなかったことか……ことにアメリカの学生たちの体力の強さには驚かされた。明け方帰ってきて、午前八時の会議のテーブルには必ず姿を現わした。たしかに恋愛のカップルもいくつかあったろうが、そういうことにかまけて、本来の使命の日米学生会議をおろそかにするものはいなかった。当時の学生たちは躰が行き届いていたのだろうか？何ととっても全国から選拔され、テストを受けて、このメンバーに選ばれた自覚、ことに非常事であり、自分たち一人一人学生の肩にずしりとその自負、自覚の気持が重くかかっていた。みんなは使命感に燃えていた。

昼間は輝やかしい黄金の日々が燃え、夜は深秘に包まれ、月光が青白く世界を映しだし、まるで別な舞台の住人に変えていた。一方はいわば白日の叡智の世界で、他

流れる小川のほとりを草に足を濡らして、歩いていった。さすがに一人では憚られ、丁度、男の学生で親しくはないが、木曾とよく話し合っている人が、附いてきてくれた。それは、まるで夢の中を歩いているようであった、歩いているというより、ふわふわと、足が宙に浮いてさまよっているようであった。あんなに月光を深秘と思っただことはない……もちろん一緒に行く相手が木曾榎夫だとなんにもいいかと思っただかもしれない、しかし、案外榎夫と一緒に話すと、あまり話すことがなかったかもしれない、……ふっと月に光っている草の茎に螢がとまり、ラムプをともしていた。このような夢幻な美しさを留めておく言葉はない……ただある旋律だけがそれを伝えられるだろうか、それはショパンの旋律……モーツアルトを愛したショパン！

一体、男性と女性と、それぞれ不完全な個体が合体して何が生みだせるだろうか？やはり不完全な別な個体しか……ただ一人一人の人間の内には完璧を憧れる希求が潜む、この願望こそ、一つの理想へ到達する道なのでなからうか？それをモーツアルトやショパンが教えてくれる。

人間と人間が協力してできるものは、日常生活での補佐役、それ以上望んではならない、恋は日常生活の領域の枠内では、対象となるものではない。日常生活の基礎をなすのは人間への愛情と労わりである……百合子は

方は月光の夢幻の領域であった。いわば理智と深秘の交錯の中に、若者たちの青春は揺れ動いていた……

榎夫が姿を現わす、西寮の建物のすぐ下の窓際の草むらに、百合子とほんの少し話を交わす。それは恋人同志などとはおよそ遠く、榎夫は同じ道の大先輩として、百合子ははるか後輩として。

「勉強をしなさい！ モンテニユをよく読みなさい！」

そしてそれから長い長い才月が流れた。その間、二、三回会った。少し長かったのは、東京駅八重洲口のなにか大きな建物の二階の一部を占めて、気持のよいカフェであった。レストランだったのかもしれない。百合子たちは、かつての「芸術グループ」の仲間として旧交を温めた。もちろん、チェア・マンだった木曾榎夫も姿を現わした。百合子と仲の良かった辰見桂子も。彼女は、すでに卒業して、宝塚に帰っていたが。百合子は卒業を控えていた。つまり開戦を目前にした―しかしまだ普通の市民にその予感などなかった―秋十一月でなかったろうか。桂子は例によってとても品のよい、しゃれたオーヴァを着ていた。この会議の時、裏方に廻って、東・西寮の寝具、装備の係りであった桂子は、シーツや枕かけ等、寮生から借りた品物のリストをチェックし、大へんな労働を、会議が済んでからも、十日間もかかり行い、くた

くたになつて宝塚の実家に帰った。その時の過労も手伝い、翌年三月卒業してから、胸を患らい、軽いものではあったが、サナトリウムから一種の道場に入り、身体を鍛え、その時には回復していた。当時、神戸の六甲に家のあった百合子とは親しく、宝塚と六甲で互いに訪問し合った。その姉で二年上の辰見光子が、その秋、結婚した筈である。六甲の家を訪れた桂子は、百合子の母のもてなしのよさにすっかり打ち解けて、夕方まで楽しんで夕食も終えて帰った。六甲山のすぐふもと町、阪急六甲の駅から歩いて、七、八分の所にある二階建ての家、お邸としてはそう広いものでなくとも、現在の感覚からは充分にゆとりのある家。辰見織の本来という旧家で、多くの家族のしがらみの中に育った桂子には、一銀行員（当時、次長であった）の親子水入らずの家庭は、屈托なく居心地よかったのであろう。

槇夫を中心にした、多くは女性のその集まりには、心温いものが通っていた。その前年の十一月に築地小劇場で、木曾槇夫作、戯曲、「十一月の夜」が上演され、百合子たち始め当時の仲間らはみんな観劇した。槇夫、わづか二十二才の槇夫は新進劇作家として注目を浴びた。

それはごく普通の一市民の家庭の中の、何気ないエピソードをいくつか綴り、劇に仕立てたもので、とりたててドラマチックな盛り上りがない、筋らしいものではなく、話の展開はなかった。いくつもの場面の中で次のエピソード

ードを百合子は覚えていた。その家庭に、アメリカから電報が、郵便局にきているという。それは何となく槇夫自身の家庭を思わせた。北大教授というインテリ一家の家庭。それは、アメリカに赴任している息子が、父親か母親の誕生日に、祝電を打ってきた。しかし、夜遅いのでその電報はすぐに配達されない。電話で内容が届けられるというのであったように思う。ともかく郵便局の人は、その電報の中味が、いささか呑気すぎると独白している所が印象的だけだった。このさりげないエピソードの連続に、今から思えば、槇夫は、怖面コワイオモテにのみなつてゆく時流に対して、ひそかなレジスタンスを試みたのでなかったろうか。表立って反抗すれば、それがどういうことになるか、今週で終ろうとする、「凜凜と」によく示されている。アメリカの学生たちと二週間寝食を共にし、心から語り合い友人となった人たちに、どうして日米開戦の必要が認められたであろうか。東大生であった小林義正という人が、しきりに、「歴史的必然性」という言葉を使っていた。この言葉は、果して開戦が歴史の必然性という意味だったのだろうか？ 従って偏ナショナリズムの表現であったのだろうか？ それも百合子が、ずっと後になつてから、気付いたことであつた。

ともかく槇夫の考えは、この「十一月の夜」上演によって、間接的に表現されていたと思う。

劇のあと——三日間連続で上演されたプレミエール（

初演）のあと、百合子は、楽屋に、一寸挨拶に出かけた。ほんの一寸だけ槇夫と言葉を交わしただけであつた。あとで、しみじみ感想を綴った手紙を送った。その時の劇のプログラムに次のように記されていた、

「夢見るよりはもっと激しい希求の彼方に、その輝けるものがあります」

この文章に深く打たれた百合子は、「うごめく群衆の中に抜んで輝く白い星のような存在である」と槇夫自身に対する賛辞を述べた。それが槇夫にどう伝わったか、今は知るよしもない。

槇夫が、その後、愛して、そうして愛されて、結婚した女優の佐和子夫人と、どのようにして生活を共にしたのか。同じ劇道に精進する同志としての結婚はどんなにか実り豊かなものであつたか、と百合子は思ってみるのであるが。ただ槇夫のある知合の話によれば、お二人の仲は、槇夫の晩年、ハーモニーに富んでいたと言えないようである。槇夫は、知り合つてすぐ百合子を見抜いたように、内省の人、思索の人、そして本質的に、「明るい生活」（トニオ・クレイゲルの中のハンスに代表されるスポーツマン、行動者としての生活）に背を向けた人であつた。彼は生の昏い面に棲む人であり、「私の憂うつやさん」であつた。人嫌いではなかったが、しかしその本質では、モリエールの「人間嫌い」のアルセルトであり、華やかな女優のセリメーヌに失恋させられる詩人

であつた……、槇夫が百合子をフランス文学に導いた。本来、百合子はその生い立ちからみてもゲルマン的であつたが。百合子の父の姉はドイツ人を父にしていた。実際にこの姉は父の従姉にあつた。津田カレッジに在学中、百合子は、自分の求めていたのは英文学であるより、ドイツ文学であることを知った。ゲーテは彼女の文学入門であり、ニーチェに憧れ、「ツアラトストラ」に読み耽り、トーマス・マンを愛読していた。ことに「ブッテンブローク家の人々」を。ヘッセはまるで自分の兄のように思えた。カロッサもリルケも愛読していた。しかしフランス文学を、戦後三年後入った大学で志した。津田を出てすぐ習ったのはフランス語であつた。すでにドイツ文法は習っていたので。そして槇夫のイニシアティブで志したフランス文学により、パリにそしてパリからウィーンへの道が見つかった。百合子は秋の夕べに記す。

槇夫！

人々の出会いは、いわゆる恋愛を越えても人と人間としての成長に豊かに寄与することをあなたは身をもって指示して下さい。

今 あなたが生きていらしたら……

しかし あなたは二十二才ですでに完熟されていたモンテーニュのように、ゲーテのように！

あなたの星はいつも白く光りつづけて 夜の暗い小径を導いてくれる
かつての「恋人たちの小径」で迷いかけた百合子を導いてくれたように！
あなたは教えてくれる

生の道は死に至り 死の道は生に至り
二つの道はたえず環流して
存在の本質を形成し

私たちはその中に揺れ動く
一本の草にすぎないことを
年毎にジンジャーが咲く時
その香りが

二つの道を繋ぐ回廊の
秘密の扉を開ける鍵であることを！

一九九〇・九・一六

小樽、稲穂小学校同窓生
の急死を聞いて

このささやかな文章は故劇作家加藤道夫への献花の一
束です。

に薬剤師として出征し、チェコの南部グロデクでの戦いの後、血まみれになり、死にかけている重傷者を前にして、何百人という数に、居合せたのは軍医二人と彼のような助手だけ数人、薬もなく、治療所もなく、そこに放棄されている、血まみれの、呻き声を発している人々を見て、自ら絶望に駆られた詩人ゲオルク・トラークルは、手にしたピストルの銃口を自分に向けて引金を引こうとして傍の人に止められた。それから彼は軍用病院に送られ、ほんのしばらくの後、一九一四年十一月四日から五日の夜にかけて睡眠剤の多量摂取で息絶えているのを発見された。それは過失ではないであろうと推論された、何故なら薬剤師の身で、その適量を承知していた筈だからである。

日米学生会議のあった夏は一九四〇年、そしてもう翌年の十二月八日に日本は対米戦争をしかけた。槇夫のよるな作家も招集され南海に行き、船の沈没で、生命からがら助けられた……そして槇夫もそれから何年か後には、トラークルと同じ運命を辿る。

思えば、すべては七月の夜の月光の織りなす夢幻の像であったのだろうか。

エビログ

それも夏の夜、月の光が映しだした幻影であった。ふしぎなほどに、あの輝やかしい夏の日々、雨の記憶は一度もない、曇った日さえなかったと思う。日増しに光を増してくる月光は、あの広大な庭園とそれを取り囲む、果しもないほど拡がる武蔵野の雑木林を晃々と照らしだしていた。

月光の中に長い間浸っていると人は、少しづつ、気がおかしくなると云い伝えられていることが実感になりそうな夜。

いつか月光に照らされた庭園にいて、百合子はそこからすぐ近くの東寮の二階の角の部屋、つまり大槻藤子の部屋で、この会議中、槇夫がもう一人の知人と共同で住んでいるその部屋の中に入っている自分を夢想した。誰もいなくて、二つ並んだ机、二つ並んだ椅子、その一つの背凭れに、槇夫のと思われるワイシャツが、無造作にかけられている。淡いヒヤシンス色と真白な絹のブラウス、そのすぐ前に都心でパーティがあつて、槇夫たちは招かれていついた筈。ふつと百合子は、そのワイシャツを手に取り、そのカラーの所に頬を寄せた……それは「男性」を意識するよりは、はるかに、槇夫のエッセンスにじかに触れる思いだった……

「^{ソナタ}汝の肉身はヒヤシンス」ゲオルク・トラークル

ずっと後になってから、二十七才の若さで、第一次大戦

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。

「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

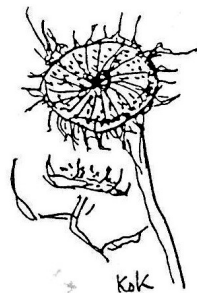
年齢、職業を超えた同志の集団です。あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。



Gone are the Days

山 根 三 枝 子

五月三日

やはり朝起きるのが眠くてつらい。早朝から風がともひどく吹いていた。朝食後、学校に出かけるギリギリの時刻までかゝって宿題の英文を仕上げた。三時間目の体操の時間に暖房の煙突に手をぶっつけて右手の人差指を少し痛めた。歴史研究会の人達が秋山謙三氏を招いて「日本の現実」と題する講演会を開催した。(彼は「日支交渉史話」の著者で朝子達が一年生の時の日本史の講師。夏休みの宿題にはかなり頁数の多いその本を読んでいくことが宿題であった。そして講義のスタートは毎度、現代の我われの身近な問題からでありユニークな歴史の学びだと感じていた) 体が何んとなく疲労したように指もズキズキ痛むので出席せず帰寮した。入浴して看護婦の渡辺さんの所に行き指の手当をして貰ってからベットにもぐって睡眠をとった。

渡辺ハナさんは東寮西寮かけもちの看護婦で寮の人達の軽い病気や怪我などの面倒をよくみていた。朝子達よりそんなに年上でもなかったが母親のような心構えで寮生達に接していた。朝子はいつかアンギーナと当時言われていた症状で扁桃腺に白いものがつき高熱を出したことがあったが、その時の親切な取りあつかいを朝子はよく覚えているし、又腹痛のためであったが夜中に二度も彼女の室をノックして起きて貰ったこと、その時彼女が眠そうな顔をして起きたが不快感の片鱗も表わすことなく手当を考えてくれたことなど記憶から消えることはない。卒業後、何年もたって戦後の世の中も落付いて来た頃に彼女の消息を尋ねる折があったが、既に彼女は乳癌で他界してしまった後であった。

五月四日

東洋倫理が休講だったので近々予定のガーデンパーティー

イーで上演する劇、イプセン作「小さなイオルフ」の読み合わせをする時間が出来た。三時から四時迄は中島先生指導のホッケーの練習があつて出席したがやはり指が痛くてやめて帰った。五時からのタイプも勿論欠席。きょうは入浴日ではないので風呂場の脱衣場でヴァイオリンの練習。(痛い指は弓を持つ方の手なのであまり差支えない) 夜は宿題が多いので忙しい。粕谷先生の訳読はジョージ・メレディスをやっているのだが彼に就いてあらましのことのレポートを提出すること。漱石は英国に滞在中、メレディスをとて沢山読んでいたということ、従って彼はメレディスの影響を受けることが非常に多かったということを知った。消灯になっても未だ和文英訳の宿題が出来ていない。鏡子さんの室に行つて懐中電灯を借りついでに力も借りてやっと仕上げた。十一時半に就寝。

五月五日

鏡子さんに朝早く起こして貰い七時半の朝食までレポートのお清書。八時から九時(始業時間は九時十分)までかゝって藤田先生の宿題をした。それでやっと学校に出席出来る準備が出来た。

毎朝 始業前に十五分位の時間をとって三階の小講堂で讃美歌を歌い聖書を二節か三節位読みクリスチャンの人達がお祈りをしていた。宿題などに追われない時には

朝子も出席していたが讃美歌を聞きながら窓外の武蔵野の景色を眺めることは気分がすがすがしくなつてよかった。しかし宗教の中に入つて行くことはどうしても出来なかった。

鏡子さんのことがよく出てくるが彼女は卒業後に朝子の兄と結婚する。その兄はフィリップ近辺で二十年六月に戦死する。後、彼女はガリオアの第一回留学生として昭和二十五年にイリノイ大学に留学する。遺児を一人育てて彼が大学四年生になった時に癌で四十九才で死亡している。

放課後は久しぶりで時間があいていたので一息ついたかった。でもイプセンの劇の脚本をコピーするよう頼まれて五時過までかゝった。

今夜から三年生の東北旅行は出発だ。出かける人達は夕食を終えてから三三五五出発して行つた。居残り組の江上・橋本・小林さん達と上水道わきの農道の方に散歩に出かけた。

塾での学生生活四年間、その間の寮生活のことを思い出す時に朝子にとつて忘れることのないものは夕食後の散歩のことだ。現代の世の中とはまるで異なつた別世界の感じ。物質的には決して現在のような豊さはなかった

がそれに反比例するように自分の時間とか心のゆとりという点では確かに恵まれていた。それに何といってもキャンパス内に寮があったので通学時間が不要であった。又食事を作ることも後片付けをすることもない寮の環境も夕方のゆったりとした散歩を可能にしていたことであろう。テレビの前にくぎ付けになることもなし。朝子の日記の一部の或日、或時の散歩についてこんなことが書いてあった。

「何か憂鬱で淋しい気分にとりつかれて夕食後すぐに寮から外に出て行った。校門の前を過ぎて久右衛門橋を渡り右に折れて上水沿いの道をもの思いに更けりながら歩いて行く。やがて初夏も訪れて来ようという晩春の夕暮時、充分に明るさは残っているし西の空は新緑の雑木林の梢越しに茜色に輝いている。心地よい夕暮時、勉強に追われた一日からホッと解放された一時。無為の寂寥感に囚われ一人トボトボと歩みを運んでいた。ふと気が付くと自分は一人で歩いているのではなかった。Aさんがひっそりと私に気付かれないように一寸後ろからつけて来てくれていたのであった。まるで貞淑な妻が夫に従うような態度でうつむきがちに。その時の朝子の孤独を耐えている淋しさにとっては彼女の静かな暖い態度が涙が出る程嬉しかった。朝子は言った、嬉しさで一杯の顔を彼女に見せて。

「あなたってとっても静かな人ね！」

い所を裸足になって向う側に行った。こちら側の人達が羨しそうに見ていた。帰途は東村山から河瀬先生にタクシーに乗せて貰って帰った。

夜は九時過ぎまで旅行で留守の室が並んでいる一番奥のアメちゃんの室でヴァイオリンの練習。そのあと瀬川さんと他後輩二人を招いてお茶をのんだ。

五月七日(土曜)

蜂谷先生の所にレッスンに出かけた。発表会の時に着る洋服を瀬川さんがきょう注文しに行くというので帰途一緒に新宿の「いさみ屋」に立寄って相談のつてあげる。赤味があった小さな花模様の布地で型はダービン以来流行となっていたボレロ付きのアフタヌンドレスにした。三時半に帰寮。自室の掃除。買って来た「音楽評論」を読んで夕食を食べそれからモン子の室で雑誌「スター」や「エスエス」を見る。夜は今井さんが貸してくれたバッハのブランデンブルグをリクの蓄音機で聞いた。

消灯の頃になって下級生の瀬戸口さんがフ拉里と私の室に来た。その夜はお話しながら一つベッドで寝た。彼女は悩みごとがあるんだと言う。そして下手な日本語で「あたし ホントはね、日本語で意味のよく分からないことが一杯あるのよお」とあわれっぽい声を出して言った。彼女はアメリカ二世で英語に関しては他の学生より得意であったが日本語に関しては日常生活には一向差支えなかったが概念的と言おうか抽象的な言葉には非常

彼女は恥ずかしそうに一寸だけ微笑んだが何も言わなかった。夕暮時の隠やかな雰囲気は二人を青春時代の淡い夢の世界に融け込ませていくのであった。夕焼の空ばかり見ていたせいか、それともそんなにも晩春の日はトップリと暮れてしまったのか視線を地上におろした時その濃さを増した薄闇に気付かされた二人はキリッと気を取り直したような速さで寮の方に急ぎ足で向うのであった。空には金星が光りはじめ、それなのに今夜じゅうにやらなければならぬ予習や宿題の山が重ったるく彼女達を現実の世界に引き戻すのであった。

みんなで帰ってくる途中で中島先生・河瀬先生と信ちゃん(中島先生の妹)に出会った。誘われるまゝに彼女達のアパート(教師館)に行って八時過ぎまですごし寮に帰って一人で入浴。夜は三年生の人達が大部分旅行に出かけたあとなので一寸ひっそりしている。もう十時も過ぎたことだし皆仙台への汽車の中で眠ろうとしている頃であろう。就寝後すぐにはねつかれなかった。十二時頃廊下をカサカサと人間が走り回るような気配があった。誰かが何かいたずらをしていたに違いない。

五月六日

七時起床。居残り生と他の学年の希望者達で天覧山に遠足に出かけた。あまり気も進まなかったが昨夕 信ちゃんがしきりに誘ってくれていたので出かけた。川の浅

に弱かったようであった。

「あたしね、例えばね、感情的と理性的っていう意味がどうしても分らないの」と言う。よく説明してあげたがいつまでも符に落ちない顔をしていた。彼女は多分、あちらで成功した農業移民の娘であったかも知れない。アメリカでハイスクールを出た後に日本人らしい教育を受けさせたいと言う両親の希望で津田塾に入学して来たと言うことであった。彼女はすべて、もの事の考え方がシンプルで具体的であった。いつも健康的で明るい感じであった。それなのに彼女に悩みごとがあるなんて想像も出来ないことに思えた。私は眠くてたまらなくてそれでもフンフンと一応聞いてあげている風を装っていたが目をあけていることが出来ずに寝入ってしまった。それで彼女の悩みごとは何んだか分からずじまいった。彼女がいつ室を出て行ったかも覚えていない。でもつまるところ英語以外の日本語でする授業がよく分からず彼女の大きな悩みごとであったということに違いない。

五月八日(日曜)

八時過ぎからやっと目覚める。朝食をとった帰りに瀬戸口さんの室をノックして一寸のぞいてみたがもういなかった。藤沢と粕沢の予習をしたらお昼になっていた。昼食後 奥田さん(姉の友人で卒業生)とドンに久しぶりで手紙を書いた。北野さんにタイプライターを一寸借りて来て一時間ばかり練習。夕方片田舎監と川上下枝さ

んと三人で散歩。川上さんは卒業生だが事務室か図書室で働いて寮にいつも食事だけに来ていた。舎監室に戻ってヨーカンをお馳走になる。洗濯場に降りてお洗濯ものを粉石けん溶液につけた。お風呂のある日はお湯がよく出る。安藤さんの室に行き東北旅行の土産話を聞いたり絵はがきを見せて貰いガーデンパーティーの時のブレイの相談もした。

五月九日

イブセン作「小さきイヨルフ」の読み合わせ。タイプ

出席。夜は英作の宿題

五月十日

体操の時間に久しぶりでバレーボールの試合をして面白かった。夜は消灯まで劇の読み合わせ。自分が読まないでよい時は近々開かれるガーデンパーティーで売るティブルクロスにステッチ刺繍もした。

五月十一日

ミス・チャペルのリーディングの時間は予習がしてなかった。夜は消灯まで劇の読み合わせ。自分が読まなかった。放課後は劇の練習。寮で夕食後に解散せず一寸だけ残るよう皆に頼んだ。寮の雑則の中に少しだけだが委員会と相談して変更した所があったので新しい寮則のプリントが用意してあった。それを皆に配って一緒に声を出して読んだ。

夜の七時過ぎから又メンバーで体操場に行き劇の練習

れる。そのせいか皆の気持は普だんの日より幾分か浮立っている。それでアゴール先生の会話の時間になった時、先生の姿が現われるとすぐに計画してあったように皆でワイワイ騒いで

「きょうみたいにお天気の良い日には外に出て緑の中で授業をやりたい」と申し出た。若くて一寸おしゃれな先生なので皆多少つけ込む気持があったようだった。しかし彼女はガンとして首をたてに振らなかった。意外にチョロくなかった。

放課後になった。早々と背広服（高野さんの兄上のもの）に着替えていたので暑くて汗だくになった。どうやら劇も終了。

今にして思うにはどんな劇だったのかな。「人形の家」の作者、イブセン作の劇なのだから読みなおしてみたい。相手役のアスタを演じた鏡子さんも委員だった小林さんももうこの世から去ってしまっているが――。

永山さんがテニスコート脇の木立を背景に写真を撮ってくれた。寄宿に帰りアスタ役の鏡子さんとベットにねころんで休息し、ガーデンパーティーで買って来たサンディッチを二人で食べた。元気がなくなった。

夜八時から毎日新聞主催の音楽コンクール入賞者の放送があったので食堂のラジオで聞いた。ヴァイオリン部

はじめのうちは中島先生がいて下さった。九時半位になっても未だ二幕しか済まないし皆がすっかり台詞を暗記して来てないのでそれぞれにあせり気分になった。おまけに皆疲れてきてみじめな気分になってきた。こんなことで明後日に演じることが出来るのかしらと……。ところが更に悪いことには停電になってしまいとても怖かった。少し待ったが点かないので月光が恍々と照る中を皆意気消沈した様子で寮に帰って来た。十時過ぎてからやっと電灯が点いたので寮のパララーで三幕目をドンドンとカットしながら終りまでこぎつけた。どうしたって明後日までに間に合わせなければならぬんだから。夜中までかゝった。

五月十二日

朝、眠たくてたまらず学校を休んでしまいたい位。でも七時半の朝食のベルでやっと起き上って食堂にかけつける。登校までの時間に時事問題の宿題（英字新聞の中から意味の分からない単語や熟語を二十ぬき出して意味を調べることを）を大急ぎでした。

夕食後又体操場に集まってセッティングをして練習。夜の十一時近くまでかゝった。演劇部委員の小林・安藤・大原さん達だけは用意のため更に残り出演者達は帰ってねた。月の美しい夜だった。

五月十三日

今日の放課後にはいよいよガーデンパーティーが開か

門の一位は巖本先生のお嬢さん、真理さん（十二才 巖本メリー・エステル）だった。子供とは思えない正確さ力強さでヴィヴァルディの協奏曲を弾いていた。終ってからもそのまゝ食堂にいて椿さんや展ちゃん達とお喋りの時を過ごす。マーガレット巖本先生はその昔、留学生であった日本人医者の巖本氏のあとを追いかけてアメリカから日本にやって来たところ彼の父親の巖本氏が横浜港で立ち止まっていた追返えそうとしたとか……それを押し切って結婚したのだとか……先生の手は冬になると気の毒な位荒れてるわよ。こんど見てごらん下さい……。とかそんなお喋り。

巖本先生は一口に言って素敵な先生だった。教師としての誠実さ、優しさ、根気のよさ、その上家庭婦人らしい円満なおゝらかさ等をすべて兼ねそなえていて人間としてとても尊敬出来る師であった。ヴァイオリニストの一人娘の真理さんを失ってから現在是非常な高令の身を一人で日本で過ごされておられる。

消灯時間が来て電灯を消した室の中に南側の鉄格子の開き窓のガラスを通し薄いレースまがいのカーテンを通してさし込む豊かな月の光。そしてその光がベットカバーに落ちている様は美しい。丁度きようなブレイの中の台詞にあったように

「幸福や喜びは二人で分け合わなければせっかく喜んでいられるかいないではありませんか アスタさん」と私が言った通りだと思った。誰かと一緒にこの光を讚美したい。ベッドにもぐってじっとしているとシーンとした夜気の中でくいながクイクイ鳴いていて余計に趣を豊かにしていた。

五月十四日（土曜）

八時半まで深いふかい眠りのうちに過ごせた。午後蜂谷先生宅で発表会の合同下稽古がある。ピアノ伴奏を持つ本加すみれさんや田中さん、山崎さんなど上手な人達も来ていて何時もとは違った華やかで賑やかな雰囲気であった。丁度先生がピアノと合わせていてこんなのを聞くのははじめてで上手だなと感心した。私の番が来た時二回だけピアノと合わせる練習が出来た。はじめの一回はちぐはぐうまく行かず何度か途中でストップしたが二回目はぐっと良くなった。山崎さんや田中さん達は和服姿の多分何所かの奥さんらしい人達で或いは先生の後輩かも知れなかった。ウイニヤスキーやヴュータンの作品を練習する位の人達で可成り上達した人達のようにだった。私達のように勉強や学生活動の合間にやっているのとは違ふはづだ。それでもやはりこのようなせまい日本家屋の中ですぐ近くで弾いているのを見聞きすると、所どころで隠しおうせないような美しくない個所も気付かせられる。でもそれはたしかに缶詰の果物ではない新鮮

に思われる。しかしこれにはかない夢のようなことであつたのだと今にしては思われるのである。

入浴して夕食も済ませ「晩年の父」小堀杏奴作を読んでいたらタッチちゃんが私を呼びに来た。ミス・ブレイスウエイトが遊びに来ていて今からソーシャル・ダンスをするから一緒につきあってということであった。しばらく皆で踊ったあとタッチちゃんの室でミス・ブレイスウエイトに写真を見せたり日本の色々なお話をしてあげた。タッチちゃんの父親こと龍村平蔵は正倉院御物の中の織物を現代に再現した染色織物師として当時の知名人であり龍村織の元祖でもある。彼女は謡曲や仕舞もたしなんでいたものでそう言った話題や写真はミス・ブレイスウエイトにとって興味深いもののようであった。十時半に散会し彼女をハッホン先生のお住まいまで皆で送っていった。彼女が昨秋英国から来日して以来ハッホン先生の家の下宿させて貰っていた。皆で月夜をエンジョイしながら帰って来たのだが十一時近くの夜気は可成り冷たく芝生には一面に露が降りていた。こんなことまでが二十才の台湾育ちの娘には面白く感じられた。月夜の夜中の散歩なんて誰かの小説の中に美しい描写があったが体験するのは初めてのことであつたので。大分歩いてから寮に入ろうとしたがもうおそいので何処も戸締りがしてあつて入ることが出来ない。台所の入口に回ってこっそ

な果物の味わいが感じられるものであった。たとい熟れ方が足りなかったり少し酔っぱかったり逆に熟れ過ぎだったりという変化があつても兎に角、生のものという、そして瞬間的にどうかなるのか分らない所をうまく乗り切るといった痛快さも伴うものであり缶詰果物のような名人の演奏をレコードなどで聞くより余程聞く値打のあるものと思えた。

明治時代に安藤幸子がヨーロッパに渡り当時ヴァイオリン奏法の正統派と広くみなされていたドイツのヨアヒムに師事した。厳しいレッスンを受けたうえで帰国し東京音楽学校（現在の芸大）の教師となった。彼女の弟子の一人が蜂谷龍先生であった。力強さ、ごまかしのない正確さ、高度の理知性そう云った根本的な土台というおかしかりした心棒を隠しもった流麗さ……… そういったつまり伝統ある古典性をそなえた上品な奏法が東京音楽学校のヴァイオリン科の伝統として形づくられていた。蜂谷先生の弟子の兎束龍夫氏も芸大教授となりその又弟子の海野義雄氏も教授となった。蜂谷先生はすぐれた技量がありながら上野の分教場の教授で終っている。学生数も当時は少なくてしたがって教授の数も少数で事足りたためであろう。台北のような遠隔の地から出て来たものがたとえ短期間であつたが彼女のような師に接することが出来たことは今にして考えると不思議な位の恵

りおきのちゃんを呼び起こしてドアをあけて貰つた。

へりに金属のついた固いコンクリートの階段はスリッパ越しに足に伝えてくる何か冷やかさをもっていて階段を上りながら何んとなく寄宿生活のわびしさを感ぜさせるのであった。或いはそれは又青春の淋しさ辛さであつたかも知れない。自室に帰ってからあまりにも美しい月を眺めずにはいられた。そのうち無我の境ともいったものに落ちていくように感じフト自分が眠りかけそうになっていることに気付きベッドにもぐり込んですぐ深い眠りにおちていった。

ミス・ブレイスウエイトについて

昭和十二年の九月、暑中休暇も終り再び学校に戻った折に星野塾長が一人の新任教師を学生達に紹介した。英国人で名前はミス・ブレイスウエイト。小柄で若い女性。三日月のような弧を描いたまゆ毛をしていた。後になって彼女の顔に白色に近い金色の産毛が沢山生えていることも分った。塾長の紹介の弁によると彼女はケンブリッジ大学を出て更にスウェーデンの大学で特殊な新しい体操（リズミック・ジムナスティックスと言っていた）を学んだ由。彼女は東洋に憧れて（多分）当時英国の租界地もあつた上海の学校で教師になるためにはるばる日数をかけて英国から支那にやって来たのである。時は昭和十二年（一九三七年）上海事変の起つた年の夏である。

上海に着いたまではよかったが事変のため上陸が許可されず日本に来てしまった。夏の間にアレコレと奔走したことであるが九月から津田塾に転がりこむ結果となつたようであつた。塾長の紹介のお話によると彼女の両親にとつては愛娘が日本のような国に行つて住むなんて耐えられない程ショックな出来事でありへこゝまで塾長が言った時に学生達はその誤解と言おうか認識不足を皆ドッと笑つたことであつた。しかしそれは又学生の側の自国に対する認識不足でもあつたのに違ひないのだ。あくまでも日本に住むことに反対した由である。しかし塾の英米人教師達の両親あての納得いく手紙の説明と彼女自身のもつ若さの冒険心が塾の教師となることを肯定させたのである。なお彼女はクウェーカー教徒でありミス・ハツホンもクウェーカー教徒であることもプラス要因であつたかも知れない。当時日本に就いては新聞による僅かな知識、それも侵略国という憎むべき国という印象しかなかった彼女の両親としては当り前の反対であつたことはうなずけることだ。

彼女の名前は長つたらしいのですぐに「ブレちゃん」というあだ名がつき人気があつた。何しろ彼女は突然日本に来ることになつたのでそれに又五十年も昔のことであつたので日本については知らないことばかりであつたようだ。今日でいう所のカルチャー・ショックを大いに受けたに違ひない。日本人が好物として食べる筍やごぼう

のことを話したら Terrible! と二度叫んで仰天してゐた。要するに彼女は日本人ずれがしていいと言ふことでお互いに新鮮な文化交流があつたように思えた。

では彼女の体育の授業はどんなものであつたかと言ふと——この説明は文字を通してするよりビデオでも用いて見て貰えば一目瞭然なのだが——はじめての授業の時間に先ず彼女の服装に一寸ばかり驚かされた。何しろ半世紀も昔のことだから——。軽く羽おつたカーディガンとロングの巻きスカートをサラリと脱ぎ捨てると下は裸に近いうすい海水着様のもの一枚だけ。足も腕もギリギリまでむき出しで体の動きがよく見えるようにしてある。

体操場の片隅にドイツ製の古ピアノが置いてあつた。彼女はそのピアノを縦横無尽にたゞき鳴らした。体育選手の機敏さと確実さでピアノを鳴らした。それはショパンやベートーベンではない。それは体を動かす強力な指導力をもつた音楽であつた。八十八の鍵盤を端からはじまてまるで機敏な鼠が走り抜けるように早く鳴らす時、生徒達はその感じで走る。そして十本の指全部でドーンと響かせる時は思い切り高く跳躍したりした。又やわらかに歌うように弾く時は体を静かに曲げたり回わしたりした。多種多様なリズムとメロディーに合わせて彼女は創作的に自由に動作を考案して生徒達に教えるのであつた。道具としてはバレーのボールとかフープやクラブ(

根棒)等も使用した。緊張の勉強時間から解放され音楽に合せてする彼女の授業は大へん楽しいものであつた。このリズムック・ジムナスティックスは当時としては新しく又珍らしいものであつたので乞われて自由学園と白木屋デパートの屋上でデモンストレーションを行つたりした。そして当時のスポーツ誌の表紙に大きな写真入りで宣伝された。細田・阿部・小越・椿・田中さん達他数人、自他共に優秀な演技が出来ると認めた者達がその役目を果たしたようであつた。しかし日本周辺の緊迫した戦局を案じた彼女の両親がブレちゃんを日本においておくことを案じ本国に呼び戻してしまつたので在任一年半位で終りを告げてしまつた。それから二十年位の時が流れたであろうか、第二次大戦も終り平和になつてから細田・小越さん達は英国を訪れた際に彼女に再会した由だが其の後ブレちゃんは死亡したということである。時々うっとりとしたライトブルーの目で遠い所へ故郷の英国をしのんでかゝるを見つめるようにしていた表情が印象に残っている。

五月十五日(日曜日)

又おねぼうしてしまつた。日曜だからいゝけど……。此頃体力減退気味だ。矢野さんにねこみを襲われてやつと起きた。食後 寝具をへらして余分の布団を物置の布団袋に片付けた。タンスの中も夏ものにかえて整理した。

午後から誰もいない学校に行つてヴァイオリンの練習二時間。絃をおさえる左手の指先はタコが出来ていてカチカチで固いのにもそれでもズキズキ痛む、寮に帰り展ちゃんの室でクロス・ステッチの本(多分英国かフランスの本)を見せて貰う。あんまり綺麗なもので一寸ばかり刺繍がやりたくなつた。

学校で何かの会がありその時に残つたお菓子を展ちゃんが持ち帰つて来ていた。何んだか蠅がたかつてたみたいだと云うのでお台所で蒸して貰つてから一緒に食べた。夜はモン子の室のベッドにねころんで本を読んでいたらいつの間にか眠つてしまふと目覚めたらもう消灯時間になつていた。自室に戻り口をすゝいでねた。

五月十六日

私の満二十一才の誕生日

九時の登校まで大急ぎで予習。リーディングと訳の本に目を通す。昼食後の短い時間に運動部の委員会。(プレイ・デイに関すること)タイプに出席。学校から帰るとプレゼント持参で瀬川さんが来てくれた。コティーの香水とゲーテの詩をコピーしたもの自作の和歌を下さねていた。午後おなが痛くなり疲れも感じたので夕食までねていた。夕食後は九時位までかかつて運動部の仕事をした。

五月十七日

昼休みに全校生とする十五分間体操のあと昨晚準備し

たプリントを皆に配った。主として中島先生にうかがって作った正しい姿勢に関する説明や注意事項。タッチャンが皆を前にしてそれを読んだ。三時間目の体操の時間は途中から欠課にしてプレイデイに出る選手を決めた。夜は家に手紙を書きそのあとでパーラーの本棚にあったゲーテの詩を読んだ。瀬川さんからの詩に刺戟されたかな。

恋人の住むこの家を

今は立ちいで われはゆく

さびしく暗き 森をぬけ

忍ぶ足どり わがゆけば

檻の木の間に月照りて

ほのあたたかき 風わたり

白樺の梢 たわみつ

あまき馨りを放つなり

この麗しき夏の夜の

冷え冷えとして こゝちよき！

心の幸をこゝにして

覚ゆることの静けさよ！

げに楽しさは限りなし

されど神なる天然よ かゝる夜を

千も おんみにゆずるらん

王と滑降するスキーヤーはとっても素晴らしかった。夜はトルストイを又読む。

五月廿日

放課後 田辺尚雄氏の講演があったのでタイプの練習はお休みにした。ソナタ形式の発達をバッハ・ヘンデル・ベリオーズの作品を聞きながら説明して貰った。音楽関係の雑誌の中では「音楽評論」が一番よい由。又音楽史は乙骨さんの著書をすゝめて下さった。田辺氏は顔立ちのきれいな一寸だけ皮肉っぽい目付をした男。入浴後は日本間で西寮の三年生達はすきやきパーティーをしてブレちゃんを招待した。食後 リクでソシャルダンスを少しして日本間に戻った。江上さんの生花、佐藤うた子さんのお琴、タッチャんの仕舞、伊藤さんの茶の湯等をブレちゃんに見せてあげた。彼女はタッチャんの着物を着せて貰ってお茶の時に客の一人になった。小柄な彼女は日本着物が似合って可愛らしかった。十時半散会。

当時タッチャンが仕舞や謡曲をすることは知っていたが他の人達がこのように日本風の芸をたしなむことは其の時まで全然知らなかったので嬉しい喜びであった。今にして思えばこれも大正生れの娘達の一面であったであろう。その昔、高等女学校では課外、今で云うところのクラブ活動で茶道や華道それに弓道部・なぎなた部などもあったのだから。彼女達のたしなみはブレちゃん的好

恋人が一と夜をわれに与えなば

(ゲーテ)

九時頃から私の室にタッチャン姉妹、井上・保坂さん達が来てお茶とお菓子で井上さんと私の誕生祝をしてくれた。

オプティミストとペスミストとは？という議論から始まって一寸ばかり下らないお喋りになって来た頃に消灯の予鈴ベルが鳴った。片田舎監が三階の電源スイッチを消した帰りに私達のいる室の明け放してあるドアの所から室内をのぞき込んだ。懐中電灯で私達をパァッと照らし、もう寝ないといけませんよと一応はおこったような顔をしてにらんだが私達は皆で先生をからかって追い払った。昨秋着任したばかりの新米舎監にとっては上級生は一寸手強かったであろう。

五月十八日

七時半と違ってびっくりして起きたら未だ六時半だったので一寸もうかったような気分。今日はプレイデイ(体育祭)の予定なのに雨がじゃんじゃん降っていて恨めしい。三時から五時まで空いていたのでトルストイの「幼年時代」を読む、五時からタイプ。

五月十九日

朝、目を覚ますと又雨。プレイデイは又延期でガッカリ。粕沢の予習(The Ordeal of Richard Feinel)放課後 企画部の催して映画会があった。雪景色の蔵

奇心を充分に満足させ又彼女を喜ばせることが出来たようであった。

五月二十一日(土)

一練習してから峰谷先生宅へ。瀬川さんが丁度やっている最中だったので聞きながら待った。きょうの私の演奏はやっと先生に「結構です」と言って貰えた。もっとも今日が結構でなければ一寸困る。帰途新宿に寄って買物をしてから帰寮。

五月二十二日(日)

朝食後 室の掃除。本箱、机、ベッド等の位置を換えて気分転換を計る。お昼前頃 ヴィオッティの二重奏曲を瀬川さんと合奏してみる。発表会もあと一週間後に迫っているのできょうも高円寺の先生宅に行く。金婚式をひく予定の原さんという可愛らしいチビッ子にはじめて会った。私達三人は練習が済んでからも他の人達のをものと聞きたかったので帰らずに居すわっていたら先生に早く帰るなさいと追払われた。

五月二十三日

早起きして昨夜早ばやと寝てしまった分を取り返すべく勉強。粕沢をしていたら増川さんが嬉しそうな顔をして郵便小包を両手でふりふり持って来てくれた。中から綺麗なロングドレスが出て来た時は嬉しかった。姉がミセス・デュームスに相談し教えて貰って作った演奏会用の洋服だ。もう勉強はそっちのけとなり洋服にすっかり

気を取られて着たり脱いだり「どうかしら？」って増川さんにきいたりした。粕沢の授業の時はこんな時だっていうのに運悪く訳があたってしまった。単語だけは一応調べてあったので無事通過出来た。午後の社会問題の時間には勤勉で秀才のIさんが珍しいことにグーグーと眠っていた。

放課後 衛生部企画の講演会。東洋病院の院長 高田博士のお話 「学生と肺結核」があった。

夕食後はドレスを着て演奏するところを矢野・安藤・増川さん達を呼んで来て聞いて貰い当日アップしないうちの練習をした。そのあと消灯まで鏡子さんのノートを覚えて貰って「社会問題」のノートの整理をした。

五月二十五日

延び延びになっていたプレイデイをやっということが出来た。朝のうちは曇っていて気がかりであったが敢行してよかった。やがて天気は回復しだし快晴となった。テニスの試合では選手として宗像さんと組んで出場。三年のもう一組は松本さんと細田さん。宗像さんは運動が何んでも上手。後衛を引きうけて着実に球を返えてくれて助かった。

テニスのチャンピオン宗像さんは卒業後、早めに結婚して三児をもうけたが早はやくと夫を失った。其の後彼女自身も四十才そこで酔っ払い運転のトラックをよけ

切らずに交通事故死をした。偶然のことながら彼女の友人の御主人がかりうじてそのトラックをよけることが出来て、ヒヤッとして後続の車はどうかと振り向いたらもう衝突していたということであった。彼女は昭和三十三年頃だったか亡くなる少し前には全日本ソーシャルダンスでチャンピオンを獲得している。

二時過ぎに体育祭は終る。顔が真赤にやけてしまった。入浴後その顔をみてつくづく困ったものだった。だって二十九日にロングドレスを着てステージに立つというのに此のまっくらけとなる顔はどうしたらいいのかしら。

五月二十六日

三時から五時までの間に伝染病の予防注射をすることになっていたが発表会のことを考えて注射は受けなかった。

五月二十八日(土)

最後の練習に峰谷先生宅にいく。帰途、四つ谷の「トタニ」に行つて髪をカールして貰う。夕食の時に食堂に行ったら皆が私の頭のことをひやかした。

明日のことがあるし一寸疲れていたがボンファイヤが運動場であるので出席しなければいけないと思つて出た。

五月二十九日(日)

今日の午後はいよいよ演奏会だ。時季外れに暑くるし

い日で朝から疲労感があつた。朝食後、三人でリハーサルをする。同級下級生十人位を呼んで来て聞いて貰いアップしないように練習をする。十時頃寮を出て途中「トタニ」に寄つてお化粧とカールをして貰う。十二時過ぎに有楽町駅近くの保険協会講堂に着き控室に入った。もう大部分の人達は集まっていた盛んに調子を合わせているので部屋中絃の音が鳴り響いていた。サンドイッチの屋食が用意されていたがそわそわした気分で食欲が少しもない。一つだけ食べた。すぐに一時になり演奏会は始まった。一番最初と最後は先生の演奏だ。ペートーベンのソナタ24番が最初だ。先生という立場の峰谷先生もきょうは一人の出演者として私達と同じ立場にあった。いつもとは違った表情で「あたし 胸がドキドキよ」なんておっしゃるので親近感を味わわれた。先生はもうすぐ舞台に出て行くという時に

「本加さん 背中をドカーンとたたいて」

と頼むので伴奏者の彼女がドンとたたいた。

「そんなたゞき方 だめだめ」

と言って手伝いの為に来ていた楽器屋の男性の人に思い切り叩いて貰つてから舞台に出て行った。私達は控室から大急ぎで客席の方に回って行った。先生の演奏は一楽章だけだったので間もなく終り増川さんがタランテラを弾き終るまでいて控室に戻った。私の番はすぐに来た。案外ドギマギしなかった。出がけに先生が私の背中也ド

カンとぶつたので思わず「アイタッ!!」と叫んでしまった。でもこの一たゞきは何か効果があり舞台の真中辺に立っても落付いた心境でいられた。しかしいざ弾き始めてみると聴衆は意外に重たい感じ。自分で満足するようにはすべてはうまく運ばない。暑さのせいの方々にプログラムをファン替りにしているのが気になる。ドアが開いて人が一人そと入って来たのも気付いたし色々な雑念にさまたげられて弾いていたら自然にテンポがのろくなつたらしい。二頁目のアンダンテに入る時にボーンとフォルテでピアノがいそぎ気味に出てくれたことでそれを気付かされた。二頁目の下から二段目あたりや五頁目の下や六頁目の下の辺りは音程が時折微妙に狂った感じ。終りに近づく頃はもうマラソンのゴール前のような疲労感で一生懸命自分に鞭を打った。もがいてももがいても平常の調子に乗らぬ苦しさにブウッとおこったような顔になっていくことに気付く表情だけは訂正した。でも兎に角終って重荷はおりた。当日はやたらに気温が高かったし体も消耗していたとくれば良い演奏など期待するのはどだい無理だったのだ。

後日この日の演奏を考えて見た。ローデの協奏曲八番の第一楽章。さまざまなテクニクを取り入れた堅い曲。立派に成長した男性が力強くひいたらよいような曲。朝子にとっては分不相応な難曲。若し寮生活でなくて親が

身近かに付いてくれたなら食べ物とか其他生活全般を注意してよい体調を整えるよう考えてくれていたことであろう。しかし万事に未経験な朝子はこの日までに色々な他の活動の為に体力氣力を消耗していて充電を必要とするようなコンディションだったのだ。

自分の演奏を終えた朝子は大急ぎで客席の方に戻って次の瀬川さんの演奏を聞く。ペリオの協奏曲七番。華麗な曲。彼女の祖母と叔父が聞きにみえていた。ところが弾いている途中で絃の中の一本がピュッと下がってしまった。こんなことって普段の練習の時だって一年間、否二年間に一度だって起こることではないのに一体どうしたっていうんだらう。ピアノの譜めくりをしていた先生はすかさず行って絃を巻きあげ調子をととのえた。彼女はこのことで大いに氣分を乱されたかも知れなかった。しかし実力ある彼女のこと故、充分取り戻したかのように演奏出来たように思われた。しかし終りに近づいて来た時彼女はかけ足テンポとなって来て本加さんのピアノがそれを追いかけるように伴奏していった。終って朝子が控室に戻ると彼女は落膽したかのような表情で盛んに「あゝいやだ。いやだわ」とか「困った、困ったわ」とか朝子の手を握りしめて半分泣き出しそうに言うので朝子は懸命に慰めた。

休憩時間になり服装を着換えて地下の食堂に行き瀬川

って欲しかった。潜在的には自分の下手な演奏を慰めてくれるような虫のいい言葉が欲しかったのかも知れない。それで「あたしの どうだったかしら？」と言った。ドンはノーコメントであった。でも嬉しそうな目付で軽くつばをのみ込んだ。そして朝子を見る時よくする目付でジッと見つめて目だけでこう告げた。朝子の問いかけは無視して――。

（君を愛しているよ 今までよりもっと）

しかし一寸間をおいて彼の口から出た言葉は「蜂谷先生って ずい分素晴らしいんだね!!」であった。彼は先生の演奏を高く評価していた。朝子は先生が賞められてとても嬉しかった。そして自分の演奏はとてもつたないものであったのにその上手下手にかゝわりなくドンが暖い氣持ですべてを理解し又受け入れてくれているのを十二分に理解出来た。

控室に戻り色々な人達が先生の所に来て挨拶しているのを眺めていた朝子はきょう一日で又先生が一層好きになっちゃった。

次の日曜から又平常通りに練習することを約束して三人で銀座のオリンピックで食事をとりヴァイオリンをぶら下げて有楽町駅まで歩き電車で帰途についた。三人とも疲労のためあまり喋ることもしなかったし満足出来な

い出来ばえに自己嫌悪感にさいなまれてもいた。

さんのお祖母さんが冷たいカフェオーレを飲ませて下さった。瀬川さんの叔父さんは三十才台のハンサム・ジェントルマン。

第二部に入ってから上手な人達がヘンデルやウィニヤスキーの作品を演奏し朝子達は客席で落付いて聞くことが出来た。斜め前の辺りにいた寮生の菊池さん達がふり向いて朝子達の方に向って手を振った。終りに先生が出てきてベートーベンのロマンス・ヘ長調を美しく演奏した。二曲目の Perpetuum Mobile (Ries 作)、これはまるで蜂がうなるかのようにすごい速さの指の動きで音がかけめぐる曲だ。途中で一寸だけそろけそうな感じになったと思われた時はドキリとして心臓が止まりそうな氣がした。だって大好きなそして限りなく尊敬している先生が沢山の人の前でミスをしたらこれはたまらなく心を痛めることに違いないから。ヴァイオリンの演奏が全部終り友情出演の長坂好子さんが「セビリヤの理髪師」の中から一曲とグノーの「アベマリヤ」を静かに歌った。そして会場は隠やかな雰囲気の中に幕を閉じた。

来会者が帰りはじめた頃、客席の中に招待券を送ってあったボーイフレンドのドンを見付けた。やっぱり来てくれていたんだ。挨拶をするために彼のところに近づいていった。「あーら、来て下さったのね、どうも有難う」と云った。朝子は自分の演奏について何か一言でもい

ピーチで朝子達を慰労してくれ、そのあと椿さんも三人に紅茶を入れて朝子達をねぎらってくれた。

自室に戻り増川さんときょうの会のことを色々と話しているうちに二人とも自分達の力の足りなさをいやという程意識しはじめて滅入って来た。お互いに慰め合うのだが両方ともが落ち込んでいくものだからどうしようもなかった。そのうち消灯時間が来てしまうが一人でなかなかねていられない位淋しい。お互いに同病相憐れむ者が必要なのだ。増川さんがねまきに替えてから来てくれて一緒にベッドにはいった。二人で先生は今頃何をしていらっしやるのかなとか熱海に休養のため出かけるって言ってらしたけどお相手は誰なのかしらなど色々先生のことを話しているうちに増川さんはスヤスヤと眠ってしまった。彼女は初級の演奏で曲もピースもので楽になしたはずだった。朝子は眠るどころか増ます苦しい氣分に落込んでいった。

人間なんて一体何を求めてに進んでいるんだろうか。ほんとに朝子は生意氣であった。今迄世の中って汚いものだから相手にすまいとか、友情を肯定出来ないと言ったり又結婚生活は罪悪であると批判したりして来た。そしてただ芸術の世界、つまり自分をヴァイオリンに燃焼させることのみに幸せを見いだし生きがいも感じヴァイオリンこそ人生での唯一の友と心に決めていた。ヴァイオリンにそぐ熱情にヴァイオリンが応えてくれさえす

れば何も要らない。宗教も神も要らない。しかし今日こそつくづく思い知った。ヴァイオリンを携えて生きて行くことが如何に険しい道程であり苦しみ多く又何んと到達し得られぬような遠き所に目ざすものがあることか！前途に見ていた希望の光はすっかり消え失せてしまった。早朝に起きて誰もいない校舎の中のタワーに行つて練習したり又、天候が許す季節には雑木林の中にわけ入つて陽だまりの枯葉の上などでも練習した。首のわきには紫色がかつたあざが出来、指先はカチカチに堅くなり、右手の人差し指には弓だこが出来、夢中の練習の時間を重ねてどんなに苦しい訓練と戦つて来たであらうか。それでもこんな結果とは！

戸外ではひどく風が吹いていた。鉄製の開き窓のせいか窓のあたりで風がうなる。よくね入っている増川さんのいることがせまくるしく感じられてきた。彼女を押しだしたらふっと起きあがりねほけ半分に一寸よたついて「もう 帰る」といつて出ていった。そのあとも何んだかぢっとしていられない気分に襲われ廊下に出た。中央階段の所にある窓を押しあけて外気を吸う。目の前で黒くて大きな木立がザワザワ動いていたがもう真夜中なので寮は静まりかえっている。しばらくして自室に戻ろうとしたら何か物音がした。瀬川さんが室から出て来たところであつた。彼女もやはり朝子と同じような状態ですつと眠れなかつたということであつた。二人は何等かの

ムーブメントを必要とした。そして一緒に一階に降りて行った。
(未完)

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

~~~~~  
(発行日) ~~~~~  
(原稿締切) ~~~~~

|     |       |       |       |        |
|-----|-------|-------|-------|--------|
| 春季号 | ..... | 二月一日  | ..... | 二月三十一日 |
| 夏季号 | ..... | 五月一日  | ..... | 三月三十一日 |
| 秋季号 | ..... | 八月一日  | ..... | 六月三〇日  |
| 冬季号 | ..... | 十一月一日 | ..... | 九月三〇日  |

~~~~~  
季刊確保のため右のように規約を定めております。



浪々好日

主夫業の巻

井 上 一二三男

第二の勤めも辞して、須田が「これからは主夫をやるぞ」と宣言した割りには、須田家の主婦である妻の生活

にさほど変化は生じていないようである。炊事は、やはり妻が担当である。須田が勤めに出ていたときは、昼は職員食堂を利用していたし、そば党の須田は、役所の周辺の蕎麦屋を利用することが多かった。家にいることになればそれなりに用意をしなければならない。従つて、妻から見れば以前よりも手がかかるようになったのかもしれない。九十六才の妻の母の昼食も母のベッドの脇のテーブルにポットの湯茶とも妻が出勤前に用意しておく。夕飯の献立は妻が勤めの帰りに用意してくる。冷蔵庫の中にあるものを頭において買い物をしてくる訳であるが、ある筈のものを須田が処分してしまっているとの計画が狂う。計画が狂うと妻の機嫌が悪くなる。

洗濯は妻が朝食の準備のかたわら洗濯機を回して済ま

せ、出勤直前に二階の干場にかけて行く。

家の改築後は、洗濯物を二階の干場に干すようになって、これを取り込むことは九十六軀にはできないので、日の暮れる前に須田が取り込んでおかざるをえない。

妻も慌ただしい出勤時に

「行つて参ります。洗濯物お願いね」

の一声をかけて行く。

「この二階の干場は、本当によかつたわ」

妻のこの言葉には二通りの意味がこもっている。南に面して日当たりがよい上、庇が深くて雨は当たらない、洗濯物がよく乾くということと、通りを行く人達に下着類のひらひらを見られない、初老の男が不器用に洗濯物を取り込んでいる様を見られることも少ないということである。

須田も自分で洗濯物を取り込む図は余り恰好がいいとは思わない。なるだけ時間をかけないで能率よく取込む

ことを考える。

見えばりなのかな、と自己評定をする。

ある初夏の爽やかな日のことであつた。物干し場に立つと、真つ青な天空が一面に広がり、暖かい陽光が燦々と注がれ、正に気宇広大を感じた。その陽光の中で風に曝されて軽くなった干し物のふっくらした感触に、須田は、身も心も清々しく洗われる思いがして、むしろ驚きを感じたことがある。女が幸せを感じるときの一つに「洗濯物がよく乾くとき」というのがあるということを、須田は、女性の世界の狭さを比喩的に表現するものと理解していたが、そのとき、須田は、「これだな」と実感した。家族の幸せを願う主婦の思いがそこにあるように思った。

とはいうものの、実際には須田は、洗濯物を取り込むのを忘れることが一再でない。

今日は天気が良いからと、布団を干して

「今日は布団を忘れないでね」

と念を押されても、自分の部屋に籠ってカタカタやっているときの経過を忘れ、窓の下で妻の車の排気音がするのには、はっとした時は既に遅し、布団は屋根の上でしっとりと夜露を吸っている。

「好きなことだけは忘れないのに」

妻のばやきに抗すべき言葉もない。

クの廃材は、押しても潰しても元の形になってしまふ。台所の片すみに大きなビニール袋の中でその存在を誇示している。

これが地中に埋められても腐ることなく地球を傷付けて行くのだと思うと須田はごみを片付けながら憂鬱である。

残滓の始末、便所の掃除など物事を綺麗にする行為そのものは余り奇麗なものではない。須田も時に掃除機を操作しながら、結構時間がかかるこの作業の意味を考える。ごみや埃のないさっぱりとした家庭環境を維持する作業は、一般には家族が家に居ない状態の中で主婦によって行われている。目立たない地味な作業である。しなくて済めばそれに越したことはないものといえるかもしれない。須田は、街を行く潑刺とした美しい女性が結婚して主婦となれば、このような作業に専念するのかと考えると何ともいえない複雑な思いがするのであった。

しかし、と、須田は考える。炊事には家族の健康を守り、味覚を満足させる食物や栄養に関する科学的知識や調理の技術、洗濯なら織布の科学、洗剤を理解する化学的知識、家計についてのやり繰りの経済知識などなど総合的知識を要するのではないか。テレビの洗済のコーナーシャルにしても美人が現れて酵素の働きがどうのこうのと叫んでいるし、また、二種類の洗剤を使ったため化学

掃除もなかなかの作業である。ごみの始末が容易ではない。人間は、ごみを産出するために生きているのかと思うばかりである。昔ならば腐る残滓は土に埋め、燃えるごみは庭で燃したものが、今は穴を掘る土はないし、煙を出せば隣家の洗濯物を黒くして女の幸せを妨害する。

ごみの始末は、結局市のごみ収集に頼らざるを得ない。燃えるごみは週二回、燃やせないごみは週一回の収集である。うっかりしていると収集車が朝早く来てしまうことがあって、そうなると次回までごみをどこかに保管しておかなくてはならない。やたらに所に置くと鼠や猫に食い荒らされる。この保管を億劫がって、収集車が去った後でもそのまま置いて行く者があって、ごみの収集場所は年中犬、猫、野鳥の食事の場所になっている。

朝のごみ出し作業は、須田が担当である。

その朝は、須田は大きな紙袋やビニール袋を抱えて収集場所へ二往復もすることがある。特にプラスチック類は、ごみの分類の上では「燃やせないごみ」になっている。燃やせば燃えるが、燃えるとき高熱を発生して燃焼炉を傷め、かつ、有毒ガスを発生して大気を汚染するのだそうである。

しかも、このプラスチック類が甚だ多量なのである。スーパーの総菜類の一つ一つがスチロールの皿に乗りポリラップに包まれていて食事の回数に従って着実に増えるし、デパートなどでの買い物の過剰包装のプラスチック

反応による有毒ガスで死亡事故が発生したとか。さらに、その洗剤が河川を汚染し、自然環境に大きな影響を与える原因にもなっている。洗剤一つにしても化学の知識が必要のようである。

須田は、主婦業こそ総合的科学的知識の上に成り立つ実践的総合職ではないかと思うのである。

妻が出勤してから昼まで三時間あるが、この三時間という時間は現役時代にはかなりの仕事をこなす時間であった。須田の今の計画では午前の三時間は主として英語とフランス語の習得に当てる予定である。しかし、なかなか計画通りにはならない。須田の病気のためには食後一時間身体を横にしていることが良いということ、
「せっかく勤めを止めたんですから、それだけはしっかり実行してください」
と妻にも言われる。須田もそうしようと思う。居間のソファに横になって新聞を読むか、テレビを見て過ごす。かれこれ十時近くになって、二階の書齋に上がる。おもむろにテキスト類を開く。

須田が脳の老化に手を焼きながら、なお英語やフランス語に粘りついているのは、いつか妻とヨーロッパを訪ねてみたいと思っているからである。二、三カ国の看板を読めるようになればという程度の実用的目的がある。

妻に「カ」国語は分担させようと思うが、妻は取り合わない。もう一つ、英語については、結構長いお付き合いをしている筈であるのに簡単な日常会話さえ聴きとることができない口惜しさがある。アメリカやイギリスの赤ん坊でも聞き取れることが、長い時間をかけているのにできないことが須田には屈辱に思えるのである。投げ出せば敗北に通じるという思いがある。

リンガフォンのCDの音声に耳を傾けながら、いつの間にか頭の中は別のことが去来する。(庭の草が伸びていたな)とか(次の市民展には何を描こうか)とか(この間の放送大学のレポートはうまくいかなかったな)、とか。

とかくしていると、机の上の電話が鳴る。

「須田さんのお宅でしょうか」

若い女性の声である。妻への電話かなと思いつながら

「はい、須田です」

「ご主人様でいらっしゃいますか」

「そうです」

「こちら東京の神田にあるインタナショナル・フアイナンスと申しますが、ご主人様は財テクにご関心がおありと存じまして・・・」

「あ、それなら残念ですね。関心はあっても、なにがなくてね」

「そんなこと、ごさいませんでしゅう・・・」

「や、御苦勞様です」「カッシャーン」
そうこうするうちに、今度はインターホンが鳴る。電話で応答する。

「はい、須田です」

「この町に住んでいます清水と申します。お願いがあって参りました。」

須田は、市の市民生活部長を介して総務庁の行政相談委員というものを委嘱されているので「お願い」とあつては迂闊な応答はできない。

「お待ちください。すぐ参ります」

階段を降りて、玄関へ出る。

「わたくし、清水と申しますが、財団法人企画リサーチというところから・・・アンケートのお願いに・・・」

行政への苦情ではないようだ。しかし、こういう手合いは、まともなものか、インチキで警戒を要するものか。信憑性に嗅覚を働かせながら、結局人の良い須田はアンケートに答える。

須田の書斎は、通りに面する駐車スペースに突き出た中二階になっていて、通りの行き来の様子が音になって入り込む。自動車、バイク、人の足音、挨拶を交わす女の声、子供の声、入り乱れる。須田の家の前を駐車に利用する車も多い。車の停まる気配がして、ボタンとドアを閉める音がする。スワ来客かと窓の下を覗いて見ると、包みを持った男が脇の私道を入って行く。奥の某氏への

そうこうするうちに昼である。

訪問客である。須田家への訪問者は多くはない。そう分かれば門前に停まる車の気配も気にかけることはない。しかし、気にしないしていると不意打ちを食うことがある。夏のことでステコ姿でいると、電話機にピンポン、ピンポン、ピンポンとインタホン。電話機で応対するより早く既に玄関内で女の声。

「ごめんください」

ズボンを履く間もなく、ステコのまま玄関へ出る。二十才前後の若い女が二人立っている。

「印鑑や運勢のことでお話を・・・」

須田をじろっと見て

「誰もいないんですか」

いる人間を前にして、いないのかは挨拶だなと思いつながら、敵の質問を逆に利用する。

「ああ、誰もいない。」

「じゃあ、・・・それにしても蒸暑いわね。雨が降りそうですね。」

「今年はカラカラだったから、雨が欲しいね。」

「おじさんは農家？」

「そうだよ」

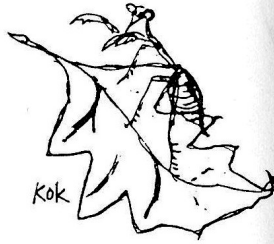
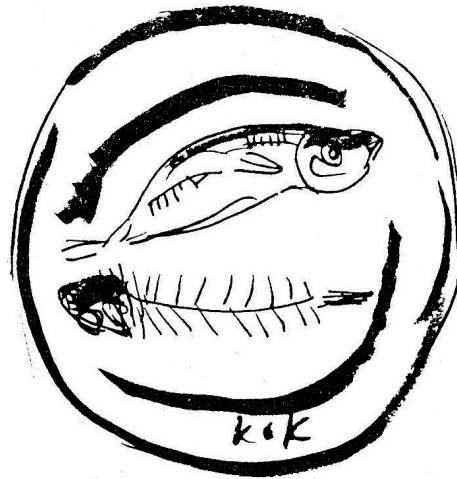
訳の分からぬ留守番じいさんを決め込む。

主夫業は、結局空振りで、机に向かっても一向に能率が上がらないでいる。

「学校を出ても何年も経っているし、第一ヒヤリングができないでしょ。だから、放送をテープに取って、炊事をしながら聞いているの。主人がいてテレビを見ているときなど、邪魔にならないかと気を使うのよ」
その上、この女性は、ボランティアの仕事も持っているらしい。

県外から通って来る人も多いようである。子供が中学、高校になり、手がかからなくなったのでという人も多い。彼女たちが学校を出たころは、地元には彼女達を受け入れる短大や大学もなかった。進学のお機を持ってなかった彼女達は、今、妻、母、パート、学生の幾足かのわらじを履いて、なお、かつ、家族への思いやりを優先させているのである。須田は、こうして放送大学に通う主婦達の姿に全くもって敬服せざるを得ない。

「主夫」と「主婦」との差は大きいようである。



葬 送 記

大 和 禎 人

ない。

葬儀はしかし（助葬会）という法人の手で万端取り仕切られ、前記のような会館で行なわれた。しかも珍しく神式であった。

司会の紹介によると新宿区市ヶ谷の亀岡八幡神宮の神官梶恒夫宮司の司祭とのことで、都合二名の神官が通夜告別式の二日にわたって一切の次第を進められた。

「あの人が神様になるんですから、笑っちゃいますよね」

そして、法名に代って（何々の命）になるのでもなく、「いいえ、ただ神々のお仲間入りをさせてただけで、戒名らしきものはありません」

と、なつみさんは言われるのであった。

「いまは他へ移ってないようですが、西日暮里には祇教の教会があって三島由紀夫の盾の会の葬儀はそこで行なわれたと知っておりますが、父の祖父が熱心な禊の信

「道灌山会館」はJR西日暮里駅から開成学園の前を不忍通りへ出ると、右折して間もなくのところにあった。不忍通りは昔上野池の端へ音羽の護国寺から都電の走っていた通りだ。（道灌山下）というバス停がいまも昔懐かしく名残りをとどめている。いまは音羽の講談社が日本雄弁会講談社という旧名でもう少し不器用の（団子坂）に程近いところにあった。

「葬式は家でやれ、と山口は言っていましたから、きつとあの人は自分の家で葬式をやってもらっていると思っ

てるはずだ」

これは次女の高戸なつみさんの言葉だった。告別式が終って最後に喪主として挨拶をされた方子夫人の言葉の中には、

「主人は谷中を愛し、谷中に長く住んで・・・」

という言葉が涙ながらにあったが、自分の葬式は（谷中の住み慣れた家で）という故人の意志であったに相違

者だったそうで、ええ、あの人の父もそうなんです」

なつみさんはそんなことも言われた。易経に凝ること
があり、職を退いた後、易断を業とするかに仰々しく大
型の名刺を作っていたりしたこの人の精神生活の別の側
面に触れる話に聞えた。

戒名などはない、ただ天に還る、いかにも山口さんら
しいこの世への訣別に思える。

神式の葬儀はまことに丁重をきわめるものであった。
はじめテープとばかり思っていた雅楽は気がついて見る
と、神官の外に奏者が一人壇の傍にいて笙を奏鳴してい
るのであった。進行の上に厳かさを添える申し分ない配
置だ。会館二階の広間に設けられた祭壇もまた十分に飾
られ、弔花もところ狭く一面を占めて、自家ではとうて
い望みえない盛儀の雰囲気を感じ上げていた。遺影は初
孫誕生の折のもので、かすかに笑みを湛えるとい
うものであった。

「母が父に内緒で助葬会へかねて加入していました、
ええ、お墓は都の霊園の申し込みしたんですが、仏のい
ない申し込みは駄目と言われましたが、こんどは立派に
資格がありますから、大威張りで申し込むつもりにして
います」

そうしてみると、山口さんの遺骨は当分は書架があり
ベットが置かれて、あなたが文章を書くため呻吟を繰り返
した部屋あたりに安置されるのであろうか。

と、たしなめはしたものの、それとない周囲の気遣い
はすでに久しいものがあった。思えば氏が死を見つめ、
死と顔をつき合わせるような心境はそれからも絶えず持
ち続けてきたものののだ。

東京医科歯科大の放射線科病棟に治療をうけ、腰に鈴
を付ける区別をうけた患者仲間はずいぶん鬼籍に入ったもの
の多い中に、あなたと顔を合わせながら、なぜか視線を
背けて去ったというわたしたちの共通の知人であるKも
その一人に数えられる。放射線治療の結果、口腔内に異
常を来し、唾液腺閉塞と口中の絶えざる痛みに悩む長い
闘病生活が続いていた。

「あの奥さんが大変だった、十年だって言うじゃない
か、うちのかみさんなら、とてもできないよ、よく尽く
したもんだ、感心するよ」

「旅行に揺り粉木、揺り鉢を持参でさ、揺り餌状態で
ないと喉を通らない、あれは大変だった、見ていられな
い光景だった」

揺り粉木、揺り鉢はわたしたち仲間の親睦旅行でも持
参していた。旅行の提案者はつねに氏であったが苦痛の
伴う旅路だった。伊香保のときは永寿病院入院中であっ
て、杖にすがってるところを自重してもらった。

永寿病院は浅草稲荷町にあり、再三あなたが入院を繰
り返したところだ。病室の人々の生息を作品にも書いて
いる。仏壇・仏具の町を病室の窓から眺め、あなたの死

祭詞は通夜、告別式、そして遺骨の帰ってからの十日
祭とそれぞれに内容が異なっていた。朗々、抑揚のよく
利いた梶宮司の奏詞は庄巻と思えるものだった。委曲を
尽くし、僧侶の唱える経と異なり、本人の履歴はもちろ
ん子女の縁組におよぶ丹念さで、場合によっては喪家に
とって迷惑のフシのものだが、なかなかの名文章であっ
た。

「あの祭詞はぜひもらっておかれるといい」
「そのつもりでお願いしていますが、あらためて後日
にという約束です」

余計なことであったが、その後聞くところでは山口家
の申し入れに対し、しばらく猶予を頂き、あらためて浄
書の上ということらしい。社家には社家として矜持もあ
ったことだろう。

もはや数年前になるが、谷中霊園五重塔あとに花見を
誘われ雑誌の同人の何人かが酒を酌み交わしたことがあ
る。

「来年の花をわたしは見れるかどうか」

このときは例の「さいたま屋百景」、「さいたま屋歳
時記」その他一連の作品に登場する愛すべき酒徒のだれ
かれの寄ってくることもあり、当のさいたまの女将も
顔をみせるなどの賑やかさであったが、つぶやくような
右の嘆息があったことをわたしは忘れていない。

「山口さんな言うの、そんな気弱いことを」

生感に触れる、哀感漂う佳作を生んでいる。

「旧制高等学校序説」という作品は未完に終わったが、
あなたの弘前でのブリリアントで無頼な青春を描くはず
であった。その後の仙台での大学生活とともに、あなたの
生涯を支えたバックボーンはそうした学生生活に培わ
れたことは明らかである。通夜、告別式、十日祭のすべ
てに参列された稲沢正一さんという人はあなたに同じ官
学出身で、たしか東大出であったが、あなたの上司とし
て十歳もの隔たりを超えて、たがいに親近を保ち肝膽あ
い照らす関係にあったようだ。あなたとともに教育界と
いうところではともに異色だけに心の通うものがあつた
のだと思われる。

しかしながら一方では、

「お前がうけるような大学は大学じゃない」

なぞ浪人中の子息をあなたが叱咤したという話を十日
祭の供養の席で方子夫人が語られるのを耳にしたが、あ
なたの意識の底に抱かれた官学プライドを覗く思いがし
ないではない。子息山口吉野氏はすでにひとかどの社会
人として嗣子の席にあって、きわめて温和な人柄に見受
けた。吉野という命名はあなたが「花の吉野」にあやか
ったものと、わたしに語ってくれた。

棺に供花を投げ入れ、棺を覆う時がきた。「虚仮の歌」
という一冊が収められているのを見た。題名に多分の寓
意を込められたと思われるあなたの二冊目の本で、昭和

五十六年八月の刊本だ。この本には「まんじ」に発表したあなたの処女作が収録されている。家族の方の思い入れがうれしかった。投げ花に埋もれ、それはやがて荼毘に付され、炎に焼かれる運命を免れないのだが、山口さんの魂魄はこれを胸に抱いて昇天されるであろうと思うと気の休まりを覚えた。

荒川区町屋の火葬場はそこまでの町並の変貌にかかわらず昔のままであった。わたしは祖父の荼毘に際会した少年の日をまざまざと思い出した。休憩所の手水場まで変わっていないのだ。数知れぬ遺体を焼き、家族たちの悲しみ送迎してきたこの場所が変らなすぎることはまた一つなにかしら哀しみを添える。

「でもアチラの建物は新しいんですよ」

と教えてくれる人があった。斉場らしい鉄筋建築がそれだ。前庭の巨大な蓮のうてなに擬した噴水が目に入り印象を刻んだ。

神官の梶氏はこの場所でも、やがて火炎を想像される重い扉の前で懇ろな祈りを捧げられた。仏式と異ならぬ作法であった。

「これが喉仏です」

磁気で金属を取り上げる無味の作業を了えた係のものが骨上げを促し、人々がそれに従う中にそんな説明があった。金属の箕を傾け、サラサラと遺骨が壺に納められた。故人はいまやまったく骨灰と化した。

「これは埋葬許可証です」

これで火葬場というところのセレモニーは終了である。隠亡などの呼びはいまは死語だ。恭しく係員は脱帽し敬礼した。

マイクロバスに同乗していて、

「待ってくれー、おおい待てえ」

としきりに叫んで、見えかくれ先を走る金ピカの霊柩車を見失うまいと身を乗出していた坊やが帰路ではあどけない眠りに落ちていた。故人の姻戚に違いがないがこの日のことを幼心にはどう刻んだのであろうか。

日増しに秋の気配も深まってまいりました。

お電話、「まんじだより」と頂戴致しまして本当に有難う存じます。入院中の主人に次々と変調が出まして、現在は経路不明なのでございますが、抗生物質に強い「セイタイ・コウシヨク葡萄状球菌」に感染致しまして、治療をつづけておりますが、一昨日主治医の方から急変の可能性大であることを知らされました。主人独特の精神力で蘇っていつものように帰宅できますように念じております。お詫び方々近況をお知らせさせて頂きました。(まんじの皆さまに宜しくお伝え下さい。秋特有の不純な天候となりました、おん身ご大切に遊ばされますようお

願ひ申し上げます。

これは介護に疲れたお方からの、それとないお知らせであった。その日から間もない平成二年九月十九日があったの祥月命日になった。大型台風十九号があなたの好んでよく使われた(にはん国)を襲う情報の中で、午前十一時五十六分、汚濁のこの世を見限られたのである。食餌を通すための手術を拒否するかに麻酔薬をうたれた瞬間、眼を閉じられたということだ。

山口健二に捧げる弔ひの辞

山口健二さん、あなたのみ霊が神去りましたいま、あなたの柩を前にご親族をはじめ多くの知己の方々が相集い、み霊を天に送ろうとするに際して、しばしの別れを惜しむことをお許し下さい。

思えば長い闘病を終えられ、いまここに安心を得られ立命の境地に赴かれたと解釈することは誤りでありません。どうか、病骨の痛みに飽きて、この世を厭われ、忽然として雲に上り、霞のあなたを指して飛ばれるあなたを思うとき、あなたは生来持ち合わせておられた飄乎たる一面を貫かれ、首尾を全うされたもののようにも思われ、むしろ清々しく、あなたの死を悼む悼みの心は別としていまはただただ、あなたを深く見送りたいと思います。いまごろはやわらかな雲の上であなたはなにを思っているのでしょうか。私はあなたとは職を同じく

する関係の外、たまたま血をうけた郷土を同じくし、奇しきことにあなたのお父上競まはわたしの父とは同学というご縁も重なるものでありましたが、あなたとの交友を深まりはそうしたことを全く抜きにして、あなたの晩年により多くひろがりを持たせて頂いたものの一人であります。

あなたには書き残された三十五編の小説があり、あなたの生きざまは近ごろ流行の(自分史)なぞ生やさしいものとは異なる如実を語られ、なお書き続けようとなされながら、筆を断られました。方子夫人が氣遣われる骨身を削る不屈の努力があつて、あなたは最晩年に光りを放つ業を積まれたのでありました。あなたが酒を愛し、酒に溺れるがごとき日常があつたことは知らぬものとしてありませんが、これぞ酒中の仙と申すべきでありましょ。うか、エンダビー神に命を拾われたあなたの人生凝視は腹の据わったなみなならぬものでありました。神にしてあなたにいま少しの時間を藉することがあればと思うとき痛恨を禁じ得ません。この恨みはあなた自身のものであると同時に、わたくしどもあなたと同じ雑誌に拠り志を同じくするものが等しく覚えるものであります。思う存分に生きられたあなたの人生についての話題は昨日の通夜の席でも専らでありました。達人とは実に、実にあなただけのごときを指すものに思われます。なにものにも束縛されず、奔放に生き、いま飄然として天に還られた

あなたには悔いなどという俗なものでは微塵もないのだと思っております。雲の上は青く澄みきり、きざや心地良いことであります。不幸な世紀を喘ぎつつ生きたことなど一切忘れられて、まずはしばらく静かにお休み下さい。少なからぬ蕪辞をお許し下さい。

山口健二さん、さようなら。

あなたの告別式にあたってわたしは右のような弔辞を捧げた。苦手のことだが、せつかくご依頼でもあり、朗読というかたちで責めを逃れたのである。ほかに松本連隊の戦友の方が素手で語りかけの弔辞を述べられた。

弘前いらいの友人の方たちも多数列席されていたはずであったが、弔辞はなかった。山口さんのことをニックネームして「文豪」と呼んだ方々である。官界その他に重きをなした方も多しはずであった。座席の背後にこの方たちの故人への親愛の話題は絶えなかったので、惜しいことであった。

葬送のすべてを通して、もっとも悲しみを露わに、ときには激しい嗚咽の声を漏らされたのは次女の高戸なつみさんであった。

「あの方がいけば多く山口さんの血を受けていらっしやるようですね」

わたしは同席していたS女に私語した。

「語りたくない・でも語らねば」という作品が山口さ

んの最後の作品になった。二回連載して筆を絶つたのである。いずれも三十余枚、必死の思いを託して書かれた作品だった。輸送船団が魚雷攻撃をうけ、あなたが死ぬべかりし命を助かった奇跡が書かれている。エンダビの海に飛び込んだあなたは泳げない、しかし、九死に一生を拾うことができた。だが、さらに次の死地へ転属させられトラック島に上陸する、作品はそこで途切れ、同島の地図を手に入れ胸に抱きながら、ついにペンを投げたのである。今年に入ってから一行も書くことをしなかった。

あなたには五十路入ってから自動車教習に励むということがあって、脱輪、オーバーランでついに免許を取得できなかったという逸話がある。かえって家族の方はホッと胸を撫で下ろされたのだが、このことは過酷な戦争時代を生き抜き、数奇を歩まれたあなたの人生をなにかしら象徴するように思われる。

高戸なつみさんがあなたに代わる作品を寄せられた。

「父が酒を断ち筆を折りました」

悲痛な骨肉の情を噛み、冷徹な目であなたを追い、しかも温かい情の流れる佳品だった。

人生の起承転結のむすびのところを息女に任せたまふ、あなたはついにこれを読もうとはされなかった。

(平二・九・三〇)

山口健二逝く

本誌創刊いらいの同人として毎号作品を欠かさず、誌運の今を導くブレインとして貢献し、大いに活躍してきた山口健二が宿病に勝てず九月十九日、入院先において逝去した。二十日通夜、二十一日告別式のいずれも台東区のだう灌山下のだう灌山会館において執り行われた。ここに深く哀悼のまことを捧げ、本号を追悼号としてきみの霊前にはなむける。

布帛を叩く軽妙な笑声

金子正義

露伴に幸田文さん、紅緑に佐藤愛子さんがいるように山口健二氏にも良い文章を書く息女がおられ「まんじ」三十六号に「父が酒を絶ち筆を折りました」を書いた。

創刊以来一号も欠かさず書き続けた山口氏が病亢進して擱筆したので、代って息女が一文を寄せられたもので、山口氏にそっくりな文体で、父君の人柄や気骨をよく表現していた。父君の性格を良く理解し其の長所短所をも含めて尊敬し、病の篤きを憂える深い愛情が全文に脈うっていた。

盲目的肉身愛に溺れるのではなく冷静に病の進亢を観察

し、人の生命の限界と、死に至る人間の弱さを凝々と見据えていた。

流石に高邁剛毅な山口健二氏の血を継いで、息女高戸なつみさんの胸の奥には生命の果敢さと世の無常を眺め返す物書きの血が激り立っていると思われた。

山口健二氏が永遠の旅路に出立するとき、此の一文は最高の餞の辞となったであろう。

山口健二氏は何んと幸なことであろうか、良き御子様方と最愛の奥様と共に、存分に此の世を生き抜き、子孫の繁栄を見届けて去る、何んと幸福な生涯ではなからうか、氏の冥福を心から祈念し乍ら、多少の羨望と尊敬の念より、更に駄文を添える。

山口健二氏は存分に潔く生きた。自由に昂然と生きた。何事か人生に生甲斐を激らせて青年の心を持ち続けて生きた。

明治の人の気骨と大正のロマンの心情と、昭和のエンターテイメントを併せたように生きた。

其の心情と意見をまんじ創刊以来一貫して書き続けた。自からは名誉や欲得、売名を超えて、それが人の世の奇妙さよ、と、独自の風俗私小説として愛すべき人間像を書き続けた。

虚名・売文で栄える多くの文士作家とは違って、生きる証として書き続けた、この高潔な同人を喪った、まんじ同人、誌友の心の痛手は大きく小生も涙を禁じ得ない。氏は長らく病床にあった、小生も亦、多病の上に宿病の耳疾の為に氏とは同人合評会の他は余り交誼を重ねなかった、謂わば君子淡交であった。今にして想えば惜しみ悔いて尽きないが、斯うしたことがあった。

お茶の水の聖橋の車道で離れて右と左であった。小生は耳の病で順天堂へ、氏は口腔腫炎かで歯科医大へ治療に通っていた頃であった。

氏は和服に十徳姿で杖を衝き宗匠頭巾を被り、慌しく行き交う行人は神田川の水の流れか芥のように意に介せず、二、三米先の路上に視線を向けて能の尉面のように静かに足を運んでいた。

喧騒の町内で声をかける必要はなかった。橋の真中を疾走する車の間から一瞬に見た氏の姿は、利久か芭蕉のように幽玄で、言葉を交さずとも電光一閃裡に氏の心情

が伝わってきた。正に一期一会、一瞬に永劫の認知であった。

氏より少々若い小生であるが、耳疾もあって老いは秋の落日の如く疾く、今年の夏は蟬の声も耳にせず、今は秋虫の鳴音も野鳥の啼音も聴えず、疾の昔に音楽は分らず歌曲のメロデーも名曲の旋律も記憶から薄れ消えたが、まんじ同人の合評会などでの山口健二氏の、布帛を叩くような軽妙な笑聲は今も消えない、いづれ西方浄土やらで氏の脱俗の笑いを聴くことであろう。

平成庚午二年九月二十六日 夜、氏の訃を受けて、

合掌

山口健二さんを悼む

井上 二三男

やたらと暑いこの夏。暑さに弱い私は、殆どをクーラーで温度を押さえた部屋のソファに横になって過ごしていた。そして、この暑さを山口さんは病床でどのように過ごしておられるのだろうか、と思った。

この二十六日夜、大和さんからの電話で山口さんの訃に接した。この夏の暑さは、長い闘病生活の山口さんにとって耐え難いものだったに違いない。

私が山口さんに初めてお会いしたのは、昭和五十六年二月、新宿住友ビル四十七階の和室で開かれた「まんじ」発刊の同人総会であった。

小人数の会合でありながら、人を覚えるのが不得手な私はその日も他の初見の方の顔を覚えられなかったが、山口さんは、しっかりと記憶に残った。それは、山口さんが私の妻の叔父に似ておられたことと氏と同姓同名の方を存じていたということもあった。しかし、私の印象に刻まれたのは山口さんの思いやりのあるお人柄であった。

山口さんは、若輩で新参の私にいたりとお励ましの眼差しを向けられ、ご出身の大学が私の息子と同じであることなども話題とされた。そして、私が宿病のため疲労感を引きずっていることを見抜かれ、

「あなたは疲れておられる。お大事にさい」と、

と、いたわりの声をかけられたのであった。私は、山口さんの人を見抜かれるご慧眼に恐れ入った。今にして思えばご自身のお身体のことであって察しられただものではないかと思われる。

同年七月の「まんじだより」には、山口さんの第二作品集「虚仮の歌」の刊行が予告され、私も一冊を書架に置かせていただいた。その「あとがき」に「ながらく、お世話になりました。世間に死亡通知とか死亡広告というものがありません。・・・思い立って、息のあるうちに

これを書いておいて、死んだらこの文を皆様にさし上げてご挨拶するように、家族に申しておくことにしました。」と、さらに良寛の「死ぬ時期には死ぬがよく候」を引用され、「こんな『ごあいさつ』は、やはり私の派手好きな気性のあらわれでございましょう。ではもう一度、さようなら、さようなら。」と結ばれている。

私は、山口さんのご病状の詳細は存じ上げないが、山口さんはこの時期既にご自身の死を見詰めて生きておられたのではないかと思う。「まんじ」創刊から今年二月の三十五号まで欠かすことなく続いた作品は、死を見詰めて生きる日々の凝視から生まれたものではないか、と思われる。死を見詰めた日々は、透明で、かつ、厳しく凝縮されながら、作品に流れるものは人間に対する暖かい眼差しであった。そこに、私は山口さんを見る思いがする。

その後、幾度か合評会の席でお会いしたが、病を押してのご出席に山口さんの「まんじ」への深い思いを感じて、私はいつも襟を正す思いがした。

また、私の作品についてのご評を大和さんから伝えられたことがあり、お礼のお便りを差し上げたところ、ご丁寧なご返事をいただいた。それも、病院のベッドに寝たきりで、手が動かせないためご家人の口述筆記による旨であった。

かつて、私をご案内して「まんじ」同人有志が群馬に

懇親の旅をしたことがあった。そのときも、山口さんは参加を強くご希望されながら、ご病状で許されなかったとお聞きした。私も大変残念に思い、せめてのお慰めに何かをと考え、旅行の順路に立ち寄った妙義山の神社の烏天狗の張り子面などどうであらうかと思ったが、ついにそれを果たさなかった。自分の怠惰を反省し、慚愧に耐えない。

山口さんのご冥福を心からお祈り申し上げる。

毛糸の帽子

柴田 富佐子

「まんじ」同人には「元中学校校長」が多い。大和さん然り、金子さん、元同人の森本さん、岸田さん、そしてわが山口さん。

山口さんを除く方々の校長ぶりは、私にも容易に想像がつく。校長訓話の時、どんな風に壇上の人となり、どんな口調で話をし、どんな姿勢で生徒を見廻すか、永年の付き合いで、話の内容さえ見当がつく。

だが、ただ一人、山口さんに限って、私にはその校長ぶりが全く想像できない。第一、私には彼が校長であったという事すら、信じ難い気持ちだが、今でもある。

それは、私が山口さんと知り合った頃、すでに彼は教職を離れて数年が経ち、その上病を得られて勝手気儘な生活をしていらしたせいかも知れない。着物の上にチャンチャンコを着、毛糸の帽子を被って杖を振り振り、下駄をカッポカッポ鳴らして歩いてくる独得のスタイルが余りにも似合いすぎ、それ以外の彼の姿を私に想像させる余地がなかったからかも知れない。

「まんじ」が発刊されて間もなくの頃、山口さんは病院の帰りだと言って、その病院に近い私の店に、何度か寄って下さった。その頃は午前中のパートの人が帰ると夕方アルバイトの学生が来るまでの間、私は一人で店番をしていたが、その時間帯は割と暇で、物を書く時間も本を読む時間もあった。奥の事務室で彼はワンカップにストローを差し込み少しずつ吸い込んでいた。

「そんな飲み方ではないですか」と私が聞くと、「飲みたくって飲むのではないんです。アルコールで麻痺させないと、口の中が痛くてたまらないのです」と言った。外見では解らなかったが、本人にはかなり苦しい病状だったのだろう。アルコールが入ると元気が出て、作品の話、近頃読んだ本の話などをしてくれた。実に何でもよく知っていて相手を倦ませない人だった。

そもそも私が山口さんの存在を知ったのは大和さんの出版記念会の折、易の話で周囲を煙に巻いている人がい

て、その風貌と知識の豊富さから、私が本物の易者と思

い込んだのが山口さんであった。次に逢ったのも、大和さんの出版記念会で、今度は象牙製品をいくつか持参していて、象牙についての蘊蓄を傾けていた。一体どういう人なんだろう、という興味と、だいぶ変わった人だ、という印象を持った事を覚えている。

「やっとこれだけ書きました」と下書きのノートを見せると、

「頑張って書いて下さいよ。期待してますから」と励ましてくれた。

帰り際、「じゃ、失敬」と右手を「挙手の礼」のように顔の前で一振りし、カッポカッポ下駄の音を残して立ち去る、その肩を怒らした瘦せた後姿が、まだ鮮明に私の臉に残っている。

号を重ねる毎に、山口さんの異才ぶりは光を放った。

他の同人の、少々とりすました作品の中で、彼の強烈な個性は輝いていた。一連の「埼玉屋物」に出てくる人物達——母であるカメと嫁であるゼニ子、それぞれに一癖も二癖もあるコップ酒の定連達、それにも負けず傲然と胸を張る本人、あの猥雑な面白さは他に類を見ないものだった。入院生活が続くと、今度は舞台が病院に移り、矢張り癖の強い患者達と傲然たる本人が織りなす人間模

様が、たまらなく面白かった。

何故彼の描く世界が、あんなに面白かったのか、それは彼の人間を見る目の確かさと、怖いものなしの居直りだったと思う。そしてその居直りはエンダービー沖で死に直面した経験が、彼にもたらしたものだと思はる。

入退院を繰り返すようになってからの彼の作品には、うまい、まずい、などという基準を超越した凄みがあった。生きている中にもどうしても書いておかねば、という気迫に圧倒されて、読み終ると強い疲労感を覚えた。だからボルテージの高いその迫力を受けとめるだけの覚悟を決めてから読み始めねばならなかった。

書かずにはいられない必然性こそが、読む者の胸を打ち、心を熱くするものだ、しみじみ感じている。

一つでもいい、私も彼の「語りたくない、でも、語らねば」のようなボルテージの高い作品を書き上げ、その墓前に供えたいと思う。

文人山口さん

三戸岡 道夫

ほとばしる才能を、嵐のように書きなぐって、あの世

へ旅立っていった人。「まんじ」に残された山口さんの作品群のことを思うと、そんな感慨に打たれる。

山口さんの作品を大きく分けると、「さいたま屋」もの、自伝的なもの、それにある程度のフィクションものと、三つぐらいに分類できるような気がするが、しかしこれらを全部ひくくめて長編に再構成してみたら、きっと「カラマゾフの兄弟」(少し大袈裟か)のようなものが出来るのではないかと、私は時折思ったものである。その日がいつかは来るとひそかに期待していたのに、それを果たされずに去られたことは、まことに残念であった。

いつかお見舞にお伺いしたとき、部屋に、山口さんの大きく引き伸ばした若い頃の写真が飾ってあった。それを見た時、私はふと、若い頃の永井荷風のようなだな、と思った。

若い頃の山口さんは、この写真のように、美男で、おしゃれで、ダンディで、気どりやで、その面影は、晩年の姿にそのまま残っていた。私は晩年になってからのお付き合いなので、私の記憶に残る山口さんは、いつも着物姿であったが、今時、着物をこんなに見事に着こなす人はめったに居ないと、いつもそんなふうに眺めていたものである。

文人。そう、山口さんは文人だったのだ、と思う。もう、永久に、「まんじ」誌上に山口さんの作品は現われ

てこない、合評会の席上での、あのすばらしい毒舌も聞けないのだと思うと、淋しい限りであるが、どうか、山口さん、あの世でゆっくりと、山口さんの「カラマゾフの兄弟」を仕上げてください。

山口さん、さようむら。(平成二・九・二六)

山根 三枝子

山口先生 長い間のご病気、男らしく本当によく耐えられましたね。今は安らかに永遠の眠りにつかれホッとなさいましたでしょうか。お葬儀に向かう途中で色々なことを思い出して涙がにじみ出しました。

その昔 私が短期間ですがある中学校に勤務致しました折にお世話になりましたのが縁で以後年に一回の年賀状の交換だけは続きましたね。再会のチャンスなどあるとは思っておりませんでしたがお別れして十八年ぶりで、たまたま御近所の朝倉彫塑館に参りました折に全く突然お宅にお寄りしました。それは昭和五十六年の春先のことでした。あの面白かった先生はどんな風になっていらっしやるかなと玄関で待ってますとパジャマ姿にチョッパリ帽子のようなものをのせて

「山根さあーん、あゝ おぼえてますよ」

とおっしゃりながら姿を現わし私が吃驚する間もなく「ぼく 昨日退院したところなんで——」と頬の辺りをおさえながら

「ぼく このガンなんです」とアツケラカンの顔でおっしゃるではありませんか。驚いて言葉も出ませんでした。が昔から冗談屋さんであったことだし、また、ひとのことだましてるんじゃないかとも思いました。でも四十才台の時とは違い大部おやせになり又年令も重ねられたご様子に見受けられました。

その昔中学校勤務の頃には俄か先生の自信のない私をおだてたり勇気づけたりして暖かく接して下さいました。私が講師をやめてお別れしてからは年に一度の賀状には面白い俳句や楽しい一行か二行の冗談が書いてあり私を楽しませて下さいましたのに、その先生がほんとうにガンならやがてこの世から姿を消してしまわれるのでは……ととても残念に思ったことでした。でもこの再会がご縁になって私は「まんじ」の同人にして頂くことが出来、更に九年半の間同人として先生とお交際させて頂くことが出来ましたことは余程のご縁ありましたこと、思われます。

同人会の合評会でお会い致します時はご自分のご病気の辛さなどふみ倒したような気魄で健康な者達を慰めたり勇気づけたりするような批評を下さる先生の心の広さに感銘いたしました。同人会の皆様共ども御前崎灯台方





金融山脈 (一)

三戸岡道夫

六月の株主総会を機に、帝都銀行の松橋常務は退任した。そして、取引先のY電氣に再就職した。

が、その退任と再就職には、円城寺頭取と松橋常務との間に、なにか激しい争いがあったという、根強い噂が流れていた。事実その経過を眺めると、たしかに不自然なところがあった。

まず、松橋常務の退任があまりに唐突であつたことである。毎年、五月に入ると、六月の株主総会を控えて、役員異動の噂が流れるのであるが、松橋常務の名前は挙らなかった。それが五月の末になって突然、退任の発表があつたのである。何かあつたと、感じない方がおかしい。

松橋常務は、かつては帝都銀行の将来の頭取と噂されたことのある実力者である。それが大蔵省から二代にわたつて頭取が入り、現在の円城寺頭取ワンマン体制が確立すると、その希望は絶たれてしまった。だが、あれ

だけの大器である、必ずや常務取締役から専務取締役に昇進し、少くとも副頭取までは行くものと、誰もが疑つていなかった。

それが、何の前ぶれもなしに五月末の決算役員会で退任が決まると、翌日の新聞に発表されたのである。人々は驚き、そこになにか異様なものを感じた。

だが、同時に人々は、

(ああ、やっぱり……)

と、この一年ほど、しきりに流れているあの黒い噂に、思い至るのであつた。

退任が決まれば、次の関心事は、

(では、次は、何処へ再就職するのだろうか)

である。他人の再就職先など、どうでもいいようなものであるが、銀行重役の再就職となると、他人の眼が抛つておかない。

帝都銀行では重役が退任すると、親密な取引先で、し

かるべき格の会社へ、重役として送りこむのが慣例になつていた。どの会社が選ばれるかは、役員の銀行内における序列と、受け容れる会社側の条件によつて決るが、いづれにしても、退任時のポストから見て、恥かしくない会社が選ばれる。その決定権を握っているのは、もちろん円城寺頭取である。

過去の実績から見ても、常務取締役であれば、一部上場企業が選ばれるのは、ほほまちがいなかつた。退任が新聞に発表されると、同時に再就職先の会社名も発表されるのが普通であつたが、どうしたわけか松橋常務の場合にはその発表がないのであつた。

「なぜ？」

人々は首をかしげた。再就職の会社が、まだ決つていないのだろうか。

(再就職先も決めないで、あわてて松橋常務を退任させなければならぬ事情が起きたのにちがいない)

そこで人々は、ひどい近眼で、ダルマのように肥つた松橋常務にまつわる、例の黒い噂に思い至るのである。

黒い噂。

それは、円城寺頭取と松橋常務との、確執であつた。二人は銀行の中で、仕事以外のことは、いっさい口をきかないという。その仕事も最小限度にしか話さず、またお互いに代理の者を使って、出来る限り直接接触することを避けているという。

その代償のように、夜になると松橋常務は浴びるほど酒を飲んで、円城寺頭取の悪口を喋りまくるのである。

それが廻り廻つて円城寺頭取の耳に入る。ますます二人の関係はおかしくなつていく、というのが銀行内に流れる噂であつた。どの程度が本当なのか、わからない。が、百パーセントの真憑性はなくても、ほほ正鵠を射ていた。

松橋常務が役員退任のことを、円城寺頭取から知らされたのは、五月の決算役員会のたつた三日前のことであつた。普通は少くとも、一ヵ月前には予告される。そのやり方にも、なんとなくルールのようなものが出来上つていて、円城寺頭取から、

「久しぶりに晩飯でも食おうか。静かないい所を見つけたよ」

などと声をかけられ、赤坂あたりの奥まった座敷で酒を飲みながら、退任の話を持ち出されるのである。あるいは、天気の良い日曜日に突然ゴルフに誘われて、緑の芝生の上でボールをころがしながら、引導を渡されることもある。

それなのに、松橋常務の場合には、そうした儀式が一切ないのであつた。ある日、秘書役から、

「頭取がお呼びです」

事務的な連絡を受けて、何事ならんと、頭取室に入つていくと、

「長年、ご苦勞であつたが、今期をもって退任し、後

輩に席をゆずってほしい」

と、書類を決裁するような口調で、そう言っただけだった。

「……」

あまりに突然で、さすがの松橋常務もすぐには声が出なかった。だが、

（頭取は俺を早く辞めさせたがっているのだ）

と、円城寺頭取の考えていることがピンとわかると、松橋の全身の血が音をたてて逆流するのがわかった。顔が赤くほてってくるのが、自分でわかる。

だが、松橋常務はすぐ冷静になった。なった、というよりも、冷静でなくてはならないと、努めたのである。

「わかりました」

簡単に、はっきりと言った。それ以上言うと、頭取を罵倒する言葉が次から次へと口をついて出てきそうで、やっと短い返事で自分を制御したのである。

「うむ」

円城寺は軽くうなずいた。

そのしかつめらしく頷いた姿を見たとき、松橋の中で、再び何かが起きた。

（いい気なものだ。途中で、大蔵省から入ってきた奴が、生え抜きの我々に向って、長年ご苦勞であったとは、何事か）

身体が爆発しそうになった。これ以上ここに居ると、

に松橋の身体につきささった。が、すぐに視線を外らし、夫々の机の上の仕事へと眼を落した。

（何だったんですか、松橋さん？）

一人ぐらいいは、その声をかけてくれてもよさそうなのに、誰もが無言であった。聞かなくても、すでに知っているという眼であった。今日まで知らなかったのは、本人である自分だけだったのかという苦い胃液のようなものが、湧き上ってきた。

いくら円城寺頭取と松橋常務の間が大猿の仲だとはいえ、夜の席の設営もなく、ゴルフにも誘われずに、事務的な方法でしか退任の指示がなされなかったことに、松橋常務の自尊心はいたく傷つけられた。その上、再就職先の話が何も出なかったのが、一段とその思いを強くしていた。

だが、あの場合、まさか俺の口から、

（私はどこへ行くのでしょう）

などという科白が吐けるはずがない。だから、一言、

「わかりました」

と、ぶっさら棒に言って帰ってきた。

だが、それはやはり、まずかったのかもしれない。円城寺頭取が再就職先のことを言い出さないうちに、松橋の方が勝手に帰ってきてしまったのかもしれないのである。あるいは、再就職先が松橋から文句をつけられそうなので、頭取は言う時期を先にのばしている、と

何を喋り出すかわからない危険を自分に感じて、辛うじて自分を押し静め、そのまま、頭取室の床を蹴るようにして、退出した。

それを円城寺頭取は引きとめようとしなかった。松橋常務も後を振り向かない。

荒々しい足どりで廊下を戻る松橋の頭の中を、

（このまま、帰ってしまった方がいいのか）

（すこし切口上すぎたかな）

軽い反省が、かすめたが、

（あれ以上のことが、俺に言える筈がないではないか。後輩に席を譲れだって。銀行から早く出ていけと、はっきり言えばいいものを）

実を言うと、秘書役から頭取の呼び出しの連絡を受けたとき、松橋常務の内心にひらめいたのは、専務取締役昇格への内示であった。当然その位の力は俺にはある。今の専務たちの情ない顔を見つみる。あんな奴等が専務なら、俺は一挙に副頭取だって、おかしくない。いや、頭取だって出来ないことはない。

（俺は絶対に、負けないぞ！）

肥った身体で廊下の絨緞を蹴とばすと、松橋は常務室へ戻った。

帝都銀行の常務室は合部屋である。

ドアを開けると、居並ぶ重役たちの視線が、いっせいに

いうことも考えられた。いや、そんな考えは甘いのであって、ひょっとすると再就職先はまだ決っていない可能性がないでもない。万が一そうだとすれば、失礼千万この上ない。

松橋常務は腹立ちをまぎらわすように大部屋を出ると、隣に続く個室に入って、腰をおろした。

個室といっても、たいした部屋ではない。五坪ばかりの小部屋で、来客があった時の応接室がわりに使ったり、ちょっとした書き物などをするためのデスクが置いてある。一人になれるこの部屋の方が、衆人監視の大部屋よりも、気分が落ち着いた。

煙草に火をつけ、深々と吸った。くわえ煙草は、松橋常務のトレードマークである。仕事中でも、来客中でも、廊下を歩きながらでも、口から煙草を離したことはない。白い灰が長くのびて、ポトリとズボンの上に落ちて、意に介さない。吸殻を捨てる片手で、もう次の新しい煙草をポケットから取り出すといった有様で、それほどのヘビースモーカーが、頭取室から帰ってくるまでは、煙草のことを忘れていた。それほどショックが大きかったのかと、我ながら驚いて、飢えに突き上げられるように煙草に火をつけると、

「ああ、うまい」

疲れが全身に行き渡る。

（それにしても、どの会社だろう）

再就職先が気になった。松橋は自分の再就職先として候補になりそうな取引先を、次々と頭に浮べてみた。

松橋常務は融資部を担当していた時代が、長かった。だから、帝都銀行の主要な取引先はほとんど知っていた。会社を訪問したり、また工場見学に行ったりした会社も数多くあったから、社長の顔や、工場の設備の状況なども、はっきり思い出すことができた。

その中には、松橋常務お気に入りの会社も数社ある。ちよっと思い浮かべただけでも、Y電気、S建設、M化学工業、B産業……と、たちまち五本の指を折った。なかでもお気に入り銘柄は、Y電気と、M化学工業で、（この辺りに決ってくれば、言うことはないのだがな）

社長もよく知っているし、工場見学に何回も行つて、帰途の料亭での思い出も深い。だから、これまで会社が必要とする金は申込通りいつも全額貸していたし、松橋常務としては特別に面倒を見ていると思つてゐる取引先であつた。

松橋常務は一瞬、Y電気やM化学工業の重役室に、どつかと坐つた自分を想像してみた。

（しかし、果して、そう事がうまく運ぶかどうか。さっきの調子では、頭取の奴め、こっちが思うような会社をすんなりと廻してよこさないのではないか）

平素剛気で鳴る松橋常務も、さすが自分の再就職先の

いる。

だが、噂は本当だったのである。

松橋が噂を耳にした次の夜、諸川取締役が、新橋の料亭染山での、Y電気の寺本社長との顔合せの宴に出席したからである。

帝都銀行から重役が取引先に送りこまれる場合、事前に先方の社長との顔合せ、いわゆる「お見合い」が慣例としてあるのである。そこで社長の審査に合格すれば、正式な手続が進められ、不合格ならば、また別の会社が選ばれるというわけである。

とは言うものの、実際はお見合いに先立って、円城寺頭取がすでに先方社長の内諾を得ているのが普通であつた。事実、諸川取締役の場合にも、事前に円城寺頭取は赤坂の料亭に寺本社長を招いて、諸川取締役のことを話しており、それに対して寺本社長は、

「ほかならぬ円城寺頭取が派遣くださる人物です。ありがたく頂戴いたします。わたくしの会社のことは、すべて円城寺頭取にお任せしておりますから」

一も二もなく、承諾した。

「それでは一度、本人と逢つていただきましょうかな」ということで、染山での席になったわけであるから、「見合い」と言つても形ばかりのものといつてよかつた。いや、言いかえれば、「見合い」はこの場合即ち、オーケーの印なのである。

こととなると、神経はビリビリと細かくふるえた。

心配した如く、松橋の再就職先はなかなか決まらなかった。決まらないというよりも、まったく音沙汰がないのであつた。その為、円城寺頭取や副頭取が、動いてくれているという感じも受けない。事が事柄だけに、自分で動くわけにもいかず、ましてや、こちらから催促するなどという事は、松橋常務の自尊心が許さない。

いらいらしているうちに、時間は速やかに流れて、六月末の株主総会までに、あと数日となつた。

（いくらなんでも、もう、そろそろ話がくるだろう）思つてゐる矢先に、妙な噂が松橋の耳へ流れてきた。

それは円城寺頭取が、二、三日前に、Y電気の寺本社長と赤坂で夕食を一緒にした、そして重役を一人送りこむ話をしたが、それは松橋常務ではなくて、経理部長をやつてゐる諸川取締役であるらしい、という内容であつた。

（まさか……）

松橋は否定したが、有り得ない話ではなかつた。心の中は、穏やかでない。

今度の株主総会を機に、退任する役員は二人いた。松橋常務と諸川取締役である。その諸川取締役の再就職先が、よりによつて松橋が狙いをつけてゐるY電気ということは、どういふことなのか。加えて、上席である松橋の方がまだ決つていないというのに、平取締役の諸川の方が先に決まるなんて、順序が逆である。嘘にきまつて

ましてや、諸川取締役は、人柄は温厚、仕事ぶりは誠実で、帝都銀行の経理部長を無事勤めているという点からしても、寺本社長の要求する、Y電気経理担当常務に最適任の人物と言えた。断わる理由はない。

翌日、直ちに寺本社長から円城寺頭取のところへ電話が入り、正式に承諾の返事がなされたことは、当然であつた。

諸川取締役がY電気へ正式に決つたというニュースは、その日のうちに松橋の耳へも入つた。松橋のショックは大きい。掌中の珠を、にわかに他人に奪われたような気になつた

松橋は、ふつと、昨年工場見学に行った、Y電気の相模原工場を思い出していた。

Y電気の本社は目黒にあるが、工場は神奈川県相模原にあった。もともとは本社も工場も目黒にあつたのであるが、工場が狭くなつたので、三年前に神奈川県に土地を買い、新しく建設したものであつて、最新の設備を誇る工場であつた。みどりの田圃と野原の中に十萬坪の土地がひろがり、敷地の西半分にクリーム色の三階建ての工場が建つてゐた。正面玄関の前には芝生がいちめんに張られ、数十本の噴水が、細い銀色の水しぶきをあげてゐた。東半分の敷地は、将来に備えての空地で、今は工員の通勤用の自動車が整然と並んでゐた。

電気機器を作る工場の内部は清潔で、中で働く工員た

ちも、きびきびと見えた。

とりわけ松橋が感心したのは、工場には惜みなく金をかけ、最新鋭の機械を据え付けているのに対し、本社の方は、古ぼけたビルのまままで我慢していることであつた。それに対して寺本社長は、

「メーカー（製造業者）の命は、工場ですよ。本社は製品を作りませんから、古いビルで結構なんです。本社を建てる金があつたら、私は工場の設備に注ぎこみます」と、信念を披瀝した。

まだ株式を上場して間もない、一部上場企業としては小規模の会社であつたが、見所のある会社だと、それ以来松橋は感心していた。

Y電気が内定した諸川取締役はさすがにうれしそうで、毎日が活気にみちていた。株主総会終了までは正式の発表を避けているのだが、その喜びは隠しきれず、廊下などで、すれ違いざまに、

「この度はおめでとうございます」
などとささやかれると、大びらに、

「いや、これは、恐れ入ります。でも、電気のことなどまったく素人ですので、弱っておりますよ」
などと、大声で答える始末であつた。

それに対して、松橋常務の方へは依然として、何の音沙汰もなかった。松橋の不安は、次第に怒りへと変化していくのが、自分でもわかつた。

「松橋常務は西山産業へ行くんだって」

「へえ、初耳だな」

「それが、たしからしいんだよ」

「でも、西山産業ぐらゐで、松橋常務がうんと言うかねえ」

「言わないだろう」

「ひと荒れするんじゃないの」

銀行内のあちこちで、こんな噂が流れはじめたのは、それから間もなくのことであつた。

「それにしても円城寺頭取のやり方って、少し汚くないか。そこまでやらなくなつて、いいのにさ」

「仕方がないじゃないか。大蔵派と帝都派との対立が、松橋常務の人事をネタに火花を散らしているんだから」
帝都銀行では大蔵省からの天下り頭取が二代続いた。現在の会長である住江道信と、それに続く円城寺頭取とがそれであるが、二代続いた結果、大蔵派の占領体制はほぼ確立した感があつた。

円城寺頭取はそのとき、三人の大蔵省役人を連れて乗りこんできた。川崎常務、藤野取締役、それに黒沼取締役である。大蔵省出身の五人を大蔵派と呼び、帝都銀行生え抜き重役の帝都派と、陰に陽に対立しているのであつた。

「なにしろ松橋常務は、帝都派のチャンピオンだからな、何事によらず大蔵派の目の仇にされるのさ」

「でも、考えてみれば、松橋常務の方だって、もう少し頭取に楯をつくのを、加減すればいいのにと、思うよ。なんと言つたって頭取は頭取だからね、喧嘩をしたら損だよ」

「でも、松橋常務は、いい加減にするってのが、出来ないんだよ。大蔵派に占領されなければ、確実に頭取になれた人なんだから。占領軍のおかげで、頭取の座がふいになつた無念さはわかるね」

「でも、おとなしくしていれば、あれだけの人が、確実に副頭取までは行けたよ。大蔵派だって、帝都派と、全面戦争をするのは得策じゃない。うまく餌をしゃぶらせて、帝都派をうまく使っていくさ」

「だが、おとなしくなんて、していられないんだなあ。あの人。単純と言おうか、純粹と言おうか、意地っぱりと言おうか、一面に子供みたいなところがあつて、適当な妥協というのが出来ない。こうと思ったら、絶対に妥協しない」

「自分の力に、絶対の自信を持っているからなんだよ」

「でも、悪くいえば、自信過剰」

「そこが松橋常務の魅力でもあるんだよ。誰かさん達みたいに、べこべこして、専務や、副頭取になろうとしな」

「だから保川専務なんかが、専務になっているのが松橋常務には気に入らないんだよ。自分よりはるかに力のない奴が、専務になつて、自分の上にのつていて、面白い筈がない」

「保川専務って、おべっかが、うまいらしいからね。大蔵派にべこべこ取り入る、おべっか専務さ。昔だったら、専務になるなんて、考えられない人だものねえ」

「そう思うと松橋常務、すこし気の毒な気もするねえ」
「円城寺頭取の腹って、案外小さいんだね。再就職先ぐらい、ちゃんと世話しておいて、少し腹の太いところを見せておいた方が、結局は得になると思うのだからね。」

あんまり松橋常務をギリギリ追いつめると、かえって帝都派の不満分子に火をひろげる結果になりかねないよ」

「そういう見方も成り立つ。だが、頭取にしてみれば、実力のある松橋常務がいい会社に入つて腕を振る、アンチ帝都銀行路線を展開して、銀行に反抗されるのがこわいんじゃないのかな。そうなると、大事な取引先を一つ失うことになりかねないからね。だから、出来るだけ小さい会社へ閉じこめてしまいたいんだよ。どうせ取引先を失うのなら、小さい会社の方がいいに決まっている」

「でも、今度の問題は、聞くところによると、頭取というよりも、むしろ裏で川崎常務が糸を引いているって、いうじゃないか」

「へーっ、川崎常務が？」

川崎常務は、円城寺頭取が大蔵省から一緒に連れてきた中の、一の仔分である。頭取が一番信頼を置いているだけあって、仕事はきびしく、誰もが、その鋭い眼つきの前に立つと、恐ろしさで身も心も緊張した。

その実力も、松橋常務に拮抗すると見られていたので、二人の間には、いつしかライバル意識が強く動いていた。とくに昨年六月の株主総会で、川崎が平取締役から常務取締役へと昇格したが、その時松橋常務だけが、まだ時期が少し早いのではないかと反対意見を表明したことが、二人の犬猿の間柄に一段の拍車をかけたといつてよかった。

「川崎常務の策動は、十分考えられるね。昨年六月の仇を、今年の六月で討とうというわけか、なるほど」

しかし、肝心の松橋常務のところへは、依然として正式な話は何も来ないのであった。頭取から、夜の宴への呼び出しももちろんない。自分の知らない所ですべてが動いているのかと思うと、いら立ちで、全身が震えてきた。

株主総会の日まで、頭取は、このままで押し通すつもりなのか。そして、株主総会の終った直後に、また今度も、

（長い間ご苦労さまでした。今度は西山産業へ行っていただこう）

と事務的に、言い渡されるだけなのか。

「西山産業…、ふん、誰がそんな会社に行つてやるものか」

屈辱感に震えて、松橋常務は思わず口走った。

西山産業。

本社は日本橋堀留にあり、繊維品の総合卸商である。松橋常務を一応送りこもうとしている候補先であるから、規模ながら、経営内容のしっかりした、帝都銀行が主力銀行として取引している、優良な企業であった。株式は未だ非上場である。それが松橋には気に入らない。いくら、いい会社だといつても、所詮は中小企業にすぎない。第二の人生を送る会社が、非上場の中小企業などということは、松橋の人生設計図の中には描いてないことであった。

西山産業はその名が示す通り、株式会社といつても、実体は個人企業の域を出ていなかった。社長の西山平太郎が一代で築いた会社である。社長の力量、手腕は拔群、二人の息子が専務と常務のポストに着き、社長をサポートしているが、今日の地位を築くまでには、かなりあくどいことをやって、のし上ってきたと言われている。典型的な成り上りの、ワンマン社長会社であった。松橋常務の肌にも合わない会社といつてよい。

（いい会社だといつたって、下着会社にすぎないじゃないか）

融資部担当が長かったから、松橋常務は書類の上では西山産業をよく知っていた。が、一度も会社を訪問したことはなかった。一度、銀行の記念パーティの席上で、西山社長と名刺を交換したことはあったが、赤ら顔をぎらつかせたこつい面相は、松橋常務の好みからは遠かった。

だが、今の松橋常務の不満は、西山産業のそのような点にあるではなかった。たかが平取締役の諸川に、一部上場企業のY電気が当り、自分の方には西山産業しか廻ってこないという、不公平、不合理が許せないのだった。

（結局、諸川、お前も保川専務と同じように、おべっか取締役だったんだな）

事実、諸川取締役は、川崎常務の腰巾着だと言われている。目先のきく諸川は、いち早く大蔵派へと乗り替えたのである。Y電気のポストも、川崎常務のルートから手に入れたのちがいない。

噂によれば、諸川取締役は単に大蔵派の軍門に降っただけでなく、川崎常務のスパイだという噂もあった。小人数の大蔵派が、多人数の帝都派を牛耳っていくためには、そうしたスパイも必要なのである。

スパイは諸川取締役に限らなかった。総務部長をやっている岩城取締役なども、その中の一人と目されている。そうでなければ、取締役に絶対なれないと言われている。



一つつくー

近藤富蔵の生涯 (九)

第一章 八丈流人近藤富蔵

二、羽倉簡堂八丈を去る

金子 正義



(一)

五月二十二日(七月一三日)簡堂一行は、明け方の大雨が晴れてから末吉を立ち、僅かの道のりなので正午には中之郷に達した。

中之郷の名主は小宮山善右衛門であるが老齢で、其の子善六も未だ名主見習なので村役諸事は、官船預かり役の山下義十郎が島取締役と兼帯していた。従って簡堂は山下義十郎屋鋪に入った。義十郎は苗字帯刀を許された船名主で八丈の船頭総元締である。其の屋鋪は古い家柄を誇る堂々たるもので大賀郷の陣屋と同じ構えであり、正面入口の左右には珍らしい連子窓がついていた。

門前に出迎えた義十郎の挨拶を受け、奥の間で村事情を聴取して昼食を摂った後、簡堂は作業広場に集められている村預かりの流人四十名余りを訓戒した。

中之郷では此の時期、天保七年より取りかかっていた

藍ヶ江湊の港造りの使役もあって、船出入の人足使役等と合せて八丈五村中最も流人が多かった。

中之郷流人は気も荒く此れ迄脱島騒動も度々あり、中でも元文二巳年十一月十二日の佐野新蔵の騒動は、密告に依って未然に捕えられたが、多数の流人共が共謀して名主屋敷に火を放ち、其の騒ぎに粉れて湊の船を奪い集団脱島の計画であった。主謀の佐野新蔵と共謀の四名は登竜峠東側の大根の海蝕断崖、宇右衛門ヶ岳から突き落しの刑で死んだ。

此の事もあってか後年、弘化四年(一八四七)十月に加茂上社の神官梅辻規清が、神道異説の科で流されたとき山下屋鋪に預けられた。

梅辻規清は、神仏習合の両部神道に反対する余り、王城鎮護の加茂の神社の正統を主張して、幕府に尊王論として睨まれ流島となり文久元年七月六十四才で没する迄

山下家の一室で神道論の著述に没頭し、『鳥伝神代巻』など百数十帖を残した。

配流は近藤富蔵より二十一年も後で、富蔵より八歳年長であったが程なく和歌俳句の友として親交を深めた。亦、富蔵が流島四十余年の後半より書き始めた八丈実記草稿を読み、富蔵が生涯赦されず八丈島辺に朽果てるかと、時に嘆いて筆硯を放擲せんとすると梅辻規清が叱咤激励して思い直させることも屢々だった。

梅辻規清は富蔵ばかりでなく兇暴無頼の流人の忿懣を克く聴いて淳々と諭して教化した。梅辻規清は天文地学の造詣も深く八丈農耕暦などを作って村々に分ち与えたり、村の子弟の手習の指導までしてその徳を仰がれた。

文久二年政情改まって公武合体論などが台頭し、將軍家茂の上洛などもあってそれを賀しての規清恩赦の知らせが八丈に来たが、惜しくも規清の病没後であった。

富蔵は我が身の赦されざることより故人の為に天を仰いでその遅きを嘆いた。

天保九年の此の時梅辻は未だ流されていなかった。簡堂は佐野新蔵等の断崖突落しの刑を例として諄々と謀反島抜けについて諭していた。

簡堂は流人戒めを済まして直ぐ中里の砲撃用石室の視察に向った。途中の山の斜面の僅かな梯田に稲が青々と伸びていて、明和五年戊子(一七六八)の大飢饉で中之郷だけでも七百人も餓死したと云うのが嘘のようだった。

藍ヶ江中里の砲撃用石室(砲台)は地の利を得て、海岸一帯より南方洋上遙かに青ヶ島を望見する台地にあったが、砲座には苔むした台石ばかりで、廻らせた石壘も築工以来三十年の風浪、潮害に崩れ始めていた。

文化三年(一八〇六)九月、北辺樺太に露艦が来寇し翌年四月には択捉島の内保・紗那に砲撃後上陸して食糧武器等を掠奪して去ったが、更に西蝦夷宗谷沖に現われ礼文島の洋上で幕船を襲い利尻島に上陸して食糧等を掠奪して去った。衝撃を受けた幕府は急遽蝦夷地、東北各藩に異国船渡来に備えて沿岸警備強化の令を出した。文化五年伊豆諸島でも主要港湾防禦の為に石積場を強化し射撃場を作り、硝煙倉等を建てたのであった。

同行の島取締役高橋長左衛門の説明に依れば、文政七年(一八二四)の夏、異国船が一隻藍ヶ江湊の入口近くを遊弋して測量などをしていたが上陸せず引揚げた。翌年も同じ船が姿を見せて暫く湊を窺っていたが南へ消え去った。どうやらその頃、小笠原島を捕鯨の根拠地しようとして狙っているアメリカ船のようなので、早速伊豆御代官所へ早船で急報した処、文政十年六月、御代官柑本兵五郎様以下幕府役人総勢二十四人が廻島され、八丈島には、特に三匁五分筒六十挺と弾丸火薬を授け下され、非常防禦五十人組を訓練して帰った。

だが、柑本御代官配下の海防係間宮林蔵殿は、砲台には少なくとも五百目玉の青銅砲が必要であるが、幕府は

本土の沿岸防備の為に砲の手持なく、早速の配置は出来ない。従つて島方で木砲を造り工夫を凝らして大筒の如く据置き、異国船来航の時は本船に構わず、夷人共が小舟を寄せて上陸せんとするとき、近くに引付けて小筒にて討ち取るべし、その為島人は日頃より猟などで射撃の訓練をして精熟させよ。と言われたので、砲台は非常防禦五十人組が出漁の無い時期に射撃訓練をやる程度であった。

三匁五分筒の使い方は、天保元年（一八三〇）四月に幕府砲術師範の土屋弥一高暢が、来島し、三十日程陣屋に滞在して陣屋大書記を始めとする島役、村々書記五人組頭、五十人組組頭等を指導して帰った。尚銃砲火薬は潮害で痛み易く、手入も充分でなく役立ずになるので五村の名主宅や村役所で分担保管するように、と達したので三匁五分筒は名主の蔵に保管してあるとの事だった。簡堂も大型の異国船を撃退するには、昨年六月江戸湾より米船モリソン号を打ち払った浦賀港の平根山砲台のように、一貫目玉の青銅砲以上でなければ役に立たない、本土沿岸の要地や島嶼の主な湊に此れを配備するのは、到底出来る業ではない、と文政八年二月よりの異国船打払令を危く思い乍ら遙かに南方洋上の青ヶ島を見渡した。天明三年癸卯五月の大噴火で生き残った者が八丈に避難していたが、今は元名主の佐々木次郎太夫が旧島民を連れて戻り関鑿に努めていると云うが、未だ山焼の余煙

を吐く孤島にはアメリカ船も近づくまいと思つた。砲台を下り海岸沿いに藍ヶ江の湊に新たに開削した港の視察に向つた。

藍ヶ江湊は八丈の最南端に近い漁港であるが、湊の入口が狭く中之郷以外の船は碇泊できなかったが、数年前より村人が力を合わせて湊入口を開削し、湾内に迫る岩壁を鑿岩して通路を設け、海底より海面に突出している岩石は砕き、或いは工夫して船繋岩にするなどして五村の廻船も碇泊できるようになった。

簡堂が波止場を視察のとき、恰度二隻の大船が碇泊していた。海底より突出している拳岩が船繋ぎの竜柱となり、西岸の繫柱と左右より纜を引繋いであった。高橋長左衛門は、外海が多少波立っても船は動かず甲板に立つても陸と変りないと言つた。

夕刻山下屋鋪に戻り夜食後、村人の与惣次を呼んで南海を漂流した顛末を聞いた。

暴风雨で転覆した漁船の船板に縋り、何日か漂流していた与惣次を救助して呉れたのは異国の捕鯨船であった。言葉は全く通じないが手厚く介護された上に、親切に送り届ける為に紀州の何処かの浦浜に近づいたが、沿岸の防備が厳しく上陸できず、態々長崎迄航行して阿蘭陀船に移されて漸く長崎に上陸し、長崎奉行所の取調べの後下田に送られやつと八丈に帰つたとのことだった。

簡堂は今度の巡察中各島で漁民の漂流譚を聴いたが、

天明寛政の大黒屋光太夫のように露国が通商を求める為の方便に漂流民を助けるのと違い、日本近海に來航する多くの異国船の中には、人道仁義の上から送り届ける捕鯨船等の有る事を知つて、昨年のモリソン号も漂流民を送り届けに來航したのに砲撃を加えた、と難じた尚齒會の蘭学者達の意見に依れば、海外の状況、異国船の渡來について思い直すこと多く、異国船打払令は緩めざるを得なくなるだろうと思つた。

五月二十三日（七月二四）簡堂は辰の刻に中之郷を出立して檉立村に向つた。途中の三原山麓の道は沿道に変わった樹木が多かつた。迎えに來た名主の奥山儀左衛門に依れば、幹が桐のように柔らかで滑らかで葉が棕櫚のようなのを蘇欄（へゴ）と言ひ、幹は棕櫚のようで葉が蘇のようなのを齒朶と言ひ、いずれも一丈余りの高さで長大の葉を存分に伸ばして爽快であつた。

近藤富蔵の父重蔵の学友であり、後年老中となつた福山藩主阿部正精が棕櫚を好んで、書画の号を棕軒とつけた。棕櫚が纏いつく枝葉を出さず高く真直ぐなのを潔よしとしたからであつた。

紅葉山書物奉行の近藤重蔵が老中首座の水野忠成と、紅葉山文庫拡充について論争し其の忌憚に触れて大坂弓槍奉行に左遷されたとき、阿部正精は重蔵を大いに弁護したが許されなかつた。

文政四年近藤重蔵は、大坂に於ける身分不相応の行状

あつて、御役不相応に付永代小普請仰渡されて江戸召還となつた。

阿部正精も亦、清廉剛直にして水野忠成と合わず文政六年老中職を辞した。その致仕を記念して棕櫚が月をさす図の絵を描き画賛に、

勁葉高抽美蔭垂 似嫌攀附直無枝

朝天巨帚掃塵罷 好與清風明月期

棕軒

（勁葉、高ク抽テ、美蔭垂ル、攀附ヲ嫌フニ似テ、直ニシテ枝ナシ。天ニ朝スル巨帚、塵ヲ掃ウテ罷メ、好ク清風明月ト期ス）

と添えた。簡堂は此れを詩友の岡本花亭が福山侯より拝受した祝いの披露の席で拝観した。

阿部侯の棕櫚は颯然として月明に孤立していたが、八丈の蘇欄、齒朶は一本一株豪快に伸びて群をなしている。

阿部棕軒侯に見せ度いものである、と感慨に耽り乍ら緑の下道を行つた。

唐滝川に架る中の橋を渡ると檉立村であつた。能里の部落を通過つて小高い緑が山の山懐にある服部屋鋪に入る。中之郷の山下屋鋪より古びた堂々たる陣屋構えである。

服部屋は代々幕府の御船預かりを務め中之郷の山下家との養子縁組などもあつて、御役は交互に勤めていた。当代の敬次郎は浦賀奉行所詰となつて不在であつた。

屋敷を囲む見事な二重の玉石垣は、流入の近藤富蔵が

組み築いたものと奥山儀左衛門が言った。

玉石垣は基盤より上に十二段程均等の玉石を組み上げ各段の線が整然と列をなして乱れず、然かも縦には玉石の卵形が六弁の花形の文様をなしていた。全体が冷たい石材の垣というより生物のように柔らかに膨み、息遣いすらあるように思えた。

強風や潮害を防ぐ八丈島人の昔より工夫を重ねた石積み技術に違いないが、古法の衆石積みと透間をつくらない間知積みを合わせた此の技法は富蔵独自のものである。簡堂はその造形美にうたれ乍ら、一体富蔵は何処で習い覚えたのであろうか、不思議な男よと感嘆した。

簡堂は屋鋪で汗を拭って小休止の後、前庭の樹齢五百年余と云う蘇鉄の大樹の下に集められている三十名余りの流人を訓戒して直ぐ出立した。

高橋長左衛門が、服部屋敷から八町ばかり南の康政里に海辺に沸き出る温泉があつて諸病に利く、と頻りに勧め、能里より向ヶ里へ山路を牛の背を借りて行った。

掘切山の西より北へ十町程登ると大坂峠の頂上であつた。紫色の大岩に立って展望する目下の景観の見事さは暑さを忘すれる程であつた。峠の下の間浜の長汀が北に伸びて陸となり、その緑に盛り上った空に優雅な八丈富士が頂きに白雲を浮かばせていた。

簡堂一行は、此の八丈第一の絶景を賞でながら遅い昼

食を摂った。

簡堂は、末吉村名主沖山市十郎宅で一夜近藤富蔵と歓談中八丈の風景に触れ、富蔵より八丈嶋八景を知らされたのを思い出した。

八重根の晴風、大里の晩鐘、嶋山の夜雨、神湊の帰帆、名古の秋月、藍ヶ江の落雁、大坂の夕照、西山の暮雪で、大坂峠よりの夕べの展望が絶妙であると言ひ乍ら富蔵は、土さへもさけて猶照大坂を

くたる夕へのくるしかりけり

と武骨な掌に似ぬ優雅な筆跡を懐紙に認めた。

空も山も海も悉く黄金に染める夕映も流人の富蔵にはただ峠下りを悲痛な思いにする残照であるのだろうか。

簡堂は、それを確かめるかのように。

「では坂を下るとしようか」

と大賀郷陣屋へ戻る最後の行程に立った。

続く。

【連載】

有院家の人々 (二)

大和禎人 1

金融山脈 (四)

三戸岡道夫 11

少年素描

大和禎人 23

詩 (四編)

青木昭成 29

【連載】

千三百年目の仇討 (一)

佐々木一郎 32

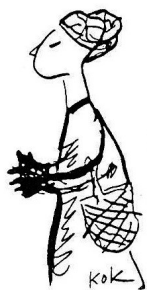
近藤富蔵の生涯 (十二)

金子正義 43

編集子のメモ

48

表紙・岸田幸雄 カット・小久保勝義



有院家の人々 (二)

大和禎人

第三章 豚屋火事

ロバート・ウォーカー・アルウィンが日本に来た同じ慶応二年、横浜の関内に大火があり、外国人居留地の四分の一、日本人町の三分の一が灰尽に帰すという出来事があった。俗に豚屋火事と呼ばれるのがそれだ。

イギリスの外交官アーネスト・サトウの記した手記に次のようなくだりがある。

十一月二十六日(慶応二年十月二十日)に横浜に未曾有の大火があった。(略)

半鐘が朝の九時頃威り始めた。ウイリスとわたしは屋上の物見に上がった。およそ半マイル先の、ちょうど風上に当たる方角に、火炎の天に沖しているのが見えた。(略)

火炎は土手道の家々の屋根に向かって突進し、まだ充分に燃え上がっていない場所のあちこちへ火を噴きつけるのは、見るも恐ろしい光景であった。突然、すぐ近くの街の半分がものすごい閃光を發して、パッと燃え上がった。油商人の店に火がついたのだ。

とあり、また、大田町の家で火事というので夜具をかかえて避難した一人に若き日の政治家高橋是清もいた。

吉原の河向うに埋立地がある。あそこがよからうと夜具を担いで、そこへ連れて行かれた。吉原の衣紋坂の通りはどんどん焼けている。仕方がないから我が輩は夜具を地面に敷いて、その上に坐って見ておった。その時に目について今もなお頭の底に残っているのは船におった外国の水兵が上がってきて、吉原

と埋立地との水面を横切って綱を引っ張り、吉原の通りに逃げまどっている老若男女を救ってやったことである。

こちらは『是清翁一代記』に見える記事だ。後の大蔵大臣、そして二・二六事件にたおれたあの（達磨さん）という異名の人が夜具を被り、まさにその達磨をきめこみ火事の修羅場を眺めていたものだ。波乱の人生を歩んだこの人らしい一つのエピソードだ。

突如、災害を及ぼしたこの火事は末広町の豚屋鉄五郎方を火元とし、外国人居留地の大部分と運上所、改所役宅ほか日本人商家の多くと、さらに遊廓を含め、関内の約三分の二以上を焼いたもので、言うところの「豚屋火事」である。

うろろしているうちに、髪の毛に火が移ると、その大衆はきりきり回ってついに焼け死んでしまいました。実に凄いと、懼ろしいとも申しようがなかったと、驚の吉と申す人の話でして……

（「横浜どんたく・下巻」吉田その女談）

多くの遊女が焼死し、また埋立中の堀に飛び込んで溺死した。ここだけで四百数十人の犠牲者であったと言われる。

この大火は国際的な問題に発展し、横浜居留地の改造および競馬場、墓地等の約定書の締結を迫られる経緯を

崎遊廓の娼妓たちが数多く逃れようとして、死の淵に落ちた哀れがかれの目に焼きついて離れなかった。

（アーメン）

と手を合わせ、祈るほかないのだった。かれはいみじくもこの国の（女の哀れ）を感じ取ったのだった。

それは苦の世界とされる（妓楼の女たち）ゆえに、いっそう堕ちた運命は悲しく、悲惨の色あいが深く、ほとんど投げ込み同然の火葬処理の作業が行なわれたことも聞いていた。またかれはその後間もなく「再生茶」の取引上でも接することになった「お茶場」での過酷に耐える女たちの姿を目撃するにつけて、日本の国の女人たちのおかれてある境遇が、かれの母国とは著しく異なるものがあることを認識させられたのだった。このことはかれがやがて抱くことになる（女人憧憬）の上にも、少なからぬ陰を落とすことになったようである。

「ミスター オオタニ、あなた、ブタヤカジ知っているか」

「オオ、知っている、話は聞いている、ワタシはまだその頃は川俣にいた」

「カワマタね？ それはどこ」

「うむー イセの国……イセランド」

かれはこの異国人にどう伝えればよい言葉に苦しんでいた。妙な付き合いはいま始まったばかりだったから

生み、倒壊寸前の幕府に少なからぬ動揺を与えることになったが、実行不能のまま明治政府に引継がれることになった。

さて、ここでわがロバート・ウォーカー・アルウィン青年がこの場合に無関係ではなかったことを書きとめねばなるまい。

かれは太平洋郵便汽船会社に着任早々のことで、まだ社内に寄寓の身であったが、出来事に少なからず動転して、ただオロオロなすすべもないありさまで恐怖の時間を体験したのである。

惨状は見まいとしても、見ざるを得ない身近かに起こった出来事であった。

死屍累々とはかかる場合を指すのであろう、のちにかれは晩年には大正十二年の関東大震災火災にも遭遇するのだが、若いこの時の印象は生涯その心象風景のどこかに消し難い傷痕を残すことになった。若冠のかれがその死生感の上でも、人間存在感といったものを痛切に揺さぶられたのである。東洋風に言えば無常観に相当するだろう。この国に生きていくとうとする第一歩の洗礼だった。

生きるもののこの世での汚濁そのものを目前のおびただしい死屍は露わにさらけ出していた。折り重なり、掘では水膨れ、あるいは熱風に四肢をかがめ、黒焦げて声なき怨嗟をこの世に向けていたのだった。とりわけて港

なおさらなのだ。ひょっこり汽船会社の窓口に顔を出した男は（オオタニ）と名乗り、香港やアメリカ向けの船便その他の資料をもとめ、また、説明を聞くうとしてあらわれたものだった。

だが、この日はあいにくなことに日曜日だった。パシフィック・メール社のカレンダーは太陽暦だったのだ。オオタニはそうした暦の相違について知識をもっていなかった。ましてその日曜日が休日であることなど意外なこと、生活習慣の相違をはじめ知ったのだ。

無人で静かな建物の奥から出てきた紅毛碧眼の人物はさわやかな青年だった。そしてこの出会いこそが実に運命的な将来をもたらすことになるのであった。

ロバート・ウォーカー・アルインはオオタニを、またオオタニもこの異国の青年を一目で警戒を必要としない仲間として直感したのである。

「航海中の船はまさか日曜だからといって、エンジンを止めはしないだろう……」

「オオ、ノー、ノー、キミは面白いことを言う、休むのはもちろんオオフィスだけだ」

オオタニの覚束ないジャパニーズイングリッシュ、それにもましてロバートのほうも母国で教習を受けたとはいえ、すこぶる怪しい日本語で、二人の会話は疎通の困難を免れなかった。しかし、そのことがかえってかれらの親愛を誘い、深い友情が結ばれることにもなった。縁

とはふしぎなものだ。

「交わす会話のなかに、たがいが一つ一つ未知の扉をひらくようなスリルを味わい、わくわくする興味をたがいに覚えたのだ。」

「カワマタはイイナン（飯南）郡にある、櫛田川に沿う茶所なのだ」

オオタニは身上を語り出した。

「チャどころ？……」

「そう、ティーと言えはいいかな、カワマタは宇治とならぶ産地だ、わたしはその香りの中に育った人間だ」

「オオ、ベリグッド、わたしは日本のティーのことたくさん知りたい」

「いいだろう、茶のことなら、なんでも聞いてくれ」

「ユーと友達になろう、神の引合わせに感謝したい」

「よろしい、望むところだ、キミもわたしに今後の便宜をあたえてくれたまえ」

二人はそこで握手をした。それは単なる儀礼的なものでなく、強く強く力をこめたものになった、たがいの顔を輝かし、異邦の青年同士が垣を越える信頼をあらわし、心意気の通じ合った握手であった。

豚屋火事の話はそのあとにウォルシーのほうから出たものだ。

「わたしのビュー・オブ・ライフが変わったのです」

「ビュー・オブ・ライフ？」

「そう、ヒューマンライフと言いかえるべきかな」

「あ、そう人生観ね、違うかな、ね、そうではないかな、ミスター」

オオタニは辛うじて、その意味を汲み取った。

（人生のビュー、なるほど、ライフを眺めるのだな、わかる、わかる）

オオタニは次第に興に乗るようすで、ロバートのほうもまた初対面の異邦のこの青年に接してみて、できるだけ長く話をしたいと願う気持ちになっていた。日本茶はこれのこれから携わろうとする貿易の仕事上、重要な位置を占めることを当然知っていた。豚屋火事のこととは生々しい出来事であったので、この場合は商取引をはなれて、世間話として提供したつもりだったが、ロバートとしては思わず近ごろの本音を吐き出すことになった。それを話すことで日本青年といっそう親しくなりたいたいと思ったことだったのだが、相手のオオタニはそれを少しまでもに受け取りすぎたようだ。

純粹すぎる日本青年の反応に、ロバートは着任直後に遭遇し、抱えてきた澱りをこの際に吐き出そうとする気持ちになっていった。

「その、あなたのビュー・ライフがどうして豚屋火事と」

「あの火事はたくさんのヒト死にました」

「そうらしい、わたしも聞いている、この居留地がル

ツボになった」

「ルツボとはなに？ とにかくたくさん、たくさんヒト死にました」

「わたしは人間の死を見すぎたのです」

「わかる、開港いろいろの大惨事だった」

「ワタシ、考えの変わるオドロキでいっぱいでした」

第四章 恋の通い路

間もない慶応四年に日本の国の変革がおこった。徳川慶喜將軍の大政奉還、つづいて江戸表謹慎が明らかになると、横浜市内は音曲停止になった。

横浜ハ幸ニ諸事整頓シ朝廷ノ官吏ニ引継キ迄醜態又ハ粗暴ノ事ナクシテ済セタリ、此間ノ苦心云フヘカラズ（大田久好『横浜沿革誌』）

しかし、実際は四月に入り、江戸に向う官軍諸藩の兵士が続々入り込んできて、黒や赤の筒袖、いわゆるダンブクロの異様な姿で市街や外国人居留地を徘徊し、外国人を見ては驚かそうとする輩も少なからず、壮年血気の武士たちは奉行所の制止を聞かず銃器を携え脱走する者や、この機に乗じ乱を起そうとする者もあったようだ。

だが、四月十八日、官軍総督東久世通禧中將を迎えた

神奈川奉行所は、戸部、横浜の両役所、東西の運上所、国産改所など一切を官軍に引き渡した。

神奈川奉行水野若狭守、依田伊勢守は三百両の慰勞金を官軍から下賜され二十一日に江戸へ引上げた。

このいきさつは少々興味深い。幕吏が少なからぬ金員を与えられて退散しているのである。進駐軍の官軍に勝者をおごる振る舞いがいささかもなく、これだけの整然とした処置がとられ、暴虐行為が一切行なわれなかったとするなら、いっそう意外としなければなるまい。

新政府は神奈川奉行所を神奈川裁判所と改め、外国側に通告し、やがて新たな機構として東久世通禧を権参与とし、権議定に鍋島直大、参与判事に寺島宗則、井関盛良をあて、御用掛定役、同心、それに警衛隊一六〇人、下番三二〇人を置いた。

さらに六月、神奈川裁判所を改め、神奈川府。九月にこれも改め神奈川県とする推移があった。

ロバート・ウォーカー・アルウィンのことを語る上にこれらのことは欠かせない背景に思える。

ついでながら、ロバートの「恋の通い路」について考証を試みる必要がある。

新官制の充実をはかる一方に神奈川県は施策として、まず海上交通の便を計ることに力を注ぎ、明治元年（一八六八）にはいち早く横須賀製鉄所所属の汽船横須賀

丸を借り上げ、週二回、横須賀と横浜間を往復させ、庶民の乗船を認めた。さらに同年八月には神奈川県府の自前の稲川丸も就航した。ともにわずかに十五馬力でしかない小蒸気船だったが、稲川丸のほうは東京・横浜間を就航させたものであった。

ところで、ここで余事として面白いことには吟香、岸田銀次が登場する。かれは天保四年美作の生れで緒方洪庵に蘭学を学び、黎明期の慶応元年にいちはやい先見をもち「海外新聞」を発刊し、横浜に来てからはJ・C・ヘボンのもとで日本最初の和英辞書『和英語林集成』の編纂に携わった人物である。そのかれはやがてジャーナリストに止まらず、運送商社を創立するという事業家に変身を遂げる。稲川丸の運営が民間にまかされると、かれがその払い下げをうけ明治五年の鉄道開通までを航行させたのである。

陸上交通のほうは二年（一八六九）五月、吉田橋わき（真砂町四丁目）に成駒屋と称して乗合馬車が新浜町川名幸左衛門、弁天通り下岡久之助らによって開業。横浜・東京日本橋間を四時間で走った。最盛期には御者二十五人、馬六十頭で鉄道開通までつづいた。わが国乗合馬車の先駆とされる。

馬車賃は東京・横浜間、一台貸切で三円でしたが、今から見れば道路は悪いし、東京まで乗っていったら、たいてい一日、二日は寝たくら

いなものです。もちろん駅々では休んだものでしたが、頭痛持ちなどはずいぶん難渋したものだそうです。

（名はいわぬが花某老妓談「横浜どんたく・下巻」）
某老妓の談とあるところが妙で、かの女らが東京までの遠出をしたのは最良客とでも同行したものであったろうか、言わぬが花は少々仇っぽい。

そして明治三年（一八七〇）十一月、和泉要助らの出願によって人力車も横浜に登場、吉田橋と大江橋には人力車の溜り場が設けられ、市内での営業が始まった。こちらのほうも駄賃によつては東京への遠出もあり得たろう。普及にともない立て場も整い、駅継ぎの走行も可能であったと考えられる。

ロバート・ウォーカー・アルウィンの恋路はたいへん高いものについた。若者の給料では大変だった。

オオタニの手引きを離れてからのかれはかれなりのアプローチに心を砕いていた。

「おイキさんにあげてください」

と花束をとどけることも、何度かにおよび、また養父母の武智惣助、ていの夫妻にも歓心を得ようと、都度の手土産を忘れず、出来る限りの努力を払った。とくにてい女のほうの心証をよくすることでもっとも気を使った。そういうことでは大いにオオタニの助言が役立ったようだ。

ビードロ、からくり、べっ甲細工。

長崎の土産といえは往時よりも似たようなものであった。てい女にロバートがとくに選んだべっ甲細工はたいへん喜ばれたようであった。

「お前さん、長崎カブレだねえ、いいかげんにしなさい、丸山の大夫じゃあるまいし、止しな」

「あら、いいじゃありませんか、さんざ欲しがっても買ってなんぞもらえなかった品物だもの、かんざしは女の命ですよ」

「そうか、そうかい、ま、いいやな、お前さんも変わったねえ、あれほど嫌いだっ異人さんだったじゃないか」

「いいんですよ、わたしはあのおひとの実のあるところを見直しているんですよ、優しいじゃありませんか、わざわざ、わたしにまで土産をくれるなんて、ただじゃありませんよ」

「ふーん、そういうものかねえ」

惣助の啞然とした顔が見ものであった。ロバートがていに贈り物として届けたべっ甲細工は高価な筈、それに櫛飾りまで添えられていた。惣助は手にとるまでもなくチラチラ横目に睨んで、商売柄の目利きで細工の凝った逸品と値踏みのできる品だった。

「で、なにかい、ほつほつイキをあの異人さんに呉れてやる気にもなったのかい」

「止してくださいな、それとこれとは別ですよ」

「そうかい、お前さん現金だねえ、いい気なもんだ、盗人に追い銭だねえ、あの異人さんがそれじゃあ可哀想だ、高えもん買ってドブだ、もったいねえ、もったいねえ」

「なにをお言いかえ、泥棒呼ばわりはひどいじゃないの、ドブはないでしょう」

「気に障ったらごめんな、堪忍、堪忍」

結構、夫婦仲はいいほうなのだろう。惣助のほうの甘さ加減が気になるほどだ。

ベコン、ベコン、またベコン。

てい女はそれ以上は意に解さぬていで、こんどはビードロを吹いていた。

大店のおかみの貫禄じゅうぶんの振る舞いなのだ。

ベコン、ベコンとこの場合は惣助をはぐらかすしぐさとも取れる。

（あれは歌磨だったか、「ビードロを吹く女」というのがあったな）

だが、惣助の胸のうちにそんな想いが浮かび、こちらは万更でもない気分というようだった。

「でもねえ、あんた、わたしはこれでも考えてはいるんですよ」

「……………」

「あれだけ、熱心に望まれるんだから、イキの気持ち

だいいじゃないかしらね、本人に聞くのもなんだけど、あの子すっかりしてますからね、怖い話ですよ」

「そう、怖いねえ、相手はなんしろ異人さんだからなあ、行けととられても可哀想だ」

「そうですとも、傷つく話になりますよ」

どうやら、本人しだいというところへ夫婦の考えが変わってきいてた。はじめ頃のなにがなんでも拒否する態度が緩められたあんばいである。それに気づいていないのはご本人たちだけだったろう。

「家督の問題もあるしな」

「いえね、それを考えたんですけどね、あの子に代わる縁組を考える方法だってありますよ、あの子の姉のつなちゃんだっていることだし……」

「そうそうは林の家に勝手ばかり言えまいよ」

「あちらは後妻さんの継母だから、イキちゃんとは同じ条件ですよ」

怖い話はこの夫婦の会話であつたかも知れない。

ロバートの知らないところで、ようやく曙光の気配が兆しはじめたようであつた。

「ロバートのことは目をつぶって見ていてほしい、かれのラブはホンモノだ、これは国際結婚に発展するだろうが、この国に骨を埋める覚悟がなくてはできることではない、そう思えばわたしたちのコンパニーの利益にも

なることだ」

社長ウォルシーは理解をこういう言葉にしていた。

「諸君の青春が二度めぐっては来ないように、かれにとつても、青春は二度ない大切なものだ、ねえ、そうではないかな、悔いを残してはならないのだ」というものだった。

主として支配人のウィルソン相手の私語だったが、ロバートをとくまくとくアメリカ人の同僚たちの、かれの恋愛問題に対する反対意見を封じるための、それとはなしの発言だったようである。そうすることでじゅうぶん意向は部下に伝わるのが計算されていたのだ。

だが、それにもかかわらず、

「キミがそれほどその日本のかの女のことを思うなら結婚しなくても同棲すればいいじゃないか、例のないことでもないだろう」

と、かれの耳に囁いた同僚がいた。

「ノー、ノー、それはひどい、それほどの侮辱があつていいものか、そういう話は聞きたくない」

かれは顔を真っ赤にし、唇を震わせて怒った。

愛するものへの冒瀆だった。居留地に住む外人たちはともすると、日本人に対する軽侮の念を潜ませている。それは日本人のほうでも、かれらに對し同様に抱いている偏見とせめぎあいを拭い切れないのが実情であつた。

も、耳ふさぎ出来ないこととして聞いたものだ。

(いったい人道はどこにあるのか)

とロバートは思うばかりだった。

さらにおどろくべきことは元禄年間には毎年四、五千人の中国人が長崎に上陸しており、丸山遊女の唐館出入りは毎日一〇〇人以上もあり、年間にすると述べて四万人を越えていたらしいという。そして長崎へ来航する中国人は丸山遊女との快楽をもとめた来航も少なくなつたとされているのだった。

淫らがましく忌まわしきことながら、ロバートがこれらを知識にしたことはかれの女人観の上にいよいよ確固としたものを定めるのに役立った。そしてかれの胸のうちに育て、温めつつづけている純潔で無垢な日本婦人像、それは「武智イキ」に外ならぬのだが、そのひとを正式な妻として迎え得たならば、かつてこの日本に入国し定着した華僑に習い、できるなら「落土生根」の志をも遂げたいと思つたことだ。

(イキさん、おイキさあーん)

と叫びつつ、ひたすら東京の空に心を馳せるのだった。

「アルウィンさんこのところお見えにならない、どうかなさったのかしら」

ぽつんと、イキがだれにとなく呟いた。その場にてい

女がいた。近ごろ離れ家のほうの一部を茶室にしつらえ水屋まで一通りが整えられている。イキはお点前の相手をさせられていた。

湯島のほうの家元へはていはいキを供につれていく慣いにしていて、ふたりは相弟子ということでもある。それだけ、義理の母子でもむつまじく、いたって気のおけない仲であった。おもにそれはていはいのほうの大きな気性に迎えられているからに相違なかった。

「おや、あんたアルウィンさんのことを気にしておいでだったのかえ」

「いいえ、そうというわけでは……」

「いいのよ、あなた、ほんとうの気持はどうなの」

「……………」

「あのひとのことほんとうのところ、どう思っているの、青い目の異人さんじゃ、いやよね」

「……………」

「黙っていたんじゃ、わからないのよ、いつかははっきりとしないといけないことですよ、うちのひとは男だから相談にはならないし、いざとなればこの家の後継ぎのことなら、何とでもなると思うのよ……」

惣助と話していた（怖い話）にひよんなキツカケからこの場はいよいよ立ち入りそうであった。

（いい機会だ、すっかり話はケリにしないことには）
とてい女はホゾを決めたのだった。

（三・六・二七）
△つづく

「どうお考えかえ、ズルズルこのままではね、いけませんよ」

イキは黙ったまま、客あしらいの所作に入ろうとするところだ。その横顔、うなじに漂い（おんな）らしさにめつきり艶やかさが加わっているのをてい女はあらためて見ていた。

（このひとはいい娘になった、でも異人さんではどうかしら、やはり、可哀想ね）

と思いのだが、それはこの際うち消さねばならない。

「正直に言っておくれな、あなたしだいですよ、それにお断りするなら、早くしなければいけませんよ、もうお話があつてから、だいぶになりますもの、うちのひとはつきりしないからいけないけど」

「いいえ、お父様のせいではありません、わたしがいけないのです、あのかたご熱心で、あまりですもの」

「そうだね、迷惑をおしだものね」

「いえ、迷惑とかいうのではなく、ほんとうはわかりませんの、どうしてよいのやら、でも、よろしいのですか、この家のことは」

「あら、それは、いま言いましたね、あなたさえその気なら……」

てい女のほうが虚をつかれる成り行きになった。



金融山脈 (四)

三戸岡道夫

年間二十億円。これが桜川が支店長を勤める、目黒支店に割当てられた、今年度の預金増強のノルマであった。昭和四十年代の初期であるから、この金額は巨大だといわねばならない。

帝都銀行の毎年度の預金増強計画は、本部の営業推進部で作られる。銀行全体の目標が決まると、それが全国の支店に細分化され、その達成は絶対的なものとして、支店長に強制される。この数字の達成如何によって、支店長の評価が決まるといっていい。桜川支店長にとってもその事情は同じであった。

目黒支店にとって、年間二十億円という目標は、案な数字ではない。現に前任の津倉支店長はそれに失敗して、検査部という閑職へ左遷されたのである。

目標達成のためには、四月から九月までの上半期中に、

半分の十億円はふやしておかなければならないのに、まだ四月、五月と、横這いという情ない数字であった。ポリーナス資金が入る六月と七月で、六億円から七億円はふやしておかないと、九月末までの達成はむづかしいだろう。

桜川支店長は焦らだっていた。

そんな日の午前中、桜川は、次長、渉外係長、貸付係長、それに十名の渉外担当者を二階の会議室に集めると、六月、七月の預金増強作戦会議を開いた。

会議室の壁には、

（必勝、年間二十億円！）

と大書した横長のポスターが貼られ、その下に、渉外担当者別の預金成績のグラフ、取引先開拓一覧表、それに取引先の所在を丹念に赤いマジックインキで書きこんだ目黒地域の地図などが、所せましと貼られて、いやが上にも預金増強の熱気をあおり立てていた。

さきほどから渉外係長の仲丸順一が、黒板に向って一生懸命六月の預金増加計画を説明しているのだが、その顔には脂汗が浮いていた。

「こういうわけで、どうしても、六月も、三千万円のマイナスになってしまいます」

仲丸係長は黒板の左端に、マイナス三千万円と書いて、何うような視線を桜川の方に向けた。仲丸係長の消極的な態度に、桜川は怒りにかられて、

「駄目だ！ 駄目、駄目」

大声で拒絶した。仲丸係長は人は好いのだが、渉外担当の取りまとめ役としては気が弱く、押しが足りない。

「マイナスになってしまいます、では、計画にならんではないか。計画とは、『なっています』などと、泣きごとを言っているのではなく、どうしたら目標が達成できるのか、それを検討するのが計画というものだ。上期目標が十億だというのに、まだほとんどふえていない。六月には三億円、七月には四億円と、ふやす覚悟でなくては、目標達成はむづかしい。そんなことぐらい、渉外係長の君が判らないのかね」

桜川の語気は荒くなった。

「わかっております」

「わかっていたら、その通りにやれ。まず、目標を先に置くのだ。いいか。六月、三億円。どうやったらこの三億円が達成できるか、それを研究するのだ。君のよう

に、マイナス材料ばかり探しまわって、今月はこの定期預金が満期で解約になります、どこの会社の資金繰りが苦しいから預金が減りますとか、そんな数字ばかりを集計しても、なんの役に立たん。お客さんが解約するといったら、解約しないように頼むのだ。また、万が一減ったら、その減った分は他で取り戻す、そのプラスの材料を探すのが、打合せというもののじゃないのかな」

やにわに桜川は立ち上ると、黒板のプラス三億円という字だけを残して、他の数字は全部消してしまった。

「考え方の発想を変えるのだ。津倉支店長時代のやり方は一刻も早く捨ててしまふことだ」

午前中のそんな激しい打合せのあと、桜川支店長は昼食をとると、外に出た。自動車の運転手が病気で休んでいるので、徒歩であった。

預金増強目標を達成するには、支店長が座っていて、渉外係を叱咤激励するだけでは駄目だった。支店長自らの率先垂範がなければ、部下はついてこない。支店長も自分のノルマを達成しなければならぬ。

午後一番の訪問予定は、自動車修理業の関口自動車サービスであった。自動車修理のほかに、隣の空き地を貸し駐車場にもしているから、金はある筈である。

六月のはじめだというのに、初夏のような暑さだった。歩いて権之助坂を下ると、太陽は乾ききった空でじっと

動かず、桜川は暑さで眼まいがしそうだつた。

目黒川にかかったコンクリートの橋を渡る。乾燥した橋は、熱く、埃っぽく、川岸にちよろちよろと生えた柳の枝は、葉が垂れさがっていた。暑さを避けてか、あたりに人の姿はなく、森閑としていた。腕時計を見ると、一時半であった。昼下りの暑さの中に、街全体が凝固してしまつたように思った。桜川は頭がぼんやりしてきて、一瞬、焦熱地獄へでも迷いこんだのではないかという恐怖にかられた。

額に汗がしたたり落ちる。ハンカチで汗をぬぐうと、たちまち水に落したようにぐっしりと濡れた。預金増強に鞭を振りあげている営業推進部長の顔が、白昼夢のように桜川の頭に浮かんできた。

（預金ノルマがきつすぎる。営業推進部の恐怖政治だよ）

支店長たちが寄るとさわると口癖になっている言葉が、耳鳴りのようにひびいてくる。だが、そんな気の弱いこととてどうするのだと、すぐ桜川は耳鳴りの言葉を、押し戻した。

今月は三億円集めなくてはならない。三億円。それに八月は帝都銀行の創立記念月なので、もっときついノルマが控えている。預金はたとえ百万円でも、二百万円でも欲しいのだ。

いくら歩いても、なかなか関口自動車サービスへ着か

ないような気がした。ちようど夢の中で、いくら走っても目的地に着かないのに似ていた。ズボンの中を、汗がいく筋も流れた。気持が悪いが、我慢した。桜川は白いアスファルトを見つめ、せつせと歩いた。顔を上げると、よけい暑かった。

やっと関口自動車サービスの赤い看板が見えてきた。

入口のドアを開けると、

「まあ、この暑いのに、ようこそ」

経理部長の声に、桜川は救われたような気持ちになった。

「さあ、支店長さん、どうぞ」

すすめられた椅子に腰かけると、クーラーの入った事務室の中で、玉のような汗が急速に引いていくのがわかった。

「電話でお願いした定期預金の件、よろしく願います」

桜川は出されたキリンレモンを飲みながら、そう切り出した。

「八月はおたくの創立記念月でしたね」

「そうなんです。ですから、今月もその前祝いで景気よく願いますよ」

「支店長さんが見えになったのだから、いくらかはしなくてはと、思っていますかね」

「関口自動車さんが唯一の頼りなんですよ」

「支店長さんは調子がいい……」

二人は同時に笑った。

笑ったけれども、この経理部長はどこまでが本当なのか、わからない人間であった。が、この分では、一千万円はやってくれるかなと、桜川は胸算用した。しかし、油断は禁物だった。この経理部長はさんざんに気を持たせておいて、最後にぱっと肩すかしをくわすのが得意だと聞いている。小切手を握ってみるまでは、わからない。

三十分ばかりねばっていると、やっと経理部長は一千万円の小切手を切ってくれた。

「定期預金は三百万円。七百万円が当座預金ですから、間違いないように願います」

そう経理部長は念を押した。

「定期預金が三百万円ですか。そりゃ、殺生ですよ。」

関口自動車さんは五百万円と予定しているんですよ。ね、部長さん、お願いしますよ」

「駄目ですよ。銀行さんの言う通りに、定期、定期と、定期預金はかり作っていたら、手形が落とせなくなってしまいますよ」

「天下の関口自動車さんが、ご冗談を」

「冗談ではありませんよ。この不景気では儲かりません。嘘だと思ふなら、金庫の中を見せしましょうか。今日のお天気のように、すっからかに干あがっています」

掛けていた。そして、時々、

「困ったなあ」

とつぶやいた。こういう時は、強硬な交渉をするよりも、打ちひしがれて、困りぬき、哀れっぽく見せかけて、相手の同情をひくのが一番効果的だと、長い銀行員生活の中から、桜川は心得えていた。

桜川はなんとなく、窓の外に眼をやった。そこには相変わらず、初夏を思わせる太陽が音もなく照りつづけていた。時間もだいぶ過ぎた。そろそろ次の取引先へ廻らなくてはならないと、内心桜川は思いはじめていた。

そんな桜川の姿に、同情したのか、それとも根負けしたのか、経理部長はついに追加の四百万円の小切手を渡してくれた。

「いいですか、これは当座預金へ入金ですよ」

「どうも、ありがとうございます。でも、定期預金が三百万円とは、ちょっと痛いですね。もうちょっと、どうにかありませんか。せめて四百万円……」

「だめ、だめ。それで、ぎりぎりですよ。まあ、決算でも締めてみて、儲かっているようでしたら、またなんとか、やりましょう」

桜川はこの辺が限界だと見て、立ち上ると、外に出た。ふたたび、さきほどの鋭い暑さが、待ち構えていたように、全身を襲ってきた。

それから桜川は五軒ほど取引先を廻った。夕方、全身

「金庫の中は空っぽでも、他の銀行さんには、たっぷりあるんじゃないか」

「支店長さんにあつては、かなわない」

「ところで、当座預金の方は何時まで置いていただけるのですか」

「十五日に支手決済がありますから、それに使います」

「えっ、十五日ですか。それは無茶ですよ。月の真ん中はそのままだしておいて、二十五日の支手決済に使って下さいよ」

関口自動車サービスの支払手形の決済は、毎月、十五日と二十五日の二回であった。

「そんなことをしたら、十五日の手形が不渡りですよ」

「だから、十五日の分はこれとは別に、小切手を切って下さい」

「そんな無茶を言って」

預金交渉の駆け引きは、虚々実々である。お互いに相手の隙を見ては斬りつけ、切り返す、言葉の真剣勝負と云う。いい。

経理部長は煙草をポケットから取り出した。桜川はすばやくそれに、ライターの火を近づける。

「どうもすみません。でも、支店長さん、火をつけてくれても、小切手は切りませんよ」

「困りましたなあ」

桜川はしばらく黙ったまま、腕組みをして、椅子に腰

汗で濡れ鼠のようになり、倒れ込むように銀行に帰った。

(二)

桜川はまず洗面所で顔を洗い、クーラーの前でワイシャツの中へ風を入れ、女子行員が持ってきた冷いカルピスを一気に飲むと、やっと人心地がついた。

(とにかく預金を集めるということは、大変なことだ)そこへ次々と、渉外の担当者たちも帰ってきた。

「ただいま」

「どうだった、今日の成果は」

「ついに待望の近藤建材のおやじ、定期預金をやってくれました」

「そうか。よかったな。金額は？」

「五百万円です」

「大成功だ」

支店長にほめられた渉外係は、顔を赤らめて、にっと笑ったが、全身は汗にまみれて、疲れ果てていた。

(どこかに、いい預金源はないものかなあ)

クーラーの風でだいぶ涼しくなった桜川の頭に、ふと一つの預金源が浮かんできた。

(そうだ、松橋常務の退職金がそろそろ入る頃だ)

これまでは松橋常務のトラブルの方にばかり頭がいつてしまい、肝心の退職金のことまで、頭が廻らなかったことに気がついた。

(これはうっかりしていただ。都市銀行の常務の退職金だから、三千万円か、四千万円か。これは大きいぞ)

桜川は急いで、本部の秘書室へ電話を入れた。四千万円の退職金が、明後日、支払われるということがわかった。幸いなことに、目黒支店の松橋常務の口座へ、送金されてくるという。

「これは、ありがたい」

と桜川は思わずつぶやき、次長の神谷にそれを話した。「大丈夫ですよ。この支店へ振り込まれた以上、他の銀行へ逃げる心配はありませんよ」

神谷次長ははなはだ呑気に構えていた。

(でも、こんな呑気なことで大丈夫なのか)

桜川はふと心配になった。

そこで翌日、朝一番に、桜川はY電気を訪問した。

すると、松橋常務の部屋にはすでに先客がいた。桜川は藤巻経理部長のところへ顔を出し、様子を聞くと、

「陽光銀行の支店長さんですよ」

「だいぶ、話が長いようですね」

「さあ、なにか個人的な用件のようなので、わたしの方では、よくわかりませんが」

桜川の第六感には、ピンと来るものがあった。退職金だ。だが、帝都銀行の口座へ入る退職金を、なぜ陽光銀行がそんなに早く知っているのか。ひよっとすると、松橋常務の方から連絡したのかもしれないと、桜川は勘

つた。

「支店長さん」

と、藤巻部長が桜川の耳許へささやいた。

「気をつけないと危いですよ。松橋さん、だいぶ陽光銀行に肩を入れているようですからね。もちろん、わたしの目の黒いうちは、勝手な真似はさせません。わたしはどこまでも帝都銀行のファンです。でも、松橋さん、帝都銀行出身だというのに、どうして帝都銀行には、冷たいんでしょねえ」

間もなく、陽光銀行の支店長は帰っていった。

すかさず桜川は、二階へ上っていった。桜川が部屋に入るや否や、松橋常務は、

「桜川君、もう、退職金はないよ」

びしゃりと、そう言った。先手を打たれて、桜川はたじたとになったが、

「明日ご送金があると、秘書室から連絡を受けました。当面、お使いになるご予定がありませんようでしたら、ぜひ定期預金をお作り下さるよう、お願いいたします」

松橋常務は、桜川がその先を言うのを封ずるように、

「それが予定が大ありなんでね。Y電気の株式を買わなきゃならないから、駄目だ。経営者ともなると、つらいんだよ、高価な株式を持たなきゃならないからね」

Y電気の株式は、最近成長株だと人気が出て、五百円前後の高価をつけていた。一万株買えば、五百万円は必

要になる。

「でも、全額、株式をお買いになるわけではないでしょう」

「それはそうだが、四万株や五万株は、買わなきゃならないからね。それに、家も建て増さなければならぬから、金はいくらあっても足りないね」

「それはご尤もですが、でも、四千万円もお入りになるのですから、一千万円ぐらいいは預金にお残りになるのではと思うのですが」

「そりゃ、残ることはすこしは残るがね、だが残ったとしても、銀行預金にはしないよ。信託銀行へ預ける。

銀行と信託とは、金利がまったく違うからねえ」

どうして、こうも意地が悪いのかと、桜川はうらめしく思った。銀行と信託とは、金利が違うことは判っている。しかし、かりにも松橋常務は、その金利の安い銀行の役員だったのではないか。そして、退職金もその銀行から出るのである。義理にも銀行の定期預金にしてくれるのが、常識というものではあるまいか。

「そこを曲げて、どうか、ご配慮を」

すると、途端に松橋常務は威丈高になって、

「そもそも、帝都銀行は頼みに来るのが遅いよ。陽光銀行なんて、支店長がもう一週間も前から日参しているね、桜川君、サラリーマンが会社を辞めれば、退職金が出るのは当たり前だよ。それに気がつかないようでは、支

店長失格だ。陽光銀行だけでは少しやることにしたが、あとは駄目だ」

陽光銀行の支店長は電話で呼んでおきながら、桜川への返事は冷い。だが、いったん駄目だと言うと、松橋常務はてこでも動かない人間だった。

桜川の胸の中を、昨日の預金増強計画打合せのことが、去来した。六月は三億円必成と、部下に強引に押しつけておきながら、支店長自らが交渉しているこの退職金が獲得できないようでは、部下に対しても顔向けが出来ないと、桜川は必死に、何回も頭を下げて頼んだが、駄目だった。桜川の眼には、くやし涙が溢れてきたが、どうすることも出来ない。

桜川はがっくり肩を落して、支店へ帰った。

だが、桜川は諦めなかった。

その日の夕方もう一度、松橋常務の自宅を訪れると、奥さんに逢って、

「奥さまの方からも、ぜひよろしくお願いしていただきますたい」

と、玄関先へ頭をすりつけた。松橋常務は奥の部屋に居るようであったが、出てこなかった。

桜川はその足で更に寺本社長の自宅をも訪れ、

「社長さんの方からも一言、松橋常務へ声をかけてください」

と頼んで廻った。

だが、結局すべて無駄に終り、翌日になると、Y電気の株式購入代金の二千五百万円の小切手が、陽光証券会社から廻ってきた。さらに一千万円が陽光信託銀行、五百万円が陽光銀行からと小切手が廻ってきて、四千万円の退職金は、あっとい間に他へ移っていったのであった。

続いてもう一つ、桜川をびっくりさせる事件が起きた。松橋常務は帝都銀行の株式を、五万株持っていた。それを突然全部売却してしまったのであった。その日の帝都銀行の高値は百八十七円で、本部の株式課から送金されてきた売却代金は、九百三十五万円であった。

桜川はちょっと異様な感じに打たれた。株式は松橋常務の個人の財産であるから、どう処分しようかと、それは勝手である。また、帝都銀行在職中は常務取締役という立場上、保有する必要があるであろうが、今は帝都銀行の役員ではない。引続き株式を持たなければならぬ筋合いにはない。理窟ではそうである。だがそうかといって、銀行を辞めた途端に帝都銀行の株式を売却してしまうのは、最後の絶縁状を帝都銀行へ、たたきつけるようなものである。なぜ、そこまで急激にやらなくてはならないのか。松橋常務のやり方は、一瞬を争って帝都銀行との関係を、無理やり断ち切ってしまったがっているような気がして、桜川は悲しく思った。

りあげた。

こうして、松橋常務の退職金も株式売却代金も、いったんは帝都銀行の口座に入金されながら、結局帝都銀行には一円も残らなかった。松橋常務の帝都銀行への復讐は、目黒支店への預金の非協力という形で、その姿を現わしてきたのであった。桜川がくやしきまぎれに、(松橋常務は本当にひどいですよ。退職金と株式売却代金をあわせて、四千九百万円も入りながら、一円も目黒支店へは預金してくれないのですよ。あれが、われわれの先輩といえますかねえ)

と、本部の部長や役員たちに訴え、それが円城寺頭取の耳へ入る効果を、明らかに狙っている。松橋常務の復讐の第一弾といってよかった。

(三)

Y電気の寺本社長は、昭和五年に郷里の福島から上京した。二十四才の時であった。

上野駅で汽車を降りると、すぐ駅前の占師に占ってもらった。

「なかなかいい顔をしている。まじめに努力すれば、成功疑いなしですよ」

と、田舎出の寺本青年を占い師は励ましてくれたのであった。

勇気を与えられた寺本青年は、上京して三年目に、電

その売却の方法も、証券会社を経由してそっと売のならまだしものこと、わざわざ帝都銀行の株式課に売却の手続を依頼しているのである。株式売却を帝都銀行側に知らせるのを、目的としているとしか思えない。

一般に銀行の株式は、流動株が少いので、普通はあまり大量に売買されることはない。だから、五万株もの株式が売りに出されれば、当然、本部の中でもニュースになり、円城寺頭取の耳へも届くであろう。

「畜生め！ やりおったな」

うめき声をあげる円城寺頭取の顔が見えるようで、そこを松橋常務は狙ったのにちがいない。

株式の売却は明らかに、松橋常務の、帝都銀行に対する挑戦なのである。桜川は愕然たる思いにかられた。

株式課から振込まれてきた金は、松橋常務へ定期預金への振替えを、交渉する暇もなかった。その日のうちに、金額に見合う小切手が他の銀行から廻ってきた。陽光銀行三百万円、東山銀行二百万円、大海銀行二百万円、西山銀行二百万円。いずれもがY電気の取引銀行で、定期預金として預入されたのであった。

桜川は、残高のなくなった松橋常務の当座預金の元帳を、ぼんやりと眺めていた。むなしさで、全身の力が抜けていくようであった。

「本当に馬鹿にしていますねえ」

横から仲丸涉外係長がのぞいて、憤慨の黄色い声を張

気関係の会社を設立した。二年間勤めていた電気関係の会社を辞めて、独立したのである。独立心と、創造性の豊かな寺本は、いつまでも他人に使われているのを、いさぎよしとしなかったのである。

目黒の高台に、ちょこんとした二階建ての建物を作った。それが事務所であり、工場であり、居宅でもあった。ただ土地だけは、将来のことを考えて、広く買った。

寺本は技術家としての才能の他に、発明考案の才能にも恵まれており、加えて、事業家としての天分も併せ持っていた。

独立する時、寺本は郷里から友人を引っばってきて、自分の仕事に参加させた。それが、小神常務と、藤巻経理部長である。

戦争で工場は焼けたが、終戦後、いち早く三人は、工場を復興させた。だが、金がない。その時、まっ先に金を貸してくれたのが、帝都銀行だったのである。三人は涙を流し、肩を抱きあってよろこんだ。

「帝都銀行はわれわれの命の恩人なんだ。生涯、この恩を忘れてはならない」

三人は固く誓いあった。

戦後の物資不足の時代である。作れば何でも売れ、会社は順調に発展していった。

だが、Y電気はもう一度、帝都銀行から助けられた。

昭和三十年代後半の不況時に、Y電氣は大量の在庫を抱えて、倒産の一手前まで追いつめられたことがあった。その時、

「寺本さん、必ず景氣は回復しますよ。寺本さん、頑張ってください」

そう言って赤字資金を貸してくれたのは、帝都銀行一行だけであった。この時にもう一度、寺本社長は、

「Y電氣がある限り、帝都銀行の恩は決して忘れない」と固く心に誓ったのであった。

こうしてY電氣は、今年年間売上高二百五十億円、株式も、一部市場に上場し、製品は国内だけでなく海外にも及び、その輸出比率は三十パーセントという、花形企業に生長したのであった。

会社が大きくなり、業績が順調であれば、どの銀行でも金はどんな貸してくれる。現在では取引銀行も、帝都銀行を筆頭に、陽光銀行、東山銀行、大海銀行、西山銀行その他と、二十数行にまでふくれ上ってしまった。しかし、一貫して帝都銀行の主力取引銀行の方針は変わらず、帝都銀行は他の銀行とは違う別格の扱いで、取引を結んでいるのであった。

桜川にとって幸だったのは、こうしたY電氣と帝都銀行との歴史的な積み重ねから、寺本社長をはじめ、Y電氣の人間が、帝都銀行ファンであることであった。

は、あたかも一人息子を溺愛する、母親の盲目的な愛のようで、それが大久保彦左衛門の異名を冠せられる、ゆえんでもあった。

以上のようないきさつから、藤巻経理部長は実をいうと、松橋常務がY電氣に入ってくるのには、はじめから反対であった。それは大久保彦左衛門の本能的な反感と、いつてよかったかもしれない。それが恩を受けている円城寺頭取の依頼だということで、やむなく納得したのであった。

ところが、入ってきた松橋常務が寺本社長のことを、田舎者だとか、ケチだとか盛んに悪口を言い、寺本社長よりも広い部屋を使い、小神常務にも与えていない専用車を松橋常務だけが使っているなど、いちいち大久保彦左衛門の勘にさわることはかりなのであった。

「帝都銀行さんからの人というので、社長はすこし松橋さんに甘すぎますよ」

いつか桜川へそう洩らしたことがあった。

その上藤巻には、松橋常務がひそかに主力取引銀行を、帝都銀行から陽光銀行へ変えようとしていることも、許せないことであった。帝都銀行はY電氣が大恩を受けた銀行である。昔から主力取引銀行は帝都銀行と決っていた。それを藤巻の方へは何の相談もなく、松橋常務の個人的感情だけで変えようなんて、もっての外と言わさる

だがそれは言っても、松橋常務の今後の手の打ちようによつては、形勢が逆転する危険もあり、予断は許せないと思った。松橋常務が巧妙に寺本社長や、小神常務、藤巻経理部長を自分の味方に取り込んでしまえば、いくら帝都銀行ファンだとはいえ、知らず知らずのうちに、松橋常務ベースに巻きこまれてしまう可能性は十分考えられた。

だが、寺本社長はいつも桜川には愛想のいい笑顔を浮かべ、数多い取引銀行の支店長の中でも、一番年の若い桜川を、

「支店長さん、支店長さん」

と、盛り立ててくれた。

Y電氣のナンバー・ツールの小神常務は、営業担当なので、ほとんど会社にはおらず、桜川との接触は少なかったが、帝都銀行に対して好意的であることはまちがいがなかった。

創業者三羽鴉のあとの一人が、藤巻経理部長である。

藤巻は七十四才であった。寺本社長よりも、十才年上で、すでに会社を退任すべき時期を過ぎていたが、創業者の一人ということで、特別扱いを受けていた。社内では最年長者の藤巻は、Y電氣の大久保彦左衛門をもつて任じていた。とくに最近では、寄る年波で、生来の頑固さにいつその磨きがかかり、愛社心にかけては人後に落ちなかった。人後に落ちないというよりも、彼の愛社心

をえなかった。松橋常務がそんなことを言っているわけではなかったが、お家大事の大久保彦左衛門の嗅覚には、松橋常務の心の底がわかるのであった。

（帝都銀行を主力取引銀行に育ててきたのは、この自分である）

藤巻部長にはそうした自負がある。それを、途中から入ってきた松橋が、断わりもなしに崩そうとしている。

それはとりもなおさず、経理部長である藤巻の存在の否定につながるのである。

（そんなこと、このわしが絶対させはせん）

それなのに松橋常務は、そうした藤巻部長の気持を無視するようなことを、平気でやるのであった。

たとえば、取引銀行の月末の預金残高の配分である。銀行間の預金獲得競争は、火のように激しい。とくに月末の預金残高には、どの銀行の支店長も全神経を集中させた。

月末が近くなると、銀行の支店長たちが、入れ代わり、立ちかわり、経理部へ出入りし、すこしでも多く預金残高を確保しようとして頼みこむ。その配分は、すべて藤巻経理部長が決めていた。

それが、いつのまにか、松橋常務が勝手に小切手を切つて、陽光銀行へ渡したりするようなことが、目立つようになったのである。その時はきまいて帝都銀行の小切手を切つて渡している。すなわち、それだけ帝都銀行の

預金が減り、陽光銀行の預金が増えるのである。

「松橋さん、この小切手はなぜ切ったのですか」

「ああ、昨日、陽光銀行の支店長が、あんまり一生懸命頼むものだから、ちょっと渡してやったんだよ。かわいそうだからね」

松橋常務は藤巻部長を、ほとんど無視した口調でそう言った。松橋常務のポジションは経理担当常務として、一応形の上では藤巻の上にある。だから、藤巻に無断で小切手を切ったとしても、形式的な権限上では問題ないといっているが、藤巻はむかつきた。

（かわいそうだ、というのなら、松橋さん。もしも、桜川支店長が頼みにきたら、陽光銀行の小切手を切って渡してやりませんかえ）

そうした言葉が、喉まで突き上げてきたのだが、そこまで言っただけで大人気ないと、藤巻は辛うじて声を押えた。怒りで顔が紅潮してくるのが、自分でも判った。松橋常務はそんなことには頓着せず、さかんに煙草の煙を、すばすば吐きながら、

「帝都銀行の預金はすこし多すぎるよ」

平然と言った。

「とんでもない」

藤巻は即座に反対した。怒りで全身が震えてきた。

「帝都銀行の預金は、あなたが来るずっと前から、やり方が決っているのです。最初に帝都銀行の預金残高を

決めてから、残りを他の銀行へ配分するのが、わが社の昔からのきまりなのです。そのやり方を崩してもらっては困ります」

「その考え方が、もう古いんです。藤巻さん」

「古い……」

「そう、古い」

「じゃあ、新しいって、何なんですか」

藤巻はむきになって、反論した。

「もう、主力取引銀行、~~力~~力取引銀行と、言っている時代ではないんです。わが社にとって必要なのは、取引銀行連合軍をいかにして結成するか、ということじゃないですか」

松橋常務の自信たっぷりの答弁の意味を、藤巻は即座に理解しかねて、

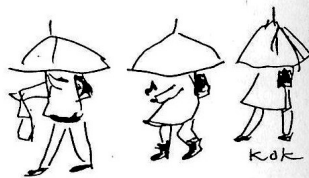
「……」

沈黙した。その横顔に、松橋常務はじろりと意地の悪い一瞥を投げながら、

「そのうち、おいおい、お解りになりますよ」

そう言って、ぶいと背中を向けてしまった。明らかに古い藤巻など要らないと、宣言しているのだった。藤巻は突然頭をひっぱたかれたように感じ、全身が硬直した。（松橋はこのわたしが邪魔なのだ。このわたしを追い出したがっている）

藤巻の心の底を、冷え冷えとしたものが流れていった。
(つづく)



少年素描

大和禎人

ぶべきものに感動を誘われたのだった。

「おじいちゃん、お月さんがボクたちについてくる、ホラね、ついてくるでしょう」

「ほんとうだね、ついてくるねえ」

「ボクたちが止まると、お月さんも止まる」

「そう、そうだねえ、ほんとうだ」

思いがけなくこんな会話の中に、フト忘れていた少年の日の思いが呼び覚まされる。

（そうだったな、たしかに同じことを考えた昔があったっけ）

胸をつき上げる思いがなにやら熱く、一瞬、昔に帰って心を洗われるような気がしたことだ。

（ボクたちについてくる）というよりも、（ボクに）としたほうが正しかろう。

幼きものの大人の虚をついた発見、あるいは発想と呼

「ボクね、この公園にドングリ公園って名前つけたんだよ、ね、いいでしょう」

「いいね、ドングリたくさん拾えたからかな」

「そう、そうなんだ、どうして知ってるの」

「多分、そうだろうと思ってね」

「これ、れんげツツジだよ、知ってるかい」

つつじはわかってもらはたして（れんげ）と呼ぶ種類かどうかは知っていない。

「植物図鑑に出てるもん、このミツ吸うと甘いんだ」

「だけど埃で汚れているから汚いよ、お止し」

「汚くなんか無いってば、こうして上のほうとればいい、甘いよ、じいちゃんも吸ってごらん」

そういうばいじいちゃんにしても、サルビヤの花の蜜なら吸った昔があった。

公園は（日暮台公園）といってすぐ近いところだ。

「そうかあ、ひぐらし台公園っていうからどこかと思つたら、ここかあ」

すぐ前に新たに特別養護老人ホームが出来たりしてから、目覚ましく整備がすすみ、介護を受けている老人たちの車椅子のためにスロープが造成されたり改善で、いまこの公園は面目をすっかり一新している。

だが、こどものキミたちの地図で言うなら、言うとおりの「ドングリ公園」でよいように思う。そのほうが野趣があつて良さそうに思える。こどもの世界にピッタリである。自然そのまま、泥んこになって遊べるころ、というイメージで親しめるような気がする。余分のことながら、緑化や公園整備も結構だが、それは造成するものではなく、飾らぬ自然そのままをもっと大事にしてほしいと思うケースにしばしばお目にかかる近頃である。

さて、四年越しキミをモデルにして「童子寸描」という作品を書き継いで、キミを追跡してきたが、いよいよ小学校に入学して、今後は学童と呼ぶとしてもこの場合の「童」はすでに「わらべ」の域を超えてはや「少年」と呼ぶのが相応しかろうと考える。あどけなくもすでに初々しい少年なのである。

すべての乗り物、入場料の半賃を支払い、社会参加をする身の上になつたのである。バスは九十円、銭湯なら

「違わない、お風呂の上だよ」

じじのこども時代の銭湯は湯煙りの中に「銭湯有情」というべき懐かしい情緒があつたものだ。だが、当今多く廃業を余儀なくする傾向の中、めげず生き残りを計る組のほうは番台をフロントに変えて、浴槽はマイクロバイブラ、露天風呂、さらにはサウナのサービスなどと、それが近代化の装いとでも言いたげな変貌を遂げている。

キミのいう（富士）や（沖に浮ぶ真帆、白帆）などというあのペンキ絵などがあるうはずもないのだ。いったいどういうことだつたらう。あいかわらずテレビの見過ぎで仕入れた知識だったかも知れない。

そして、（椅子がたくさんあつたよ）という光景はもちろん洗いの腰掛のことだ。昔と違って客のマナーが悪く、使い放しでそれが散乱するありさまは年寄どもの目に余り、慨嘆する話題でもあるから、キミの目にはそのまま（椅子がたくさん）という光景として映つたのかも知れない。

キミの入学した小学校は私立の「淑徳学園小学部」である。私高公低の趨勢の中、著しい発展を見ている女子系総合学園だ。なぜことさら私立を選ぶかと思われそうだが、長く公立学校教師の祿を飯んだじじも双手をあげて、あえてこの入学には賛成だつた。公立校なら学費無償なのに、親たちが懐勘定を度外視してまで志望の殺到

中人分の百五十円を払って入浴するのである。じじ、ばばはシルバーパスをもっているから、無料でキミを連れてバスに乗ることもあつた。また、年二十回の敬老入浴券の特典をうけているが、キミを伴うなら未就学の小人は七十円のところ、もはやそうはいかなくなつた。

「キミ、あそこへ来たことあるな、覚えてるかい」

「うん、知っている、ばあちゃんと来たことある、銭湯だろ」

「覚えていたね、キミは弱虫だから、熱いって言うとうとう入らなかつたんだろ」

「だけどからだは洗つたよ」

「そう、そんなことが一回だけあつたね、よく覚えていたねえ」

「うん、覚えてるさ」

『黄金湯』という銭湯の見える街角だつた。せがまれで散歩に出るコースの通り道にあたるのだ。お月さんが追いかけてくる発見とはまた別の日だつた。

「銭湯には椅子がたくさんあつたよ、大きい鏡もあつた」

「そう、覚えていたね」

「覚えてるさ、ボク三つぐらいだつたよ」

「それからね、フジさんの絵が描いてあつたよ」
「それは少し違うな」

する現実を肯定せざるを得ないのが、正直、いまのじじの心境である。すでに成城の外孫たち二人も桐朋学園の小学部に通っているのである。学校教育の場もいまや官尊民卑を風潮とする時代を去る傾向にあることは大いに歓迎すべきだ。高学費の難点があるにせよ、実のところ堅実な私学への進学に大賛成なのである。

じじをもつて遠慮なく言わしめるならば、小学校とは限らず大学までのすべての国公立を、国鉄の例に習って分割民営化すらあつてしかるべし、という意見さえ強く抱いているのだ。戦後日本の教育の目を覆いたくなる荒唐の因が那邊にあるかは、明々白々だがいまは言いたくない。戦後に至って教師としてのよろこびや夢を砕かれて、光りを見失い停年までを残念ながら空しく生きた、公立学校教師の一人がじじであることを、ここではキミのために告白しておこう。

私立学校のランクづけは戦前と戦後では著しい塗りかえが見られた。往年の名声を維持し得ないで衰微を招いたもの、その逆で声価の日増しに高く発展を見たもの、その消長はすべて経営の如何によつて一栄一落の淘汰を見たと言つて誤りないであろう。女子系のキミの学園の男女共学は小学校だけであつたが、今年から中学校部も一年生から共学に移行した。教育人口の動態を先取りする経営路線の転換なのだ。だが、そうはあつてもキミを

この本来は女子系の中学には進ませないつもりだ。

私立校であっても義務教育下の小中学校であるから、教科書の無償給付や、学校給食法の適用は公立と変わりが無い。地方教育委員会からはランドセルの交通安全の黄色のビニールカバートや、袖マークまで支給される。幼稚園でそうだったが、就学援助の公費もやがてまともに支給されることだろう。手厚くありがたいことだ。

昔は赤い房を下げた付属小スタイルの学帽がいまは慶応型、制服は背広型に、学年で異なる赤とブルーいずれかのネクタイ、ランドセルはもちろんワイシャツ、靴下も、それに体操着、ムーニー（作業衣）、すべて校章入りである。遠慮なく負担を家庭にかけて統一が可能であり、そうすることで学校カラーの特色を外にアピールもし、こどもたちにはプライドをもたせる。義務教育下の公立学校では真似できないことだ。だが、一面になにかこどもたちの意識に特権的なものを植えつけることがあるとすれば、良いことだとは言えないだろう。

キミの入学通知書は地域の区立小学校を指定されていたところをお断わりし、学園のほうの入学許可書を役所に提出する手続きがとられた上の私立入学だった。

三クラス一二〇名のところ、幼稚園からは単願で二九名が入学している。近所その他電車通学が多く、スクールバスも運行されている。

あかるい

あさの

うみ

こんなふうに「うみ」という章からはじまっている。

片仮名から入る国語教育ははるか過ぎし昔のことなのだ。検定制度下の教科書採択は学校の任意だが、公立にあつては広域採択でなくとも同一自治体は共通のものが使われる。だが、キミの場合は私立だから同じとは限らない。光村図書の「こくご」①上というのが使われている。色刷りで夢多い美しい教科書だ。

「施設、設備は公立に及ばないわね、でもこどもの粒は揃っているから、先生は授業が楽でしょう」

父母参観日があつて、出席したもと公立小学校教員であつたばばの感想である。

キミの学校時間割は週二十七時間で月曜四時間、土曜三時間のほか火水木金は五時間である。下校時間はそれなりに遅くなったし、通学も一人できるようになったから、ばばは自転車による送迎から解放され大いに楽しかった。

「いって来まゝす、送ってくれないの」

「はいはい、若とのお出かけですか」

そして、さらには、

「じいちゃんも、送って」

「おばあちゃん、ボクいま帰るからね」

すぐ近間から、五分で通えるキミが電話をかけてくるということが、当座の何回かあった。公衆電話からそうした家庭連絡は学校の指導もあつて、テレホンカードを携帯するように指示されているのだ。よほど一般とは異なる光景だろう。母親が自家用車で送り迎えしている家庭もある。幼稚園から見つけた光景だが、女性ドライバーが妊を競う嫌いだ。雨降りの日に限り、幼稚園時代にはじきも運転してキミを送り迎えした覚えがある。過保護の最たるもの、決して褒められない。だが、そうした風景があるいはいまの時代としてはきわめて日常的で、茶飯事に属しようかという見方も成り立ちそうに思える。

ハタ タコ コマ

これはじじの時代。

サイタ サイタ サクラガサイタ

こちらはばばの時代。

国定教科書の尋常小学校用の「国語読本」は国民学校の成立、太平洋戦争を契機とする四回目の修正（第五次国定教科書）に至るまで、そのそれぞれの時代を生きたものの幼いころに刻まれ、記憶にとどめられている。

ところで、みきとくんたるキミの国語教科書はどうなっているのだろうか、覗いてみることにした。

あかるい

と叫び、門口に立ち手を振って見送らないと、はじめは満足しなかったが、いまはそうしなくてもすむようになった。身仕度もだんだん慣れて、早すぎる登校はセッカチなじじの血をひくもののである。

「公文」と「めばえ」の塾のほかに加えてスイミングスクールへも通うようになった。幼稚園の三年間は温水プールに親しむ時間があつて、ビート板につかまって「面かぶり」ぐらいまでは出来ていたが、それ以上には進んでいなかった。週一回だけ通うのだが、専用バックまであつて（かっこいい）気分らしく喜んで出かけて行くところで、そうこうするうち、疲れもあつてか、一人前に入学後の五月病らしき「林檎病」に罹った。正しくは「伝染性紅斑」というらしい。ウィルスによるものだからだ。赤い発疹が顔や手に現われても、べつだん熱もないのだが、校則どおり登校をひかえ蟄居の退屈を五日間ほど余儀なくされた。昔は聞くことのなかった病気である。かかりつけの小児科の大家せんせいはい、

「あ、これは林檎病だな、二、三日してからまた見せにおいで」

と、こともなげに投薬もなく、注射をするでもなかったから、キミは大いに安心して帰ってきた。

この時は病院に行かせるについてファミコンカセットを買い与える約束だったから、大空さんは格別の処置がないにしても、どうした計算かたった二五〇円、それに

比べカセットのほうは一八、〇〇〇円とあって、大損の勘定になった。キミの遊び友達の健太くんはクラスがこんどは違ったが、かれにも林檎病らしき徴候をホッペに認められたが、かくべつ学校を休むでもなくケロリとしていた。タフなのである。キミに見る蒲柳の質は相変らずのものに思える。

(目からはなれば、心を離れる)というおたがいのための疎遠を期待したのだが、クラスが異ってもキミと健太くんとはあいもかわらず蜜のごとき交友が続いている。

かれの家は「ドムドム」というハンバーガーの店のほかに、その後「FUJICOLOR PURAZA 前野町店」という写真D・P店を新たに隣接してひらき、(三十分仕上げ)の看板を掲げ発展をしていた。かれの母親が働きもので偉いのだ。オートメーションのD・P機械を導入したこの種のチェーン店はあちこち見かけるようになっていくが、いち早い着眼をもって投資に踏み切り、成功しているのである。

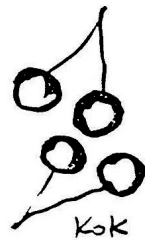
すぐ近くの文具店では(翌日仕上げ十五円)のところを、三十円というサービサイズズのプリント代で比較する限り明らかに高いのだが、スピードと仕上りも段違いということが決め手で、はた目に危ぶまれた経営も思っただけでなくむしろ繁昌のようである。

したがって健太くんのいよいよ放任される成り行きに変わりなく、キミのほうはまだ両親共働きの条件に変化はないのだから、(相寄るたましい)の状況は変わりようがないのだ。キミの塾通いの門口までかれはついて行くことがあり、反対にキミが塾帰りを道具のバックをもったまま、公園のスピーカーから「家路」のメロデーが流れるまで寄り道の上、遊んで帰ることを覚えるようになった。

親たちの、とりわけてママのほうの心配から、入学祝にキミにこども用の二輪自転車をはじめの贈り物にしようかという考えがあったが、買って恨まれるようでも困るという配慮で控えていたところ、ようやくお許しが出た。六月十六日、たまたま「父の日」、じじがプレゼントをパパママからうけたことの、まるでお返しのようにとうとう買うことになって、キミの夢の一つが実現した。十八時のブラック、ピカピカの新車だ。

防犯登録にキミの名が書かれ、満六歳と記入された。だが、ともあれ補助輪をつけて走るにはあるいは恥ずかしい「おくて」に相違ない。だが、この際は周囲の目はどうあろうと、キミ自身は「おくて」を恥じることなく堂々の勇氣と頑張りをもって欲しいと願っている。

(三・六・一七)



小品三編

セントポーリア

葉脈のみどりに

みどりいろの広がり

花卉のむらさきに

むらさきいろの高さ そして

わたしのピアノには透明な奥ゆき

わたしは頷きながら弾き

小鳥のやさしさを聴く

その脆弱にちかづくたびに

庭

青木昭成

便りをしない間に

いつのまにかあおきの実が赤く

万年青の実が赤く

わたしの庭で ひそかな音に

変っていました

今年 碧い庭石をいくつか

置いてみます

ひつじ

ビルの角をまがる

すると わたしはひつじ

わたしは蹄を鳴らす

群を追いかける

ホルンの音をきき

中空をあおぐ すると

わたしの視野は鋭角に

裁たれていて わたしは

ふたたびわたし

かわいた舗道の向こうがわで不思議な軀を
みせて揺れる

※

もうながいこと誰も眺めない看板が

吊りさがっている

あれは気ままでない気ままな形

これは好みでない好みの色

たびたび窓ガラスが鋭い斜光をわたしの爪先に

おとすので

過ぎ去った日々が消えかけた告知板の面のように
わたしの命に限りない迷路を刻みつける

※

闇は鳴る跣音をつぎつぎにガードレールの

下にかくし

月の光はすべてのものの輪郭をうばう

街路灯の下にたたつみわたしは深い井戸を

”習作”

鳴る

鳴る跣音を壁にのこして地下鉄をでる

わたしの一日はこうして始まる いつも

いつも誰かが肩をすばめてすりぬけるので

わたしはきまって平衡感覚を失い なぜか

沈んでくる空気の重さを額に感じてしまう

※

ビルを吹きあげる風の底に無言でいるとき

わたしは一羽の水鳥なのか

かつて 川岸がうねり草いきれが

迫りだしていた辺り

開かれた水門のように歩道橋が翳り

車だけが行き交う水脉をつくる 今

わたしの気憶は一隻の小舟になってしまったのか

言葉のさざ波と時間のはそい權と

思いだした

わたしは心急ぎ わたしは幾つものオーニングを

行きすぎる

けれどそこだけが明るくもの憂い玄関の壁に

きまって「定礎」とあるのは何故だろう

未完

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

(発行日)

春季号・・・・・・二月一日

夏季号・・・・・・五月一日

秋季号・・・・・・八月一日

冬季号・・・・・・十一月一日

(原稿締切)

一二月三一日

三月三一日

六月三〇日

九月三〇日

季刊確保のため右のように規約を定めております。



千三百年目の仇討ち (一)

佐々木 一郎

真夏の青く高い空が、目に眩しい。

かじか岳山麓南面には、四方を濃い緑に囲まれた千手観音堂が、南には戦没者慰霊塔を、北には六角地蔵塔、鐘樓を従えて、幽すいの中に鎮座します。その朱塗りの仁王門の間を通る長い石段を降りきった先には、昔の門前町の名残を止める茶店が十二、三軒軒を連ね、静寂のなかにも、江戸時代の風情が漂う。

この寺は、智礼山瑞鳳寺と呼ばれ、出石三十六番札所中第十二番に定められた天台宗の古刹である。

平成×年八月一日の午前九時頃、一台のタクシーが瑞鳳寺境内に差し掛かった。車には「水津タクシー」の社名が見え、水津温泉の観光帰りと思われる二人の男の客が乗っている。

「これが、さっきお話しした瑞鳳寺ですよ……」

制服制帽姿の運転手は、車を徐行させた。

「ああ、これが！」

若い方の学生風の客は、建築の趣味でもあるのか、窓から周囲を見上げながら

「ふーん、随分古い観音堂じゃないですか？」

「ええ、でも、これは江戸時代に建て直したものでしてね。何しろ、寺が開かれたのが、千三百年も前だっていうんですから……」

運転手は、年は三十才前のようだが、いかにも観光地の運転手らしく、如才なくガイドをする。

「うーん。千三百年前ねえ。まったく、お寺の話ってのは、時代離れしているからなあ……。そのころから寺は、ここに建っていたんですか？」

「いやいや、最初に瑞鳳寺が建てられた場所は、もう少し下って行ったところにあります。今は、寺跡って呼んでいますけどね。そこには、今の寺の何倍っていう大

伽藍があったのが、国司の兼俱大将の逆鱗に触れて、とうとう攻め滅ばされたって話です……」

この門前町通りは、そのまま隣町境まで続く約四キロの産業道路に連なっているのだが、この道路は、簡易舗装にはなっているものの、うねうねと曲がったカーブが多くて、あまりスピードを出すことができない。

静かに下って行く右手は、鬱蒼とした杉林が延々と連なっていて、屋なお暗い感じである。

「どこでも聞く話ずら……。昔栄えたけど、今は滅んで、何もなくなつた……。残っているのは、年寄りの話す昔話ばかりずら……」

年配の緒ら顔の客がポツンと呟いた。

「お客さん。それは違いますよ。この寺跡は、それこそ日本中の専門家が調査に来て太鼓判を押しているんです。もう少し下ると見えてきますから……」

運転手は、せっかくの説明を茶化されて、ムキになっている。二人が、その語勢に気押しされて黙ると、

「あっ、お客さん。あの左手に大きな家があるでしょ……。あれが、竜造寺家ですよ。さっき話した兼俱

大将の末裔の家です。まあ、大金持ちには違いはいけれど、何となく憎らしい感じがしますね……」

指さされて、伸び上がって見ると、確かに、森に囲まれた大きな寄棟造りの家々や白壁の土蔵群がある。

「へええ、あの家ずら……。ふーん、何となく憎

らしい気持ちがあるか……」

「じゃ、あの家が確かに国司の末裔だということを示す品物が、残っているの？」

「えっ、そんな大昔のものがですか……。いえ、ただ、言い伝えがあるってことですよ……」

「ハハハハ、ま、そうずら」

産業道路がようやく終わり、隣町を走る県道の手前まで来ると、運転手は車を止めた。不審そうな顔をする二人の客に向かつて

「ここが寺跡ですよ。新幹線に乗るのには時間が充分ありますから、ま、ちょっとでもいいから、覗いて行ってください。寺の段々の跡や礎石もすぐに見えますから……。軒平瓦なんか見つかったら、それこそ、たちまち、旅費位浮いちゃいますよ。なにしろ、奈良時代の値打ものの瓦だそうですから……」

運転手の言葉に、二人の客は、好奇心を覚えて、怖々と中へ入って行った。門前町通りから樹海のように続いてきた杉林も、このあたりに来ると、長年大勢の人々が出入り口に使っていたせいか、木立の数も少なく、頂上からは強い木漏れ日が射しているの、意外に中は明るい。若い方の客は、草むらの間に礎石らしい石塊を目にすると、つかつかと近寄って行ったが、地上に奇妙なもの横たわっているを見て、思わずたじろいだ。年配のほうの客は、その肩越しから覗き込んで、悲鳴を上げ

た。そこには、額から血を流した老人が倒れていた。

急報を受けて、里見警察署からは、吉原刑事課長以下捜査員たち約三十名が駆け付けた。彼らは、一目で、この老人が竜造寺家当主の竜造寺芳栄であることに気付いて、一瞬立ちすくんだが、課長の叱咤の声に、すぐ我に帰って、早速、捜査活動を開始した。

芳栄は、麻の背広姿で倒れていたが、所持品の財布や腕時計が奪われていないことから、物取りというより、怨恨のための凶行と考える方が自然のように思われた。死体の周囲の下草や杉や雑木の落ち葉は、少し乱れていて、小競り合いの跡を思わせたが、鑑識の奮闘も空しく、足跡も指紋もほとんど採取できなかった。

確認した傷口は三か所で、前額部のほかに後頭部に二か所、いずれも鈍器様な物——その凶器と思われる血痕の付着した煙の棍棒と拳大の石は、間もなく、近くの草むらの中から発見された——で殴打された跡があり、肉眼で見える限り、前額部の打撲が致命傷と思われた。

死亡推定時刻は、昨夜の九時から十時の間である。

第一発見者である二人の観光客——静岡から水津温泉へ観光に来た——と運転手からは、発見時の状況を細かく聴取したが、結局、彼らは、寺跡を見物するために立ち寄ったに過ぎないことが確認された。

この時、被害者の所持品を調べていた鑑識の若い職員

が割れて、白い粉のようなものが飛び散った。

「ヤク（麻薬）かな？」

彼は、反射的に少しなめてみて、思わず吐き出した。

「ペッ、ペッ、こりゃあ、砂じゃないか」

近所の聞き込みも、丹念に行った。この里見市寺跡地区には十五、六軒の民家が散在しているきりであるが、一軒一軒に充分時間を掛けた甲斐があって、ようやく、芳栄の足取りをつかむことができた。

寺跡近くに住む農家の主婦山岸よねという六十六才の老婆は、九時ごろ、一人で寺跡に向かう芳栄の後ろ姿を見たと言った。後ろ姿だけだったが、特に変わった感じはなかったという。また、吉井勇という青年が、市内へ自転車遊びに行った帰り途中で、芳栄と擦れ違っていた。場所は、寺跡と竜造寺家との間の市道で、その時、吉井は簡単な挨拶を交わしている。時間も、九時前だったというから、どちらも凶行時間と合致していた。

当の竜造寺家へは、吉原刑事課長以下数名が出向いて、発見の様子を説明しながら、あらましの事情聴取を行った。しかし、長男で竜造寺デパート社長の芳胤や長女の夫、竜造寺ホテル社長森永振一郎、次女の夫、竜造寺信用金庫理事長斎藤道雄は、それぞれ遠方に出張していて不在だったし、芳栄夫人ひさえも警察に呼び出されたままだったので、今日は取り合えず、芳胤夫人園子、長女

が、驚いた顔付きで

「課長！ 死体の所に、こんなものがありました！」

と、一枚の土の付着した紙切れを差し出した。

見ると、便箋に、墨黒々と

われは、遠祖瑞鳳寺東慶の千三百年来の恨みを晴らすため、ここに、仇敵国司兼俱大将の子孫たる汝竜造寺芳栄を誅するものなり

と、書かれていた。吉原刑事課長は、苦い顔をして

「何だい。これは？ たちの良くない冗談だぜ。こんな伝説ばなしを、怪談めかして……」

と、鑑識に突き返しかけたが、ふと手を止めて

「……待てよ。これが、もし、犯人の凶行のメッセージだとすると……。そうか、おいつ、この紙はホトケ（死体）のどこにあったんだ？」

「はい。死骸の下にありました」

「なに！ 下だって？ うーん、犯人が置いた可能性もあるな。よし、指紋の検出と筆跡鑑定だ！ あ、それから、これはブンヤ（新聞記者）には絶対に内緒だぞ」

金子警部補は、鑑識課員の立ち去った足跡の先に何か小さな金物が頭を出しているのに気が付いた。手に取って見ると、それは、小銃の弾丸で作ったペンダントだった。小首を傾げながら、いじっていると、突然、真ん中

里江、次女敬子たちから前夜の芳栄の様子を尋ねるだけに止めた。それによると、

竜造寺芳栄は、事件当日、いつもと変わらず、読書や盆栽いじりで一日を過ごしている。そして、機嫌良く晩酌をし、夕食を取り、午後七時には書斎に引き籠った。

しかし、その後の外出については、家族も執事も女中たちも知らなかった。もっとも、芳栄は、読書に飽きると、部屋の横にある当主専用の小玄関から散歩に出る習慣があったから、これは、当然のことであった。

ただ、不審に思えることは、この暑さの中で、いつものような散歩の際の軽装ではなく、上着を着用して外出したということだった。それに、外出に当たっては、いつもひさえ夫人に手伝わせていたのに、昨夜に限って、一人で支度をして出て行っている。そのほかには、特に、手がかりらしいものはなかった。

殺人事件と断定されると、里見署には「瑞鳳寺跡殺人事件捜査本部」の看板が掲げられた。そして、本部長に里見署長、主任に吉原刑事課長、副主任には県警派遣の須田憲一警部以下二十名の刑事が本部長に任命され、検視の結果を待って、直ちに、捜査会議が開かれた。

会議は、吉原が座長となって進められた。被害者が被害者だけに、いつもと違った緊張感が漂っている。考えてみると、この大会議室の空調設備も、芳栄を会長とす

る里見市警察署後援会からの寄贈品であった。

担当の金子警部補の説明が続けられている。

「……名望家竜造寺家の先祖は、戦国時代に、かじか岳周辺にたむろしていた豪族の一つだろうという説があります。江戸時代には、有名な竜造寺堰の造営に私財を投げ出した話や、天狗党の乱の際には近郷最高の冥加金を納めたことで、大体の権力や財力が推察できます。」

しかし、竜造寺家中興の祖と言われているのは、先々代の芳兼だそうです。江戸末期に生まれた芳兼は、名主や戸長・連合戸長を務める傍ら、養蚕の改良に精を出して、金岡藩と組んで生糸の輸出に成功したり、製糸会社を興して莫大な利益を上げて、現在の竜造寺家の基を築いたといわれています。

その子の芳康は、竜造寺家の財力をバックにして政界に打って出て、六回の衆議院議員選挙に勝ち、昭和三十年に死去するまでに、数度の主要閣僚を経験しました。

ただ、この人物は、『ライオン』のあだ名のとおり、典型的な支配者型の人格で、弱者に対してはきわめて暴君だったことです。特に、家の雇い人には、常に傲慢、非情だったと言われていますから、私は、このことも、今度の事件の遠因の一つになると考えています」

若い青山刑事が尋ねた。

「芳栄の商売敵はいなかったのですか？」

「皆無とは言わないけれど、なにしろ、昭和三十年に

県都金岡市に十階建ての竜造寺デパートを開設したのを始め、ホテル、信金などを次々と創立した時でさえも、ほとんど敵を作らなかったような人だからね……。」

それでも色々当たったが、全部、シロだった」

今度は、紅一点の林警部補が拳手をした。

「あの、千三百年目の仇討ちという八仇討ち状Vについては、金子警部補は、どう思われますか？」

「あ、それは、署長の方から……。」

「ああ、それは僕から説明しよう」

野口署長が、ゆっくりと立ち上がった。彼は署内随一の文化人で、書も、詩や短歌も良くした。特に、郷土史に興味を持っていて、市の「郷土史研究会」の名誉会員でもある。

「あの八仇討ち状Vの内容は、もちろん、作り話と考えて良い。本当の狙いから目をそらさせるためか、あるいは、われわれ警察をからかったものと思う。」

そもそも、この瑞鳳寺伝説は、室町時代に編集された『神道集』という伝説集の中の一節なんだな。

要点だけかい摘まんで話すと、こういうことになる。

題名は、『河鹿大名神ノ事』。

光仁天皇四月六日——年号がないけれども、八世紀の天皇であることは間違いない——、時の国司兼俱大將隆元が、かじか岳で巻狩りをしていた時、白い鹿が一匹瑞鳳寺の境内に逃げ込んだ。追って来た兼俱大將は、『す

ので、よく覚えて……。」

かじか岳の美しい姿と、瑞鳳滝の見事な瀑布が、日光の二荒山同様、山岳仏教の霊場として、最適の地とされたのだという結論だった。だから、今は、県重要文化財に指定されている……。」

「芳栄が、なぜ、上着を着て出たと思いますか？」

県警の須田警部が、話を方向転換した。

「はあ、多分、改まった客に会うためだったと思いますね。そうでなければ、あの暑いのに……。」

金子警部補は、この県警きっての切れ者と言われている須田警部の質問に首をかしげながら、答えた。

「そうすると、殺害現場の草の乱れ方の少ないことは、どう解釈しますか？ あれは、顔見知りなので、安心してるところを襲われたように思えますがね」

「これは、自分の考えであります……。」

身長が百八十二センチの田村巡査部長が、発言した。大学を出てから五年きり立たない若手部長刑事である。

「自分は、犯人は二人いたと考えます。一人は顔なじみ、一人は改まった客。これは、頭部に加えられた傷を見ても分かります。解剖所見によれば、まず、前額部に致命傷を与え、続いてすぐ、別の凶器で後頭部に傷を負わせたとありますから、一人の犯行とは思えません」

「成程。そういうばそうです……。それから、芳栄は、殺害されることを全然予期していなかった感じが

しますね。家族の証言も、山岸さん、吉井青年の証言もそれを物語っている……。こんなにまで心を許して会いに行った相手とは、一体、誰だったのか？ また、果たして、家族の誰かが、この中にいたのか？」

「長男の芳胤、森永振一郎、斎藤道雄の三人の中に、呼び出しの役をした者がいるかも知れない」

「よしっ……。それじゃ、おやじさん、芳胤、森永、斎藤のアリバイを、最初に洗ってみてくれ」

定年まじかの金子は、署内では、ハおやじさんVの愛称で呼ばれている。

「あとは、会社関係か、交友関係だな……」

「これは、竜造寺デパートの秘書課長の山野正ぐらいでしょう。呼び出し役が勤まる者といったら……」

「あとは、セオリーどおり、芳栄が死んで、だれが一番得をするかだな！」

再び、須田警部が、疑問を投げ掛けた。

「それについて、ちょっと……」

田村部長刑事が発言を求めた。

「今度の事件で、理解に苦しむのはそのことでしてね。芳栄が死んでも、だれも得をする者がいないんです。

遺言も、この人らしい、ごく常識的なやつでしたしね」

「遺産が早く手に入る、という得があるじゃないか！」

「えっ、あっ……、そうか」

「だから、この中で、もし大きな使い込みをしている

とか、事業に大穴を開けている者がいたら、一応、疑っていてもいいんじゃないのか？……」

「それにもう一つ、竜造寺家の崩壊を企てた事件なのかも知れない……」

「ええっ」

視線が一斉に、平石警部補の方を向いた。

「竜造寺芳康が、金を湯水のように使って権勢を欲しいままにし、挙げ句の果てには、妾宅でポックリ死んだ後には、莫大な借金が残っていたそうです。そのうえ、高額な相続税が掛かって、芳栄は、背に腹は替えられず、土地や山林の大半を売り払ったといいます……」

幸い、遺産相続者は芳栄一人だったので、なんとか切り抜けたのですけれども、このことが、彼を実業界に乗り出させる直接の動機となりました。そして、自分が存命中に、逐次、子供たちに資産を分割して、竜造寺家本家の家名を守り抜く計画を立てたのです……。その第一着手が、自分は会長職に退いて、三人の息子や娘婿たちをそれぞれの会社の社長に据えることでした」

「つまり、芳栄が生存中なら、夫人も子供たちも、その計画に従った、ということだな……」

「はい、逆に、途中で彼が死ねば、すべてが崩れてしまふということでもあったわけですよ。

芳栄個人に集中していた竜造寺家の全資産は、ひさえ夫人を含めて四人で分割相続することになって、多額の

借り入れ金の返済や相続税対策で、あの広大な土地、建物は売却せざるを得なくなってしまうからです。

つまり、名望家竜造寺家の終焉です……」

「うーん、そういう見方もあるか……」

「まさに、太宰治の『斜陽』ですよ……。名望家と呼ばれた地方小貴族は、明治以来次ぎ次ぎと姿を消していきましたが、太平洋戦争敗戦後の『農地解放』で徹底的な打撃を受けました。辛うじて生き残ってきた竜造寺家も、ついに、今度は、崩壊に直面したわけです」

座が一瞬、静まり返った。ようやく、野口署長が、咳払いしながら

「つまり、平石警部補は、芳栄の殺害は、芳栄個人を憎んで行ったのではなくて、竜造寺家そのものの崩壊を狙った者の仕業かも知れないと、言うんだね？」

「そうです……」

「そうなる、竜造寺家のかつての小作人、雇い人までが捜査の対象になってくるなあ……」

「平石警部補、あなたは、竜造寺家のことに随分お詳しいようですが、何か良い傳手でもありますの？」

林警部補は、エリートに婦人警官にも似ず、率直な発問をする。

「ハハハハ……。分かりましたか。」

実は、私の祖父は、この竜造寺家の小作人でしてね」

「えっ」

「うーん、驚くべき、前近代的な話だな！」

「一つ、質問。そのシツジというのは何ですか？」

田村は、中学生が先生に質問するような言い方をした。「これもね。派手好きな、芳康が設けた制度でしてね。

以前は、番頭とか大番頭と呼ばれた職です。彼は、執事を作ると同時に、雇い入の数を倍に増やしました。邸内にある雇い人の住宅には執事以下約十人が住んでいましたし、それに通いの労務者五名を加えると、常時、十五名の雇い人が邸内に出入りしていたんです」

「ふーん。まるで、殿様だねえ」

「いや、本当に、殿様なんですよ。芳康は、御前様と呼ばれるより、殿様と言われる方を好んだそうです」

「驚いたことだ。この民主主義の世の中に……」

「あ、誤解のないように申し上げておきますが、芳康の時代は、主として戦前、欽定憲法下の時代です。

民主主義になった現在では、芳康によって、雇い人の数も大幅に削減されました。彼は、その人々を、竜造寺デパートやホテル、信用金庫、マンション・グループに就職させました。邸宅に残っている雇い人は、かつてのような主従関係ではなく、近代的な雇用関係で結ばれています」

じつと耳を傾けていた吉原刑事課長が、立ち上がると、会議を締めくくった。

「いろいろな意見が出ているところだが、今日はこの程

度にして置こう……。あとは、各班ごとに詰めて見てくれ。なお、このあと、田村君から、ホシの遺留品らしい品物の説明がある……。私はこれから、記者会見があるので失礼する」

吉原が、署長に挨拶して退場すると、それを機会に小休止となった。婦警たちが、コーヒールを配って歩く。室内にその快い香りが漂って、刑事たちの緊張した表情が和らいでいった。

十分後、会議が再開された。

「それじゃあ、皆さん。課長から話のあった遺留品を紹介します。」

田村は、小銃の弾丸で作ったペンダントをかざした。「これは、現場に落ちていました。まだ、犯人のものがどうかは分かりませんが、一通り調べてあります。回覧しますから、手に取って見てください。あっ、その中の砂をこぼさないように気を付けてください」

「おい、何なんだ。この砂は？」

「今、説明します。これを県警の鑑識へ持ち込んだのですが、分からなかったので、大学付属の『地球砂漠化研究所』で調べてもらったところ、この砂は、サハラ砂漠の砂と分かりました」

「サハラ砂漠？」

「はい。北アフリカのサハラ砂漠です。アルジェリア近くの砂だそうです」

じゃないの」

井上信也は、大洋新聞のヴェテラン記者だった。

「ほら、鑑識から紙を受け取ったとき、千三百年って呟いたじゃないの！俺、そばで聞いてたんだよ」

「うまいこと言うなあ。いなかった癖に……」

「いたさ。あれ、まさか、伝説のあれじゃ……」

「信さん。帰ってくれよ。忙しいんだから……」

二

翌朝、里見警察署長野口幸雄警視は、署長室で大洋新聞を丹念に読んでいた。机上には、婦警の入れた朝の茶が、大きな茶碗に湛えられている。空調も快く利いて、喧噪に変わる、つかの間の静けさである。

野口は、一面を読み、二面を読み、地方版に移った途端、あっと驚きの声を上げた。そこには、トップ記事で、三十六活字の、しかも白抜きで

千三百年目の仇討ち！

八世紀に滅ばされた瑞鳳寺東慶上人の子孫、当時の国司兼俱大将の子孫を殺害か？

—— 瑞鳳寺跡殺人事件 ——

吉原は、質疑の時間を一時間に制限したが、予想どおり、記者団の質問は執拗に続けられ、到頭、二時間を越えてしまった。やっと解散を宣告して、ほうほうの体で刑事部屋に戻って来ると、いつの間に来ていたのか、地方紙の大洋新聞の井上記者が、机の前にたたずんでいた。「おや、信さん。もう記者会見は終わりだよ」

「課長。そんなつれないこと言わないで、あの紙切れのことを教えてよ……。もう十年以上の長い付き合い

という大見出しで、今度の殺人事件を取り上げていた。びっくりして本文を読んでもみると、こちらの方は、こ

く普通の説明記事である。

「また、いつもの、読者受けを狙ったタイトルか！」
憮然として、新聞を放り出した。

そこへ、恐縮しながら、吉原刑事課長が入って来た。
「署長。すいません……。あんな派手なこと書かれ
ちゃって……」

「ああ、新聞の見出しのことか。いや、気にしない、
気にしない……。しかし、信さんってのは、素早い奴
だなあ。どこからネタを仕入れたのだろう？」

「いや、そのことなんですが……。大分私にも絡ん
できたんです。相手にしなかったんですが……」

どうも、鑑識の安田君が紙を私のところへ持って来る
前に、仲間の課員たちに見せたいらしいですな……」

「ひそひそ話でも、聞き付けられたか？」

「はい、マスコミは地獄耳ですから……」

「若いんだなあ……。まだ、マスコミの恐ろしさを
知らんのだよ」

「ええ、とにかく、連中ときたら、ちょっとしたネタ
の匂いを嗅いだけで、たちまち、記事にしちやいます
からね。我々の迷惑なんかはお構まいなしですよ」

「まあ、この辺りは、我々刑事の捜査上のカンや見通
しと、五十歩百歩なんだろうがね……」

「信さんの奴、特ダネ賞でもねらったんじゃないで
しょうか。この派手な見出しを見ると……」

「ハハハハ、さあて、それはどうかな？ この程度で
は特ダネにはなるまい。デスクの書いた、はったりの見
出しだけなんだから……。しかし、信さんも、少しね
え……」

「はあ、焦っているような気がしますなあ」

「しかし、あの賭事好きの病気が治らない限り、将来
ろくなことにならないよ……」

「とにかく、競馬、競輪に凝り過ぎて、カミさんに逃
げられた男ですから……」

「しかし、何と言っても、長年のなじみだからね。心
配でもあるんだ」

「はあ……。そう言えば、このごろ、少し臭い匂い
がし始めているという、二係りの報告がありました」

「うん、暴露記事の威しか？ あまり深みにはまらん
うちに、君から、注意して置いた方がいいかな」

「はい」

「あ、それから、迷惑を掛けた竜造寺家には、僕から
も電話で詫びて置くが、事情聴取で出向く刑事たちにも
このことは徹底するように話して置いてくれ給え」

「はい。承知しました」

野口署長は、竜造寺芳栄の口利きで、退職後は、市営
自動車教習所長に再就職することになっていることを思
い出していた。

(続く)

連載

(小説)

近藤富蔵の生涯 (十二)

第一章 八丈流人近藤富蔵

三、風浪望郷の歳月

金子正義



(三)

其の時代の沿岸航行、船旅の取締りは鎖国下の海外渡
航禁止令に合せて、関所や道中手形の定めのある陸路よ
り厳しかった。

伊豆諸島の船は島の小さな漁舟は別としても、島々就
航の船は全て浦賀奉行の認可の船手形が無ければ航行は
勿論乗船も出来なかった。

島々の船の出航、停泊、乗客の乗り降りは一々島の官
船預り役が船手形を改めた、官船預り役は伊豆廻島の官
船が入港中陸に曳き揚げて預かる役職で苗字帯刀を許さ
れた島の船舶の総元締であった。其の下に船年寄役、船
頭・水手がいて定められた船掟によって各村々の船舶の
取締にあたっていた。船掟に反すれば死罪であった。従
って脱出の船を手に入れることは至難であった。

假え漁船を盗み出しても、村々の漁船などは大きなも

のでも長さ四尋半(約八米)、四反帆・五挺櫓で、此れ
では黒瀬の潮流に阻まれて島の沿岸を離れることは不可
能だった。運よく黒瀬の急潮を乗り切ったとしても、本
土迄百五十里の大海原は、七百石積の官船でも風浪によ
って遠くへ押し流され、三、四百石積の商用船などは破
船するものも屢々だった。

四面海に囲まれた島国日本の海運が斯のような有様な
のは、船舶造船、航海術が世界の発展から立ち遅れてい
た訳ではなかった。嘗っては世界の大航海時代と同じく
して、室町幕府の勘合貿易を始めとし、織豊の時代迄は
西国の有力大名、寺社、商人は競って海外貿易に活躍し、
船舶も大昔の遣唐使船などと異って、中国(明)は勿論
遠くマラッカ海峡辺り迄往来する遠洋航海船が工夫され、
竜骨構造こそないが、中国船ジャンクの箱形構造と、西

洋船の多帆船型船を兼ねた特色ある日本船が出現していた。勘合貿易の遣明船などは豊前・門司の港に二千五百石積の遣明船和泉丸を始め、千石積以上の大船が十四艘も出入していた。

南蕃貿易となると遠く東南アジアと交易する二千石船、二千五百石船が呂宋・媽港・安南・東京・占城・東埔・暹羅・太泥と遠洋航海に往還していたのであった。

征韓の暴挙をした豊臣秀吉も、幾十万の兵力を渡海させる千石、二千石の大船を含む四万余隻の大海運力を集中し得たからであった。

因に秀吉の座乗船として建造された千五百石船日本丸は全長十八間五尺、幅六間三尺余、帆こそ角帆一箇檣であるが檣は百挺立てで、船内に能楽を催す十八畳敷の広間があった。

斯うした大型船を建造するばかりでなく、航海技術も発達して、文禄二年（一五九三）の和議によって内地へ引揚げる小笠原民部少輔貞頼の船が南海に漂流したが、無人島（小笠原諸島）を発見して帰国する程の航海力を持っていた。

軍船よりも豪商の持船はより一層優れていた。茶屋四郎次郎の船の如きは長さ二十五間二尺、幅四間三尺、三檣の大船で乗組員三百余人と云われた。

徳川幕府になっても、伊達政宗の派遣した訪欧使節船陸奥丸は、長さ十八間、幅五間三尺、乗組み百八十人の

二檣の快走船だった。

だが、既に徳川家康は政権を得てより、西国大名の海上よりの江戸攻略を防ごうと、慶長十四年（一六〇九）五百石積以上の軍船の建造を禁じ、更に熊野水軍の九鬼守隆に命じて西国大名の大船を淡路島に集めて廃棄処分にしていたのである。

更に家光の代、寛永十五年（一六三八）五月島原の乱後、鎖国政策の完遂の上から諸藩の大船建造を禁止し、帆柱一本白帆一枚の五百石積以下に限ったのである。

勿も家光は幕府の権勢を誇示する為に、寛永七年（一六三〇）全身二十七間四尺、幅九間五寸、百挺立の大船を建造していた。だが虚偽威しに、朱塗金箔の楼閣ばかり高く聳えさせたので頭が重く均整がとれず品川沖より外には出られなかった。

諸大名に大船建造を禁じ乍ら幕府そのものが禁を破って無用の大船を造っているの、水戸光圀はこれを戒める意図もあって、外洋に面する藩を幸として常陸那珂湊で大船を造った。光圀は権勢誇示の家光と違って蝦夷地の探検と北方防備を目的とする快風丸を仕立てた。長さ二十八間、幅九間、檣四十挺、十八間の帆柱の大船であった。

だが貞享三年（一六八六）の第一回の航行は蝦夷地に達せずして引き返し、翌四年六十七人の乗組員で松前付近に達したが実際の探検は出来ず引き揚げ、元禄元年（

一六八八）漸く石狩地方に達し、石狩川流域を探検して帰った。

其の後中断され元禄十三年（一七〇〇）光圀の死後は大船造りは嚴禁され、造船技術、航海術も停滞した。

尤も其の後の江戸幕藩体制の強化と、商品経済の発展から江戸、大坂間の商品交易の増大となり、米穀等の回船に限り千石積が次第に黙認され、北前船などは全長十三間三尺弱、幅四間余の千石船が普通となった。更に菱垣船が造られ、樽回船も多くなり漸て東廻りだけでなく西廻りにも千石船が使われるようになった。

だが伊豆七島廻りの船は、代官廻島の官船ですら七百石積か五百石積で、就航しない時は島々の官船預り役に預けられて自由航行は許されなかった。島の村名主が船主の商用船は精々三百石積であった。

斯うした状態なので八丈島では慶長十一年（一六〇六）宇喜多中納言秀家の配流以降、享保七年（一七二二）に至る百十五年間、無謀な島抜けなど企てる者は無かった。

(四)

享保六年（一七二一）春の船で島送りされていた神田三河町の町人伝七の弟与兵衛と、同じく橋本町の万之助が、苦しい流人生活一年を過ごしたが、秋風が吹き始めると江戸の街が恋しくなり、耐え切れなくなった二人は共謀して夜蔭にまみれて漁船を盗んで拔舟したが、追手

の船に捕えられ、村の空小屋に捕え置かれ、島取締役人より公儀へ上告して処断を待った。暫くして届いた判決は死罪であった。亦、船を奪われた菊池左門も浜に船を放置していたとして過料仰付られた。

此れが島抜け逃亡の第一号であったが、其の後八丈の他にも島抜けが開始したので、其の都度一々公儀へ上告して処断を仰いだり、身柄を江戸へ送って断罪することなく、島役人に依ってそれぞれ処分を許すと、享保二年（一七四二）に『島ヲ逃候者於其島死置』と特に定め、更に、明和五年（一七六八）江川代官により島役人に、流人共の日頃の監視油断なきようと令達されたが、

令達文に

『其島流人之者トモ儀日所役遂吟味 不逃出様可仕候万一油断之取計有之ニオイテハ所役人可為曲事候』

とあって、流人の逃亡は島役人の方にも責任処分のあることになるので、却って島役人は島抜け逃亡があっても公儀に上告せず闇に葬り去るようになった。

八丈島取締役人高橋鉄之助始め地役人は恩情深く、此の令達に囚われず、仲間と語り合せた大勢の船抜けでない少数の逃亡は捕えても死罪にせず、八丈小島などに島替して年を経てから八丈に戻してやったりした。

だが、此の寛大さが流人達に島抜けをさほどの重犯罪と思わなくさせ、流人の中の奸智に長けた強か者の巧妙な島船乗っ取りによる島抜けが開始した。

これを重視した公儀は、天明三年（一七八三）島取締役人の裁判権の強化と、島役人の流人監視の細目を通達し、回船・漁船の船具・漁労用具の点検迄、念入にして粗末無き様、常々油断なく堅く相守るべき事と厳告した。此れに従って島役人一同の嚴重な監視、見廻りがなされ、暫くは逃亡も熄んだが、寛政年間に入ると慢性的な飢饉状態が続き、耐えられなくなった流人の島抜けが再び始まった。

島役人は島抜け対策ばかりか、食料の奪い合いの傷害、村方への押込強盗、田畑の盗み取り等が多発してその裁きや仕置に多忙を極め、堪り兼ねて罪人配流の中止を公儀へ度々嘆願に及んだ。此れに依って寛政八年（一七九六）支配代官三河口太忠が諸役人十七人を伴って巡察に来島し、五月八日神湊に着いてより九月二十五日帰帆する迄、八丈島を基地にして各島を廻島した。

八丈では八丈本島ばかりでなく小嶋にも渡って田畑、物産、織物、漁場まで具に視察し、島方役人の多忙の実情を見て此れを緩和させる仕儀の工夫を約して帰府した。如何なる改善が届くかと、菊池恒七以下の地役人が首を長くして待ち望んでいたところ、翌年春便で届いた通達には、『村々にて罪を犯せし囚人は、村役人にて吟味の上、その口実をとって御公儀に上申し、その伺いの下知を取ってより刑罪の仕置をせよ。代官所よりの下知ある迄は、親類及同村縁者に七日間預け、更に五人組ごとに

七日預け、下知到着迄、村内順次に預かり置き、重罪人は手足に桎梏をはめ、牢獄に入れ置くべし』とあった。改善どころか、肝腎の裁判権を召し上げ、国地よりの下知ある迄は処罰も出来ず、村内順次に犯罪者を預り置いたり、牢獄の無い八丈では流人小屋の空屋を収監に当て、日夜見張番を置く始末となった。村々の負担と難儀は此の上も無いものとなり、罪を犯した流人には空室の仮牢などの脱獄はお手のものであった。

まして、放火、盗賊、喧嘩、傷害などで収監された流人は、下知状の届く前に抜け出して、訴人や、証人の百姓、或いは同じ流人仲間仕返しに放火や乱暴を犯して罪を重ねる有様だった。

斯うした流人共の犯罪の多発は更に、善良な島人にも波及し喧嘩、傷害等の類似の悪行を為す者も出る始末だった。

青ヶ島清受寺から宗福寺に弟子入りしていた見習僧の坊太郎が、宗福寺の修行の厳しさに反抗して寺に放火して捕えられ、村役人の吟味の上公儀の判決下知を待つ間桎梏をつけて仮牢に収容中に脱走し、訴えた宗福寺を怨んで本堂に放火し再び捕えられた。

放火は江戸町奉行所の判決で死罪であるが、死刑判決執行の下知状が八丈島に届く迄、嚴重見張をつけて仮牢に収監しても繰返し脱走するとして、八丈小嶋へ村預の仕置にする方がよいと、村役人合議で決定し、更に此の

件を例として囚人取扱の仕儀の不適切なるを問い糺す、地役人連署の長文の問糺状を代官所に提出した。

『八丈島囚人取扱方之儀ニ付奉伺候』とした前代未聞の地役人より大公儀に対する真正面の問糺しは

八丈島神主地役兼帯	奥山左京
"	地役人
"	菊池左平次
"	菊池左内
"	"
"	取締役
"	高橋長左衛門
"	御用船頭
"	高橋政之助
"	地役人
"	山下与惣兵衛

の如く八丈の行政、治安維持を掌る有力な者の連署なので、事重大として伊豆代官所内に留め、幕閣迄は達せず、唯伺いの儀は聞き届けると軽く流され、以後重罪人の八丈小嶋への島替、島抜け死罪の執行は事後の報告で許されるようになった。

島抜けなど疾に諦めていた近藤富蔵は島掟がどう変わろうと意に介することではなかったが、ときに、皇室や幕府の慶弔に特赦があつて赦免帰国の流人があると、心の動揺を覚えたり、父重蔵の知己の羽倉簡堂等の幕府重臣から慰められたりすると、昔の榮譽を思い起して、八丈流人の我が身が此の世で一番惨めであるように暫くは沈鬱な日が続くのであった。

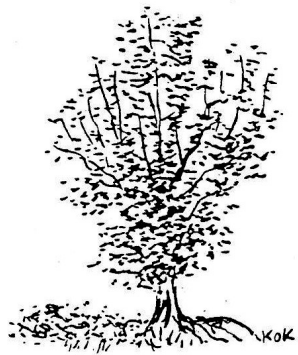
だがそうした富蔵の煩惱が吹き消される大きな機縁が

あった。三根村の高橋長左衛門宅で、頼まれて古文書の整理をしているとき、天明三癸卯年三月五日の青ヶ島大山焼（大噴火）の文書を読んで、青ヶ島人が言語に絶する地獄絵図さながらの苦しみにあったことを知った。

八丈流人が此の世の最も惨めであると思ったことなど全くの泣き言に過ぎず、青ヶ島の人々が灼熱の熔岩に追われ海中に落ち、岩を砕く波濤に吞まれる阿鼻叫喚は、己れの罪業を償う流人の苦しみなど物の数に非ずと豁然として迷妄を払ったのであった。

そして天魔か大邪神が荒れ狂うような災害の繰り返しにも屈せず、島の復興に努力する不撓不屈の人々に強く胸博たれ、罪障深き我が身乍ら、八丈の地誌を綴って後世の島人に捧げようと秘かに神仏に誓った。

続く



◆季刊の本誌にとって五十号を目指す第十一年目の新たなスタートである。さらに発行の順調を堅持するとして二年半を要する道程である。同人各々が皆勤するなら三十ヶ月の間に十作をあげる計算になる。売れっ子作家に比してなんとも悠長なペースである。笑われないように質の高い作品を盛る努力をしたいものだ。

◆三ヶ月一作のペースはたやすいように思われるのだが、実際はなかなかそうはいかないのが実態である。創作を第一義の道とするか否かの覚悟と、一にも二にも努力によって左右される。これを余技とするがごとき浅く甘い考えは通用しない。

◆本号はたまたま連載四編を目次とする異彩を呈した。季刊であってみれば、連載とはいえ毎号が短編を読むに等しい興味ある内容でない、飽きられる恐れがある。他は知らず、わたくしごととき長編を手がけたことのない作者にとっては初めての試みで、自らは先の先まで綿密な構想があるわけではない。苦しみながら書いていくうちに思わぬ展望がひらけ、澳としたものが次第に凝固を促され、ストーリーの定着をみるあんばいである。五十号まで書き続ける意欲をもって臨んでいる。

◆巻改まる本号からの表紙イラストを変えた。故人山口健二の第二随想小品集「虚仮の歌」を飾った岸田さんの装画から採った。もちろん諒解を得て、天にある氏よりうか「まんじ」のいまを見そなわし給えというほどの意をこめたつもりだ。
(お)

「まんじ」第四十一号

平成三年八月一日発行(非売)

編集 大和 禎人

発行 柴田 富佐子

〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―
升本ビル 升本内

「作家群」
(まんじ) 編集部

☎〇三(三三一九一)六五五七 ますもと
郵便振替口座 東京二一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷 (有) 加藤 清 耕 社
千代田区神田神保町三十一
☎(三三六)一五七四三

本書の目次

隣は住宅

東京錦絵

大正少年回顧

蝉の抜け殻(詩)

【連載】

金融山脈(五)

千三百年目の仇討(二)

有院家の入道(五)

近藤喜蔵の生涯(十三)

繩集子のノモ

表紙・岸田幸雄 カワト・小久保勝義

井上二三男

太和頼人

青木昭成

三戸道夫

佐々木一郎

大和頼人

金子正義

1 7 14 17 27 37 47 58



隣は住宅

井上二三男

伊藤の家の北隣は、庭つきの木造平屋の小住宅である。若い夫婦の持家で、大谷石に鉄の柵を嵌め込んだ塀に囲まれた庭の植込には岩を組上げて水を落とす滝などがある。軒の近くには小さな砂場もあって、新婚夫婦が子供を遊ばせることを夢見たものであろう。久しく子供に恵まれず、折角の砂場も植木鉢置場になっていたが待望の子供ができる今度はすぐ前の広い土地に大きな家を建てて移ってから、この住宅は何処ぞの全国規模の会社の支社の社宅に貸したようである。

社宅になってから、大体二年の割りで住人が変わる。家族揃って赴任してくる人たちは子供がまだ幼稚園にも行かぬ程の若夫婦であることが多い。若くても庭つき一戸建の住宅を用意される人たちはさすがに一流企業のエリートなのであろう、何処となくきちんとした温かい家庭の雰囲気を感じられる。

しかし、隣ではあっても、住む人とは、顔を合わせることは滅多にない。若夫婦の世帯と老夫婦の世帯とでは交流もなく、転居の挨拶のとき顔を合わせないと遂に顔も知らないうちに移転してしまうことがある。たまたま、伊藤が隣の庭との境を通ることがあるが、伊藤はなるたけ眼をやらないようにしている。覗き見と思われたいための「李下に冠を正さず」である。顔を合わせるとすればその時であらうか。こちらは、隣の庭先を通る形なので、横を向いていても、向こう様は、隣人として距離が近ければ声を掛けないわけにも行かないのであろう。

「おはようございます」
と、美しい声を掛けられて、はっと顔をあげると、声の主は小柄ではあるが色白な、知的なたおやかな女性である。還暦を過ぎてゐる伊藤がどきまぎして
「お、は、よ、ございます」

の声が擦れて、我ながら醜態であると感じる。
その声の訛から、この妻君は京都辺りの出であろうか
と思う。

伊藤の部屋は道路に面した二階であるが、隣家側に窓
はなく、隣家を直接見下ろす位置にはない。しかし、周
辺の物音、人の話し声は遠慮なく飛び込んでくる。

主人公は、朝、定刻に会社に出掛けるが、妻君とまだ
稚い子供がそれを見送る声もよく聞こえる。

「いつてらっしゃい」に合わせる幼児の「いてらちゃ
い」が可愛らしい。手を振り合う様子が見えるようであ
る。

庭に洗濯物を干しながらの母子の天真爛漫の会話も手
に取るようである。

「ママ、あたしも、おせんたくのおてつだいする」

「ありがと。じゃ、その籠からソックス出して頂戴」

「はあー」

これは、まだ幼稚園にも行かぬ姉の方が、お手伝いを
認められた喜びの声である。

「ママ、ママ、たーちゃんもお庭に出たいんだって」

「おねえさんが、お靴を履かせてあげられる？」

「はあー」

「返事である。」

「たーちゃん、これは、あぶないのよ。おててをいた

くするわよ」

やっと庭で歩ける弟の世話をする姉の声、それを見守
る若い母の声が交錯する。

若いエリートの家庭に響く声は明るくのびやかで、そ
の庭からは幸せの光が立ち昇り、隣の老人の心まで幸せ
にするが如くである。

しかし、かのエリート達にしてみれば、一、二年で全
国的に転動する生活は大変なことであろう。妻が仕入れ
た情報によれば、転動に備えて家具調度も抑制し、趣味
のものも持てない由。子供が長じればその教育のことも
あり、主人公だけの単身赴任、或いは子供を前任地に下
宿させての転動になるとか。ことに、高等学校になると
入試と教科の違いなどから公立の高校でさえ、いや、む
しろ公立高校の方が転校が極めて困難で、別居生活にな
らざるをえないようである。

「私たちは、県内だけの転動で幸せね」

「それも、車で十五分の通勤でね」

M市内から出たことのない、老夫婦は、自分達だけで
は気が付かぬ幸せを発見して息をつく。

そして、またまた隣人が替わった。転出は大体が日曜
日である。大型トラックの地に響くエンジン音が去って、
表札が剥がされた門の中に、物音のしない空間が残され
る。

くるといふ訳には行かないのじゃない」

妻の同情を交えての報告である。

特段の交流がないのに、隣人が去るということだけで
一抹の淋しさが去来する。それは、美しい人のいる幸せ
家族への羨望であるような気もする。また、今度はどの
ような幸せ家族が来るのだろうかという若干の期待があ
る。

次の日曜日、新隣人の挨拶を妻が受ける。

「学校に行っている子供達がおりますので、主人だけ
になります。よろしくお願い申します」

「それは大変ですね。で、どちらから」

「松江でございます」

「それは、それは……」

松江と聞いても伊藤にはピンとこない。伊藤は未だ山
陰に足を踏み入れたことはない。伊藤にとっては山陰は
酒呑童子が住んでいた土地だらけの知識しかない。こ
こからは交通も不便なことであろうと同情する。栄転な
のか、横滑りなのか、その辺のところは伊藤にはよくわ
からない。関東とはいふものの、何か地味なこのM市が
企業戦略上どういう位置にあるのか。とにかく、遙かな
地への転勤であることは言えよう。心なし、主人公の声
は、力なく、ぼそぼそとして聞き取れない。

「そうね、子供さんが高校って言っていたし、前の方
よりかなりご年配ね。それにしても、島根じゃ、ちょっ
とお帰りになるのも大変ね。奥さんだって、ちょっと出て

単身赴任の借上げ住宅は、いつもひっそりとしている。
門扉は、日夜、半分引き開けられた仄であるし、車がな
い車庫のシャッターも上げられて空間がガランとしてい
る。玄関のガラスに「鈴木」と書かれた名刺大の紙が張
ってあるのが住人がいることの唯一の証明である。

会社人間の単身赴任のことが最近によく話題にされる
が、会社の都合で見も知らぬ土地へ家族と別れて移り住
む者にとってこのような赴任はどのような意味を持って
いるのだろうか。父親を送り出した家庭はどうであろ
うか。「亭主は元気で留守がよい」というわけで清々と
しているのかもしれない。しかし、独りで生活する者は
不自由なことが多かるう。炊事、洗濯、掃除といった家
事が好きでない伊藤には、他人のことながら気の毒な現
象であるとしか考えられない。企業にとって戦略拠点に
人を配置することは必要なことかもしれないが、転勤を
命じられる個人にとっては必然性はないのではないか。

「お隣は、自治会に入らないんですって。何かあれば
戸田さんから連絡するそうよ。大家さんが眼の前ですも
のね」

妻の隣人に関する中間報告である。戸田さんというの
はこの住宅の合い向かいに住む若い大家さんである。

暖かい家庭の中で奥さんと子供の成長を楽しみながら充実した人生を送る真っ只中で、家庭を遠く離れて夜を過ごす心境はさながら流配の身に通じるものがある。「ゴミも出さない」という徹底した気持ちにもなるうというものだ。伊藤は真に同情を禁じ得ない。

転勤の季節の春が過ぎて、伊藤の部屋に隣人の声が聞こえなくなると、それが当たり前になっていった。

夏が近くなると、孤独者の住まいの庭の様子が変わってきた。かつて美しい若い母親と可愛らしい幼児の聲が弾んだ庭には一面に雑草が生い茂り、雑草は土のあるところといわず、車庫のコンクリートの隙間にも根を張り、葉を茂らせてきている。

門は半開きになっていて、玄関のガラス戸にゴルフバッグの影が映っている。この家の主人がゴルフを楽しんでいるらしきことが窺われる。その玄関までの間にも雑草が立ち上がり、人の進入を妨ぐが如くである。道路に面した部屋には日と人目を遮るため簾が下がっているが、風雨に曝され、黒ずんでほつれかけている。簾の奥の窓は雨戸を閉ざしている。この雨戸は日曜日でも開かれることがない。

時には、郵便受けからはみだした新聞が雨に打たれて波打っていることがある。しかし、平素はそうしたこと

にその草の枝葉に引っ掛かっていたゴミがどぶ泥をはねて、伊藤の顔にかかった。

「やられた」

唇から目までかかったどぶ泥をシャツの袖で拭いながら、どぶ泥がはねることに對する警戒を欠いた結果だとわかって、忌々しい思いが胸に広がるのであった。

その夜、伊藤は

「それにしても、『珍人類』だね。社宅なら、会社の総務なり庶務なりが管理を担当しているのだから、どういう会社かね」と、憤懣を吐き出した。

「そうそう、この間、お隣に宅急便がきて、留守なのでうちで預かってもらえなかった。そのときの配達の人が『本当に人が住んでいるんですか』っていうから、『会社の偉いかたよ』っていったら『へえー』ですって」

「で、預かったのかい」
「いえ、大家さんが前の家ですって、戸田さんを教えてあげたわ」

台風之夜が明けた朝は、伊藤の宅の前まで道路一面に隣の窓に下がっていた簾が吹き千切られて散乱しているのであった。伊藤がその簾の残骸を片付けていると、犬の散歩に通りがかった男が

ではないから、完全無住ではないのであろう。伊藤の行動と隣人の行動の接点が一致しないだけなのであろう。

雑草は、太陽の勢いに応じて道路上に範囲を広げ、背を延ばしてきた。

伊藤の宅の前に草は生えておらず、隣人の家の前は草ぼうぼう、その差がはっきりとしすぎていて、ともかく伊藤家の責任でもあるように見えてうまくない。

伊藤は、自分の家に接する四・五メートルの道路上の草を省った。雑草の中に散歩につれられる犬の糞が散っている。道路の硬いアスハルトを突き破って延びる雑草の生命力に驚きながら根を抜くと、アスハルトが崩れてバラバラと砂利が散る。

こうして、伊藤の草省りは、その都度、範囲を拡大して、結局は隣家の前の道路の草は伊藤が省ることになってしまった。

それにしても、そう毎度サービスするほど伊藤も環境整理に積極的なわけではない。草は、側溝の中にまで生え、コンクリート側溝の継目の間からも生え茂ってくる。その丈は五・六十センチはあろうか、茎は堅く、枝葉は流れの障害物になって、ビールのアルミ缶、発泡スチロールや紙屑などのゴミが引っ掛かり、どぶ水を貯めている。伊藤は雑草の茎を両腕で引いてみる。しっかりとコンクリートの間に根を下ろした茎はびくともしない。なおも力を籠める。パシャ、と音がして茎が抜けると同時

「いやー、大変ですね。飛はされましたね」

と、声をかけて行ったが、その簾が隣家のものであることには気付いていないふうである。

自分の家の前であるから当然の延長のようなものであるが、これも道路清掃ボランティアだな、そんなことがひょっと伊藤の頭をよぎる。

新聞に道路の清掃が続けて何年とか『小さな親切運動』から表彰を受けたというような記事が出ることもあるが、もういい加減で止めようと思っていた矢先に表彰を受けてしまった止める訳にはいかなくなって困ることもあるだろうな。そんなことを考えると伊藤は可笑しくなった。

次の異動期に隣はまた変わった。新隣人は、金沢からのことである。たまたま、伊藤夫婦はその一月ほど前に金沢に旅行して小京都といわれる街の雰囲気が入っていたので何か好感を感じるものがあった。

やはり、学校のことがあって、主人公は単身赴任の由である。幸福家族の到来を待ち受ける期待が外れて伊藤は少しがっかりした。

無人さながらであった隣の庭に人の気配がして茫々と茂るに任せ庭の草はきれいに引き抜かれ、地面が顔を出している。

到着した荷物の整理が終えても、妻君は直ぐには帰ら

ず、こまめに立ち働く様子である。ペランダに置かれた幾鉢かの草花が妻君の主人公への思いを物語る如くである。

新隣人とはまだ顔を合わせていないが、門の郵便受けに厚紙ではあるが氏名がきちんと表示されているのを見て、伊藤は、新人は前の住人とは違うなと思った。

妻君が金沢に帰ってから、毎日曜日には軒下に洗濯物が干されているのを見ると、伊藤は、道路の草にまでは気も手も回らないであろうと期待を持たないが、何か気が軽くなるのを覚えた。

この町内では、子供会が三月に一度の割りで廃品回収をして活動の資金としている。伊藤は新聞雑誌は『毎度お騒がせいたします……ありましたらお車へお手をお上げください』には出さないで子供会の役に立つようにしている。その日には、子供会の広報車が町内を回る。

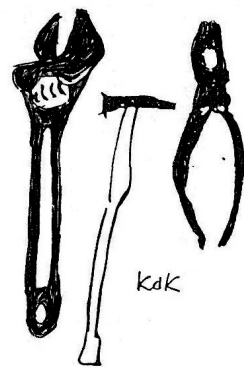
「こちらは子供会です。古新聞、古雑誌、段ボールなどありましたらお願いいたします」

たどたどしい子供の声の日曜日の町内に流れる。

伊藤は物置きから古新聞紙の束を抱えて運び出す。

ふと、隣の塀の上に古雑誌と新聞紙の大きな束が載っているのに気付く。それには、『子供会』と書かれた紙が貼ってある。毎日発生する不要物ではあるが、ゴミ捨て場に出すのでなく、子供の声を聞いて対応する心配り

が嬉しい。金沢の子供たちを想っているのかも知れないと思う。そこには単身赴任者の荒んだ心は感じられない。伊藤は軽い気持ちで物置から古新聞の束を抱え出し、門の脇に積み上げた。そして、これにも『子供会用』と書いておこうと思った。



東京 錦 絵

— 大正少年回顧 —

大和 禎 人

スイカを食っていると、井戸に響く
水滴の音や、遊びましょ、の声が
遠くきこえてくる

ふと見る日刊紙『朝日』の平成三年八月十三日付の夕刊「素粒子」欄にこんな記事を発見した。

わずかな言葉だが、読者が少なくとも大正のこともなら、懐かしさに涙さえこぼれ落ちそうな感傷を誘われ、言葉の裏に潜むロマンに想いを馳せ、必ずや共感を呼ばずにはいないといったニュアンスの、まさに寸鉄の文章であった。

わずか三行にいまは遠い時代の断面を鮮明に切り取り、凝縮して見せてくれているのである。見事な切れ味だった。

井戸のある生活は大正の時代、それも関東大震災に劃

される時代までたしかに存在していた。ちかごろ昭和史を編む区切りとして、遡って大正十二年以後を組み入れる史観が見られるのはうなずけることなのだ。戦前、戦後を劃する場合にも匹敵する（世がわり）が同じような焦土の中に芽生え、ともに以後を一新する「隔世」を迎えているからだ。

だが、ひょっとすると、そうした感懷や実感は寂しいことだが、わたしたちの世代だけのものかも知れない。

（関係ないもん）

とドライに若者たちから一笑されそうな世相である。だが、たとえ笑われようと、ここに「素粒子」欄が取り上げてくれたものはいまだ滅びぬロマンのあらためての発掘であって、そのこと自体たまらなく楽しくしてくれたのであった。

「井戸浚え」もしくは「井戸替え」と呼んだものの記憶が残っている。かつて、わたしたち一家の住んだ借家

の勝手口の前にも井戸があって、いく度かそれを見た覚えがある。はなはだ覚えのない幼い記憶では、わたしの場合それはどうやら「いどさらえ」というふうに教えられたように思う。井戸の差し渡しは一メートルはあった。

後々一般に見かけた手押しポンプ式のもので、細い口径の井筒を下ろすだけのものとは異なって、時代劇のセツトの中などに見られる、あの本格派なのであった。小屋根に覆われ、天井には滑車を取り付けられているといった「釣瓶井戸」だった。この釣瓶式には浅い井戸なら竹竿を使う場合もあったようだが、滑車に棕櫚縄をかけ両端に汲み桶、といった仕組みのそれこそ本格で、かなりの深井戸であった。

（井戸に響く水滴の音）

はこのゆえにこそ聞こえたことを説明しておかねばなるまい。

（おーい）

と、井戸底に向かって叫ぶとこだまが返ってきた。

背伸びして覗き込むと、底に沈む水の色が無気味で、こどものわたしの姿を黒く写していた。水滴は十メートルはあったろうかと思われる側壁から時折落ちるものらしかった。ポトンと間をおいては落ちるのだった。

「あぶない、お止しなさい、危ないわよ、アタマは重たいんだから、真ッ逆様ですよ、井戸神さまが祟りますよ」

「井戸浚え」が再々行なわれたとは思えない。記憶はその稀な場合のものであったろう。

ところで、もちろんのこと西瓜に網をかけ、井戸の蓋をあけて落とし込んで冷やす知恵を母も心得ていて、こどものわたしは吊り下ろすときのスリルを楽しんだ覚えがある。貧しく減多に買うことのない宝物だから、どうかして落とすことのないように祈ったものだ。

氷室をそなえる氷屋さんという商売が成り立った時代で、その氷を使う冷蔵庫をもつ家庭はよほど裕福な家庭に限られていた。家主の家にはそれがあって、氷屋さんが来ると、麻袋を地面に敷いて氷塊を置き、目分量を決め大きな鋸をあてると、シュッ、シュッと涼を呼ぶ氷片を散らす巧みな捌きで、最後には鋸の背をあてて止どめの割りを入れて終るのである。独特で大きな（やっこ）挟み）で運ぶ作業の終始を見守ったことだった。皮肉なことに家主の勝手口は井戸の向こうに、わたくしたちの家とは向かい合っていた。こうしてみると、井戸に西瓜を冷やす風情は一般庶民のみが経験し得た夏の風物詩なのであった。

「釣瓶井戸」の印象はさらに関東大震災に際会しての挿話を加えることになる。

大正十二年（一九二三）九月一日、午前十一時五十八分、相模湾頭を震源とする関東大地震が発生した。

背伸びをし、爪先立っているのだから、間違ってもそんな事態は起こらないはずであったが、母の心配が気後れをわたしに与え、（井戸神さま）の神秘性を彩った。

（釣瓶銭）という言葉があったようだ。ツルベゼニと訓むものだ。井戸浚えは大変な作業だから、日当も高かったと思われる。しかし、大事な生活水にかかわることだから、（銭惜しみ）はできないところからとくにこんな言葉が存在したのだろう。

さて、一日がかりで裸の男が命綱を頼り、井戸底に下りて浚うのである。泥水にまみれ狭いところでの作業だから、辛い重労働である。

「おじゃまになるから、そばへ行っただいいけません」きつく言われていたが、わたしはすっかり蓋を除かれた井戸を覗いて見たいばかりに、足場をくぐる冒険をおかした。

蓋をすべて除かれて見ると、ふだんとは違う井戸の顔があった。荒くれの「井戸浚え」作業は別に言うところの「井戸替え」という方がふさわしいのかも知れない。あの（井戸に響く水滴）などという静寂はもはやそこにはなかった。井戸端は一種の修羅場のように水垢に汚れて、作業用の泥着の男が黙々として働いていた。

臆病なくせに覗き見したい光景であった。
母の制止は無駄であった。

マグネチュード七・九。関東地方一府六県の被害は、死者九万一千人、行方不明一万三千人、負傷者五万二千人、被害所帯六十九万（全焼三十八万、全壊八万）に及び、京浜地帯は壊滅的打撃をうけ、朝鮮人虐殺事件、亀戸事件、甘粕事件が発生した。

新村出編「広辞苑」第三版に拾うことのできる簡明な記事である。関東大震災について今日なりに瀟過され、集約されて述べられているので引用しておく。

小学二年生のわたしは始業式を終えて帰り、友達の家遊びに行っていて、地震に遭った。

「遊びましょ」

と、それこそ声をかけた途端だった。ゴォーッという凄まじい鳴動とともにその瞬間大地が弄ばれるように揺れたのである。ザ、ザーとすぐそばにある釣瓶井戸の屋根瓦が音を立てて滑り落ちた。とても立ってはいられない揺れ方であった。この世の終わりではないかという恐怖が幼いわたしを驚愕にさせたのだ。今生ではもう二度とあの思いはしたくない、そういう恐怖だった。

芒々もはや七十年に及ぼうとする過去だ。ここにいう亀戸事件は労働運動家たちの、甘粕事件は社会主義者の虐殺を指している。いずれも戒厳令下に乗じた事件だった。

甘粕事件については

甘粕十年、森三年、主義者の命はただ奴（もんめ）。

加害者憲兵大尉甘粕正彦、同曹長森慶次郎の刑期を軽きに失するものとして風刺する言いが当時流布した。社会主義者大杉栄、妻野枝、幼い甥の橘宗一の三人を扼殺したという出来事だった。わたしの幼い記憶にも無残さに対して軽く思われ、右の比喩が刻まれている。

さて、そうした渦中にくだんの井戸の周囲に白く石灰が撒かれた光景を忘れていない。

「そんなこともないと思うんだけどね、毒を投げ込まれる心配があるというの、こうしておけば足跡がつくからすぐわかるって石灰が配られたの」

「ふーむ、だれがそういうことをするの」

母は声をひそめてそれに答えたのだが、そのひそめた言い方から、それを軽々しく言っただけなら重大なこととして受け取ったことだ。

さて、石灰を撒かれた井戸のほうは翌朝何事もなかった。

「なんともないわね、井戸が駄目になったら大変よ」

「よかったね、なんともなくて」

いつにない早起きをして、わたしも恐る恐る母に従って覗いたことを覚えている。もしも足跡でもあったらどうしようという思いであった。

流言飛語が飛び交っていた。毒物の投げ入れに止まら

ず、暴発、暴動すら伝えられ自警の詰め所ができ、竹槍、木刀をもった大人たちが夜回りを勤めるものものしが見られた。この時期に市民が怯えねばならなかった謂われはなぜだったろうか、無辜の一般までが何事か罪の意識があり、幻影に怯え、戦いを招いたものとしか言いようがない。

新しいマス・メディアとして鉱石式受信機に「JOK」こちらは東京放送局でございます」という放送電波が愛宕山から流れはじめたのはようやく大正十四年七月のことだから、当時の情報としては新聞に頼る以外にはなかった。それも東京の新聞各社の機能は壊滅し、電信の途絶する状況の中であつたから、大阪で代替え発行された新聞の第一号の号外は（帝都は陥没して一大湖を生じた）という誤報さえあって、流言はさまざま、頻発する余震についても（時〇〇分には最初のものより数倍する強震がある）など、乱れ飛んだものであった。

震災後の十一月二十五日付夕刊「報知新聞」から連載開始された「ノキナトウサン」（当初は「のんきな父さん」）の六コマ漫画にこんなのがあった。

①「君が代をうたってみな」

父さんが自警団に取り囲まれる。

②「あなたは日本人ですか」

次に父さんは竹槍を持った婦人会の人たちに詰め寄られる。

③「どうもおどろいたな、おれもおどかしてやるぞ」
父さんもうとう意を決して竹槍を作る。
④「兵隊の服をきているが、大方ひとごろしだろう」
父さんはサーベルを下げた将校をつかまえて竹槍をつきつける。

⑤「バカッ」

父さんは将校に一喝される。

⑥「おっかけろ！」

激怒した将校が兵隊に命令する、父さんは一目散に逃げ出す。

当時人気を博した麻生豊の漫画である。鋭い風刺がここにある。震災直後の、しかもこの当時のことだ。作者の勇気ある、痛快な揶揄に拍手を送りたい。

主人公の父さん、いつもカップルの（隣の大将）はともて失業者である。震災後、昭和の初頭にかけでは不景気であった。この二人のノンキはしかしながら震災後の救世の倫理でもあった。

釣瓶井戸のあったわたしの家は正期の「東京錦絵」をイメージする上に格好の題材をまだまだその他でも提供できる珍しく古い家であった。

いまだガス灯が使われ、台所には引き窓があった。

ガス灯の炎は青白く、生き物のように息づき、その発光体をマントルと呼んでいた。荒物商の店へそれを買

にやらされて、もとも帰ったことがたびたびであるところを見ると、いまだガス灯という家はわたしの家ばかりではなかったからであろう。電灯の家あり、一方にはガス灯の家があるという明治をなお残す時代だった。

引き窓は近ごろのトップライトに相当するものであった。引き紐を引くと直接青空が仰げ、引かなければ木製の建具を嵌めたため窓で、おもに竈の煙を排気するため使われ、外光を採り入れるためのものではなかった。

近松の浄瑠璃「双蝶蝶曲輪日記」では力士濡髪と放駒の仁俠を描く外題の世界に相撲場・引窓の二つの場があり有名だが、あの引き窓である。いぶせき家の台所に必要な煙だしの役目をなすものであった。いまごろのガラス入り採光のトップライトとはまったく趣を異にしたものであった。

だが、この引き窓に仰ぎ見ることできた雲悠々の青空、時により閉め忘れた宵の口に星空を望めたロマンは忘れ難く、なかなかのものがあつた。せいせい長さ二尺に幅一尺（ここは尺貫法でないと実感がでない）程度の開口に覗ける中空に無限の希望を望めるように思ったものだ。

にわか雨や夕立とあって慌てて閉める、また忘れていて夜露にあい、夜気の忍び入る気配に驚くなど、今日には通じようもない伸びやかさであった。

伸びやかさといえばいまだ東京の空には鳶が舞い、ま

た鮎（いたち）も縁の下に棲み、敏捷で人間を小馬馬にする体に、こちらを見て走り去ったものだ。同じ縁の下には蟻地獄もあって観察できた。

「○○くん、遊びましょ」

または、

「○○ちゃん、遊ばない」

と、どちらか。大正のこどもたちはたがい友達にこう呼びかけ遊びを誘いあった。友恋いのニュアンスをもつなんとも優雅なコールを交換した。「素粒子」にとりあげて言う（遊びましょの声）はまさに大正のこどもの世界に普及した遊びを誘うための礼儀なのであった。

門口に立って、あるいは塀の外から聞こえるように呼んだものだ。相手がニコニコ顔で出てくれば遊びが成立する。遊びの種類によっては大勢を必要とする場合、連れ立って声を合わせて同じ呼びかけをした。大勢だと相手に対しかなり否応なしの効果をもったはずである。大正のこどもは群れ遊びが上手だった。

「いま、勉強しているから、あーとで」

と断わられる場合があった。それも大人の声でそういう拒絶に会う場合には、可哀想に勉強机の前に座らされている友の姿が浮かんで諦める。仕方がないなという同情をしようというものだが、本人の声で、

「あーとで」

り「輪まわし」「ペー駒」「駒まわし」「めんこ」とプログラムは豊富だ。

正月には「風揚げ」「羽根つき」。また女の子と一緒に「手まり」「ままごと遊び」「お手玉」があり、室内では「おはじき」「お手玉」「カルタ」「トランプ」「花あわせ」「家族あわせ」「双六」「百面相」と数えられる。

学校は男女別学だったが、生徒数の関係で例外的に男女組と呼ぶ混成学級があった。

「やーい、男女組」

と、学校ではからかいの的になったが、町中の遊びでは案外男女の区別をしてはいなかった。わたしは「磯部館」という本郷の学生相手の下宿を主とする旅館に磯部松子という同級生がいて、遊びに行き電車通りに面した部屋から、行き来する電車を心ゆく眺めさせてもらったことがある。いま思うと、それが目的で遊びに行ったように思う。快くその希望を容れて部屋に案内してくれた（松ちゃん）の好意を忘れていない。電車を眺めるだけでは申し訳ないので二人で「おはじき」をして遊んだように覚えている。

もう一人、原菊枝さんと云った女兒とも交渉があったこの人の勧めで教会の日曜学校へも行ったものだ。こちらは一年ぐらい下級生だったが、姉のような接し方では

と断わられると、腹立たしく口惜しい気持を噛んだ。断わり方のこのように独特で長く引く張る口調もまたなぜか一般的ようであった。

道路を遊び場にして、少しの危険もなかった。電車通りから少し入ればそこはもう安全な遊び場だった。「車社会」などという言葉の存在しない時代だった。

「円タク」と呼び、大正末期から昭和初期に料金一円であったタクシーは庶民には縁遠く、震災の翌年に登場した円太郎とニックネームされた市営の乗合自動車があり、こちらはバスガールを登場させたりで、運賃は市電の片道七銭に対し一区十銭で、明治の時代に存在した円太郎馬車に因む愛称で呼ばれた。円太郎はがたばしゃ、がたくりばしゃの異名でも呼ばれ、落語家橋家円太郎が御者の真似をして喝采を博したことで流布したものだそう。ところでバスの円太郎にしてもノンビリ走る不細工な乗り物で、市民の足としては電車に如くものではなく、いずれにしてもみな大通りのことで、こどもの世界に車は決して踏み込んでこないものであった。大正のこどもは路地の至るところノビノビ、思いのさま遊ぶことができたのであった。

ついでながら、遊びもさまざま、数えるとするなら、戸外では「通りゃんせ」「かくれんぼ」「鬼ごっこ」「下駄かくし」「馬とび」「縄跳び」「陣とり」「石蹴

にかと世話のよい女の子だった。

ある日、かの女は父親の所蔵する錦絵の画集を持ち出して、縁先でとくにわたしのために見せてくれた。主として日清戦争や日露戦争の戦争画だった。「勇敢なる水兵」の黄海海戦があり、（まだ沈まずや定遠は鎮遠は）という場面だったり、死んでもラッパを放さなかった木口小平、玄武門一番乗り、そして日本海大海戦などであった。勇壮であっても少年にとっては息を呑むよう、錦絵のもつ魔力に誘われる幻想の世界がそこにあった。また別にいま思えば川瀬巴水作品ではなかったかと思われる風景版画集も見せてくれた。こちらはまた情緒溢れる魅力の画集だった。菊枝さんのお父さんがどういう人であったか、わたしは知っていない。かの女はどういうつもりでそれらを父親の書斎から持ち出してきてわたしに見せてくれたものか、それもわからない。

男女別学の時代を生きたわたしだが、少年の記憶にあるこれら二人の女の子との交わりはほのかに甘い香りを持ちつつづけている。戦争画集と風景画集の錦絵の世界のコントラストが鮮明に、だが遠く（遊びましょ）という幼な呼び声とともに、いまに見えてくる。そしてまた井戸の水滴の音もわたしの耳朶に遠く聞こえてくる。

これらは決して幻覚というようなものではない。



蝉と脱け殻

青木 昭 成

蛇の脱け殻をみつけると

「や 脱け殻だ」と誰もが叫ぶ

蟬の脱け殻をみつけると

「脱け殻があったよ」と誰もが教える

紙テープのようにひき千切られて

蛇の脱け殻は嫌われたが

蟬の脱け殻は 掌にのせられて嫌われなかった

蛇の脱け殻は軟かく 蟬の脱け殻は硬いせいだろうか

履き捨てられた靴のように

紐を垂らしているこの命の果て

そして再び

城山の石垣は蟬の声で明ける

陽がまたたくまに登れば

油蟬の背中が大きくはじける

誰もが信じていないのに 誰もが

溶けた己の内臓をもてあます時がある

地を走る痛みにあたえる

それがみんなの夏だ やがてまた

西日があたたかい木立の影を地面に置く

ななかまどの実の朱くゆれる

熊笹の葉のさざ波のよせる

樹海のかしわの下枝にとりついて

決して地に落ちないあの蟬の脱け殻は

生きていないのに 生きてみたいだ

じっと視つめていると人間の眼は渋いろにかわる

触れば指先でかすかに虹がひかる

この凝縮した沈黙

この時 蛹は「かなかな」「かなかな」

と聞きなれた声の後にたくみに

その姿をかくす

鳴くことで己をもてあます蟬よ

耐えることで滅びようとする脱け殻よ

”画家Y・O氏の油彩をモチーフに二編”

エーゲ海の夕日

くれなずむ岬の向こうがわ

黄金いろの空と 海原と

ぼくらが対峙している今と

ここは異国 ここに誰もが佇むとはかぎらない

だが 明日はまた紛うことなく

自明の陽がかがやくと疑わない

入江に舫う帆船のマストのように ぼくらは

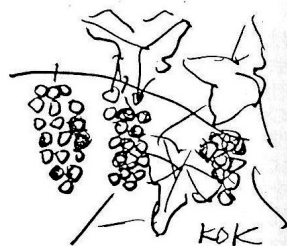
深まる潮の藍いろに沈みこんで

ただ 旅の眠りを眠ればよいのか

ヴェネチアの海

ゴンドラが時の上を滑りながら近づく

時の下を滑りながら遠のく



金融山脈 (五)

三戸岡道夫

ある日、Y電気の藤巻経理部長が家を建てるために、土地を探しているというニュースを、仲丸渉外係長が聞きこんできて、桜川支店長に伝えた。

「経理課の若い連中が話しているのを、ちらっと耳に挟んだのですが、藤巻さんの今の渋谷の家は狭い上に、環境も悪くなってきた。それに、一緒に住んでいる息子の子供たちも大きくなって、勉強部屋もほしい。どこかにいい土地があれば買って移りたいと、探しているらしいんですよ」

「よし、さっそく我々の手で探そう」

桜川は土地探しにかかった。第一の候補地を東横線の沿線にしぼり、不動産屋や、銀行の取引先に声をかけると、北千東に売家があるという話が入ってきた。桜川はすぐそれを見にいった。家はもう古いが、土地は七十坪

あれは消えゆく軌跡 これが私の旅

中天に終日かがやく太陽に

私の中で静止し 呼応する振子よ

私は旅の倦怠をどこに置き忘れてきたのか

さざ波が破風に反射するアパルトマンの

かの窓辺に 時報がゆっくり消えてゆく

私は明るい色彩をたくさん選んでみた

けれど此処にも彼処にも 灰いろの影がゆれて

私の旅はヴェネチアの海のためと

たゆとうている

とまあ十分である。日当りもいいので、家を建て直せば立派になる。難をいえば駅からすこし遠いことであったが、高級住宅地の中なのだから、恰好の物件といえた。松橋常務が会社にはない日を狙って、桜川が藤巻部長を訪れると、

「支店長さん、早耳ですね。いえ、別に急ぐわけでもないのですが、このインフレの時代でしょう、先にのびればのびるだけ、不利になると思いませんか」

「北千東では如何でしょうか」

「いや、なにかいい物件でもありませんか」

「ええ、駅は大岡山になりますますが、売ってもいいという人がいるのです。わたしも念のために、先日見てきたのですが、間違いのない物件です。場所はここになります」

と地図を拡げて説明すると、藤巻は身体をのり出して

きて、

「なんだか、よさそうですね」

「ご希望でしたら現場をご案内いたしますから、一度ご覧になってください。それに、こんなことを申しあげては失礼になるかもしれませんが、もし購入する資金がご入用でしたら、どうぞ、わたしどもの銀行の貸金をご利用ください」

「いやあ、これは支店長さん、これまで銀行さんから金のお世話になったことはありますが、土地の世話までしていただいたことは、はじめてです。それだけで十分です。土地の世話から金の世話まで、支店長さんは熱心ですなあ。感心しました。お金の方はいいんですよ。渋谷の今の家があれば、少しはお金になりますし、それに会社の株式をすこしばかり持っておりますからね、それを売れば、そのぐらいのお金は出来るのです」

「藤巻部長さんはなんといっても、Y電気の大株主ですからねえ」

「いや、いや、創業当時の株式を、ただそのまま持っているうちに、増資などですのまにかふえただけですよ。幸いなことに、Y電気も最近は株式市場の花形株にさせていただいておりますので、値段も高くなり、すこし売ればそのくらいのお金はあるんです。わたしも長年、会社にご奉公してきましたから、この辺ですこしぐらいは会社の株式を売らせてもらおうと、思っているんです」

ようです。陽光銀行も、帝都銀行に次ぐ準主力取引銀行ですから、接待するのは結構です。しかし、わたしが納得いかないのは、帝都銀行さんの本部は接待しないのに、なぜ、陽光銀行だけ、本部の重役の接待をやるのかということですよ」

「はじめて聞きました。驚きました」

「それで、翌日、社長が松橋さんに、『陽光銀行だけを接待して、帝都銀行をやらないわけにはいかないから、帝都銀行の方も設営するように』と指示したんですよ。すると松橋さんは、にべもなく、『帝都銀行はわかってるから、やらなくてもいい』、と言って、それっきりなんですって。社長は首をひねっていましたね」

帝都銀行につれない松橋常務の態度を、寺本社長はどう感じたかと、桜川はひやりとした。いずれ松橋常務の正体が寺本社長にわかるにしても、今の段階ではまだ早すぎるように思われるのである。

「それに松橋さんの遊び方は、派手すぎるんですねえ」
松橋常務はまた、いつか喜代田での、これが宴会だ、
というのを、陽光銀行の前でやったのであろう。

「芸者衆も大勢呼びましてね。それに、そのやり方が、派手というか、キザというか、お呼びした先方さまに失礼ですよ。手の切れるような千円札を、芸者衆の胸もとに、見ている前で一枚ずつ、押しこむんですからね」

桜川はいつかの新橋の喜代田で見た、松橋常務の遊び

一日おいて、次の日。

桜川は藤巻部長を銀行の車に乗せて、北千束の土地を案内した。

「支店長さんみずから申し訳ありませんねえ」

「いいえ、これも仕事のうちです」

物件は、ひと目で藤巻の気に入ったようであった。

「結構な物件です。これに決めました。これで老後が、

この閑静な住宅地の中で送れます。支店長さんのお陰です。こんなことなら、もっと早くお願いすればよかった」

「駅からちょっと遠いのが難ですが」

「いいえ、このぐらいあった方が、かえって運動になって、ちょうどいいですよ」

帰りの車の中では、気に入った物件が見つかったせいもあり、藤巻はいつもにもまして桜川に親しく話しかけてきた。

「ねえ、支店長さん、松橋さんって、一体どういうつもりなんでしょうねえ。この間、陽光銀行だけを、夜、接待したんですよ」

「へえ、陽光銀行ですか。誰ですか？」

「わたしはご一緒しませんでしたから、よくは知りませんが」

と言いながら、藤巻はすべてを知っていて、

「陽光銀行の本店の朝倉常務さんと、それに目黒支店の支店長さん。こちらは、社長に松橋さんの二人が出た

ぶりを思い起した。

「陽光銀行の朝倉常務さんとは、松橋さんは銀行時代からの知りあいで、非常に親密な仲らしいんですね。でも、いくら親密だとはいえ、かりにも陽光銀行さんがお客さまですよ。そのお客さまの眼の前で、そんな真似をしたのでは失礼千万だと、社長が帰ってきてから言っていましたよ。それが松橋さんの言う、遊びの通というもののなか、どうか、わたしにはわかりませんがね。でも、もし、本当に芸者衆にお祝儀をという気持があるのなら、廊下の隅かなんかで、『今日のお客さんはとくに大事な人だから、よろしく頼むよ』とか言って、わからないように渡すのが、本当の通というものじゃありませんかね。客が居ようと、居まいと、自分が晴れがましいことをやらないと、松橋さんって気がすまないんですねえ」

Y電気に入ってから、帝都銀行時代と同じように、我侭いっぱいに振舞っている松橋常務の姿が、桜川には眼に見えるようだった。普通は誰でも第二の就職先に入社すれば、まず心掛けるのは社員との融和である。人の和の上に立ってこそ、何事も成立する。だが、松橋常務はそんなことにはまったく頓着していないように見えた。自分はそのことをしなくても乗り切れるという自信からなのか、それとも別の見方をすれば、松橋常務の破れかぶれの心境の反映のようにも、桜川には受取れるのであった。

「社長は、支店長さんもご存じのように、立志伝中の人ですよ。だから、無駄が嫌いなのです。松橋さんは社長のことを、ケチだとか、しみつたれ、だといいますが、決してケチではないのですよ。一緒にやってきたわたしが一番よく知っています。立志伝中の人というのは、そういうものなんですよ」

桜川は、寺本社長と松橋常務の、どちらもでっぷり肥った二人の姿を、頭に思い浮かべていた。寺本社長は学歴もない、立志伝中の田舎者である。それに対して松橋常務は、東京生まれ、一高、東大と歩いた、エリート中のエリートである。この二人の喰い違いは、今後の展開に、なにか宿命的な暗示のようなものを、桜川に与えるのであった。

「まあ、支店長さん、頑張ってください。わたしはどこまでも支店長さんの味方ですから」

最後に藤巻部長は桜川の肩をポンと叩いて、そう言った。

「ありがとうございます。よろしく願います」
土地の幹旋は成功したのだと、桜川は思った。

(二)

八月二十日は帝都銀行の創立七十周年の記念日に当たった。それを祝して、主要取引先を招いてのパーティーが、ホテル・ゴールの吉祥の間で行われた。

声を落して、話しかけてきた。

「おかしいことがあるものだと、思いましてねえ」
何があったのかと、桜川はどきりとした。

「実は、このことを、支店長さんへお話しした方がいいのか、悪いのか、ちょっと悩んだのです。でも、やはり支店長さんだけに相談しておいた方がいいと考えて、思いきってご相談に来たのですよ。他の人には、決してこんな相談はいたしません。実は、松橋さんのことですからねえ……」

桜川の背筋に悪感が走った。ついに来るものが来たのか。

「明日のパーティーのことですよ」

「……………」

桜川は不吉な予感におそわれた。

「わたしも小神常務も明日のパーティーへは、よろこんで参上させていただく予定なのですが、どうしたわけか、松橋さんはパーティーへ行かないというんですよ」

「えっ、どうしてですか」

桜川はあっけにとられ、

「でも、松橋常務さんからは出席のご返事をいただいておりますよ。わたしも心配だったものですから、今朝、秘書室へ電話を入れて、ご返事の葉書を確認しましたから、まちがいありません。変ですねえ」

「たしかに出席の返事は出てあります。でも、今に

招待する取引先の数がおびただしく多いので、招待状は一社あて一枚、社長だけに限定せざるをえなかった。しかし、Y電気の場合だけは、特別扱いと考えなければならなかった。というのは、寺本社長だけを招いて、松橋常務を外すわけにはいかなかったからである。

それに、松橋常務を呼ぶとすれば、その上席の小神常務も無視するわけにはいかない。そう考えた桜川支店長は秘書役に交渉して、

「Y電気だけは、特別に、寺本社長、小神常務、松橋常務と、三名に招待状を出してほしい」

と、三通の招待状を出してもらった。

ところが、明日はパーティーという前日の夕方になって、桜川は突然寺本社長の訪問を受けた。桜川は、

「社長さん、ご用でございましたら、わたしの方からお伺いしますのに、お越しいただいて申しわけありません」

「いや、いや、大切な主力取引銀行さんですもの、たまにはお伺いしませんと」

寺本社長は相変らずエネルギーに身体を動かし、愛想よい笑いを顔に浮かべながら、応接室へと入ってきた。

しばらく桜川を相手に、仕事の抱負やら、最近の業績などを話していたが、話が一段落した頃、

「実はね、支店長さん」

なって、急に行かないと言いつたのですよ」

「なぜでしょう。気が変わったのでしょうか」

「それがよくわからないので、困っているのですよ。腰の神経痛が痛むとかいっておりましたがね。でも、今しがたまで会社で仕事をやっておりましたし、三十分や一時間のパーティーに、行けない病気ではありません」
帝都銀行の創立七十周年の記念パーティーである。すこしばかりの病氣は押しても出席するのが、義務ではないか、寺本社長の顔にはありありと、そう書いてあった。

「ねえ、支店長さん、松橋さんはY電気の重役ではありますからね、ついこの間までは、帝都銀行の重役だった人ですよ。だから、晴れの記念パーティーには、何をさておいても馳けつづけるのが当然じゃありませんか。すこしぐらいの腰痛など、注射を打ってでも行くべきです。でも、わたしも最近すこし判ってきたのですが、松橋さんという人は、いったんこうと言ったら、絶対後へは引かない人なんです。ですから、神経痛の一点張りで頑張られると、どうにも身動きがとれないのですよ」

桜川には、松橋常務の欠席は、予定の行動のように思われた。だが、そんなことを、寺本社長へ言うわけにはいかない。

「ねえ、支店長さん、これはどう考えたら変じゃありませんか」

「そうですねえ」

と、桜川は曖昧な相槌を打った。

「普通ならば、『わたしは帝都銀行の重役たちをよく知っていますから、社長に彼等を紹介するのがわたしの勤めです』と言って、まっ先に出席するのが本当だと思うんですがね」

「……」

桜川は返事に窮した。寺本社長はかまわず言葉をつづけた。

「それで、支店長さん、実はこんなことを、ふっと考えたのです。松橋さんにはひょっとしたら、パーティーに出席して、円城寺頭取と顔を合わせたくない、なんらかの理由があるのではないのでしょうか。どうもそんな気がしてならないのです」

そこで寺本社長は言葉を切ると、桜川の顔色を伺うように見た。見つめられて桜川は、顔色がこわばってくるのを感じた。

「支店長さん、実を言いますと、この疑問は、いま突然起ったのではないのです。以前から松橋さんの言動については、ちょいちょいわたしの耳にも、変なニュースが入っておりまして。でも、わたしはそんな話は受けつけませんでした。しかし、たとえ根も葉もない噂でも、二度、三度と、耳に入ってきますとね、わたしだって不安になってきます」

んでしょうねえ」

寺本社長はその疑問を、何回も反芻するように言った。

「そんなことがあつての、明日のパーティーでしよう。おかしいと思わない方が、変ですよ。やはり、松橋さんには、円城寺頭取さんと顔を合わせたくない何かが、あるのではありませんか。わたしは無責任な噂を信用するつもりはありませんが、でも、心配なんですよ」

「お気持はよくわかります」

桜川はもう一度、同じ合槌を打った。

「松橋さんにわが社へ来てもらったのは、これを機会に帝都銀行さんとの親密化を、ますます願っていることなのです。それが、かえって逆になってしまっている。それでは何のために来てもらったのか、わからないじゃありませんか。支店長さん、一体どうなっているんでしょう。支店長さんだけから、そっとお聞きしたいと思って来たのです」

寺本社長の疑問に対して、いっそのこと桜川は、この機会に自分の知っていることを、全部話してしまいたい衝動に強くかられた。しかし、それはまだ出来ないと思った。まだ松橋常務はY電気に入って三ヵ月足らずなのに、桜川が迂闊なことを喋って、松橋常務がY電気を辞めるとか、辞めないとかの騒動が持ち上ったら、桜川の責任問題にも及びかねないからであった。

桜川はつとめて冷静な口調で、

「……」

桜川は、寺本社長の気迫に押されて、息苦しくなってきた。

「つい一週間ほど前のことです。こういうことがありました。わたしと松橋さんとが、陽光銀行の本部へ行つての帰りです。車で帝都銀行の本部の前を通り、車の窓から、円城寺頭取さんの部屋の窓が見えたのです。わたしは思わず、『松橋さん、ちょっと円城寺頭取さんのところへ寄っていきましょや』と声をかけたのです。わたしはこれまで折があれば、頭取さんのところへお邪魔してはいたからね。なつかしいんですよ」

「社長さんのお気持ち、よくわかります」

「松橋さんからは二つ返事で、『ええ、参りましょや』という言葉が返ってくるものとばかり思っていましたのに、どうしたというのでしょうか、松橋さんは、『いや、寄らなくてもいいですよ。寄らなくても、わかっていますから。それに、今日は時間もありませんし』、そう言つて、そのまま帰つてしまふではありませんか。円城寺頭取とは、わかつていゝとか、いないとか、そんな間柄ではないのですよ。社長のわたしが行きたいと言っているのです。お伴しますと、素直についてくるのが当り前じやありませんか。なにか妙な工合でしたね。支店長さん、なぜ松橋さんは、陽光銀行やら東山銀行の本部へは行くのに、肝心の帝都銀行の本部へは、顔を出すのを避ける

「社長さんのご心配はよくわかります。たしかに、パーティーに出席されないのは、変ですね。でも、聞くところによると、明日、パーティーが終つたあと、退職された重役さんたちだけは、別に夜の晩餐会があるということです。そちらの方へ出席されるので、昼間のパーティーの方は遠慮されたのではないでしようか」

桜川は苦しい弁明をした。こんな説明で、寺本社長が納得するはずはなかった。しかし、とっさの桜川にはこれ以上の言い訳は見つからなかった。

パーティーの後に、OB重役を中心とした晩餐会のあることは、本当であった。しかし、その晩餐会の方へ松橋常務が欠席であることを、桜川はすでに知っていた。

二日ほど前であった。本部の秘書役から、
「晩餐会への出欠の返事が、松橋常務からまだ来なくて、困っているんだよ。君が行って、是非出席するようにと頼んでくれないか」

そういう電話がかかつてきたのであった。桜川の頭にはひらめくものがあった。

(松橋常務は出席しないつもりだな)

しかし、再三にわたる秘書役の、困惑しきつた哀願ともいえる依頼に負けて、桜川は松橋常務を訪ねていった。しかし、予想通り、桜川が何回頼んでも、松橋常務からは、出席の返事が得られなかった。

銀行に戻ると、桜川はその旨を秘書役へ電話した。

「身体の工合が悪くて、どうしても出席できないと言っているんですよ」

「そこをなんとか、もう一押し、してくれないかな」

「何回頼んでも、駄目なんですよ。とにかく、腰の神経痛一点張りで、どうにもなりません」

「困ったねえ、松橋常務にも」

秘書役のため息が、電話の奥から聞えてくる。ついに桜川が、

「もし、どうしてもというのなら、秘書役の方から直接電話をしていただくほかに、もう方法はありません」と言う

「いや、いいんだよ、そこまでしなくても。ご苦労さま」

秘書役は逃げるように、電話を切った。秘書役といえども松橋常務へは、直接電話をしたくないのである。

そのあわてて電話を切った秘書役の声が、まだ桜川の耳に残っているだけに、寺本社長へ、嘘の言い訳をするのは辛いのであったが、今の場合、仕方がなかった。

桜川の両腋からは、冷汗がぐっしり流れていた。その桜川の困惑しきった顔を見ると、急に寺本社長は、

「そうですか」

と、笑顔になって、

「晩餐会があるんですか。わかりました。それでは、わたしたちは明日、よろこんでパーティーへ参上いたし

を述べた。

「頭取の円城寺でございます。本日はお忙しいところを、かくも大勢お集りくださいます、本当にありがとうございます。心より厚くお礼申し上げます。さて、幣行も今年で創立七十周年を迎えたわけでございますが、振り返ってみますと……」

大蔵省時代からの豊富な経済知識と、さわやかな弁舌をもって鳴るだけあって、その演説振りは堂に入っていた。

人混みの中で寺本社長は、水割りのグラスを持ったまま、円城寺頭取のスピーチに聞き入っていた。最近とんと頭取のところを訪問してないだけに、非常ななつかしさで、いっぱいだった。

円城寺頭取の挨拶が終ると、来賓の祝辞がそれにつき、乾杯がすむと、会場は一気にさわめきの渦へと転化していった。寺本社長は小神常務とともに、人垣をかき分けて金屏風の前へ進むと、

「頭取さま、お久しぶりでございます。本日はまことに、おめでとうございます」

円城寺頭取の肩に両手をかけんばかりにして、挨拶すると、

「それは、これは、寺本さん、お元気ですか。お久しぶりですな。最近はお見えになりませんか。お忙しいでしょうが、是非またお寄りくださいよ」

ましよう。支店長さん、よく考えてみれば、わたしと頭取さんとの間です。変な隠しだてなどが、あるはずがありませんよなあ。あ、は、は……。これは、わたしの思いすごしでした。どうか支店長さん、わたしのい言ったことは、忘れてください」

桜川の顔の奥に、真相を見てとった寺本社長は、これ以上若い支店長を苦しめまいとして、態度を急変させると、話をそんなふうに打ち切ったのであった。

「じゃ、支店長さん、大変おそくにお邪魔して、申し訳ありませんでした。わたしが今日来ましたことは、くれぐれも松橋さんへは内証に願いますよ」

そう言うのと、寺本社長は応接室を出て、六時すぎてもまだ蛍光灯の下で忙しそうに残業をしている行員たちにお世辞をばらまきながら帰っていった。

(三)

翌日、パーティーは定刻に開かれた。

京浜地区の百カ店に及ぶ帝都銀行の支店の厳選された主要取引先が招待されただけあって、さしも広いホテル・ゴールドの吉祥の間も、立錫の余地ないほどであった。どのテーブルにも、盛りこぼれるほどの料理が並べられ、正面の、

帝都銀行創立七十周年記念

と大書された看板の下に、円城寺頭取が立つと、挨拶

円城寺頭取からそんな言葉をかけられると、寺本社長は思わず涙ぐんでしまふのであった。

「頭取さま、今日はまことに申し訳ないことですが、松橋さん、神経痛になりました。出席できませんので」

「いや、いや、松橋のことはすべて寺本さんにお任せしてあるのです。あなたの思うように、ご存分にお使いください。あのジャジャ馬を乗りこなすのは、寺本さんをおいて外にないと思ひ、お願いしたのですから……」

「光栄に存じております」

「今度は一度、松橋を連れて銀行へ寄ってくださいよ」

円城寺頭取はごく軽い調子で、そう言った。

「ええ、是非ともお伺いいたします。今度はきつと松橋さんと一緒に」

寺本社長がそんな会話を円城寺頭取との間で交わしているうちに、祝辞を述べる人の群が、まわりに押し寄せていた。寺本社長だけがいつまでも、円城寺頭取を独占しているわけにはいかなかった。

寺本社長は金屏風の前を離れた。

その時、寺本社長の頭の中に、鋭くひらめくものがあった。いま円城寺頭取が、

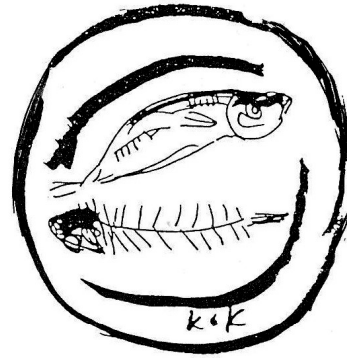
(松橋を連れて銀行へ寄ってくれ)

と言ったのは、銀行を退任して以来、ただの一度も円城寺頭取のところへ顔を出さない松橋常務を、

(寺本さん、あなたが連れて来なさい。それが社長としての任務ですよ)

という、円城寺頭取の指令なのだということが、寺本社長にはわかったのであった。

(つづく)



kuk

千三百年目の仇討ち(二)

佐々木 一郎

三
竜造寺芳栄の盛大な葬儀が滞りなく終わった数日後、金子警部補と田村部長刑事は、竜造寺を訪れた。

二人は、長々と続く白壁の塀を横目に見ながら、古風な長屋門をくぐり抜け、日差しが強い舗装車道を一気に歩いてガレージ前の日陰に飛び込むと、ほっと一息ついた。正面には幾つかの白壁の土蔵が立ち並び、その裏側の竹やぶの辺りからは、のどかな蟬の音が聞こえてくる。

「おやじさん。こう改めて見ると、随分広い屋敷なんですねえ……。あれ、さっきくぐった長屋門の中にも人が住んでいましたよ……」

田村は、抱えていた上着を傍らの立木の枝に掛けると、もう大分汗で湿っている手拭で、顔や首筋から滴り落ちる汗をふき取りながら尋ねた。

「ところで、おやじさん。今日のねらいはどっちなん

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の(ひろば)として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助し、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせつかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ヶ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

*同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

です？ 奥方？ それとも……」

「もちろん、有吉執事の方さ。あの人なら、竜造寺家の生き字引だから、上手に聴き出しさえすれば、事件の内側をいろいろと話してくれると思うんだ」

金子警部補は、急に声をひそめると

「しかし、奥方は駄目だよ。あの人たちは、まず、現段階じゃ無理だな……。とにかく、爺さんが法務大臣だったかどうかは知らないけれど、てんからわれわれ警察をなめているから、なかなか本音を言わないよ」

金子は、ハンチングの庇を指先で突き上げると、扇子の風を激しく額へ送り込んだ。

「ああ、昨日事情聴取した芳胤たちのことですか。いや、自分も、あの連中の横柄さには、まったく腹が立ちました。しかし、最後には、斎藤に、芸者とホテルへしけ込んだのをゲロ(白状)させたんですから……」

「ハハハハ……。それも、そうだな。斎藤氏も、

大分しよげ込んでいたねえ。しかしね、田村君。結果的には、三人とも白（容疑なし）になっちゃったんだから、あれは、残念ながら、われわれの負けなんだよ」

「はい、よく分かっています。どうも、今度の捜査会議じゃ、課長の雷が落ちそうですね」

「うん、それに県警の須田警部もなあ……」

「しかし、おやじさん！ おやじさんは、この四人の中に犯人がいると考えているんでしょう？」

田村の声が、辺りの静寂をやぶると

「し……」

金子警部補は、慌てて周囲を見回した。広い邸内には人っ子一人いないように見えるが、それでも時々忙しそうな野良着姿が、あちこちに見え隠れしているのだ。

「おい、ここは敵地だぞ。つまらないことは言わないことだ。さ、汗が引込んだら、執事の所へ行こう」

有吉光二郎執事はなかなか気さくな老人だった。初対面に等しい二人をいそいそと応接室に迎え入れると、共に出迎えた夫人を紹介した。

（これは驚いたな。この人品のいい老夫妻が竜造寺家の執事かね……。あの、見識張った、ひさえ、芳胤親子の方がよっぽど品が落ちるなあ）

一瞬、ぼう然と突立った田村部長刑事の袖を、金子が慌てて引いて椅子に座らせた。とにかく、身長が百八

家と有吉家との、そもその馴れ染めというのは、どんなものだったのでしょうか？

「さあ、馴れ染めというのは、ちょっとおかしいございますが……。何でも、戦国時代からの主従だったようでございますよ。あわよくば一国一城の主にと、竜造寺様もあたくしどもの祖先も、槍をかついで戦場を駆け巡ったそうでございます」

「成程。しかし夢破れて、いや、これは失礼！」

「いえいえ、その通りでございますよ。ホホホホ」

「同じように苦労して来たのに、片方は主人で、片方は家来では、間尺に合いませんな」

「いえいえ、そんなことは決してございません。封建制度という言葉のとおり、見返りとして過分なことをして頂いております」

言われて、金子警部補は、初めて室内の調度に気が付いた。二十畳ほどの洋間ではあるが、本格的な建築が施してあった。金子が腰掛けている椅子も本革製だし、敷物も高価なベルシャ絨毯が使われている。

「それに、竜造寺家にもあたくしどもの家にも、竜造寺家の財産に関する家訓がございましたね……」

「家訓？」

「はい、竜造寺家の財産の移動は、必ず有吉家の承認が要ることになっているのでございますよ……」

「ほほう、そんなことが……」

十二センチの田村は、何をして目立つ。

「……短兵急で申しわけありませんが、もう何代竜造寺家に仕えていらっしゃるのですか？」

「はい、さようでございますな。あたくしで十三代目で、四百年近くなると聞いております」

やや細身の有吉執事は、ほほえみながら答えた。服装は、モーニングでも羽織り袴でもなく、普通のズボンに濃い茶色の格子模様を巧みにあしらった夏シャツを無造作に着こなしている。

「うーん、随分と長い間お勤めでございますなあ」

「はい、われながら、随分長いと思っております」

「そうでございますようなあ……」

聞いていて、田村は危うく吹き出しそうになった。金子警部補の言葉遣いがいつもと違っている。それに、静かに話す有吉の顔付きがいかにもいい。毛が一本もない見事な禿頭なので、顔が面長になって、中世期の高僧の面影がある。そして、有吉が柔和にほほえむと、前頭部までほほえむのである。田村が妙なことに感心していると、夫人が静かに茶を運んで来た。配り終えて、丁寧に会釈をして立ち去る老夫人の後ろ姿をしばらく見送っていた金子は、再び有吉の方を向くと

「いやあ、おきれいな奥様ですなあ」

「とんでもない。あれも、もう七十を過ぎました」

「はあ、あ、話をまた元に戻して恐縮ですが、竜造寺

「今の方にはなかなかお分かり頂けないことでございますよ。昔は、人よりも家名が大切だったのでございますよ。ですから、たとえご当主といえども、お家を傾けるような行動は許されなかったのでございましょう。その監視の役を有吉家がするという、家憲でございまして……。まあ、言わば両家は、竜造寺家を支える運命共同体とでもいうような間柄でございましょうなあ」

「今流で言うと、共同経営者ですか？」

「ははあ、そういう言葉もございますなあ」

「それから、もし仮に、家憲に従わない暴君が現れたとしたら、執事さんはどうなさいますか？」

「あたくしども有吉家の家憲では、たとえ、ご当主様にお手打になろうとも切腹を申し付けられようと、お諫め申すべし、とあるんでございますが、実際にはそういう例は一つも聞いたことがございません」

「ふーむ……。しかし、ご当主がどうしても従わない。世間に知れるとお家の名が汚れる。やむを得ず執事さん自身の手でご当主の命を取ると……？」

この時、つぶっていた田村の目が、ぱっと開いた。

（ははあ、おやじさん、これを切り出したくて、あんな昔話に付き合っていたんだな！ ございます言葉なんか使っちゃって……）

「あ、下克上ゲクジョウでございますね。いえ、それはございません。下克上は、竜造寺家の大先祖様やあたくしども

の大先祖が、戦場を駆け巡っていた時で終わりでございますよ。徳川様の御代になってからは、『君、君たり、臣、臣たり』から『君、君たらずとも、臣、臣たざるべからず』に変わってしまいました。今のあたたくしてしたら、それならさっさと暇を頂きましょう、というところでございますよね。ホホホホ」

「はあ、やっぱり下克上ですかね……」

金子は、有吉の顔を眺めながら、力なくうなづいた。

「ちょっと、口出ししてもいいですか？」

田村が、身を乗り出した。

「率直にお尋ねしますが、殺された竜造寺芳栄氏は、一体、どういうお人柄だったんですか？」

「はあ、人柄と申しますと？」

「つまり、警察が調査した限り、芳栄氏は実に評判がいい人なんです。危害を加えそうな人物が割り出せなくて困っている程なんです……。しかしね。自分の経験から言うと、殺される動機を持っていないガイシャ（被害者）なんかいるはずがないんです。ま、加害者が間違いや麻薬患者の場合は別としてですよ。必ず、どこかに、殺されるような動機が隠されているはずなんです。ね、有吉さん。何かお気づきの点はありませんか」

「そうでございますなあ。動機と申ししても、あの通り、子供のころから心のお優しいお方でございましたから、殺される程恨まれるなどとは……」

たくしが黒子の役を勤めていたからでございますよ」

「ああ、やっぱり……」

「芳栄様が地域の方々と協議を始める三月程前から、あたたくしは、一軒一軒回ってお願いして歩きました。もちろん、手土産を用意いたしました。もう、買収という言葉が当てはまる程莫大な金額でございます」

「予想どおり、陰で金が進んでいましたね」

「はい、商人は、理屈じゃ動いてくれません。最後はやっぱり金でございますよ」

「それでも、芳栄氏は、自分の説得が功を奏したと、最後まで信じていたんじゃないですか？」

「はい、それが王道でございますから……。そして、それを適えて差し上げるのが執事の役目でございますから……」

「成程ねえ。しかし、考えてみると、芳栄氏の一生は本当に幸せだったんですね」

「はい、ある意味では、そうでございます……。その代わり、不幸な出来事もございました」

「え、不幸な出来事とは？」

「実は、芳栄様は、若いころ、駆け落ちをなさったところがあるのでございますよ」

この時、声がして、静かに老夫人が入って来た。両手に、メロンや梨、葡萄を山盛りにした大きなバスケットを抱えている。

強いて、申し上げれば、帝王学ということになりましたようかなあ」

「帝王学？ ですか」

二人は顔を見合わせた。

「竜造寺家の仕来りでは、門屋や小作人の子は絶対に小学校以上の学校へは進めませんでした。その子がどんなに成績が良くても、許されませんでした。それに引き換え、ご当様は、大学までお進みになります。その上、ご嫡男は必ず二年間アメリカに留学をなさいます」

「留学ですかあ！」

「はい。大旦那様も、芳栄様も、芳胤様も留学なさっています」

「うーむ。成程、帝王学ですねえ」

「はい、そして、この家の帝王学の本質は、苦勞や危険を伴うことは、すべて家来に任せて、ご自分は、常に日の当たる場所で誇り高く過ごすことにございます」

芳康様の放恣な生活を保つために、父がどれ程心を砕いていたことか……。権勢と酒色を両手にして、御前様が哄笑していらっしゃる陰で、父は瘦せ衰えた体に鞭打って走り回っておいりました」

「まったく、すまじきものは宮仕え、ですなあ」

「あたたくしは芳栄様でございました。県都進出が、ほとんど地元の抵抗を受けることなく出来たのは一重に芳栄様の人徳の致すところ、とされておりますが、実はあ

「これは、当家自慢の果物でございますの。特にこの新品質のマスク・メロンは、例年になく良いお味に出来ましたので、どうぞ、召し上がってみて下さいませ」

夫人は帰り際に、チラッと夫に目配せをしたようだったが、有吉は黙って首を振った。

「駆け落ちですって？ それ、本当の話ですか？」

「あれは、芳栄様が大学二年生の時でございましたか。なあ。熱烈な恋愛をなさったんでございます。相手の娘さんは、竜造寺家の当時の女中頭の姪に当たるおりきさんという県立女学校五年生の、そうですなあ、若鮎のようにはビビチビした娘さんでございました……」

しかし、結局は御前様のお耳に入ってしまった、二人はまるで生木を裂くように引き離されてしまいました。身分が違うという理由でございまして……」

「……………」

「芳栄様は、失意のうちに外国に旅立たれました。最初は当時日本領だった満州、朝鮮、台湾などをお回りになって、それからヨーロッパの方に向かわれました。しかしこの旅は、芳栄様にとっては、まさに死に場所を求めている旅でございましたので、中国では、わざわざ馬賊の仲間に入ったり、ゴビの砂漠などを一人で放浪なさったと聞いております」

「ちょ、ちょっと待ってください……。今、有吉さん。ゴビの砂漠とおっしゃいましたね？」

田村部長刑事が、あわてて叫んだ。

「はい。結局、ここでも死ねなかったようでございますが……」

「それなら、サハラ砂漠へも行ったんでしょう？」

「はあ、生活費は月々大奥様がご送金になっておられました、ヨーロッパ滞在中はバリ銀行振り込みのようでございます。バリを拠点にすれば、ヨーロッパでもアフリカでも行動範囲になりますなあ」

田村の顔が、急にくくと歪んだ。ついに、サハラ砂漠の名が出た。芳栄と繋がった。彼は、金子の方に顔を向けると引きつったように笑った。金子もうなづいた。

「ところで、有吉さん。どうして芳栄氏が、あの時期

に、当時は日本人にとっては絶対的な義務だった徴兵を逃れて、外遊などが出来たのですか？」

金子は、深刻な顔をして聞いた。彼も、例え当時は幼児だったにせよ、戦中派には違いない。

「そのことでございますよ。刑事さん。あたくしが、こんな田舎家の主人を語るのに、帝王学だとか王道だとか大袈裟なことを持ち出しましたわけは……」

有吉は、果物をすすめながら、座り直した。

「つまり、芳栄様には、到頭、召集令状がこなかった

のでございますよ。事実上免除されたのでございます。

あたくしは、戦後になって初めて、一億一心とか一億玉砕などという掛け声は嘘だったことを知りました。所

ご本人の芳栄様、皆、亡くなっておりますので……」

有吉執事の答えに、田村は一瞬がっかりしたようだったが、それでも、ふと思いついたように、

「あっ、あの、おリキさんは、どうですか？ おリキさんですよ……。元氣なんじゃありませんか！」

「ああ、おリキさんでございますか。あの方は、戦後間もなく、産後の肥立ちが悪くて亡くなりましたよ。男の子を一人残して……」

「ええっ、そうですかあ……。じゃあ、そのう、おリキさんの残した、男の、子は？」

彼は、薬にでも紐る面持ちで、歯切れ悪く尋ねた。

「はあ、その方ならお元氣でございますよ」

「えっ、どういう方ですか？」

今度は、金子が尋ねた。金子も、いつの間にか、紐り付くような目になっている。

「大洋新聞の井上信也さんという方でございますよ」

「何ですって！」

金子と田村は、同時に声を上げた。やっと、事件の真相の一端が見え出したのだ。

四

「やあ、この間はどうもありがとう」

「うむ、君こそ大変だったな……」

「ようやく、目的が達成できた。殺人などはしたくは

詮、日本は女王蟻の群れと働き蟻の群れの集団に過ぎな

かったのでございますなあ……。芳栄様が満州や中国

を放浪していらした時は、こともあろうに、陸軍

の軍用機に便乗したそうでございます。馬賊になって危

険に遭遇した時も、戈壁砂漠で行き倒れになった時も、

不思議と、誰かしらに命を助けられたようでございます。

あの方は、『世の中には親切な人がたくさんいるんだな

あ』などと、単純に感謝していらしたようですが、私

は、すべて御前様の差し金と睨んでおります。恐らく、

陸軍の上層部の方に手を回したのに違いありません」

「ほーお、そういうことがあったのですか」

「ですから、こういう王道を歩んでいる方々は、知ら

ず知らずのうちに、多くの方から妬まれたり憎まれたり

恨まれたりしているのだと思うのでございますよ」

「うん、それは、王道を歩む者の宿命ですな」

「さようでございます。自覚していらっしゃらないだ

けに、防御が甚だ弱いわけでございます」

「サハラ砂漠について、何かお聞きになりましたか？」

田村は、まだ、サハラ砂漠にこだわっていた。

「さあ、生憎、そのころは、あたくし自身が海軍に取

られて、一年程、南方に行っておりましてので……」

「じゃあ、外に知っている人は？」

「ないと思います。極秘で出掛けられたうえに、当時

のことを知っている方、御前様ご夫妻、あたくしの父、

ないのだが、十年越しの悲願だからなあ……」

「あの仇打ち状の文面はどうだったのかな？」

「うん、ちょっと大時代的だったが……。まあまあ

かな。それでも、警察は大分混乱したようだ」

「そうか、それなら、いい」

「あと、一人になるか二人になるか、だな」

「こっちは、どっちでもいいぜ」

「警察は、ようやく、われわれが置いてきたペンダン

トを追跡し出したようだ……」

「そりゃ、結構だ。担当刑事は？」

「金子警部補と田村部長刑事だ。どちらも並だが、県

警から来ている、須田警部というのが少し切れるらしい」

「うむ、そうか。期待していよう」

「じゃ、今回はこれで……。失敬」

五

金子警部補から報告を受けた野口署長は、すぐ参考人として井上信也に任意出頭を求めよう、吉原刑事課長に指示した。そして、彼が一昨日来アバートに戻っていない事実を知ると、急遽、令状を取って、家宅捜査を命じた。野口は、言いようのない焦燥を覚えたのだ。

急行した吉原は、部屋を覗いて思わず顔をしかめた。LDKと聞いてきたが、電灯の下で見る部屋は、そんな近代的な印象などはみじんもなく、異様な臭気と湿気

を伴う薄汚い六畳だった。恐らく、ここへは寝に帰るだけで、ほとんど戸の開け閉めもしないであろう。

(この男は、一体、どういう暮らしをしてるんだ!)

吉原は、土足のまま部屋の中央に立ち、部下を指揮して捜索を行った。座敷の片隅には、さすがに新聞記者らしく、原稿用紙やペンの入った古机と、受話器、携帯用ラジオなどが置いてあったが、真ん中近くには薄汚れた布団と枕が雑然と積み重ねられ、半開きになった押し入れの中には服や下着などが丸めて放り込んである。流しには、茶碗と鍋が水に浸けられたままになっているし、ごみ箱のダンボールには、インスタントラーメンの殻が二つ、三つ投げ捨ててある。そのうえ、キッチン照明の蛍光管が切れていると見え、ソケットが剥き出しになっている光景が、ぞくぞくとする程うら寂しい。

金子と田村は、鑑識と入れ代わりに部屋に上がった途端、思わず二、三步たじろいだ。

「なんとも、佻しい風情ですなあ……」

田村が感に堪えないようにつぶやいた。

二人はそれからしばらく、思いつく限りの箇所を探索した。と、いっても、精々、積み重ねられた物を調べたり、天井や壁を軽く叩いたりする程度だったが……。

とにかく、この捜査は、肝心の井上が、犯行をくらすために逃走したのか、単なる旅行に出たのか、それとも誰かに呼び出されたのか皆目分からないのに捜索し

が、やがてその手をサッと離すと、まずプレートが外れて落ち、それを追うようにして、四つ折りの小さな紙片が、まるで魔法のように、ゆっくりと舞い落ちてきた。

「あっ、何だこれはっ」

金子は慌てて、床から拾い上げて眺めた。

「おやっ、これは、一千万円の小切手じゃないか？」

振出人は、竜造寺芳胤。あっ」

金子は奇声を挙げると、その小切手を持ったまま、入り口まで行き、大声で吉原刑事課長を呼んだ。

小切手発見という金子の叫びに、課長ばかりでなく、捜査員たちもどっと駆け込んで来た。満員になった六畳の中で、吉原課長が、悲鳴に近い声で怒鳴った。

「どういうわけなんだ。この小切手は！ しかも、竜造寺芳胤振り出しのものじゃないか」

「課長、わが署にシャーロック・ホームズ（コナン・ドイル作品の名探偵）がいたんですよ……。」

「何だと？」

「この田村部長刑事です。こいつが、ピタッとこのスイッチのプレート突き止めたんです」

「本当か？ 田村。しかし、俺たちがあれだけ探しても見つからなかった物が、どうして分かったんだ？」

「はあ……」

「何か予感でもしたのか？」

ているのだから、漠然と探すより仕方がないのである。

「おい、もう引き上げよう。あ、おやじさん。そんな所に首を突っ込まなくてもいいよ。もう、われわれが調べ済みだよ」

課長が、廊下から怒鳴った。

金子警部補も、引き上げようとして、ふと、田村の方を見ると、いつの間にか彼は、壁にはめ込まれた流し場のスイッチを眺めながら、しきりに首をひねっている。

「どうした。壁が動くのか？」

「いえ」

田村は、くると金子の方を向くと

「ちょっと、管理人の所まで行って来ます」

と叫ぶと、怪鳥のように、百八十二センチの長身を翻すと、階段を二歩半で駆け降りて行った。

呆気にとられている金子の前に再び姿を現した時は、管理人から借りたのか、片手にドライバーを持っている。

「どうするんだ。君」

「これを開けてみようと思うんです」

田村は、壁に取り付けられた、スイッチをはめ込んだ縦長の金属製プレートを指さした。これは古い型のようで、僅か上下二本のネジで止められている。彼は、このネジを外して、内部を開けて見ようとしていた。

「おい、止めとけ！ 感電でもしたらどうするんだ」金子の制止も聞かず、田村は黙々とネジを回していた

「いいえ……」

「はいといいえばかりじゃ、分からんじゃないかっ！」

「でも、これを言おうと、あんまり馬鹿馬鹿しいので、皆に笑われそうなのがして、つい……」

「だれも、笑ったりは、しないっ！」

突然、傍らで大きな声がした。びっくりして振り向くと平石警部補だった。顔が上気している。

「そうですか！ そこまで言われるのなら……」

田村部長刑事は、到頭観念したように話し出した。

「自分の東京の家の部屋は、亡くなった父の部屋を貰って使っていたのですが、どういうわけか、スイッチが二つ取り付けられていましたね。その一つは部屋の電灯のなんです、もう一つの方は何のためにあるのか分かりませんでした……」

そこで、母親に糺したところ、それは、三十年前に家を新築した際父の部屋の隅に取り付けた、当時流行した装飾電灯の撤去跡だった。

あるとき、彼は、閃くものがあった、このスイッチのプレートを取り外してみると、そこには約四センチ平方奥行き約八センチの空洞が作られていた。

「父は常日頃、いくら上手にへそくりを隠しても、すぐ見破ってしまう母に対して、密かにその裏をかく計画を練っていたようです。そして、ついに母の盲点を発見しました。それは、この電気だったんです。私もある本

で読んだことがあります、日本女性、特に年配の人は、いや、これは男性もそうらしいんですが、電気に弱いつていうんですね。そしてそれが、次第に無関心になつてきているんだそうです。例えば電気冷蔵庫にしても電気洗濯機にしても、使うことは積極的によく使っているが、いざ故障となると、すぐ電気屋に依頼してしまふ。電気屋が来て直していても、その作業を覗こうともしない。実際、母は一度もこのスイッチに関心を払ったことはありませんでした。自分の代になつても……」

「……………」そうか。よし、分かった。そのほかは、どうなんだ？」

「は？」

「遠慮しないで、捜査上の意見を言ってみてくれ」

吉原課長は、何かに気付いたようだった。

「はい。これは自分の私見であります、この部屋の乱れ方が少し作爲的のように思えたんです。初めは佻しいような気持ちで眺めていたんですが、ふと、これはわざわざ部屋を荒らしたのではあるまいか、と思ひ付きました。そういう視点で眺めてみると、不思議なもので、色々と不自然な点が目に付き始めました。寝布団を部屋の真ん中に置いてあることも、背広と下着をごちゃ混ぜにして押し入れに放り込んであることも、僅か一、二日留守にただけなのにあれ程ひどい異臭が漂っていることも……………」そして、あの電球のない蛍光灯を見た途

端、父の作ったからくりを思い出して、これだけ闖入者に不快感を与えるように細工してあるからには、きっと何かが隠してあるな、と……………」

「成程、そうか……………」それで、そのヒントを呉れたのは、誰だ？」

「えっ、あっ、参ったなあ、課長には……………」みんなお見通しのうえたんだんですか……………」実は、出掛けに須田警部に、ちょっと耳打ちされたんです」

帰路、吉原は金子警部補と並んで車に乗った。

「おやじさん。新旧交代って言葉、知ってるかい？」

「いやあ、耳の痛い言葉ですなあ……………」

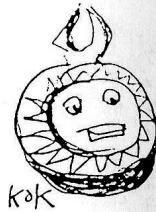
そのまま、二人は黙り込んだまま、それぞれ、毎日毎日、体中を火のように燃やして走り回った新米刑事のころを思い出していた。

新大阪発十六時四十四分発新幹線「ひかり」三五二号は一九時四十八分に東京駅に着いた。

車内を見回っていた専務車掌は、グリーン車個室の一つが閉まったままになっているのを不思議に思つて、合鍵で開けて入ってみると、中に中年の紳士が倒れているのを発見した。

紳士は、その所持している名刺から、竜造寺デパート社長竜造寺芳胤四十歳と判明した。

(続く)



有院家の 人々 (三)

大和禎人

第五章 洋を越えて

アメリカ青年ロバート・ウォーカー・アルインと日本人武智イキの日本式な内祝言が山手のウォルシー・ホール支配人の宅でおこなわれた。

ロバート二十六歳、イキのほうは十八歳であった。ロバートがイキを見初めたそもその時から二年を経ている。

新郎は弘化元年(一八四四年)一月七日の生れ、新婦は嘉永五年(一八五三年)十二月二十三日の生れであった。たがいに異邦人のこの二人はいかなる星の下に生れたものであったろうか、縁結びの神の気紛れな業に思える。

「タケチさん、若い人たちのケッコンのセレモニーはワタシのハウスでどうでしょう」

「オオ、ウォルシーさん、それは願ってもない、ぜひともよろしく」

武智惣助に異存があるはずもなかった。ウォルシー・ホールにおけるロバートがうけている並々ならぬ信任を物語るものであったし、これを機会に今後武智の商人としての立場にもなにかとプラスをもたらすことは明らかであった。

「タカサギヤを、だれか歌ってくれませんか」

「へえ、「高砂」をご存知とはいよいよ痛み入りましてございます、それはもう手前どもで手配いたします」

「オーケーね、二人のために祝福はできるだけ良くしてあげたい、これはわたしの気持です」

「ありがたいでございます」

とりあえずは内祝言という形式をとらざるをえない事情であった。この結婚について、日米ともにいまだ先例

もなし、法律上の障害を多くひかえていたからだ。

「そのことは時間が解決するでしょう、わたしはそう思っています、かれにも心配するなと言っておきます、武智さん、あなたもこの国のほう骨折ってあげてください」

「もちろんですとも」

明治新政府のもとに、ようやく戸籍法も改正され、一般庶民の戸籍調査も行なわれ、戸主は相続人を必要とした。イキは明瞭な武智家の相続人であるから、それを放棄しての外国人国籍への転出は容易なことではなかったのだ。その手続の煩雑なこと、書式のやかましいことは現在では想像もつかないものがあつた。そしてなによりも日米双方の政府が正式な国際結婚を承認することに否定的であつた。

ロバートはこのいきさつを知ると、自分たちの結婚を正式なものとするために、あくまでも戦わねばならないと、持ち前の意志の強さと政治力を發揮して、敢然と戦うことを決意し、後年それを実現するのである。

「おメデトウ、ロバート、そしてイキさん、あなたがたは神の祝福をうけ、いまこそ幸福の日を迎えました、その幸福はあなたがた二人が築いたものです、そして、これからさきも、さらに神のおん恵みが二人の上にあることを祈ります」

ウォルシーは日本語が巧みであつた。

館でのことだから、すべて椅子席であつた。新婦側の出席者にとってそれはかなり落ち着かない雰囲気余儀なくしていた。さしあたり武智の妻女がそれだ。ピードロをペッコン、ペコンと吹いたあのオドケどころでない緊張を強いられていた。

だが、

（あの娘の母親はだれがなんと言おうと、わたしなんだ、ごらんな、林からはとうとうだれ一人この席に来てはいない）

実の父林金造、継母福貴には型通りの案内が出ていたが、伊那と横浜の距離は遠く、出席する気持もなかったようだ。相次いで三女を生み男子を得られぬまま不縁になり、家を去った実母には知らせが届けられたものかどうか、はなはだ心許ないことに思われた。

（あの娘は芯の強いところがある、お母さんと別れたときから、姉妹三人ではいちばん幼かったから、里親に預けられたりの苦勞をなめてきた、こんどのことだつて、ほんとうの気持はわからない、これでよかったのかどうか、あの娘の気持、わたしにはわからずじまいだった）

血のつながりのないはいはこの場において、イキがいよいよ遠い他人に見えてきた。できるだけの、世間並以上の愛情をかけたつもりが、一挙に潰えてゆく寂しさから、たまらない気持ちに襲われていた。

「高砂」の小謡が披露の宴を盛り上げた。意外にも惣助自身がそれを謡ったのである。（手配しましょう）と約束しながら、この場合、大店の旦那芸としてかれにはその素養があつたからである。

謡いつつ、淡白に見えた惣助が目頭を熱くし、しまいには涙が頬を伝った。子宝に恵まれることなく、イキを養女としたが、そのイキを嫁にやることになった。十歳で武智の家に迎え、養育してきた情は実の親にも勝るものがあつた。娘を嫁にやる親子の情とはこうしたものであろうか、惣助は潤んだ眼の隅に花嫁姿のイキをとらえ万感をもてあましながらか、「高砂」を謡いおさめた。

イキの花嫁姿は武智が贅を尽くした打ち掛けをまとうといった純日本的であるのに対し、ロバートのほうはいかりのタキシード姿で、派手な鬘胸に蝶ネクタイといういでたちであつた。

（なんとも、とばけたお人だな、この異人さんにイキを、これでよかったのだろうか、それにしてもイキはどう思つてこの人を？）

この期におよんでいまさらと思いつつ拭い切れない思いが過ぎる。

当のイキはいまだ少女を残す身を固くし、心を研ぎ澄しながらも、冷静な面もちで新夫の脇に控えていた。

祝言の流れは日本式とはいへ、ウォルシーさんの西洋

（この後、いったいどうなるんだろう、あの異人さんが義理にせよ、あたしの息子ということになるなんて、どうでしょう）

と、思うのだった。

ロバートはひとり端然としていた。かれの一族は遠く十世紀から十二世紀に遡ればスコットランドに住んだ貴族の家柄であつた。やがて一族の裔は北米大陸へ移住した清教徒の一団に属し、かれの父ウィリアム・ウォレス・アルウィンはピッツパークの市長や、米国下院議員となり、後にはデンマーク駐在の代理大使となつた人であつた。かれの母ソフィヤ・アルベラ・ベイチがペンジヤミン・フランクリンの曾孫娘であることはすでに書いたとおりだから、北米合衆国独立宣言起草者の一人であるフランクリンの血を明らかに享けていた。端然と記すこの場の印象は自ら具わつたものの上にそうした背景も無関係なこととは言えないように思える。

（このとばけたお人）

という惣助の感想はむしろ同様に新夫の生い立ちからくるものであつたろう。惣助にとっておよそ不可解な人物という印象を与えたのだった。ロバートのこの端然あるいは悠然とした態度はかれの終生かわらぬ姿勢であつた。

かのオオタニももちろん招かれて末席を汚していた。かれは絶えずこの場に微笑を失わず、心からの祝福の眼

をもって宴の終始を見守っていた。

（これからだな、すべてはこれからだ）

そういうかれ自身はロバートとは同年ながら、自分の身を固めるにはまだ早いと考えていた。二人を結びつけることに陰に陽に働いたこの青年だが、そのへんでは大人の考え方をもっていた。

（ロバートはこれでいよいよ張り切るだろう、彼の場合は結婚をプラスにできる、そういう人間だ、イキさんにしても間違いなくよい家庭の人になるだろう）

かれが仲立ちに多少なり力を貸したのは異国人ロバートとの間の友情はもちろんだが、イキその人に対して好意をよせて甲斐のある、なにかを感じていたからだ。

（商取引は世界に開かれねばならない、かれはそうした良き捨て石となるだろう、ここは天下の横浜なんだ、なにごとにも進歩的でなければならぬ、きみは良いお手本になってほしい）

さらにかれの先見では国際結婚はこれからさき珍らしいことではなくなるだろうと思われるのだった。

ウォルシー・ホールの米国人同僚が数多く出席していた。新郎側の出席者が多く、新婦側は乏しく数の上で圧倒されていた。

だがここに、新郎側のメインテーブルには日本人紳士が一人だけいたのである。

「武智くん、あの人は井上さんだよ、ほれ、一度はお

（一八三五）周防湯田村の生れ、号は世外。明倫館に学び万延元年（一八六〇）には藩主の小小姓の役にあつたが、尊攘運動に走り、文久二年（一八六二）高杉晋作らと江戸品川の英国公使館を焼打ち、さらには藩主の命をうけ、伊藤博文らと渡英、元治元年（一八六四）四国連合艦隊の長州来撃を知り急遽帰国、高杉、伊藤らと講和の使者となるなど活躍したが、恭順派に襲われ重傷を負った。維新後、新政府の参与、そして民部から大蔵という官界を歩んできた。ロバートより九歳の年上だが、二人はよほどウマが合ったものとみえ、深い交わりをこのさき永く保つことになる。とくに開化の最盛期という事情の中、たがいに利用し、扶け合うことがこの後に多く、洋を越えて熱い友情を育て、協力しあったのであった。その顕著な例はやがて相計って三井物産の前身となる先収会社を設立したことであろう。

「武智さん、アリガトウ、あなたとタイで二人の乾杯をし直しましょう」

上機嫌のウォルシーが惣助のところに歩み寄って、グラスを近づけた。

「ウィスキー？、それともジャパニーズ・サケ？」

「ありがたい、ウォルシーさん、サケがよろしい、わたしは日本人だから」

なぜ惣助はここで日本人であることを言わねばならな

目にかかっているはずだ」

「うむ、それはわかっているが」

「井上馨さんだよ、政府参与、大蔵大輔の閣下さ」

「そ、そうだったのか、どうもただのお人ではないと思っていたが、詳しくは名乗ろうとはされなかった、もう二年ばかりも前のことだ」

ロバートが通弁を伴いはじめてイキとの交際をもとめて店に現われた日のことが思い出された。同席したこの紳士は口数少なく、それでいて惣助に圧迫感を与え、申し入れを軽々には扱えぬ空気を作っていた。

「そうか、あの人が、そうだったのか」

「おいらは承知だったが、お前さんに言わなかった、言っちゃ、さきさまはご身分もあることだ、どうせ、あとで分かると思ってる」

「お主、思ったより人が悪いな、ま、いいやな、あとで紹介してくれる、あいさつ無しじゃこの場はすむまいよ、あんばいよく顔つなぎをしておくれでないか」

話の相手は「すずもと」の主人だ。地元ではあるし、ロバートはこの男の店先でイキとめぐり合ったいきさつがあった。両替商という立場上、井上とはかねて相知る関係であったし、当のロバートについて井上はウォルシー商会の若手社員としてとくに有望視し、肝入れをしていたものであった。

井上馨は萩藩士井上聞多の後年の称である。天保六年

かったのか、長身、碧眼の人々に囲まれたこの場の空気に吞まれて思わず口にした無意識のものだったようだ。

「オオ、ナイス、ニホンのサケはすばらしい、イキさん、なおすばらしい、ありがたい、乾杯ね」

カチッとグラスが合わされた。

「武智さんの「タカサゴ」もよかった、ベリ、グットだった、……さ、つぎにはオクさん、乾杯しましょう」

如才ないウォルシーを前に、てい女はホンノリ顔を赤らめ、尻込みをしたが、盃をあげた。

「この人には真似事で」

惣助が古女房をかばった。

「マスター、ところで井上閣下の紹介をこのへんで、あらためていかなものでしょうか……」

ウォルシーと夫妻の献酬を見守っていた「すずもと」がとりなしの口をはさんだ。

当時、両替商としての「すずもと」は多く同業の例に漏れず、（大名貸し）が少なからずあり、新政府に藩債整理が引き継がれたいま、貸し倒れから逃れることに汲々としていた。ウォルシー・ホールもまた二、三の藩の債権を少なからず抱えている点では同様であった。大蔵官僚の大物である井上という手蔓はかれらともに太い頼みの綱であった。

井上の大蔵官僚としての地位大蔵大輔はいまの次官で

ある。ちなみにかれの右腕の大蔵大丞(三等官)は渋沢栄一であった。

幸福に輝いて見えるロバート、さすがの緊張に心をうち震わせ、見えない未知に戦くかに見える花嫁のイキ、だが、この場の空気はすでに二人を除いては賑やかさをしだいに増し、喧騒が広がり、思い思い、それぞれに、思惑やら、算用の話題に傾くものに変わっていた。

第六章 処女母イキ

内祝言をあげたロバートはイキを伴い長崎へ帰った。新婚家庭はまず同地で営まれた。二年間通いつめた恋の勝利である。ついに射止めた新妻である。意気揚々としたかれの胸のうかが察せられる。

ロバートとイキが家庭をもつてから一年目、長崎駐在中に女の子が生まれたが、不幸なことにその子は生れてすぐに死んでしまった。なぜか以後十二年もの間、かれらは子宝にめぐまれなかった。

だが、一方では二年間のロバートの活躍は素晴らしいものがあった。「亜米一」と呼ばれ、米国商社中一頭地を抜くウォルシー・ホールの業績は急速な進展を見たの

その隸下である大輔の井上は長州閥だから、たとえ参議としては同格でも潔しとしない面があったろう。薩長の軋轢が考えられる。井上の下野は佐賀の乱に走った司法卿江藤新平とはほとんど期を一にしているのである。その辞任は大丞職の渋沢栄一と共にしたもので、瀆職疑惑を取り沙汰されたが、黒い霧に包まれたまま、二人は先収会社を創立するのである。

したたかな井上は後ふたたび政界に復帰する。内閣制度初の伊藤博文内閣に迎えられ外相となり、以後農商、内務、大蔵、などの頭職につくことになる。井上馨と伊藤博文は同じ周防の出身、つまり聞多と言い俊輔と呼んだ竹馬の友という関係だった。

井上が創立した先収会社というのは日本最初の貿易会社である。亜米一のウォルシーにかつて勤めたこともあり、造幣権頭(四等官)として井上を補佐してきた益田孝を迎えて副社長としている。このいきさつは業種上の関係のみでなく、人脈上もまたウォルシーとはいよいよ密接を保つことになる。

先収会社の主な仕事は米の国内取引、輸出。陸軍省用達のラシヤ、武器、毛布等の輸入だった。井上と益田は米、古銅をはじめ一切の輸出入の業務を亜米一にまかせたのである。当然ここでロバートが前面に立ち活躍する場面を与えられたのであった。かれの誠実さ、敏速な処理能力に二人はすっかり信頼をおき、外国取引のすべて

であった。このためウォルシーはかれを身近におき強力なパートナーとするために横浜へ呼び戻した。

しかし、こうしたウォルシーの信任にかかわらず、やがて、かれの身上に大きな転換の機会が訪れることになる。悩んだすえの転身だったが、その契機は井上馨との交渉から導かれる。

「まず、ウォルシー・ホールを手始めに、話をかためるようになさい、いくら、いくらをまけるように交渉するので、わたしが支配人に進言してウォルシー・ホールがまずまけるようにさせます、そうしておいて他の商会へはたらきかけるのです、ウォルシーがここまでまけたのだから、同じようにまけるという談判をすればいいではありませんか」

大蔵官僚として藩債整理にあたり、外国商社にも多く債務がたまっていることを苦慮する井上を見かねて、ロバートがこんな親切な助言をしたことから、井上はそのとおりにして苦境を脱することができたのである。

いらい、井上はロバートをいっそう深く信頼するようになった。なにかことあるごとにロバートに相談するのを常とするようになり、二人の交情は家族ぐるみにまで発展した。

ところで、間もなく井上は大蔵省を辞め、野に下った。当時の太政官制下の大蔵卿は薩摩の大久保利通である。

を一任するようになった。

やがて井上の政界復帰にともない、益田はあとを引き継ぎ、三井財閥との提携により三井物産と社名を改め、初代社長に就任する。ロバートは請われて顧問に就任している。時に益田二十九歳、ロバートは三十二歳であった。まさに少壮が風雲を呼ぶ時代だった。

ロバートはこうした経過の一方に亜米一を離れ、友人フィッシャーのパートナーとなり、独立してフィッシャー商会を起こしていたが、井上・益田との関係はすべて引き継がれていた。フィッシャーのロンドン支店を通して輸入したスナイダー十萬挺は西南戦争に際し西郷軍を鎮定するのに役立ったというエピソードを生む。

ロバートは仕事の移った機会にイキのため東京に居を移し、はじめは浅草橋場町の武智方に同居していたが、隅田川沿いの同町の別のところへ邸宅を構え、朝夕武智惣助夫妻とは自由に往来し、イキが淋しくないように配慮した。

東京都港区の浜松町、浜崎橋に近く海岸一―三―七に「東京都公文書館」なるものがある。この資料室で外国人結婚登録記載簿を見ると、明治十五年(一八八二)の登録決済書類の中に、米国民フィラデルフィア市出身、ロバート・ウォーカー・アルウィンと日本婦人武智イキとの婚姻に関する十数ページにのぼる煩雑な書類

が綴じこまれていたのを発見する。ロバートの武智イキに対する愛情の真実を物語る正式な入籍を証明する貴重な書類である。ロバートはすでに三十八歳、イキは三十歳になっていた。ロバートは自分たちの結婚を正式なものにするために全力をあげて戦いつづけてきた。こうしてようやく目的を達したのだが、この結果を得るために日本側で六年、アメリカ側で十二年間という気の遠くなるような年月が流れていた。ロバートは持ち前の意志の強さを貫き、粘り強さと政治力を発揮して、ついに初志を貫徹したのである。

武智ていが夫の惣助にイキに代わる養子にはキクがいるのではないか、というかりそめの話はその通りに瓢単から駒の成り行きになった。

「あなたという人はいつも引込み思案で駄目です、伊那へはわたしが掛け合いに行きます、武智の家の大事ですから、気兼ねしては駄目ですよ」

ていは早目の手をうつように惣助を促し、気丈に交渉を買って出た。たとえこの縁組が再度になろうと、なによりイキのためであり、先方に否やはないはずと踏んでいた。林金造の次女、すなわちイキの姉つなが西村家に嫁し、一女をもうけたが二十七歳の若さで死去した。その忘れ形見がキクなのであった。林に異存はなかりとありえずはイキの養女として迎えたのだから、イキは処女母

隅田川の川沿いにある庭内目がけて投石すると犬は吠える、又誰かが大声で叱咤するのが面白かったので斯様な宜敷ない悪戯をした事もあった。

これはキクの夫として武智の養子に入った林直道の手記から写す記事である。よく当時の状況が伺え、縁組にいたるいきさつが彷彿して興味深い。ここに登場する直道は林姓は同じだが、イキやキクの里方の伊那の林とはまったく関係がない。たまたま同姓で日本橋葎町（よしちょう）の「よしや」と呼ばれた老舗の三男である。

さて、その手記はつづいてはこうある。

然るに縁の連繋は全く不思議なものであるが、私が十三歳の折、町のある妻女を通じて、此の武智家へ養子として所望される話が持上がつてきた。洋行をさせると言う事と、当時幼少である娘のきくと許嫁にするというのが条件であった。私はこの洋行の事を聞いて心大いに動いた。従って養子問題は少年の心中立所に決し、何等迷うところはなかった。この養子話は遂に実現して、私が武智家の者となったのは明治十五年であった。当時惣助氏は既に世を去られ、未亡人てい女が橋場に居住して居られたが、私はアルウィン氏夫妻の許に引取られたのである。又許嫁（きく子）もその方へ行っていた。

になるいきさつを生んだ。武智はキクを引き取ると武智イキと養子縁組をし、養女として届出をしたのだ。さらにイキを相続人とする認知をうけ、あらためてキクに武智家を継がせ、こんどはキクが養母イキを嫁に出す格好にして、日本国籍から抜きロバートとの結婚を成就させたのであった。二十歳にも満たない処女母イキとやっと五歳の幼女の相続人キクが書類の上で母娘となり、いたいけなこともがうら若い養母イキの結婚の承諾人となったのである。

形式上のこととはいえ、なんとも不思議な書類上の魔術であった。養母であるが事実上は血のつながった叔母であるイキに従って、キクはイキ・アルウィンの家に引き取られ、養育されることになったのである。

浅草橋場町三十二番地に、武智惣助という表札の打ってある家があった。土佐高知の人でかつて海産物などを扱う、俗に献残屋と称する商売を営んだことのある家柄である。私が小学校に通うには常にこの門前を通過するのであるが、此の家には時折、異人さんが来るのと、洋犬が沢山飼ってあって、盛んに吠えるのとで特に知っていた。ゴマ白毛の馬が曳いている軽快な馬車で、此の異人さんが通るのに行遇った事もあった。又友と共に船に小石を積んで夕闇に乗り

アルウィン家はすでに芝切通し（柴町五番地）今水道浄水場のある所に住居しておられたが、庭にはその頃としては珍しき泰山木や種々の立派な薔薇などが植込まれ、カナリヤ、洋犬等も飼育され、すべてが陽気な家庭と見受けた。又私は生来始めて外人に接したのであるが、アルウィン及び夫人（武智惣助の養女で、きくの養母）共々親子の如くに親切に世話してくれたので、此養子君も大いに満足して目出度く納まった。

直道は後にロバートがハワイ公使となり、官約移民に尽力した際には事務上の助手をつとめ、やがては台湾製糖会社を創立する時にも企画を助け、後には二代目社長として糖業界に活躍したのである。さらに直道の長男武智勝も父の後を襲い、第三代目社長としてその歴史を閉じる日まで日本糖業界の元老として活躍したのであった。

さて、右の手記により知り得ることは、ロバートとイキの橋場町川沿いの家の新婚家庭のただずまいであり、また、二人の正式結婚へむけての武智の配慮である。富裕であればこそと思えるとしても、洋行を条件に直道を迎え、かれを慶応義塾幼稚舎へ通学させたりするのである。キクとの婚姻のための入籍は明治十五年とあることで、その年がロバート夫妻の晴れての正式結婚を認めら

れた年にあたることも知ることができる。武智の家が周到に国際結婚をすすめたいきさつのすべてを了解できるのだ。武智惣助はそれを見届けることなく逝ったが、てい女は息災であった。

(此養子君も大いに満足して目出度く納まった)
とある手記の文字は軽みを免れないが、ロバート夫妻の家庭のありように触れる大事な意味を受け取れる。

ところで、ここに芝切通し(栄町五番地)の住居とあるのは港区芝飯倉栄町にあったハワイ公使館邸を指している。ロバートが駐日ハワイ代理公使となったのは明治十四年のことであった。

日本婦人を娶り、日本人と交わり、日本の美術・伝統を愛し、日本の各地をめぐり、風物を賞したロバートだったが、ついに日本語だけは駄目であった。日本語は悪魔の造った言葉であると匙を投げて、とうとう必要最小限度の単語以外は書くことも、話すことも一切諦めてしまった。(仮名と漢字の混合の文体は世界中比べるものない難しさである)と嘆いた言辭はすでに書きとめたことだが、かれの来朝が激動期に重なり、折しもの国語混乱の時期に災いされたとする同情は成りたつようだ。

イキ夫人もまた英語をほとんど解さず、日本語に終始した。アルウィン家の日常生活はイキ夫人を中心にすべて純日本式のしきたりが守られていた。ただし家屋は和洋折衷で、西洋料理の上手なコックと、日本料理に堪能

な調理人がいて、両様の美味しい食事が出されたのであった。服装も夫人はつねに和服であった。

イキは手紙を書くときも巻紙に流麗な変体仮名書きで認め、書簡文、とくに候文を好んで使っていた。後に子女がみな米国で教育を受けるようになる、愛児たちへの便りを書きたい一心でローマ字を独習し、マスタしたが、大方は巻紙に変体仮名をつねとしたようだ。

すべて貴族趣味のロバートは広大な邸宅を好んだ。全盛期には古くは佐土原藩島津淡路守屋敷だった由緒の一万坪の本宅を三田綱町に、十数万坪の別宅を玉川に、そして序の章で触れたように伊香保には井上馨の紹介で東京芝の紅葉館主人の持屋敷だった三万坪を武智キク名義で手に入れ、別荘としていた。

使用人の数は五十人を下らず、女中たちは奥と下に分かれ、中には夫が庭師、馬丁として夫婦共働きのものも少なくなかった。ロバートの交際は派手であったから、内外の来客も多く、イキはその饗応と三つの邸宅の切り盛りと、召使いの監督と、その上の育児で席の暖まる間もないほど多忙でだった。

ロバートとイキの間にハワイ公使館時代に長女ソフィヤ・アルベラが生れたのは明治十六年十一月二十四日のことであった。

(本編の参考文献・資料等は連載終了時に掲載します。)

(三・九・一七)

ハつづく

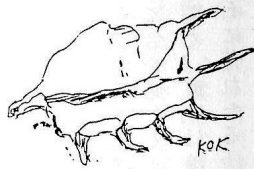
(小説)

近藤富蔵の生涯 (十三)

第一章 八丈流人近藤富蔵

三、風浪望郷の歲月

金子正義



(五)
富蔵の根性を一変させた八丈青ヶ島山焼の記録文書は、数度の火山爆発と、その災害の凄まじさを正確に報告したもので、八丈島へ避難した島人が飢餓や海難に耐えて三十余年の後に青ヶ島に帰る迄の艱難辛苦が富蔵の心を強く縛ったのであった。

富蔵が読んだ天明三癸卯年三月五日の青ヶ島大山焼の文書は、その四十六年の後、文政十二年(一八二九)に青ヶ島地役人、名主の次郎太夫が書いた『青ヶ島略記』及び『山焼注進状』である。

文政十二年の頃、富蔵は既に流人として三年を経て、浮喜多一門の沖山の娘逸を水汲女として娶り、既に長女操を得て苦しい流謫の中での僅かの小康に安んじていたので、三十四年前八丈より更に南に十七里の青ヶ島に大惨事があったとは全く知らなかった。江戸鰯殻町の邸に

いた幼少の頃、祖父知新庵から浅間山の大噴火で関東一円に灰が降ったと聞いたことがあったが、安永より天明寛政の約二十年間は、日本火山列島の脊梁をなす各地の火山が鳴動し、噴煙噴火を繰り返していたことなど全く知らなかった。

幕藩体制下の情報は遅く、公儀諸藩は自然災害は不可避の天災として無策に近く、農工商の庶民も天災飢饉に狎れ切って、天災は堪え忍ぶものとして天も人も恨まなかった時代であったからでもあろう。

安永七年(一七七八)の伊豆大島の山焼は伊豆半島沖の漁船からも、その噴煙が望見し得た。伊豆代官江川太郎左衛門英征は將軍家治に、「伊豆国大島の内なる三原山より火おこり、砂礫を飛ばし鳴りはためき、黒煙天を掠め、三月半よりは更に昼夜をわかつたず……下略……」

と上申しているが幕閣は島民にさしたる被害なしと見て鎮静を待つのみであった。

ましてや天明三年（一七八三）の青ヶ島の大山焼は遙か江戸より九十里の洋上の孤島、噴煙火柱が天に宙し溶岩流が田畑人家諸共に海へ溶け落しても、八丈島への注進すら風浪激しく仲々届かなかったので、江戸よりの救援など有り様もなかった。

然し同時期の浅間山噴火については『徳川実紀・浚明院殿御実紀』に、『浅間山噴火江戸府内鳴動砂礫降』として、

「七日七夕規の如し。此日天色はのぐらくして。風吹き。砂を降すこと甚し。午の刻すぐるころ風漸々静まり。砂を降すことも少しくやみぬ。黄昏よりまた震動し。よもすがらやまず。」

と記した後よりの注進によって、更に次のように書き加えている。

「世に伝ふる所は。ことし春のころより、此山頻りに煙立しが。六月の末つかたより漸々に甚しく。七月六日夜忽震動して。其山燃上り。焰燼天をこがし。砂礫を飛ばし。大石を迸すこと夥し。また山の東方崩壊して泥濘を流し。田はたを埋む。よりて信濃上野の人民流亡し。あまつさへ石にうたれ。砂にうづもれ。死するもの二万余人。牛馬はその数を知らず。凡この災にかかりし地四十里余におよぶといふ。」

領主、地頭が開墾復旧すべき事なれども、人々艱苦の折なれば堤防及び私領の溝渠、道路、橋梁に至るまで、公より修理せらるべし、今、農隙の時なれば救済の為、其の地の農民にはからわせ、費用を給はるべければ開墾のちからを尽すべきよしを、各々の所領の農民等に曉諭すべし……下略……」

と、災害地の復旧は当地の領主の仕事であるが、その費用は全て幕府により賄うこと、及び災害地の農民には賃金を払って開墾復旧をさせるので、農民達によく説諭して暴動一揆などに疾ることなく復旧に努めさせよ、と言う訳であった。

災害地が將軍藤元の関東信濃の地であり一揆暴動の拡大を防ぐ為であった。

寛政四年（一七九二）の肥前島原の雲仙・普賢岳の噴火については、遠国の地であったが熊本藩、島原藩より船飛脚を以って次々とその状況被害が幕閣の下に急報された。『徳川実紀』にも次のように記録されている。

「一月十八日午後、肥前国島原の温泉山普賢山鳴動せしより。泥土吹出し湯煙立上り。二月に到り火気また見えて芝木を焼き。こなたの岩石崩れ。かなたに新山を出し。その月も過ぎ。三月は地震ふ事もしばしばなり。」

と火山活動が繰り返されているのを記し、三ヶ月後、「四月朔日肥前島原の地。西の刻過ぎ頃海上より津波をし上げ。肥前島原。肥後熊本の地。家屋の流失男女の

と記した。後の調べでは被害家屋四千戸余り、人数三万五千人余であった。

幕府は被害地が江戸府内ではなく、殆どが大名藩地なので、被難民の救済はその地の領主に任せていたが、年貢の基礎となる田地畑地の荒廃を問題として、噴煙の小休みとなった八月二十五日漸く田畑被害見分の為に勘定吟味役の根岸九郎左衛門鎮衛を現地に派遣して、泥砂に埋った田畑の状況を見分させ、それに依って十月廿九日に勘定奉行松本伊豆守秀持が『信濃国浅間山焼にて砂を被り泥に埋りたる田畑開墾のこと』として幕閣に図った。

斯のような悠長な仕儀の間に田畑悉く荒蕪となった信濃、上野の農民等は、九月より十月に至って飢渴迫まり四、五百人或は千余人の群集となって、それぞれの領主の居城、館の門前に飢えを訴え飯米を乞い求めて騒ぎ叫び、一揆騒動の有様となった。就中上野国安中では近国の溢れ者も加わって富める家々に乱入し、金銀、米穀、衣服、器財に至る迄掠奪する有様となった。

信濃の国の一揆劫略は小諸の辺まで及び、暴徒と化した群集は上田城にまで押し入らんとして、城中より銃砲を持った藩士足軽によって追い払われる騒動となった。

十一月九日幕府は漸く一揆の拡大を重視して、上野・下野・武蔵・信濃・常陸の国々に令を発して、農民等の徒党を結んで事をなす者は訴え捕え、或いは諭すように領主代官に命じ、「田畑汲水砂石に荒れたる所は、其の

死亡又甚し。」とある。眉山の碎屑流が有明海に出ての津波である『島原大変記』によると、雲仙、普賢岳の噴火で眉山崩壊して大焼岩を含む溶岩流が島原城下を直撃して死者一万四千五百人を出す大災害となった。

幕府は島原城の被害の復興と長崎港の警備番役に当る島原藩のことであり、藩主松平忠恕が徳川一門に連なることもあって四月に二千両、九月に一万両を貸与している。

処が浅間山と同時期に大爆発をした八丈青ヶ島については、遠く南方洋上の孤島である為に当初は一顧もされなかった、それも青ヶ島が天明三年三月五日に突如として大爆発したのでは無く、青ヶ島が富士箱根火山帯の海底火山の噴出によって生まれた太古より屢々噴火を繰返していたのである。大昔の事は不明であるが、『青ヶ島略記』には

「承応元壬辰年（一六五二）初而山焼吹出し、当時の里辺荒地に相成候共……略……」とある。

その頃の八丈青ヶ島は島全体が複式火山をなし、島の周囲海岸の断崖絶壁が外輪山で、その内側の火口原の南西部が二重火山となっており、その内輪山の火口原は池の沢と云われる平地で、中程に差し渡し七、八町の大池があった。火口に溜った雨水や火口原の湧き水が溢れて内輪山の岩の割れ目や谷合いより内輪山の外側火口原に流出し、樹木を繁らせ畑地の用水となっていた、池の沢

には水田耕作も為され、外輪火口原には桑を植えて年貢の養蚕をも営んでいた。北西の台地状の火口原は樹木も繁茂し、畑地には麦、粟、稗を作付け、大池の周辺の湿地には里芋、流球芋、大豆、なども栽培され、島民大凡九十戸三百余が浮世を離れて安らかに暮らしていた。

それが突如として池の沢の大池が湯煙りを吹き上げて溢れ出し、忽ち溶岩流となって押し流れ内輪山の割れ目の水路から外輪火口原の村里までも呑み込んで海中に溢れ落ちたのであった。島内の耕地は勿論、他の村里まで降り注ぐ火山岩や礫砂で荒れ地と化した。

島民は島の北西に残った緑地に避難し、僅かの麦、粟に海藻や木の芽、アシタバ等を混ぜた雑炊を食べ、鯉節を噛って噴煙と熱湯の如き泥水の止むのを待った。

噴火、噴煙は十日程で鎮まり、大池の湯も止まった、生き残った島民は泥土の乾き冷えるのを待って積った泥砂を掘り起して埋っている里芋などを取り出して命をつなぎ、漸々に島の北西の山膚の荒地を拓いて大根、大豆などを栽培し、十年程の言語に絶する苦勞の果に埋れた田畑も掘り起し、漸く困窮を脱したかに見えたが

寛文十年（一六七〇）五月十二日、二時間程地鳴震動して火山礫を吹き飛ばし、辰の下刻より巳の半刻まで噴煙をあげた。島民は承応元年の熱湯の噴出を恐れ戦いていたが、次第に沈静化して其の後十年程は大池の火口から煙を吐き続けていたが大事に至らず、内輪火口原にも

りの大噴火となったのである。以下『青ヶ島略記』の記述を抜き出すと

「……前文省略……」

一、同三月九日ノ夜丑之刻頃 夥敷地震八度致候処 寅之刻時分ニ相成池之沢ニ火穴出来 夥シク火石ヲ空エ吹上ケ島中エ降下候故 火石ニ当リ焼失ノ家数ハ神主山城家 蔵家財共焼失 拜殿ハカリ残候……中略……合而三十五軒 其外堂小屋共廿六軒 都合六十一軒焼失仕候 右之通焼失 大勢ノ者トモ十方ニ暮 桶類 板其外手ニ当リ候モノヲカブリ築地ノ陰 或ハ所々洞穴へ逃込漸ク相成リ罷在候
一、十日卯之刻頃火石降止ミ 天ヨリ砂降候テ又々泥土夥降積 同日午ノ刻頃降止ミ申候
一、降り積ル土砂平地ノ畑へハ三四尺 山手坂地ニハ一尺位降積リ 火穴ヨリ遠キ場所へハ五寸位相積リ申候
一、農事ニ罷出 野宿仕居候男女十四名 同時ニ焼埋リ申候

以下惨状が痛ましく記されているのを略記すると、飼牛は驚き怖れて盲滅法に駆け回って過半数は焼死、海辺に逃れた三十四程を岩壁の岩間に追い集めて梯子で囲んだ。飲料水は池之沢よりの給水していたので噴火で通路塞って用をなさず、山岩の間に垂れ溜る水で渴を抑える程度で、降雨を待つのみであった。

耕地は勿論、島中の草木悉く焼け倒れ僅かに火穴より

粟、麦等の作付けも出来るようになり、其の後百年程後には、西郷、休戸郷の村里も昔にかえり貧しい乍ら暮らしも立ち直るようになった。

処が安永九年（一七八〇）再び池の沢の大池より熱湯沸騰して火口原へ溢れ出したのである『青ヶ島略記』は、「安永九庚子 六月廿七日 池之沢ノ池ノ水中ヨリ湯水湧上ツテ 作物凡捐亡仕候共無程相鎮申候」とあるが他の記録では、始め地震打ち続き、湯水の沸騰は休んだが高温の濁水が断続して翌年の噴火となったとある。そうして、

「安永十辛丑年 池之沢大池湯水湧上リ 池之沢ニ火穴吹出テ煙ヲアゲ耕地捐亡」と内輪火口原の池之沢に新たに噴火口が出現して活動し始めたのであった。

此の年四月改元して天明元年浅間山も鳴動して噴煙をあげ、日本火山列島全体が活動し始めていたが遂に青ヶ島では、天明三癸卯の大山焼となったのである。略記には、「当卯年二月廿四日昼時ヨリ北大風吹出シ 雨降候処 神子ノ浦ト申青ヶ島船着ノ場所 相崩レ赤砂夥シク陸地エ吹登リ 中原ヶ平 コハ子ヶ沢ト申所 手入不成様ニ相積 同日暮時 雨止ミ風ナキ申候」とあるが、前年より続く地鳴震動に、大風雨となり火山灰地が崩れ、大風に吹きつけられて赤砂地が畑地に吹き積って島の南北の耕地が全滅に瀕した。そこへ無常なるかな止めを刺すように、天明の中山焼と云う、天明三癸卯三月五日よ

隔たつ西北の隅の、焼け枯れた立木の下地が僅かに青く残っているのみだった。

島の周囲の浦々は崖崩れに埋って往来できず、神子の浦西浦の船着場は崖崩れにも残っていたが、其処迄の通路は溶岩で塞って往来できず、島民は焼砂泥土に床上まで埋っている焼残った家屋に、助け合って避難し、降り積った泥砂を掘り除いて食物を探し求めた。だが、琉球芋も、泥中のアシタバ草ハガリ草も泥土で腐って食とならず、里芋ばかりは十個の内に三、四個程は食に耐え得るので海藻と取り合わせて食べ、泥土の熱が冷えてから焼け倒れた家屋の下を掘って、備蓄の鯉節、塩辛、麦等を取り出して別け合って雑炊とし辛うじて命を繋ぎとめ、八丈島よりの救援の船を待つばかりであった。

中には待ち切れず小舟や漁船を漕いで八丈へ逃げ渡ろうとしたが、北風強く殆どは荒海に消えた。

洋上遠く十七里も離れた八丈島からも青ヶ島の火柱噴煙が見えられ、大賀郷八丈陣屋は地役人菊池左兵太以下島役人が色目き立って、腕利きの船頭惣兵衛が水手四人を選んで早船を出させた、夕刻青ヶ島近く漕ぎ寄ったが、黒煙群が内火玉閃き立ち、火炎の燃え立つ度に岩石落下して岸辺に近か寄れず空しく漕ぎ戻った。

四月十日八丈樫立村の名主市郎右衛門は、再び船頭惣兵衛を頭に各村より選り抜いた水手、人夫を集め、青ヶ島噴火見分の早船三艘を仕立てて出立させた。

必死の見分船は火煙に包まれた青ヶ島の周囲の海岸を漕ぎ巡って山焼の惨状を見分け乍ら、船を寄せる岩間や湊口を探して戻った。

見分船の報告で、青ヶ島の救援は火の玉噴煙の休止を待つより仕方なしと、荒れる海と黒煙立ち籠る青ヶ島を毎日痛ましく望見するのみであった。

五月に入って噴煙も納ったと見て、八丈末吉村の年寄役浅沼源左衛門が青ヶ島山焼見分救援の長となって、五月五日朝大賀郷八重根湊より大型漁船に、八丈義倉の救援米や薬品衣料等の救援物資を積んで出港した。救援船はその日の申の刻(午後四時頃)に、西浦の渡り口の着岸に成功したが、次第に天候怪しくなり上陸できず、翌六日も海荒れて船が岸壁に打ちつけられるのを防ぐのが精一杯であった。

七日小雨まじりの北風の中で西浦の船着場と島内を塞ぐ埋った泥砂を押し除き、火山落石を鑿で打ち砕いて道をつけ、焼け残った百姓治兵衛宅を救援の拠点として漸く八丈義倉の御囲穀物を陸揚げして、集まり寄る島人と共に焼残りの治兵衛宅に運び込んだ。

八日、九日は快晴となり救援物資の陸揚げを完了した。名主七太夫を始めとする青ヶ島村役は手別けして所々に散っている避難民を集めて救援米を分配した。

八丈末吉の浅沼源左衛門は十日は雨であったので十一日、島内の惨状を出来るだけ具に見届けようと、皮引草

(一七八五)の大爆発となった。

天明五乙巳三月十日未明より地鳴震動と共に池之沢の火口より噴煙天に宙し、忽ち焼石を吹き飛ばし昼夜限り無く火柱を吹き上げ、島中は煙に覆い尽くされ、天明三年に焼けた草木が漸く芽吹いて青味を戻した処も火灰が降り注いで忽ち枯れ失せた。建て直した家屋も火を被って燃え尽くされ、島民は生くべき家も土地も失なった。

青ヶ島に火災の立ち昇るのを見た漁船の注進によって、八丈大賀郷の陣屋は一昨年と同じように、船頭惣兵衛以下腕利の水夫で通用船に依って青ヶ島噴火状況の見届けに急航させた。

黒煙に包まれた青ヶ島周辺の海は、焼け石が落下して近づけず、風の吹き立てる具合によって視界の開く岩間より上陸しようとしたが、火炎焼き立つ火玉の閃めきで接岸できず諦めて八丈に漕ぎ戻った。

その後、海荒れて船を出せず、一昨年と同じように噴火の小休みになるのを待っていると、三月廿九日青ヶ島の名主七太夫が船頭、水夫四名と命がけで早船を漕いで八丈八重根湊に注進に及んだ。

青ヶ島名主七太夫、惣百姓代三次郎の注進状には、
「……略……山焼ハ去ル十日ヨリ今以テ火燃立 火石吹上砂土降下リ 島中昼夜ノ分チナク 真闇ニテ 震動ノ音絶間ナク候右ノ通り

鞋が焦げつき、硫黄の臭気が咽喉や鼻孔を射す流出泥土の半乾きの岩山や谷間を巡見したが、翌十二日から再び天候悪化して十日間も風雨続きとなり見分は不可能だった。廿二日は晴れ上がり南風が程良く吹き渡るので、帰帆の好機と西浦から出帆したが、程無く風向きが逆となり神子の浦に追い返され、已む無くの儘停留して六月五日漸く風を得て出帆すると、海上一面に濃霧が渡って航路不明となった。

翌六日強い南風に追い立てられ北に流されて二日後の六月八日朝、遙かに陸地を見出して一同蘇生の思いで帆を下し、水夫・人夫が交々に櫓を漕いで岸に近づき漁船に尋ねると、何んと其処は上総国夷隅郡興津村であった。浅沼源左衛門は興津村の村役人を通して水先案内人を得て浦賀に渡り、浦賀番所に青ヶ島噴火のことを訴え届けた。此のことに依って始めて青ヶ島大山焼のことが江戸へ伝えられ、品川の島会所より八丈屋権六が真先に浦賀に駆けつけ、浅沼源左衛門と力を併せて青ヶ島お救い船を仕立て、江戸表よりのお救い米穀を積んで八丈へ戻り、八丈囲い米を加えて再度青ヶ島へ運び込むことか出来た、餓死寸前の島民は地獄に仏と涙を流して喜び、救助米の配分を危座合掌して頂く有様だった。

伊豆代官江川太郎左衛門の尽力もあって、其の年及び翌天明五年の年貢、諸役も免除され青ヶ島は生き返って立ち直れるかに見えたが、亦々より激しい天明五乙巳年

今以テ山焼不鎮 火煙火石吹上 砂降り積リ 別而去ル
十八日ヨリ烈シク成候 東台子ヨリ大峯ヲ隔テ池之沢ヲ見オロシ候処 当時焼上リ候 噴火口ハ凡ソ百二十丈程モ有之 沢ノ底ニテ其遙ナル処ヨリ吹出ス火石砂土島エ吹散当 三月十日ヨリ十八九日ノウチニ池之沢ハ三分トオリ程モ砂土焼石ニテ埋上申候……中略……此日増ニ池ノ沢埋上リ終ニハ東台子ノ岸丈ケモ 並ヒ候様ニ相成申候 其節ハ火石里辺エ吹掛ケ候ハ必定也 左候得ハ家居助間違候……中略……山焼鎮リ候迄在島ノ者共ハ八丈島エ御引取一命御助ケ被下候様偏奉願上候 以上」

天明五乙巳年三月廿九日

名主 七太夫
惣百姓代 三次郎

と緊迫した状況を告げ、一命御助被下候と悲痛な嘆願をしているのであった。

八丈陣屋では、前々年のように噴火の鎮まるのを待つてはいられずと、檣立村名主市郎右衛門を見分の頭として四月十日八重根湊より補理船を出帆させた。

其の日夕刻、青ヶ島へ六、七里に近づくと、山焼の炎で島山や海面も白屋の如く明々として、海底の震動が船底を通して船上の水夫達を震わせた。

更に島に近づくと岸に寄せる波濤も火炎に照されて火

の海のようなであった。それでもたじろがずに船を巡らせて翌十一日朝、西浦に船を寄せ火山灰の降り頻る中で島民四十五人を收容して八丈に帰った。

八重根湊に這い上った避難民は命の助かった喜びに我にかえると、大里神社の山は溶岩が避けて通るので多くの島人が、その岩蔭や社殿の床岩に通れていると口々に叫び出した。

市郎左衛門は即刻船を向けようとしたが、空模様が怪しくなり、翌日より風雨続きとなって虚しく十日程も過ぎ、漸く四月廿七日の朝、晴れ間を見て三艘の救助船を青ヶ島へ向け立てた。

船が青ヶ島に近づくと、噴火と樹木の焼え上る火焰に追われて外輪山の岸壁を伝い下りて海岸に通れた島人が、救いを求めて布切れを振っているのを発見した。

危険を冒して船を寄せ島人を救い上げる凄惨な様子は船頭達によって伝えられ、市郎左衛門が次のように書き残した。

「頭ニカカル火ノ玉、足元ニ粘リツク火泥ニ追ワレ、大根カ渦ノ崖ニ追ツメラレテ 絶壁ヨリ転ビ落チタ老少男女 浜辺ニ下リテ潮ニシタリテ岩ニスガリ居テ ナゲキカナシム声 イトモ哀レナリ 四月廿七日三艘ノ助舟ヲ見テノヨロコビハマタイカバカリ嬉シカリケン 一百八人ノ男女スミヤカニ舟々ニ助ケ乗リテイソギ漕戻セバ乗リオクレテ取残サレシ老人幼児炎ニコガサレ畑ニムセ

焼以後、救援物資を八丈より青ヶ島へ送る船舶が不足しているの、官船預り役の高橋長左衛門が代官江川太郎左衛門英征に願って、二百両の私金を江戸の両替商に託し、その利金の半ばを以って青ヶ島の輸送船一隻を造り半ばを救恤に充てて効果をあげ、將軍の上聞に達して天明五年正月廿七日褒賞され生涯苗字帯刀を許された。

高村三右衛門の義捐も、その例に倣ったことでもあった。

斯うして青ヶ島難民は八丈島民の情と八丈陣屋の恤民出資によって青ヶ島復帰の日まで命を辛じて繋ぎ待つのであった。

天明七丁未年六月十一日、八丈島に身を寄せる難民の帰島の熱望で名主七太夫は、七名の島民と青ヶ島の様子を見届けに行ったが、未だ噴煙が立ち昇り帰島は不可能と見て虚しく船を漕ぎ八丈に戻った。

続いて寛政元己酉閏六月十六日、交替した青ヶ島名主三九郎等数人の島人が渡航し、神子ノ浦より上陸して見分し、未だ人の住める状態ではないと次のように伝えた。

「……前略……追々焼鎮り候ニ付見分仕候処野山里辺ニ至迄一円ニ焼灰ニ而埋り 銘々之家屋敷等モ一切相分不申候 其後追々大雨等之節坂地之分ハ洗ヒ流シ 地境等凡相分り候得共焼石砂ハ其儘相残申候 且平地之分ハ今焼砂灰交リニ御座候 且又池之沢今以所々ニ無絶間煙相立申候……中略…… 山焼以前トハ島之様子一体ニ

ンデ岩ノ上ニフシマロビ 波濤ノウチニ浮沈シテ 助ケクレヨト泣キサケベド 舟ハ少シ人ハ多シ 猛火ニ焦レ潮ニオボル苦シミヲ見ル見ル殺スモ是非モナシ 大凡一百三四十人ノ死亡ト覚エタリ……下略……」

青ヶ島より救助された二百余人の避難民は、八丈島の知己、縁者に頼ったが、八丈島そのものが全国的な天明の大飢饉の最中で、助けようも無く共に衣食に窮する有様であった。

此の儘日を過しては骨皮ばかりに痩せ衰え病に斃れるばかりであった。苦しみ日々に復島の願望は募るばかりであったが、青ヶ島の亡地復興、開墾帰住には相当の資金が必要であった。身一つで逃れ来た島人にはそれを得る手段も無かった。

処が、八丈三根村の旧家高村三右衛門保考と云う奇特な者がいて、深く青ヶ島避難民を憐んで五百両の大金を施与し、伊豆代官江川太郎左衛門に願ってその金子を、然るべき江戸の両替商に貸付け、その毎年の利子五十両の半ばを復興の為に積立て残りを難民の衣食の扶けに平等に頒ける恤金とした。此れに依って飢渴を脱した難民は青ヶ島復興の希望を抱いて日々の困窮に耐えた。

当時既に大坂、江戸では米穀取引、実物取引より為替相場、金融制度が発達し、八丈島のような遠隔の地にも金融資本が働くのであった。勿も天明三年の青ヶ島大山

少ク相成 畑地ハ山ト成 山ハ洞ト成リ或ハ海岸ニ崩レ落無跡形罷成候 古来之姿トハ大イニ相違仕居……下略」

其ノ後島への復帰を試みる努力が続けられるのであるが、渡海往還の難船や渡島しても飢渴の苦しみに耐えられずに引揚げる等の繰返しであった。名主三九郎などは二度も渡島しようとして遭難漂流し遂に不帰の人となった、その子次郎太夫が志を継ぎ、粒々辛苦の努力によって青ヶ島への復帰再興が成し遂げられるが、その三十間の苦闘は言語に絶するものであった。

その記録を読んだ流人近藤富蔵は強烈な衝撃を抑えて冷静に八丈実記の青ヶ島稿を書いた。茲ではその経過を簡略に箇条書に留めておく。

青ヶ島名主三九郎は、寛政元己酉の見分後、青ヶ島起シ返シ（溶岩掘除き）入用金を八丈陣屋に申し入れて、金子二百五十両二分銀六匁を拝借し、渡島の準備に入った。

寛政五癸丑年七月十二日 名主三九郎始め二十人、農具、資材、食糧を積んで青ヶ島に渡り、復興の足場を作り、小屋数棟を造って七人を残し三九郎等は八丈に帰る。

同年八月 残留七人噴火の不安と、仲間争いによって五人が船を出して八丈に向ったが風浪に破船し全員行方

不明となり、島に残った二人も其の年の冬病死。

寛政六甲寅年六月十三日 名主三九郎以下十八人船二艘に食糧、資材を積んで青ヶ島に向ったが、大時化に遭って船積の物資殆ど波に浚われ、破れ船で青ヶ島に漂着した後、船を繕い、十人を残置して八丈に帰った。

同年七月二日 三九郎の船の破船を知らず追而の食糧を送らんとし船頭彦太郎以下五人、米穀を満載して出帆、難風に吹き流され漂流の末房州へ漂着。

寛政七乙卯年二月十九日 青ヶ島へ食糧を入れようと、八丈三根の義民八人、神湊を出帆後破船して全員溺死。

同年四月十九日 八丈陣屋より青ヶ島食糧送りの荷船西浦への荷上げ処功、前年六月十三日より残留していた十人の餓死を救う

寛政八丙辰年四月廿五日 青ヶ島への食糧送り船が難風に押し流されて房州へ漂着し、助かった吉三郎等二人渡り船を乗り継いで三宅島迄戻りつき、三宅の漁夫より八丈へ食糧欠乏を告げに小舟を出して難破漂流中の青ヶ島残留者を救助した時の話を聞き、その窮状を告げんと便を頼んで急ぎ八丈に戻り、次のように訴えた。

に成りきって災害多き青ヶ島のことなど忘れ去って納った者もいた。

だが八丈の仮住いの避難生活の中で生れ育った若者の中には、幼少の頃より青ヶ島噴火の猛煙を潜った祖父母の話を聞き、一人前の漁師、農民となって父祖の拓いた青ヶ島の地を、必ず自分達の手で復興させようと唇を噛みしめて心に決した健気な者もいた。

寛政九年、青ヶ島へ食糧、資材を入れようとして遭難漂流し、遠く紀州三木崎へ漂着して、無惨に乗組員と共に病没した名主三九郎の遺児次郎太夫もその一人であった。

文化十四丁丑年四月 新しく青ヶ島名主となった次郎太夫を中心とした十二人が、青ヶ島復興開墾の意気に燃えて八丈八重根湊を出帆したのであった。

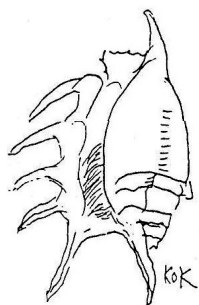
流人近藤富蔵は、次郎太夫等の言語に絶する青ヶ島復興開拓の努力を知って、旗本の家に生まれ育った己れが、農耕漁民の困苦欠乏の生活を知らず、「君、恥しめを受ければ臣死し、父、辱しめらるれば子、此れを雪ぐ」と父に代って鎗ヶ崎抱屋敷にて、塚本半之助一家を斬捨てにしたことは武士道に悖らず、亦「父之讐弗与共載天」と「礼記曲礼篇上」に依るものと信じていたことなどは全く空しく思われ、一家殺害の罪の深さが漸く自覚されるのであった。

「甲寅の年より青島残留の者、火山泥土を掘り返して漸く穀種で麦、粟等の実のりを得て悦んだが、穀物の実のりと共に野鼠多く現われ、忽ちにして一粒も残さず喰い尽し、乙卯の春の八丈陣屋より送られた備蓄の糧も喰い荒され、蒔き種も残さず、芋類で命を繋ぐ有様である」

寛政九丁巳九月廿五日 名主三九郎、三宅帰りの吉三郎、七三郎の注進により早速、食糧、開発資材を積んで出帆したが、風浪に遭難し遠く紀州三木崎へ漂着したが、三九郎始め乗組の者十三人悉く疲労困憊して病没す。

寛政十一己未年九月四日 待ち切れなくなった島民十三名、数艘の船に穀物、資材等を積んで青ヶ島へ向ったが、暴風雨に吹き流されて紀州州浦に漂着、命辛々八丈へ帰る。

以後も青ヶ島へ向う船の悉くは破船遭難して上陸できず、遂に基の後は八丈よりの船送りも絶え、食糧尽き果てた青ヶ島残留の七人も小舟で八丈へ脱出し、奇特な八丈三根村の高村資金も尽きて青ヶ島復帰は絶望となった。其の後十六年間は青ヶ島は無人不毛の島となった、天明以来の大噴火に八丈島に避難している青ヶ島の難民の多くは、何時の日にか故郷に帰らんと困苦欠乏に耐えていたが、余りも耐え忍ぶ長き歳月に年寄り病弱者より次第に命を落していった、若者たちは縁を得て八丈島島人



「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

(発行日)

(原稿締切)

春季号・・・・・・二月一日

一二月三二日

夏季号・・・・・・五月一日

三月三一日

秋季号・・・・・・八月一日

六月三〇日

冬季号・・・・・・十一月一日

九月三〇日

季刊確保のため右のように規約を定めております。

続く

編集集子のメモ

◆季刊の本誌にとって今号はこの年を締めくくる冬季、終刊の号になる。第十一年目に足を踏み入れて二号、つまりはや半歳を閲する勘定になる。同人各自の胸のうちに秘める抱負の実現は果してどうであつたろう。

◆世にタレント教授と呼ばれる種族があり、一方には無闇に作家と呼ばれる得体の知れぬ種族もある。ともにテレビの画面に臆面もなく登場しているのを見ると不思議に思う。星の数ほど大学があり、文学の世界には何々賞の氾濫があり、地方自治体までが割拠して賞を設けるありさまだから、教授や作家が星の降るごとく現われるのだろうか。

◆金子正義が本誌連載の「ハイラル挽歌」を、また三戸岡道夫は書き下ろし長編第四作目「凄腕人事部長」を、それぞれに刊行を見た。「まんじ」同人の意欲の旺盛を喜ぶたい。

◆故山口健二の一年祭が雑司が谷靈園の崇祖堂に営まれた。旧友たちの寡歌の合唱と、戦友の物語った戦陣における気骨、ともに故人の生きた時代を偲ぶものであった。時の流れの早く、生けるものの諸行無常を改めて覚える。

(お)

「まんじ」第四十二号

平成三年十一月一日発行(非売)

編集 大和禎人

発行 柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―

升本ビル 升本内

「作家群」

(まんじ) 編集部

〒〇三(三三二九一)六五五七 ますもと郵便振替口座 東京二―九〇八一五

加入者名「作家群編集部」

印刷 旬加藤清耕社

千代田区神田神保町三―十一

〒(三三六)一五七四三